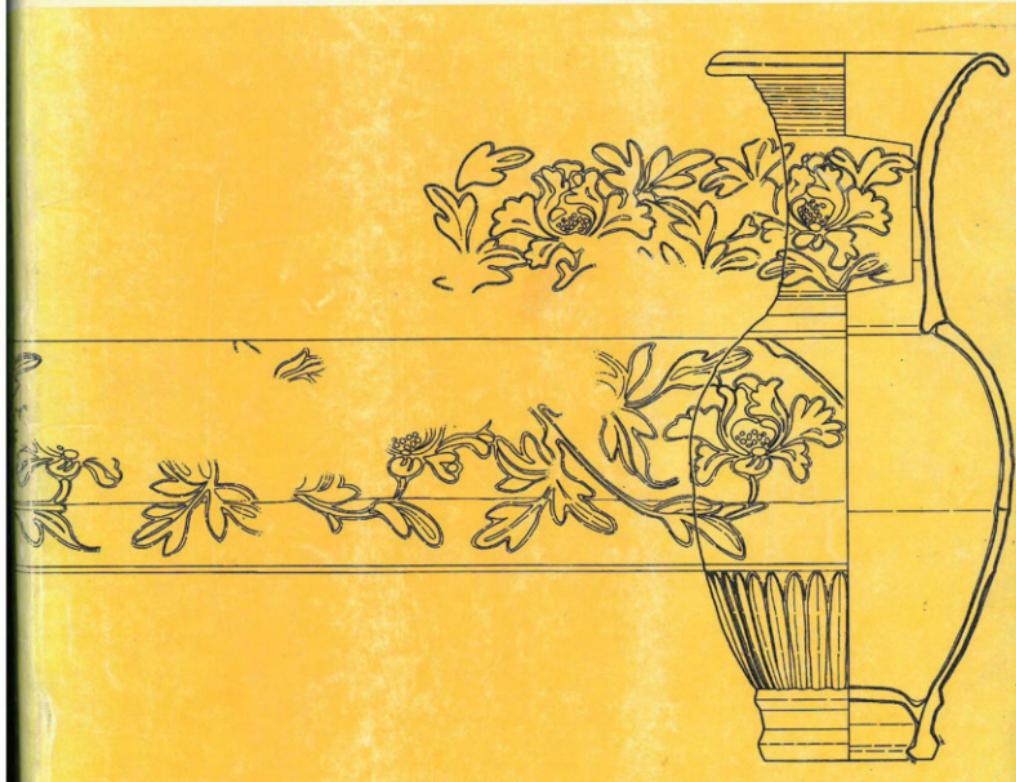


# 首里城跡

—京の内跡発掘調査報告書（I）—



平成10年（1998年）3月

沖縄県教育委員会

# 首里城跡

－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－

平成10年（1998年）3月

沖縄県教育委員会

## 序

昭和47年に国指定史跡となった首里城跡は、琉球王国の王城として500有余年にわたり沖縄の歴史・文化的な核となって沖縄の歴史と文化の基盤を築き上げてきたグスクとして県内外に知られています。

首里城は沖縄独自の建築技術や石積みなどの土木技術の枠で完成されたグスクであったが、残念なことに今次大戦による戦禍で旧国宝であった首里城正殿をはじめとする多くの建造物や石積みの城壁はことごとく消失し、破壊されました。

県民の熱い期待と要請により昭和60年度から首里城の復元整備事業が開始され、沖縄開発庁、建設省、沖縄県によって古都首里の歴史的風土にふさわしい区域として今日まで継続的に復元整備を進めてきました。その中でも平成4年度には首里城正殿の復元と北殿、南殿などの施設が再建され、在りし日の姿を現在に写し出して首里城公園として一部を公開しています。

本書に収録された首里城の「京の内」と称された地域は、正殿、北殿、南殿、奉神門の存在する政治的建造物空間が集中する区域とは離れた内郭の南西地区にあり、文献や伝承によると首里城の聖域的空間として位置づけられています。首里城の発祥や琉球王国の最高神女である聞得大君による厳粛な儀式や歴代の琉球王国への託宣を下した首里森御嶽と真玉森御嶽が「京の内」あったようです。また、首里城筑城以前の古いグスクがあった場所としても考えられています。

このような中で、沖縄県教育委員会は沖縄総合事務局の委託を受けて平成6年度から「京の内」跡の復元整備に必要な位置確認、規模、遺構の変遷などを解明する目的で発掘調査を実施しました。

このたび、平成6年度の調査で確認された石積み遺構や出土遺物の詳細を記録した発掘調査報告書を発刊することになりました。本書が首里城跡の研究や考古学、民族学、歴史の各研究分野に寄与することができれば幸いです。

末尾ながら発掘調査や資料整理の際にご指導戴きました緒先生をはじめ、調査にご協力を戴きました関係各位に深く敬意を表するとともに厚く御礼を申し上げます。

平成10年 3月

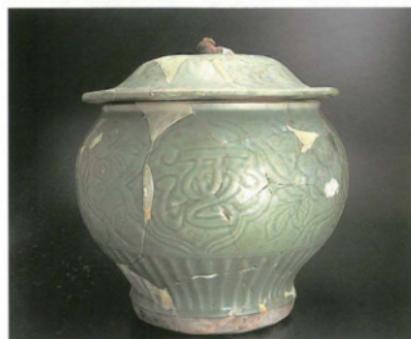
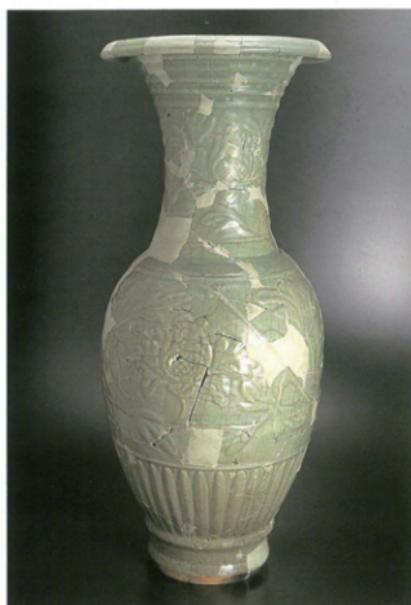
沖縄県教育委員会  
教育長 安室 肇



卷首図版1 首里城跡（航空写真）

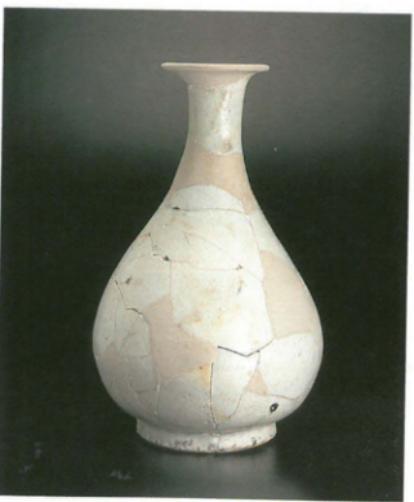
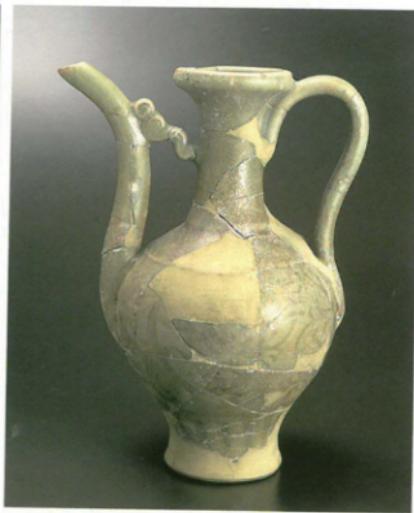


卷首図版2 上段：調査区全景 中段および下段左：SK 01 検出直後 下段右：SK 01 完掘後



左上段：青磁牡丹唐草文花瓶（元）第50図  
左中段：左下段の蓋の撮 [獅子型撮] 第46図3  
左下段：青磁吉祥字文壺（元）第46図3

右上段：青磁蓮弁文壺（元）第49図17  
右中段：青磁蓮弁文壺（元末～明初）第49図18  
右下段：青磁区画花文壺（　々　）第46図6



左上段：青磁牡丹唐草文壺（明）第48圖5・11

左中上：青磁牡丹唐草文大鉢（明）第51圖1

右上段：青磁牡丹唐草文水注（明）第52圖3



左中下：青磁馬上杯（元～明）第52圖2

左下段：青花牡丹唐草文碗（明初）第57圖6

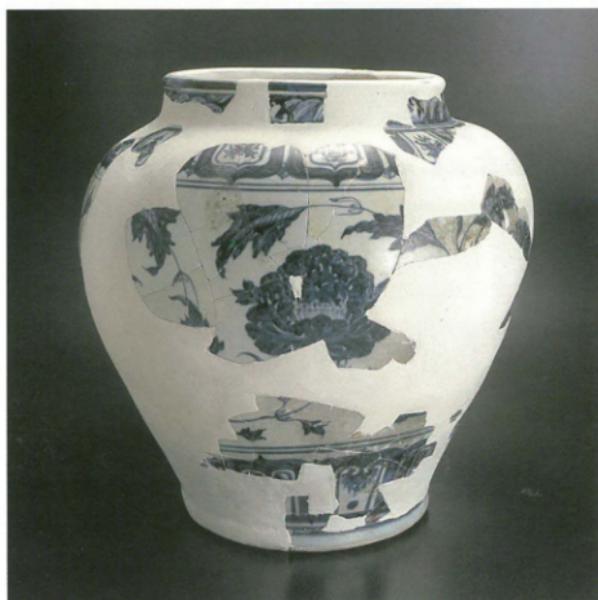
右下段：白磁玉壺春瓶（明）第68圖27



上段

青花八宝文大合子（元）

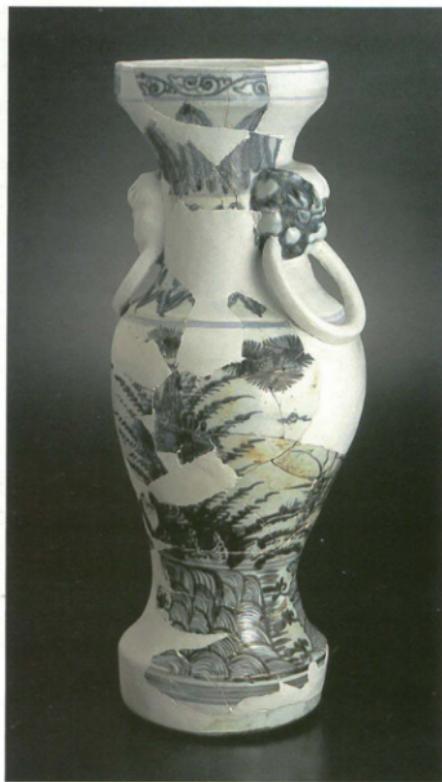
第56图



下段

青花牡丹唐草文罐

（明初） 第65图61



上段

青花松梅樹文双耳花瓶

(明初) 第64圖57

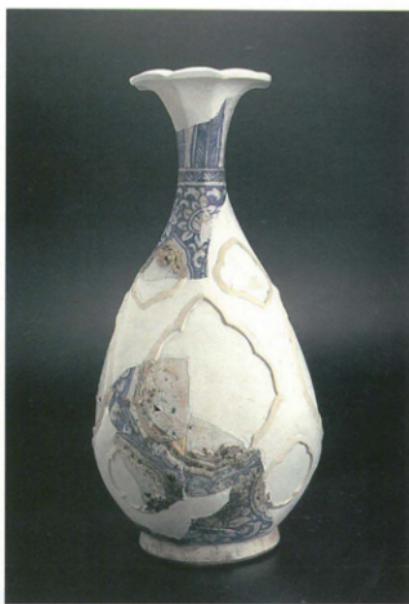
左下段

青花龍文馬上杯 (元) 第55圖9

右下段：同上內面

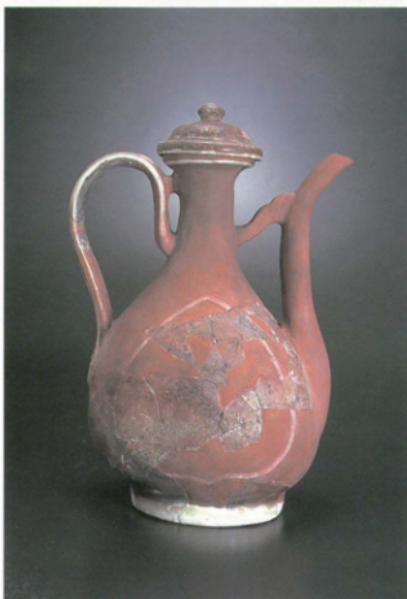


卷首圖版 6 青花



左上段：青花牡丹唐草文梅瓶（明初）第63図55

右上段：ベトナム青花花唐草文面取瓶（15C）第77図



左下段：紅釉水注（元）第69図

右下段：色絵菊花文碗（元）第69図1





左上段：中国褐釉壺（明）第73図9



右上段：タイ褐釉大型四耳壺（15C）第72図1

右下段：備前焼壺 第83図5

左下段：中国褐釉中型四耳壺（明）第74図18



卷首図版 8 褐釉陶器・中世陶器

## 沖縄県那覇市首里城跡京の内跡の発掘調査報告書概要

首里城京の内跡の発掘調査は沖縄開発庁沖縄総合事務局・国営沖縄記念公園事務所の依頼を受けて受託事業として沖縄県教育委員会が1994年11月21日から1995年2月28日までの期間で発掘調査を実施した。発掘調査の面積は約2,000m<sup>2</sup>であった。

京の内跡は首里城内の聖域的あるいは祭祀空間として機能していた。いわゆる「京の内」と呼称された区域の復元整備を実施するために必要な当時の石積みなどの配置を把握する目的で1995年度より発掘調査が開始されて、1997年度の今日まで継続的に調査が実施されている。

首里城跡は沖縄本島南部にある県都那覇市の東側、石灰岩丘陵上に形成された「グスク」であり、中国との朝貢貿易によって地理的条件を生かし、東南アジア諸国、朝鮮、本土との中継貿易で王国を豊かにし独自の歴史と文化を築きあげてきた。首里城は500年余の沖縄の政治・文化の中枢であった。

首里城は1925年に国宝に指定され、1927年に本格的な解体修理が実施され1931年に修復工事が完成をみるが、1944年に首里城内の地下に日本軍の沖縄総司令部隊壕がつくられ、偉容を誇った首里城も沖縄戦で米軍の集中砲火を浴び国宝建造物をはじめとする貴重な文化遺産の数々が焼失してしまった。

沖縄県では本土復帰後すぐに戦災文化財の復元整備計画を立案し、1973・74年には沖縄開発庁の補助を得て歓会門を復元整備し、その後も継続しながら歓会門と久慶門の接続石垣工事を完成させた1997年度の今日では歓世門の復元整備が実施されている。

首里城の規模は、東西370m、南北210m、面積42,000m<sup>2</sup>のやや楕円形状に近い形状となる。基盤である琉球石灰岩を巧みに利用しながら基本的には内郭と外郭の城壁を廻らして二重の城壁で囲っている。城壁は琉球石灰石の切石を幅4～5m、高さ6～10mに屏風状に曲線構成で積み上げている。城内では東側の「東のアザナ」と称される標高135.5mの高所から西側へ段丘状の平場を形成しながら標高125.5mの“西のアザナ”へ移行していく。

一方、首里城の南北軸では「京の内」の物見が“東のアザナ”と同様135mの標高があり、「京の内」が南北軸の高所となる。「京の内」から北側へ向かって緩斜面となる。北側の緩斜面部分は1984年の歓会門・久慶門内側区域の発掘調査の結果、旧地形の傾斜面（勾配17°）を大規模に埋め立てて造成を行ない、平場を確保しながら城壁などの普請を行なったことが明らかとなっている。

「京の内」は正殿、南殿、北殿、奉神門の政治的建物が集中する区域とは離れた内部の南西地区にある。

「京の内」の「京」は“靈力”と同義語の意味があり、「靈力のある聖域」という意味での固有名詞として考えられている。幾つかの絵図や文献などから「京の内」は沖縄の開闢二神降臨の御嶽（拝所）である。“首里森御嶽”・“真玉森御嶽”の二つの御嶽以外に「京の内之三御嶽」と称された三つの御嶽が存在したようである。特に“首里森御嶽”は琉球王国最高神女である“聞得大君”によって、歴代国王に託宣を下した拝所であった。この首里森御嶽

がグスクの名称の由来となっているようであり、別名首里城を“首里森グスク”とも称している。

「京の内」地域の面積は5,000m<sup>2</sup>が考えられているが、その内の北側約2,000m<sup>2</sup>を1994年度に発掘調査を行なった。京の内跡から検出された遺構は合計で51基が確認されている。内訳は石積み33基、石列2基、石敷き3基、溝7基、土壙3基、建物2基、階段1基であった。出土した遺物などからこれらの遺構群は15世紀初頭頃から16世紀代に構築や造成がなされたようである。

石積み遺構は「京の内」の古絵図にみられる区画石積みと一致するものとして考えられるが、時代によってこれらの石積みは若干、位置を変更したり、あるいは新しい石積みを構築したりしているようである。

遺構や出土品で特に注目されたのは石積み S A19・S A20、S A28であった。石積みが二次的な火熱を受けて、橙色に変色し脆くなっていて、その内側から一括廃棄された多量の遺物が出土した。中国陶磁器、タイの褐釉陶器と半練土器、ベトナム陶器、本土の備前焼・鎧・玉類・鏡などが出土し、大半が二次的な火熱を受けていた。完掘した結果、階段が取り付けられた倉庫跡（3 m × 4 m規模）と判断されたので土壙 S K01と仮称した。土壙 S K01内から出土した陶磁器では青磁の雷文帶碗が多く出土している状況などから14世紀中頃から15世紀中頃の時期に火災で消失した遺構として判断された。この時期の状況を文献にあてると首里城内で1453年に起きた志魯・布里の乱と1459年に発生した倉庫などの失火の二件が挙げられた。

出土品の中には、僅かではあるが中国元朝の青花・馬上杯・紅釉・瑠璃釉などの他に中国明朝永楽期から宣徳期頃に比定される青花の碗・瓶・壺などが出土している。最終的な時期決定の資料として銛の出土状況などから1459年の倉庫などの失火による遺物群として判断した。発掘された遺物は、日本国内の15世紀前半の遺跡と比較しても一級資料である。

#### 参考文献

1. 外間守善・西郷信綱「おもうさうし」『日本思想史大系』18 岩波書店 1972年。
2. 當眞嗣一・上原 静ほか「首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査－」沖縄県文化財調査報告書第88集』沖縄県教育委員会 1980年。
3. 真栄平房敬『首里城物語』ひるぎ社 1989年。
4. 首里城研究グループ『首里城入門その建築と歴史』ひるぎ社 1991年。

#### 註

- 註1. “グスク”は、考古学上では地方領主の館や王城などとして今のところ考えられている。
- 註2. “アザナ”は物見台などの機能があり、中国や朝鮮の影響を受けて、沖縄独自に変化した施設とみられる。中国や朝鮮の“雉”・“馬面”や“甕城”に類似するものが玉城村糸数城跡で確認されている。
- 註3. 1459年の倉庫などの失火については、明實錄之部 英宗実錄、卷301 「天順三年三月癸未朔〔甲申〕禮部奏、琉球國中山王尚泰久奏稱 本國王府失火、延燒倉庫銅錢貨物…」云々の記録がある。

## EXCAVATION OF THE KYONOUCHI SITE IN THE SHURI CASTLE

The Okinawa Board of Education conducted an excavation of the Kyonouchi site in Shuri castle from November 21, 1994 to February 28, 1995, as requested by the Okinawa Memorial Park office, a division of the Okinawa Ministry of Developments.

In the plan to reconstruct the Kyonouchi site, the sacred or ritual space in the castle, continuous investigations have been carried out since 1995 in order to clarify the nature of the original structures such as the layout of stone walls.

The Shuri castle(or gusuku)is located on the top of a limestone hill in the castcrn part of Naha city. It was the political and cultural center of Okinawa for over 500 years, and prospered through intermediate trading with China, southeast Asia, Korea and Japan.

Since its designation as a National Treasure in 1925, Shuri castle was thoroughly repaired from 1927 until 1931. However, it was entirely destroyed in world war II, not only by American bombardment but also by the Japanese armed forces which had installed their Okinawa headquarters in underground shelters below the castle.

The prefectural government of Okinawa planned the restoration and reconstruction of the war-damaged cultural properties soon after the land was returned to Japan. Since 1973, some gates and stone walls have been reconstructed, as well as interior buildings.

The plan of Shuri castle shows an oval shape of 370 by 210 m, covering an area of 42,000m<sup>2</sup>. It was built upon a Ryukyu limestone base and was surrounded by two layers of walls. The walls made of cut limestone measure 6–10 m high and 4–5 m thick, meandering along the natural land contours. In the castle, several stepped terraces exist between the highest part called East Azana (135.5 m above sealevel) and the lower part called West Azana(125.5 m).

The Kyonouchi is located in the southwest sector, which includes the highest point (135 m) on the north-south axis. From this area, a gentle slope declines toward the north. The excavation of the northern part of the castle in 1984 exposed the raised terraces upon the original slope of a 17° gradient.

The Kyonouchi is separate from the complex of political facilities such as the Main Palace, South Palace, North Palace and Hoshin gate. The name 'Kyonouchi' is supposed to mean ' the sacred area with spiritual power'. Old maps and archives suggest that five sacred shrines (utaki or uganjo) existed with in this area. Two in Particular, Suimui-utaki and Madamamui-utaki enshrined the two founder deities of Okinawa, and the former took Precedence as all the Ryukyu kings received oracles from the highest deity, Kikoe-ogimi, through this shrine. Shuri castle is also called 'Suimui-gusuku' so that the name 'Shuri' seems to have come from the shrine.

The Kyonouchi covers an area of 5,000m<sup>2</sup>, and approximately 2,000m<sup>2</sup> of this was excavated in the northern portion. As a result, 51 features were unearthed : 33 stone walls, 2 stone alignments, 3 stone pavements, 7 ditches, 3 pits, 2 building foundations, and a staircase. They seem to have been built or made in the 15 th and 16 th century A.D.

The plan of the stone walls match with the zoning walls shown on old maps, although some reconstructions and additions could have been made.

The most notable of all was the stone walls SA 19, SA 20 and SA 28 that had strong marks of fire. A considerable number of abandoned artifacts was found from inside these walls. They consisted of various Chinese, Thai, Vietnamese and Japanese ceramics, Japanese armor, bead ornaments, and a padlock. Most of them were also fired. The entire feature turned out to be a storage unit (SK 01) of 3 by 4 m with a staircase.

This storage place seems to have been destroyed by fire in either the 14 th or 15 th century, since it included many celadon cups with 'raimon-tai' decoration. In fact the archival descriptions suggest two incidents of fire : the rebellion of Shiro and Huri in 1453, and an accidental fire in 1459.

Some of the Chinese ceramics belong to the Yuan and Ming dynasties. The latter are of the period between Yung-lo and Hsuan-te ; however, the padlock indicated that this storage might have been demolished by the fire of 1459. The quality of the artifacts found in this storage is strikingly high when compared to similar types of material unearthed elsewhere in Japan.

#### REFERENCES

1. HOKAMA S., SAIGO N. 1972, Omorososhi Nihon Shisoshi Taikei 18, Iwanami Shoten.
2. TOMA S., UEHARA S. et al. 1980, Shuri-joseki Okinawa-ken Bunkazai Chosa Hokokusho 88, Okinawa Prefecture Board of Education.
3. MAEHIRA B. 1989, Shuri-jo Monogatari, Hirugisha.
4. SHURI-JO KENKYU GROUP ed. 1991, Shuri-jo Nyumon, sono Kenchiku to Rekisi.

## 沖繩県那霸市首里城京内跡之発掘調査報告書概要

首里城京内跡之発掘調査係受沖繩開発庁沖繩綜合事務局 国営沖繩記念公園事務所之委託由沖繩県教育委員会在1994年11月21日至1995年2月28日之間實行之承辦事項。發掘面積約為2,000平方公尺。

京内跡地是首里城內之一種聖地或是舉行祭祀之所在。為復元整理被稱所謂「京内」之區域所需要把握之積石配置情形自1995年度開始發掘調查至1997年現在仍在繼續進行。

首里城跡地位在沖繩本島南部縣都那霸市之東辺在、石灰石丘陵上形成之「GUSUKU」、由於每中國之朝貢貿易發生之地理上條件乃能進行每東南亞各國、朝鮮及日本々土之中繼貿易以致使王國豐盛並築成獨自之歷史及文化。首里城可謂是沖繩之政治、文化500年余之中樞。

首里城於1925年被指定為國寶、由1927年開始全面的解體修復工程、至1931雖然完工惟於1944年因日本軍之沖繩總司令部掘設地下洞致使曾經誇耀其偉容之首里城亦在沖繩戰闘中被美軍之集中砲火燒失了包括國寶建築物之甚多貴重文化遺產。

沖繩県在復歸日本後即曾立案復元整理計畫、在1973・74年業已獲得沖繩開発庁之補助復元整理款會門、之後亦繼續進行復元工程而將款會門及久慶門之接続石垣工程完成而至1997年度亦正在進行繼世門之復元工程。

首里城為東西370公尺、南北210公尺、面積42,000平方公尺之稍近橢圓形狀的規模、巧妙地利用琉球石灰岩作為基礎而根本上以內郭及外郭的城壁雙重的包圍着、城壁則用切開做琉球石灰岩以4～5公尺的幅度及6～10公尺的高度屏成曲線形狀東積成的、在城內的東邊有高度135.5公尺稱為「東辺 AZANA」的高處並由比漸以形成段丘狀的平處而行至高度125.5公尺的「西辺 AZANA」。

以外、在首里城的南北軸有「京内」的觀覽台其高度另「東辺 AZANA」一樣有135公尺、而以此作為南北軸的高處。由「京内」向北則為暖斜面。北邊的暖斜面部分是由於在1984年的款會門、久慶門內面區域發掘調查結果發現係以大規模工程填埋舊地形的傾斜面（傾度17°）而造成、而一面保持平處一面築積城壁。

「京内」所在地是居於離開正殿、南殿、北殿、奉神門之政治建築物集中地內部之南西地區。「京内」的「京」含有“靈力”之意、被認為表示「有靈力的聖域」之固有名詞。有幾種圖面及文獻表示在「京内」有沖繩之開闢二神降臨之御嶽（行禮處）除、「首里森御嶽」、「真玉森御嶽」兩處之外似曾存在着稱為「京内之三御嶽」之三處御嶽。尤其「首里森御嶽」之為琉球王國最高神女“聞得大君”曾經對歷代國王賜下宣示之處。此“首里森御嶽”似乃成為“GUSUKU”名稱乃來由、因此首里城曾有“首里森 GUSUKU”之別稱。

「京内」地域之面積大概有5,000平方公尺、其中在北面大約2,000平方公尺之區域內曾在1994年實行發掘調查、在京内跡地被檢出之遺構計有51基、內容為積石33基、列石2基、敷石3基、溝7基、土壤3基、建築物2基、階梯1基、以出土之造物而觀這些遺構群可能在15世紀發至16世紀之間構築造成的。

積石遺構被認為每在「京内」之古書面所示之区画積石相同、但隨着時代這些積石似曾多少變更位置或築造新的積石。

在遺構或出土品裡特別被注目的是積石 S A19・S A20、S A28、積石因受再次火熱變成橙色而脆化、由其內面掘出甚多被一起廢棄的遺物。例如中國陶磁器、泰國的褐釉陶器及半練土器、越南的青花、日本々土之備前燒・鑑・玉類・錠等大部分受過再次火燒。掘完後的結果困判斷係帶有階梯的倉庫跡地（3 平方公尺×4 平方公尺規模）故假稱其為土壤 S K01。

由土壤 S K01內掘出的陶磁器中因有甚多青瓷器的雷文帶碗由其情形判斷係在14世紀中期至15世紀中期被火災燒失的遺構。此時期之狀況馬文獻所載相比可舉出在1453年勃發之志魯・布里之亂及在1459年發生之倉庫的火災二案件。

在出土品中雖然不多尚有中國元朝之青花、馬上杯、紅釉、瑠璃釉等之外還有可認定為中國明朝永樂期至宣德期之青花碗、瓶、壺等々。關於推定期期的最後資料乃以錠之出土狀況判斷其為在1459年之倉庫火災的遺物群。被掘出之遺物如馬15世紀前半之日本國內遺跡比較可作為一級資料。

#### 参考文献

1. 外間守善・西郷信綱：《OMOROSAUSHI》，《日本思想史大系》18 岩波書店，1972年。
2. 當眞嗣一・上原 靜主編：《首里城跡》，一歛会門・久慶門内面地域復元整理事項之遺構調査－《沖繩県文化財調査報告書第88集》沖繩県教育委員會，1980年。
3. 真栄平房敬：《首里城物語》HIRUGI 社，1989年。
4. 首里城研究 Group：《首里城入門その建築と歴史》1991年。

#### 註

註1. “GUSUKU” 在考古學上被認為地方領主的公館或王城。

註2. “AZANA” 帶有眺望台之機能、受中國或朝鮮之影響、成為沖繩獨自之設施。在玉城村糸数城跡有類以中國或朝鮮之“雉”，“馬面”或“甕城”的設施。

註3. 關於1459年之倉庫火災情形在明實錄之部 英宗實錄，卷301 天順三年三月癸未朔〔甲申〕禮部奏，琉球國中山王尚泰久奏稱 本國王府失火，延燒倉庫銅錢貨物…伝々之記錄。

訳文 黃煥然（住址：宜野灣市真志喜1-23-18）

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	しゅりじょうせき 首里城跡							
副書名	京の内跡発掘調査報告書(I)－京の内北地区の遺構調査－							
卷次								
シリーズ名	沖縄県文化財調査報告書 第132集							
シリーズ番号								
編著者名	金城亜信・上原 静・城間 肇・大澤正己・四柳嘉章・島袋春美							
編集機関	沖縄県教育委員会 文化課							
所在地	〒900-0021 沖縄県那覇市泉崎1丁目2番2号 ☎098-866-2731							
発行年月日	1998年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°°	°°°			
首里城跡	沖縄県那覇市 市之藏3 丁目1番	那覇市 47201	『那覇市の遺跡』 (1982年) 11. 首里城跡	26度	127度	1994.11.07 ～ 1995.03.19	2,000m <sup>2</sup>	国営公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
首里城跡	城跡	室町～江戸時代相 当期 中世・近世	石積み、階段、 土壙、埠敷遺構、 礎石、石列遺構 など。	グスク土器、タイの半練 土器、陶質土器、瓦質土 器、カムイ焼窯系須恵器、 青磁、泉州窯系青磁、高 麗青磁、青白磁、青花、 ベトナム陶器、褐釉陶器 (中国・タイ)、綠釉、三 彩、五彩、瑠璃釉、紅釉、 備前焼、天目茶碗、高麗 系瓦、大和系瓦、明朝系 瓦、埠瓦、玉類、円盤状 製品、古錢、青銅製品、 鐵製品、骨製品、貝製品、 石器、石製品ほか。	首里城の祭祀場 所・聖域空間。 首里城発祥と関 係する首里森御 獄ほか4御獄(拝 所)があった。			

## 例　　言

1. 本書は平成 6 年度に実施された首里城京の内跡北地区の発掘調査報告書である。
2. 本書掲載の地形図は国土地理院発行 1 / 2,500、1 / 50,000 を使用した。
3. 本文中に使用した首里城の各種地形図などは、沖縄県教育委員会が刊行したものを再度、複写した。
4. 遺物の実測図は、その規模や種類によって整理縮小し、各図版にスケールを付した。なお遺物の図版については不定縮尺となっている。
5. 本書で使用した航空写真は国土地理院 93 OKINAWA C 49-12 と同院が保管している1944年の米軍撮影の 3 PR/5 M 3 IV XXIBC JAN-3 F/152.4 REST を複写した。
6. 陶磁器の分類・鑑定については、手塚直樹氏（鎌倉考古学研究所所長）、紅釉の鑑定については長谷部楽爾氏（元東京国立博物館次長）のご協力を戴いた。記して謝意を表します。
7. 「沖縄県那覇市首里城跡京の内跡の発掘調査報告書概要」の英訳は国際基督教大学 考古学研究センター研究員の林 徹氏に、中国語訳は黄煥然氏にお願いした。記して謝意を表します。
8. 本書の編集は島袋春美の協力を得て、金城亀信が行った。
9. 各章の執筆は下記のように分担した。  
金城亀信 第 I 章～第 IV 章、第 V 章第 1 節～第 13 節、第 VI 章、付編 首里城関係主要年表  
上原 静 第 V 章第 15 節  
城間 肇 第 V 章第 14 節
10. 付編の原稿については下記の先生方にお願いした。記して謝意を表します。  
四柳嘉章 漆器文化財科学研究所所長  
大澤正己 たたら研究会会員（九州委員）
11. 平成 6 年度の発掘調査で全出土量の 4 分の 3 近くを占めた土壙 S K01 (S A19・S A20、S A28) 出土品を主体に報告書を作成した。土壙 S K01 内出土の陶磁器類は 1456 年の志魯・布里の乱もしくは 1459 年に起きた倉庫などの失火の際に消失した倉庫跡とみられ、首里城の陶磁器研究上、重要な遺構であると判断されたからである。土壙 S K01 内出土の鉄器・青銅製品等は次回に報告する。
12. 本書に掲載された現場の写真は発掘担当者の金城亀信、出土遺物は長田 剛の撮影によるものである。
13. 本書の位置図・遺構図関係などは金城亀信がトレースをした。また、陶磁器の石膏復元で難易度の高い特殊なものについても、直接金城が復元した。
14. 本書に掲載した京の内跡の発掘調査に関する写真・実測図などの記録はすべて沖縄県教育庁文化課資料室に保管してある。
15. 発掘調査・資料整理などの調査体制については、第 I 章の第 3 節に記してある。

# 目 次

## 序

沖縄県那覇市首里城跡京の内跡の発掘調査報告書概要

EXCAVATION OF THE KYONOUCHI SITE IN THE SHURI CASTLE (英訳)

沖縄県那覇市首里城跡京内跡之発掘調査報告書概要 (中国語訳)

報告書抄録

## 例 言

第Ⅰ章	序 章	1
	第1節 首里城跡公園整備事業に至る経緯	1
	第2節 調査に至る経緯	1
	第3節 調査の体制	3
	第4節 調査の経緯	7
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	11
	第1節 地理的環境	11
	第2節 歴史的環境	13
第Ⅲ章	調査の概要	15
	第1節 調査地域	15
	第2節 調査区の設定	20
第Ⅳ章	遺 構	22
	第1節 遺構の概要	22
	A. 遺構の種類と概略	22
	B. 各時期別の遺構	26
	C. 土壌 SK 01(SA 19・SA 20、SA 28)	53
	1. 層 序	53
	2. 遺 構	56
第Ⅴ章	出土遺物	61
	第1節 タイ産半練土器	61
	第2節 青 磁	70
	A. 青 磁 碗	70
	1. 蓮弁文碗	70
	2. ラマ式蓮弁文碗	74
	3. 雷文帯碗	78
	4. 無文口縁碗	90
	B. 青 磁 皿	97
	1. 口折皿	97
	2. 玉縁口縁皿	106
	3. 外反口縁皿	108
	4. 直口口縁皿	116
	5. 稜花皿	124
	6. 八角皿	125
	C. 青 磁 盤	127
	1. 銅線盤	127

2. 直口口縁盤	128
D. 青磁壺	132
1. I群（小型壺）	132
2. II群（大型壺）	137
3. II群（大型壺）の蓋	137
E. 青磁大瓶	146
1. I群（大花瓶）	146
2. II群（大瓶）	146
F. 青磁大鉢	148
1. 大鉢	148
G. 青磁馬上杯	149
1. 有文馬上杯	149
2. 無文馬上杯	149
H. 青磁水注	149
1. I類	149
2. II類	149
I. 青磁瓶	151
1. I類（双耳瓶）	151
2. II類（玉壺春瓶）	151
J. 青磁花盆台	151
K. 青磁香炉	153
L. 青磁小品	153
第3節 元青花	155
第4節 明青花	160
第5節 白磁	181
第6節 色絵	190
第7節 紅釉	190
第8節 瑞璃釉	193
第9節 接釉磁器	195
第10節 接釉陶器	196
第11節 ベトナム陶器	211
第12節 タイ産接釉陶器	214
第13節 中世陶器	229
第14節 黒釉陶器	232
A. 黒釉天目茶碗	232
B. 黒釉茶入れ	232
C. 黒釉碗	233
第15節 屋瓦	239
第VI章 調査の成果	255
付 編	
首里城京の内出土朱漆器の科学的分析	337
首里城跡出土の青銅製品の科学分析調査	341
首里城関係主要年表	366

# 図表目次

## 図目次

第1図 沖繩(琉球王国)の位置と周辺諸国	2	色繪 中国(1・2碗、3皿)、ベトナム(4碗)、 紅釉水注(5~9)	191
第2図 首里城跡の位置	12	瑞穂釉水注	194
第3図 発掘調査地域(上段)と「首里古地図」(下段)	16	第71図 褐釉組合器	195
第4図 磁気異常測定位置	10	第72図 褐釉陶器(1)	206
第5図 首里城鶴本郷土冲縄分遣隊配置図(1893年)	18	第73図 褐釉陶器(2)	207
第6図 首里城平面図(袋袋良徳氏所藏)	18	第74図 褐釉陶器(3)	208
第7図 首里城平面図(昭和16年頃)	19	第75図 褐釉陶器(4)	209
第8図 旧首里城跡図(旧琉球大学校舎配置図)	19	第76図 褐釉陶器(5)	210
第9図 「京の内」跡遺構配置図およびグリッド設定	21	第77図 ベトナム陶器	213
第10図 遺構全体図	23	第78図 タイ産褐釉陶器(1)	225
第11図 京の内 北地区第I期(14C前半~14C後半)の遺構	27	第79図 タイ産褐釉陶器(2)	226
第12図 京の内 北地区第II期(14C後半~15C前半)の遺構	31	第80図 タイ産褐釉陶器(3)	227
第13図 京の内 北地区第III期(15C中)の遺構	35	第81図 タイ産褐釉陶器(4)	228
第14図 京の内 北地区第IV期(15C後半~16C初頭)の遺構	39	第82図 中世陶器 摺鉢	230
第15図 京の内 北地区第V期(16C後半~19C後半)の遺構	43	第83図 中世陶器 大甕(2~4)蓋(5~6)	231
第16図 京の内 北地区第VI期(19世紀終末~昭和)の遺構	51	第84図 黒釉陶器(茶碗)	234
第17図 層序(A-14~15グリッド北壁とS A28の畦)	54	第85図 黒釉陶器(茶入れ・碗)	238
第18図 B-15土壤 S K01内の遺物検出状況	55	第86図 高麗系瓦(軒丸瓦・軒平瓦)	248
第19図 B-15土壤 S K01の完掘後の石積み立面及び断面	57	第87図 高麗系瓦(軒平瓦・平瓦)、明朝系瓦(軒丸瓦)	249
第20図 首里城 京の内空間の変遷	59	第88図 高麗系瓦(平瓦・丸瓦)、大和系瓦(雁振瓦・平瓦)	250
第21図 タイ産半線土器 蓋	68	第89図 有段式平瓦、高麗系瓦(平瓦)、大和系瓦(丸瓦)	251
第22図 タイ産半線土器 蓋、その他の蓋	69	第90図 高麗系瓦(平瓦)、大和系瓦(軒丸瓦・軒平瓦・役瓦)	252
第23図 青磁 運弁文碗(1)	76	第91図 明朝系瓦(軒丸瓦・軒平瓦・平瓦)	253
第24図 青磁 運弁文碗(2) ラマ式運弁文碗	77	第92図 大和瓦(平瓦・丸瓦)	254
第25図 青磁 雷文帯碗(1)	85		
第26図 青磁 雷文帯碗(2)	86		
第27図 青磁 雷文帯碗(3)	87		
第28図 青磁 雷文帯碗(4)	88		
第29図 青磁 雷文帯碗(5)	89		
第30図 青磁 無文口縁碗(1)	94	卷首図版 1 首里城(航空写真)	
第31図 青磁 無文口縁碗(2)	95	卷首図版 2 上段: 調査区全景 中段: 下段左: SK01検出直後 下段右: SK01完掘後	
第32図 青磁 無文口縁碗(3)	96	卷首図版 3 青磁	
第33図 青磁 口折皿(1)	103	卷首図版 4 青磁 青花 白磁	
第34図 青磁 口折皿(2)	104	卷首図版 5 青花	
第35図 青磁 口折皿(3)	105	卷首図版 6 青花	
第36図 青磁 玉縁口緑皿	107	卷首図版 7 青花、紅釉、五彩	
第37図 青磁 外反口縁皿(1)	114	卷首図版 8 褐釉陶器・中世陶器	
第38図 青磁 外反口縁皿(2)	115		
第39図 青磁 直口口縁皿(1)	122		
第40図 青磁 直口口縁皿(2)	123		
第41図 青磁 穂花皿・八角皿	126		
第42図 青磁 豆(1)	133	版画 1 首里城航空写真(1944年)の米軍撮影	261
第43図 青磁 豆(2)	134	版画 2 遺構検出状況(1)	262
第44図 青磁 豆(3)	135	版画 3 遺構検出状況(2)	263
第45図 青磁 豆(4)	136	版画 4 遺構検出状況(3)	264
第46図 青磁 豆(1)	142	版画 5 磁気探査	268
第47図 青磁 豆(2)	143	版画 6 タイ産半線土器 蓋(1)	265
第48図 青磁 豆(3)	144	版画 7 タイ産半線土器 蓋(2)、蓋、その他の蓋	266
第49図 青磁 豆(4)	145	版画 8 青磁 運弁文碗(1)	267
第50図 青磁 大花瓶・大瓶	147	版画 9 青磁 運弁文碗(2)、ラマ式運弁文碗	268
第51図 大鉢	148	版画 10 青磁 雷文帯碗(1)	269
第52図 青磁 馬上杯・水注	150	版画 11 青磁 雷文帯碗(2)	270
第53図 青磁 瓢	152	版画 12 青磁 雷文帯碗(3)	271
第54図 青磁 花盆台・香炉・小品	154	版画 13 青磁 雷文帯碗(4)	272
第55図 元青花	158	版画 14 青磁 雷文帯碗(5)	273
第56図 元青花 大合子(10蓋、11中蓋、12身)	159	版画 15 青磁 無文口縁皿(1)	274
第57図 明青花 碗(1)	172	版画 16 青磁 無文口縁皿(2)	275
第58図 明青花 碗(2)	173	版画 17 青磁 無文口縁皿(3)	276
第59図 明青花 碗(3)	174	版画 18 口折皿(1)	277
第60図 明青花 碗・鉢・杯	175	版画 19 青磁 口折皿(2)	278
第61図 明青花 盆	176	版画 20 青磁 口折皿(3)	279
第62図 明青花 水	177	版画 21 青磁 玉縁口緑皿	280
第63図 明青花 大瓶	178	版画 22 青磁 外反口縁皿(1)	281
第64図 明青花 花瓶・壺	179	版画 23 青磁 外反口縁皿(2)	282
第65図 明青花 壺	180	版画 24 青磁 直口口縁皿(1)	283
第66図 白磁(1)	187	版画 25 青磁 直口口縁皿(2)	284
第67図 白磁(2)	188	版画 26 青磁 穂花皿・八角皿	285
第68図 白磁(3)	189	版画 27 青磁 豆(1)	286
		版画 28 青磁 豆(2)	287
		版画 29 青磁 豆(3)	288
		版画 30 青磁 豆(4)	289
		版画 31 青磁 豆(5)	290
		版画 32 青磁 豆(6)	291

## 図版目次

卷首図版 1 首里城(航空写真)	
卷首図版 2 上段: 調査区全景 中段: 下段左: SK01検出直後 下段右: SK01完掘後	
卷首図版 3 青磁	
卷首図版 4 青磁 青花 白磁	
卷首図版 5 青花	
卷首図版 6 青花	
卷首図版 7 青花、紅釉、五彩	
卷首図版 8 褐釉陶器・中世陶器	
版画 1 首里城航空写真(1944年)の米軍撮影	261
版画 2 遺構検出状況(1)	262
版画 3 遺構検出状況(2)	263
版画 4 遺構検出状況(3)	264
版画 5 磁気探査	268
版画 6 タイ産半線土器 蓋(1)	265
版画 7 タイ産半線土器 蓋(2)、蓋、その他の蓋	266
版画 8 青磁 運弁文碗(1)	267
版画 9 青磁 運弁文碗(2)、ラマ式運弁文碗	268
版画 10 青磁 雷文帯碗(1)	269
版画 11 青磁 雷文帯碗(2)	270
版画 12 青磁 雷文帯碗(3)	271
版画 13 青磁 雷文帯碗(4)	272
版画 14 青磁 雷文帯碗(5)	273
版画 15 青磁 無文口縁皿(1)	274
版画 16 青磁 無文口縁皿(2)	275
版画 17 青磁 無文口縁皿(3)	276
版画 18 口折皿(1)	277
版画 19 青磁 口折皿(2)	278
版画 20 青磁 口折皿(3)	279
版画 21 青磁 玉縁口緑皿	280
版画 22 青磁 外反口縁皿(1)	281
版画 23 青磁 外反口縁皿(2)	282
版画 24 青磁 直口口縁皿(1)	283
版画 25 青磁 直口口縁皿(2)	284
版画 26 青磁 穂花皿・八角皿	285
版画 27 青磁 豆(1)	286
版画 28 青磁 豆(2)	287
版画 29 青磁 豆(3)	288
版画 30 青磁 豆(4)	289
版画 31 青磁 豆(5)	290
版画 32 青磁 豆(6)	291

図版33	青磁 磁(7)	292	第27表	直口口縁皿推定個体数	119
図版34	青磁 磁(1)	293	第28表	直口口縁皿推定個体数	124
図版35	青磁 磁(2)	294	第29表	横花口推定個体数	124
図版36	青磁 磁(3)	295	第30表	八角皿推定個体数	125
図版37	青磁 磁(4)	296	第31表	分類不能な皿の個体数	125
図版38	青磁 大花瓶、大瓶	297	第32表	青磁盤推定個体数	129
図版39	青磁 馬上杯・水注	298	第33表	青磁盤観察一覧	129
図版40	青磁 瓢(1~4)、大鉢(5)	299	第34表	青磁盤観察一覧	138
図版41	青磁 花盆台・香炉・小品	300	第35表	元青花推定個体数	157
図版42	元青花	301	第36表	明青花推定個体数	164
図版43	元青花 大合子(10蓋、11中蓋、12身)	302	第37表	明青花観察一覧	165
図版44	明青花 碗(1)	303	第38表	白磁観察一覧	183
図版45	明青花 碗(2)	304	第39表	中国産褐釉陶器サイズ別出土状況	199
図版46	明青花 碗(3)	305	第40表	中国産褐釉陶器観察一覧	199
図版47	明青花 碗(4)・鉢・杯	306	第41表	タイ産褐釉陶器口縁破片数	217
図版48	明青花 皿	307	第42表	タイ産褐釉陶器主要口径一覧	217
図版49	明青花 瓢	308	第43表	タイ産褐釉陶器底径一覧	217
図版50	明青花 大甕	309	第44表	沖縄県出土のタイ産褐釉陶器主要一覧	218
図版51	明青花 花瓶・壺	310	第45表	タイ産褐釉陶器観察一覧	221
図版52	明青花 瓢	311	第46表	博多道路群出土の天目茶碗分類試案(要約)	235
図版53	白磁(1)	312	第47表	黒釉天目茶碗観察一覧	236
図版54	白磁(2)	313	第48表	各種瓦の地区別出土状況	239
図版55	白磁(3)	314	第49表	各種瓦別の平瓦厚さ状況	239
図版56	赤絵 中国(1・2碗、3皿)ベトナム(4碗)	315	第50表	高麗系瓦の平瓦造瓦技術状況	241
図版57	紅釉水注、珊瑚釉水注	316	第51表	大和系瓦の丸瓦にみられる叩き目状況	242
図版58	褐釉磁器	195	第52表	大和系瓦の平瓦造瓦技術状況	243
図版59	褐釉陶器(1)	317	第53表	高麗系瓦の丸瓦造瓦技術状況	243
図版60	褐釉陶器(2)	318	第54表	明朝系瓦の焼成(色調)別分類状況	244
図版61	褐釉陶器(3)	319	第55表	明朝系瓦の分類別厚さ状況	244
図版62	褐釉陶器(4)	320			
図版63	褐釉陶器(5)	321			
図版64	ベトナム陶器	322			
図版65	タイ産褐釉陶器	323			
図版66	世中陶器・播鉢 1・大甕2~4、蓋5~6)	324			
図版67	黒釉陶器(茶碗)	325			
図版68	黒釉陶器(茶入れ21~27、碗28~31)	326			
図版69	高麗系瓦(軒丸瓦・軒平瓦)	327			
図版70	高麗系瓦(軒平瓦・平瓦)、明朝系瓦(軒丸瓦)	328			
図版71	高麗系瓦(平瓦・丸瓦)、大和系瓦(雁振瓦・平瓦)	329			
図版72	有段式平瓦、高麗系瓦(平瓦)、大和系瓦(丸瓦)	330			
図版73	高麗系瓦(平瓦)、大和系瓦(軒丸瓦・軒平瓦・役瓦)	331			
図版74	明朝系瓦(軒丸瓦・軒平瓦・平瓦)	332			
図版75	大和瓦(平瓦・丸瓦)	333			

### 表題次

第1表	磁気異常測定値一覧	9
第2表	切石積みの外面と内面の関係	26
第3表	京の内北地区第I期の遺構観察一覧	29
第4表	京の内北地区第II期の遺構観察一覧	30
第5表	京の内北地区第III期の遺構観察一覧	33
第6表	京の内北地区第IV期の遺構観察一覧	38
第7表	京の内北地区第V期の遺構観察一覧	43
第8表	京の内北地区第VI期前半の遺構観察一覧	48
第9表	京の内北地区第VI期後半の遺構観察一覧	53
第10表	遺物出土状況	61
第11表	タイ産半疊土器落し蓋の器と蓋端部の相関関係一覧	64
第12表	タイ産半疊土器観察一覧	65
第13表	青磁推定個体数	67
第14表	蓮弁文碗推定個体数	72
第15表	蓮弁文碗観察一覧	72
第16表	フマ式蓮弁文碗観察一覧	75
第17表	雷文帯碗推定個体数	80
第18表	雷文帯碗観察一覧	80
第19表	無文碗・その他の資料の推定個体数	91
第20表	無文口縁皿観察一覧	92
第21表	口折皿推定個体数	99
第22表	口折皿観察一覧	100
第23表	玉縁口縁皿推定個体数	106
第24表	玉縁口縁皿観察一覧	107
第25表	外反口縁皿推定個体数	111
第26表	外反口縁皿観察一覧	112

### 付編 2

図1	首里城/百坂司墓木棺漆塗膜の赤外線吸収スペクトル	338
図版1	漆器建膜顕微鏡写真	340
付編 1	首里城/百坂司墓木棺漆塗膜の赤外線吸収スペクトル	338
図1	首里城/百坂司墓木棺漆塗膜の赤外線吸収スペクトル	338
図版1	漆器建膜顕微鏡写真	340
第1国	首里城跡位置	342
第1表	供試材の履歴と調査項目及び調査結果の概要	342
第2表	鍋塊の化学分析値と硬度の関係	346
Photo. 1	鼎形香炉・鎧立物の顕微鏡組織	347
Photo. 2	銅製品と青銅鑄の顕微鏡組織	348
Photo. 3	銅塊と銅鏡の顕微鏡組織	349
Photo. 4	鼎形香炉(SUR-1)の特性X線像と定量分析値	350
Photo. 5	鎧立物(SUR-5)の特性X線像と定量分析値	351
Photo. 6	被熱中国貨銭(SUR-6)の特性X線像と定量分析値	352
Photo. 7	銅釘(SUR-7)の特性X線像と定量分析値	353
Photo. 8	鉈入り青銅滴(SUR-8)の特性X線像と定量分析値	354
Photo. 9	鉈入り青銅滴(SUR-8-1)の特性X線像と定量分析値	354
Photo. 10	酸化銅塊小片(SUR-9)の特性X線像と定量分析値	356
Photo. 11	鳩目銭(SUR-10)の特性X線像と定量分析値	357
Photo. 12	琉球貨銭(世高通宝)(SUR-11)の特性X線像と定量分析値	358
Photo. 13	鼎形香炉(SUR-1)・鼎形香炉(SUR-5)・鎧立物、 SUR-6: 被熱中国貨銭	359
Photo. 14	SUR-7: 銅釘、8: 鉈入り青銅滴、9: 酸化銅塊小片 10: 鳩目銭、11: 琉球貨銭(世高通宝)	360
Photo. 15	SUR-1 鼎形香炉	365
Fig. 1	鼎形香炉(SUR-1)	361
Fig. 2	鎧立物(SUR-5)	362
Fig. 3	被熱中国貨銭(SUR-6)	362
Fig. 4	銅釘(SUR-7)	362
Fig. 5	鉈入り青銅滴(SUR-8)	363
Fig. 6	鉈入り青銅滴(SUR-8)	363
Fig. 7	酸化銅塊小片(SUR-9)	364
Fig. 8	鳩目銭(SUR-10)	364
Fig. 9	琉球貨銭: 世高通宝(SUR-11)	365

# 第Ⅰ章 序 章

## 第1節 首里城跡公園整備事業に至る経緯

沖縄県の県庁所在地のある那覇市には、室町時代から明治時代までの約500年にわたって琉球王国の政治・経済・文化の中心として役割を果たしてきた尚王家の居城である首里城があった。首里城は歴代の国王によって、当時の琉球王国の土木・建築技術などの粹を集めて築城された沖縄の代表的なグスク（城）であった。城内には正殿、北殿、南殿などの多くの建築物が存在し、そのいくつかは旧国宝として1925年（大正14年）に指定されていた。

琉球王国の遺産でもあった首里城も1945年（昭和20年）の太平洋戦争の際に、集中砲火を受け徹底的に破壊されてしまい、正殿や南・北殿などの建造物も灰燼に帰してしまった。さらに戦後は、首里城跡に琉球大学が1950年（昭和25年）に創られ、造成工事によって改変がなされ、キャンパスとして使用された（第8図）。

沖縄県は首里城をはじめその周辺の文化財を戦災文化財として復元整備計画を立案し、1972年（昭和47年）の本土復帰直後に沖縄開発庁の補助を受けて歓会門復元整備事業から着手し、久慶門・木曳門・西のアザナの石積み、京の内南側石積みと復元整備がなされていて、平成9年度には維世門の復元整備に至っている。この事業は沖縄県の「首里城城郭等復元整備事業」として整備がなされている。

1982年（昭和57年）の『第二次沖縄振興開発計画』の中で首里城一帯の整備が提言され、これを受けて1984年（昭和59年）には沖縄県が首里城の復元整備の指針となった「首里城公園基本計画」を策定した。さらに首里城の中心となる正殿などの建造物の復元が検討され、1986年（昭和61年）に首里城公園計画区域の約18ヘクタールの内、城内内郭の約4ヘクタールを沖縄県の本土復帰を記念する国「都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）」で復元整備することが閣議決定されている（第3図上段）。

これとあわせて城郭外側の区域約14ヘクタールを「県営公園事業」として位置づけて整備が推進されている。

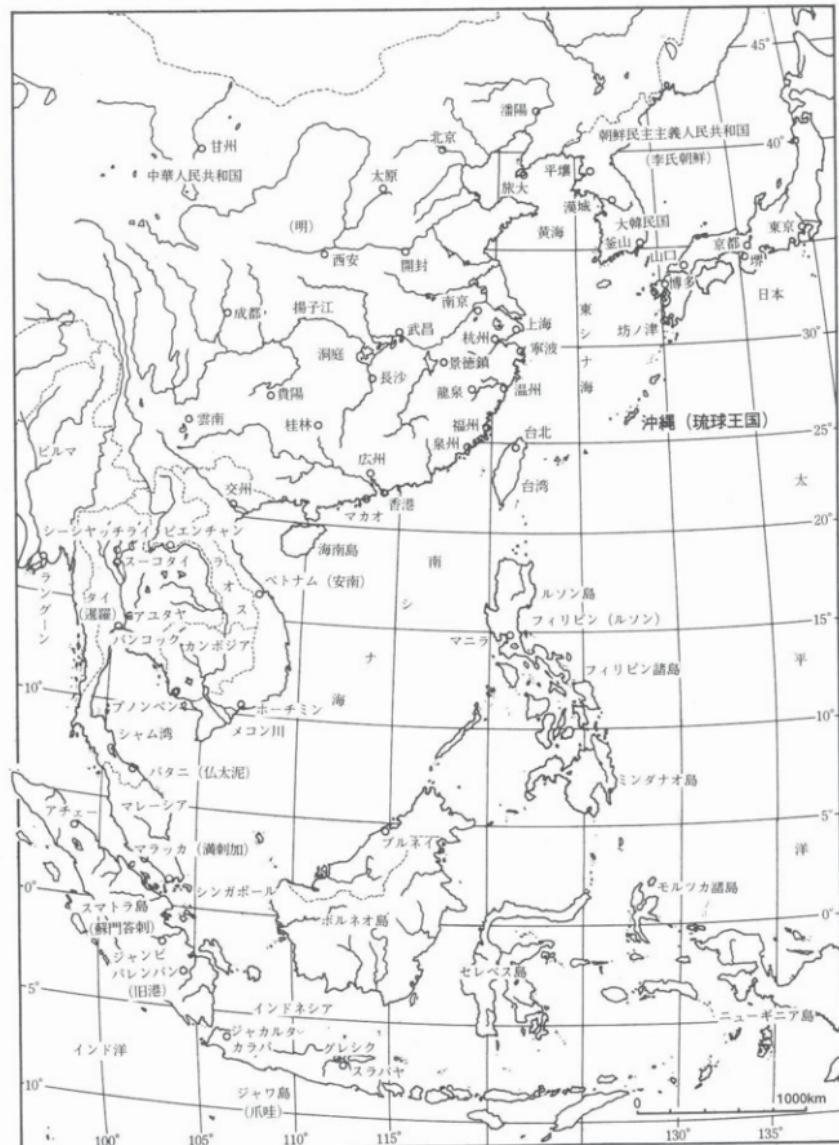
1992年（平成4年）には正殿を含めた建造物が復元整備され、「首里城公園」として一部が公開されている。このような中で、首里城内でも最も重要な聖域であった「京の内」地域の復元整備の気運が高まり、「京の内」地域の実施計画に必要な当時の石積み遺構などを検出して、「京の内」の実施計画に反映させるべき情報の収集を目的として沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所からの委託を受けて沖縄県教育委員会の文化課が遺構調査を平成6年度から開始したわけである。

## 第2節 調査に至る経緯

首里城の復元整備が具体的に動き出してきたのは、1967年（昭和42年）から始まった琉球大学の移転と共に伴う跡地利用計画が検討されたことによる。その後、1981年（昭和56年）～1982年（昭和57年）の二ヶ年の期間を要して琉球大学の移転が完了するわけであるが、琉球大学の移転直後から県教育委員会は、沖縄開発庁の補助を得て1985年（昭和60年）に国指定史跡である首里城跡の現状変更申請の手続きを得て、戦後で初めての城内の歓会門・久慶門内郭の発掘調査が実施されるとともに同年10月2日から1986年（昭和61年）2月14日までの期間で、旧首里城正殿跡位置確認調査を実施した。

首里城内郭の約4ヘクタールの復元整備に伴う遺構発掘調査は、1988年（昭和63年）から国営沖縄記念公園事務所との委託を沖縄県教育委員会が受けて、南殿・北殿・御庭地域の発掘調査が開始される。1997年（平成9年）まで継続的に発掘調査が実施されてきた中で、1992年（平成4年）には首里城正殿・南殿・北殿などを含めた建造物が復元整備され、首里城公園として正殿などの施設が一部公開されている。

首里城内の復元整備や遺構確認のための発掘調査の進捗に伴い、未整備地域の首里城南側にある「京の内」地域の復元整備が課題となり、整備に必要な基礎資料となる石積み遺構などの情報の収集を兼ねて1994年（平成6年）より調査が開始された訳である。「京の内」地域の一部は、1936年（明治11年）に伊東忠太・鎌倉芳太郎の両氏によって発掘調査が実施され、首里城の第一拡張時期に造成された古い段階の郭であると解釈がなされてい



### 14世紀末～16世紀の琉球王国主要対外交易国

日本、李氏朝鮮、明（中国）、呂宋（フィリピン）、安南（ベトナム）、暹羅（タイ）、満刺加（マラッカ）、蘇門答臘（スマトラ）、  
旧港（パレンバン）、爪哇（ジャワ）

第1図 沖縄（琉球王国）の位置と周辺諸国

るのみであり、復元整備に必要な情報としてはたりないところである。しかしながら、輸入陶磁の明代の華南彩釉陶（三彩手軸陶器）に関しては豊富であった。伊東・鎌倉両氏の情報や現存する「首里城古図」・「首里城図」などの古絵図の手掛かりを経て発掘調査の事前調査とした。

ところで「京の内」地域は正殿、南殿、北殿、奉神門の存在する政治的建造物が集中する区域とは離れていて、内郭の南西側にあったようであり、首里城の発祥とも関係のある聖域的な場所であった。

古絵図からの情報に基づくと「京の内」には、五つの御嶽が存在していたようである。南側の最も高い箇所には首里森御嶽、西南側に真玉森御嶽、北西には「京の内之三御嶽」と称された三つの御嶽があったようである。その他に首里森御嶽の東隣りや奉神門と番所の南西には家屋型の建物が2・3棟存在していたようである。また、「京の内」の内郭には御嶽や建物空間を仕切る石積みが四基程度と、最も高い南側地域には、西側から入る階段と石造りのアーチ門が存在していたようである。以上の配置を念頭に入れながら1994年（平成6年）の11月下旬から発掘調査に着手した。

#### 参考および引用文献

- ・伊東忠太・鎌倉芳太郎 「南海古陶壺」宝雲舎 1937年。
- ・亀井明徳 「明代華南彩陶をめぐる諸問題」 三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁編 三上次男博士喜寿記念論文集編集委員会 1985年。
- ・糸数兼治・當眞嗣一・上原 静 「旧首里城正殿跡位置確認調査報告書」 沖縄県教育委員会 1986年。
- ・當眞嗣一・上原 静 「首里城正殿跡の調査」 『紀要』第4号 沖縄県教育委員会文化課 1987年。
- ・沖縄県教育委員会 「首里城跡」 歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査 1998年。
- ・沖縄県教育委員会 「首里城跡」 南殿・北殿跡の遺構調査報告書 1995年。

### 第3節 調査の体制

京の内跡の発掘調査は、平成6年（1994年）度と資料整理および報告書の刊行年度である平成9年（1997年）度まで、下記の体制で実施した。

#### 平成6年度組織（遺構調査年度）

事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	嘉陽正幸
事業所管	沖縄県教育庁文化課	課長	西平守勝
事業統括	同 上	課長補佐	知念 勇
	同 上	課長補佐	新垣末子
	同 上	埋蔵文化財係係長	大城 慧
事業事務	沖縄県教育庁文化課	管理係係長	比屋根 正治
	同 上	管理係 主査	新垣和子
	同 上	管理係 副主査	宮城直子
	同 上	管理係 副主査	新崎文子
	同 上	管理係 主事	伊波盛治
事業実施	沖縄県教育庁文化課	埋蔵文化財係史跡整備班 班長	上原 静（発掘統括者）
	同 上	史跡整備班 指導主事	運天和夫
	同 上	史跡整備班 指導主事	我那覇 念
	同 上	史跡整備班主任	盛本 素
	同 上	史跡整備班主任	金城亀信（発掘担当者）
	同 上	嘱託調査員	高宮とり・渡邊尚子

#### 専門調査指導・助言（遺構調査、資料整理 平成6年度～平成8年度）

文化庁記念物課	調査係	整備部門	主任文化財調査官	田中哲雄	平成6年
同 上		史跡部門	文化財調査官	伊東正義	平成7年

文化庁記念物課 調査係 史跡部門 文化財調査官 増潤 徹 平成 8年  
奈良国立文化財研究所 元所長 塚井清足 (平成 6年)  
同 上 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 元部長 牛川喜幸 (庭園 平成 6年)  
中国福建省文化庁文物所 副所長 鄭國珍 (陶磁器・城郭 平成 7・8年)  
福建省博物館 副研究員 楊琼 (陶磁器・城郭 平成 6年)  
ベトナム 国立ハノイ考古学研究所 主任研究員 チン・カオン・トゥホン (Trinh Cao Tuong)  
カナダ トロント大学 教授 リチャード・ピアソン (R.J. Pearson)  
九州大学 文学部 教授 西谷 正 (城郭 平成 7年)  
専修大学 文学部 教授 亀井明徳 (陶磁器 平成 6年)  
愛媛大学 法文学部 助教授 村上恭通 (鉄製品 平成 8年)  
東京外国语大学 専任講師 小川英文 (フィリピン・東南アジア考古学 平成 6年)  
青山学院大学 文学部 教授 田村晃一 (考古学 平成 6年)  
熊本大学 法文学部 元教授 白木原和美 (考古学 平成 6年)  
鹿児島大学 法文学部 教授 上村俊雄 (考古学 平成 6年)  
名古屋大学 文学部 教授 渡邊 誠 (考古学 平成 7年)  
沖縄国際大学 文学部 教授 高宮廣衛 (考古学 平成 6・8年)  
ノルウェー科学アカデミー 博士 トゥール ハイエルダール (Thor Heyerdahl) (平成 8年)  
鎌倉考古学研究所 所長 手塚直樹 (陶磁器 平成 8年)  
漆器文化財科学研究所 所長 四柳嘉章 (漆器 平成 6年)  
沖縄県指定無形文化財保持者 前田孝允 (琉球漆器 平成 6年)  
沖縄県文化財保護審議会 委員長 嵩元政秀 (史跡・名勝・考古学 平成 6年)  
沖縄県文化財保護指導委員 玉津博克 (史跡・名勝 平成 6・7年)  
福岡市美術館 学芸員 尾崎直人 (タイ・ベトナム陶磁 平成 7年)  
福岡市教育委員会 埋蔵文化財係 主事 佐藤一郎 (陶磁器 平成 8年)  
宇佐市教育委員会 文化課 文化財係 技師 江藤和幸 (史跡・考古学 平成 8年)  
浦添市美術館 学芸員 金城聰子 (漆器 平成 6年～8年)  
那覇市教育委員会 文化課 課長 金武正紀 (陶磁器・考古学・史跡 平成 6年～8年)  
同 上 主査 島 弘 (考古学 平成 6年～8年)  
同 上 主事 玉城安明・仲宗根 啓 (考古学 平成 6・7年)  
那覇市教育委員会 壺屋焼物博物館準備室 室長 渡名喜 明 (美術・工芸 平成 7・8年)  
同 上 非常勤学芸員 我部太郎 (美術史 平成 7・8年)  
北谷町教育委員会 文化課 主事 山城安生 (考古学 平成 6年)  
南風原町教育委員会 文化課 学芸員 上地克哉 (考古学 平成 6年～8年)  
玉城村教育委員会 社会教育課 主事 西平 剛 (史跡・考古学 平成 6年～8年)  
糸満市教育委員会 文化課 主事 湖城 清・大城一成 (考古学 平成 7年)  
中城村教育委員会 生涯学習課 主事 渡久地 真 (史跡・考古学 平成 6年)  
今帰仁城跡整備研究委員会 委員 名嘉正八郎 (歴史 平成 7年)  
同 上 委員 赤嶺和男 (建築 平成 8年)  
財団法人 沖縄県文化振興会 史料編集室 主幹 安里嗣淳 (考古学 平成 6～8年)  
沖縄県立博物館 学芸課長 當眞嗣一 (史跡・考古学 平成 6年)  
琉球大学 元教授 仲松弥秀 (民俗・地理学 平成 7年)  
法政大学 文学部 元教授 外間守善 (国文学 平成 6年)  
琉球大学 法文学部 教授 池宮正治 (国文学 平成 6～8年)

琉球大学 法文学部 教授 高良倉吉 (歴史学 平成6~8年)

浦添市教育委員会 文化課 主幹 安里 進 (考古学 平成8年)

琉球大学 法文学部 教授 池田榮史 (考古学 平成6・7年)

基山町教育委員会 係長 山田 正 (史跡・考古学 平成8年)

#### 発掘調査協力者 (遺構実測など 平成6~8年度)

県教育庁文化課 埋蔵文化財係 主任 烏袋 洋・金城 透 (平成6~8年)

同 上 埋蔵文化財係 指導主事 西銘 章 (平成6年)

同 上 タ 嘴託調査員 新城 恵・田中ゆきの・仲座久宜 (平成6・7年)

県教育庁文化課 埋蔵文化財係 嘴託調査員 上原清乃・仲根ゆかり (平成6~8年)

同 上 タ タ 仲間留美・又吉純子 (平成6~8年)

同 上 タ タ 長田 剛 (平成7・8年)

同 上 史跡整備係 嘴託調査員 矢沢秀雄 (平成6~8年)

同 上 タ タ 上原 久 (平成6・7年)

現石垣市教育委員会 文化課 主事 烏袋綾野 (平成6年)

下地町教育委員会 文化財係 主事 川満邦弘 (平成7年)

#### 発掘調査作業員 (平成6年度)

呉屋正一・小波津夏子・山畑キミ・玉城富子・呉屋光子・大城輝子・小波津ヨシ子・幸地ヨシ子・小橋川恵子・小橋川幸子・永吉弘子・小湾清美・仲程喜美子・川鍋敬子・稻嶺フミ子・仲里ハル子・玉城信子・嘉数キミエ・呉我フジ子・新垣美智子・中田邦子・嘉手納 太・諸見里幸子・烏袋文子・松本倫子・袖木崎未子・堀切邦子・米須美津・北谷 香・比嘉宮子・神里利恵子 (以上4名 琉球大学 学生)・古屋聰洋 (富山大学 学生)。

#### 資料整理作業員 (平成6年度)

安和千代子・平良貴子・外間 瞳・烏袋春美・金城礼子・西銘バトロシニア・仲村恒子・島 京美・備瀬枝美子・座間味美津子・立津春枝・島袋里美・喜屋武さおり・源河秀子・玉城恵美利・知念純子・石嶺真由美・新垣千恵子・川満奈美子・喜舎場かおり・高良三千代

城間 肇 (別府大学 学生)。

#### 聞き取り調査および情報提供者 (平成6・7年度)

真栄平房敬・桂 辰哉・高江洲良吉・上間秀政・仲本政治・島 秀範・上江州安英・城間富吉・小橋川興永・宮城盛長・阿波根直盛・喜屋宗徳・喜屋 満・首里城復元期成会・琉球大学

#### 発掘調査員

沖縄県教育庁 文化課 埋蔵文化財係 史跡整備班 班長 上原 靜 (平成7年度より班から係へ改定)

同 上 タ タ 主任 金城亀信 (平成6・7年)

#### 発掘調査協力者

金成淳一・松本 茂 (以上2名 富山大学 学生)・山本正昭 (奈良大学 学生)。

松竹 讓・喜屋武盛世・宮里富二男 (以上3名 松竹重機)・澤嶽直彦 (与那嶽測量設計)

国営沖縄記念公園事務所首里出張所・海洋博覧会記念公園管理財団首里城管理センター

#### 平成9年度組織 (報告書刊行年度)

事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 安室 肇

事業総括 沖縄県教育庁文化課 課長 大城将保

同 上 課長補佐 日越国昭

同 上 課長補佐 稲嶺靖子

事業事務 沖縄県教育庁文化課 管理係 主幹兼係長 大浜 節

沖縄県教育庁文化課	管理係 主査	村山佐代
同 上	管理係 主査	砂川邦子
同 上	管理係 主事	上原直樹
<b>事業実施 沖縄県教育庁文化課</b>	<b>史跡整備係係長</b>	<b>上原 静</b>
同 上	史跡整備係 主 任	盛本 煥・金城 透
同 上	史跡整備係 充指導主事	運天和夫・我那覇 念
同 上	埋蔵文化財係 主 任	金城亀信
同 上	補助員 渡邊尚子・花城五百子・宮城利香・崎浜陽子	
同 上	嘱託調査員 矢沢秀雄・島袋春美・赤嶺雅子・玉寄智恵子・又吉純子 比嘉優子・城間 肇	

#### 資料整理指導および協力者

文化庁 記念物課 埋蔵文化財部門 文化財調査官	坂井秀弥 (中国陶磁)
同 上 文化財調査官	小池伸彦 (考古学 生産遺跡)
出光美術館理事 (元東京国立博物館 次長)	長谷部楽爾 (中国陶磁)
出光美術館 学芸課長	弓場紀知 (同 上)
国立歴史民俗博物館 考古研究部教授	吉岡康暢 (中世陶器)
財団法人 市原市文化財センター 調査研究員	牧野光隆 (考古学)
財団法人 沖縄県文化振興会 史料編集室 主幹	安里嗣淳
沖縄県教育庁文化課 埋蔵文化財係係長	大城 慧
同 上 埋蔵文化財係主任専門員	岸本義彦
同 上 埋蔵文化財係 主 任	島袋 洋・専門員 上地 博
同 上 タ 充指導主事	比嘉 聰
沖縄県立博物館 学芸課 主幹兼課長	當眞嗣一 (「京の内」出土品展関係者)
同 上 充指導主事	津波古 聰 (「京の内」出土品展指導助言)
同 上 学芸員	仲間留美 (「京の内」出土品展示協力)

佐賀県教育庁文化課 課長補佐 大橋康二

沖縄県教育庁文化課 文化財係 有形文化財 (美術工芸) 主任 園原 謙

同 上 文化財係 民俗文化財 充指導主事 桃原茂夫

財団法人岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター調査課 課長補佐 高橋與右衛門

那覇市教育委員会 文化課 課長 金武正紀

岡山県古代吉備文化財センター調査第二課長 伊藤 晃

東洋陶磁学会会員 森本朝子

山口県立萩美術館 学芸員 宮田絵津子

#### 資料整理作業員および協力者

知念純子・比嘉孝子・新垣利津代・比嘉登美子・伊波小百合・岡村綾子・大城勝江・上原園子・城間千鶴子・外間 瞳・仲宗根三枝子・安和千代子・永友和子・村山理代・謝名元かずみ・牧志加代子・請盛智秋・折田衣代・嘉数禮子・長田 剛・国吉春美・池原直美・瑞慶覧尚美・田中ゆきの・石橋朝子・備瀬枝美子・源河秀子・玉城恵美利・金城洋子・高良三千代・玉榮さとみ・吉田昌子・金城 薫・手嶋永子

#### 発掘調査作業員

小波津ヨシ子・大城輝子・永吉弘子・仲程喜美子・大嶺愛子・瑞慶覧長裕・瑞慶覧繁美・諸見里幸子・安次富マサ子・島仲恵子・比嘉清恵・比嘉 剛・浦崎京子・伊佐美幸・上間宏美

## 第4節 調査の経緯

京の内跡の発掘調査は1994年（平成6年）11月21日から開始して翌年の3月28日までの約5ヶ月間にわたって実施された。なお、事前に不発弾検出のための磁気探査を9月19日・20日の二日間実施し探査に立ち合った。

調査地区的発掘着手前の状況は、1992年（平成4年）の首里城正殿、南北の両殿が復元整備された公園として開園された際に京の内地域の北側は客土の上から芝を全面に植え付けて暫定的な仮整備が行なわれていた。客土は琉球大学の基礎跡より上になされていて、調査は仮整備の芝の除去から始まり、次に客土の除去をユンボで琉球大学の旧地盤まで剥ぎ取った後で磁気異常測定（磁気探査）を入れた。磁気探査の結果、発掘調査地区内で異常点が61ヶ所確認された（第4図）。確認された61ヶ所の内、29ヶ所は鉄筋コンクリート、鉄筋、鉄パイプ、鉄片、鉄筋コンクリート板、鉄屑、鉄管、番線入りコンクリート、マンホールの9種類の影響で磁気に反応を示めしていたようである（第1表）。反応した磁気量は、5ガウス～50ガウス以上で鉄片のサイズなどの差により、磁気量が変化するようである。29ヶ所の磁気量を平均化すると23ガウスであった。異常点61ヶ所の内、深度が90cm～100cmの範囲まで14ガウス～60ガウスとなった10ヶ所については調査員が立ち合いで往時の遺物や遺物包含層を確認する目的も兼ねて不発弾の検出を行なった。磁気探査の結果、琉球王国時代の遺物や不発弾は検出されなかった。この時点で磁気探査を終了したが、琉大地盤を東側から西側へユンボで掘り下げたところ手榴弾4発、砲弾2発が検出された。その後、遺構内の崩れた栗石を手作業で除去していく際に調査員が持ち上げた石の下から完形の不発弾が見つかり、調査員は手に持った石（25kg）を下ろすわけにもいかず、そのままゆっくりと栗石の中を歩きながら10数m離れた捨て場まで運んだ。不発弾は先端に青錆が発生し、危険な状況にあると判断し土嚢袋で周辺を囲い、日光が入らないようにブルーシートで覆い、直ちに警察に通報し、自衛隊へ不発弾の処理をお願いした。不発弾も無事撤去されたが、磁気探査は地表面から1m以内しか反応しないことが後になって判った。また、砲弾は回転しながら飛んできて、回転したまま遺構内の栗石に潜り込んで砲弾先端が栗石間の隙間に嵌って不発弾となつたことが判った（図版5-4）。

このような中で住時の地表面と首里第一小学校の土盤までユンボや手掘りで掘り下げたが、調査地区的南側半分は琉球大学の校舎建築の際の造成により琉球石灰岩の掘削や削平がなされ、遺構の残り具合は悪かった。逆に北側は校舎地盤のレベルより低い地域となった為に、遺構の保存状況は良好であった。遺構検出に際しては、遺構直上までユンボで掘り下げたが、この辺はオペレーターの松竹 譲氏の長年の経験と技術が生かされ5cm前後の誤差で剥ぎ取りが可能となり、調査がスムーズに進行していった。それより下は手作業によって遺構を露出させながら掘り下げていった。

遺構の検出に際しては確認され次第、下記のように遺構の形状などから記号と番号を検出順に冠していた。また、遺構の性格や時期を具体的に把握する目的で、遺構沿いにトレーナーを入れながら発掘調査を進行させた。結果として検出された遺構は51基（調査終了時点での遺構番号に重複番号が生じる）を数えた。

1. 石積み… SA01～SA27・SA29～SA34 (33基)
2. 石列…………… SR01・SR02 (2基)
3. 石敷き・博敷き…………… SS01～SS03 (3基)
4. 溝…………… SD01～SD07 (7基)
5. 土壙…………… SK01～SK03 (3基)
6. 建物…………… SB01・SB02 (2基)
7. 階段…………… SA28 (1基)

以上の遺構発掘調査のみで約5ヶ月を要したが、土層図や遺構の断面図の作成などで時間を要し、図面が完成したのは、1995年（平成7年）12月14日までの期間となった。実際に発掘調査開始から終了までの期間は1年1ヶ月間（1994年11月21日～1995年12月14日）を要した。その間、国営沖縄記念公園事務所より新たに平成7年度事業で、京の内南側一体の1,000m<sup>2</sup>を受託事業として県教育委員会が発掘調査を実施することとなり、管理用道路の北側一帯を「京の内北地域」（平成6年 2,000m<sup>2</sup>）と同道路の南側一帯を「京の内南地区」（平成7年 1,000m<sup>2</sup>）と地区を分けて、平成7年度の南地区的発掘調査と平行しながら平成6年の北地区的図面実測作業を行い、両地

区とも無事に作業を1995年（平成7年）12月14日に終了した。

京の内北地区の埋め戻しは、平成8年2月29日に遺構や往時の生活面を保護するために白砂を15cm前後の厚さで岩盤の石灰岩を含む調査区2,000m<sup>2</sup>に敷いて、その上に残土を50~70cmの厚さを盛らせて埋め戻した。この埋め戻しに際しては、重機（バックホー、タイヤショベル、ローラー）を使用するため、調査員の立ち合いで埋め戻しの方法について協議しながら行った。遺構面については人力による埋め戻しを実施した。



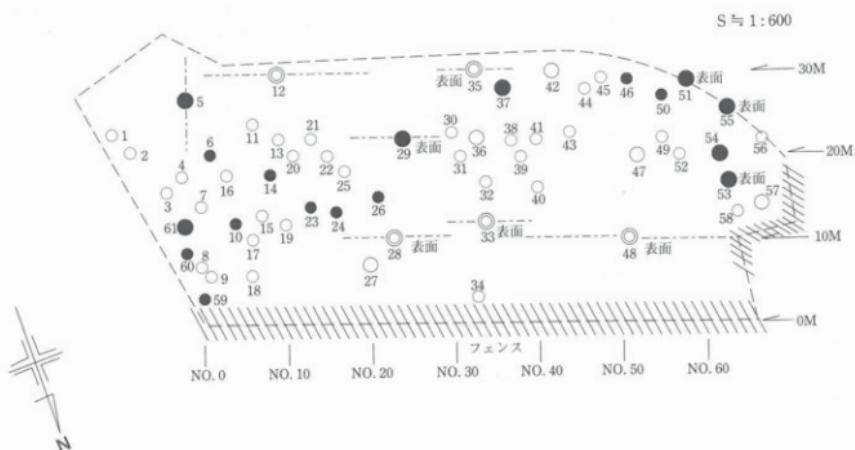
図版5 磁気探査  
1. 磁気探査の状況 2. 異常点の発掘状況 3. No.61より出土した鉄パイプ  
4. B-12S A11の不発弾

第1表a 磁気異常測定値一覧

異常点番号	磁気量 (ガウス・cm <sup>2</sup> )	埋没深度 (m)	位 置		確認された磁気異常物 品名・寸法(単位・cm)
			NO	距離(m)	
1	1	0.2	NO.-10	23.0	
2	4	0.6	NO.-8	20.0	
3	1	0.3	NO.-4	15.0	
4	3	0.8	NO.-2	17.0	
5	42	0.7	NO.-1	26.0	鉄筋コンクリート L=90 φ=1.2
6	8	0.5	NO.1	20.0	鉄 筋 L=65 φ=0.9
7	6	0.5	NO.0	14.0	鉄パイプ L=35 φ=1.5
8	1	0.3	NO.0	7.0	
9	2	0.1	NO.1	6.0	
10	5	0.7	NO.4	12.0	破 片
11	1	0.3	NO.6	24.0	
12	50以上	0.5~1.0	NO.9	30.0	鉄筋コンクリート板
13	3	0.7	NO.9	22.0	
14	2	0.4	NO.8	18.0	鉄 筋 L=40 φ=1.2
15	2	0.4	NO.7	13.0	
16	1	0.3	NO.3	18.0	
17	1	0.3	NO.6	10.0	
18	2	0.3	NO.10	6.0	
19	2	0.3	NO.10	12.0	
20	1	0.4	NO.11	20.0	
21	2	0.4	NO.13	22.0	
22	2	0.4	NO.15	20.0	
23	6	0.7	NO.13	14.0	破 片
24	9	0.9	NO.16	13.0	鉄 肩
25	1	0.4	NO.17	18.0	
26	7	0.5	NO.21	15.0	破 片
27	10	0.4	NO.20	7.0	鉄 管 φ=12
28	50以上	0	NO.23	10.0	番線入りコンクリート
29	50以上	0	NO.25	22.0	鉄パイプ
30	4	0.7	NO.30	23.0	
31	2	0.3	NO.31	20.0	
32	1	0.1	NO.34	17.0	
33	50以上	0	NO.33	12.0	鉄筋コンクリート
34	3	0.6	NO.33	17.0	
35	15	1.1	NO.33	22.0	鉄 肩
36	50以上	0	NO.33	30.0	鉄 肩
37	37	0.9	NO.36	28.0	鉄パイプ 鉄筋
38	2	0.6	NO.37	22.0	
39	1	0.2	NO.38	20.0	
40	3	0.4	NO.40	16.0	

第1表b 磁気異常測定値一覧

異常点番号	磁気量 (ガウス・cm <sup>2</sup> )	埋没深度 (m)	位 置		確認された磁気異常物 品名・寸法(単位・cm)
			NO	距離(m)	
41	3	0.4	NO.40	22.0	
42	12	1.1	NO.42	30.0	鉄屑
43	3	0.8	NO.44	23.0	
44	4	0.7	NO.46	28.0	
45	4	0.4	NO.48	29.0	
46	7	0.9	NO.52	29.0	番線
47	10	0.5	NO.52	20.0	破片
48	50以上	0	NO.51	10.0	鉄筋コンクリート
49	4	0.5	NO.56	21.0	
50	6	0.9	NO.55	27.0	マンホールの影響
51	29	0	NO.58	29.0	マンホール
52	2	0.3	NO.57	20.0	
53	45	0	NO.63	17.0	鉄筋
54	27	0.8	NO.62	20.0	破片
55	38	0	NO.63	29.0	鉄屑
56	2	0.5	NO.67	22.0	
57	13	0.3	NO.67	14.0	鉄筋コンクリート
58	2	0.4	NO.64	13.0	
59	6	0.4	NO.0	3.0	鉄筋コンクリート
60	6	0.4	NO.-2	7.0	鉄屑
61	26	0.9	NO.-2	12.0	鉄パイプ L=50 φ=2



第4図 磁気異常測定位置

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

国指定史跡首里城跡は県庁所在地である本島南部の那覇市に所在する。地番は那覇市首里当之蔵3丁目1番である。かつては琉球大学が所在した場所でもある（第2図・第8図）。

那覇市の1995年（平成7年）の面積は38.74km<sup>2</sup>を有している。1996年（平成8年）10月1日現在での人口は300,809人、世帯数105,638世帯である。気候は亜熱帯気候に属している。

公園整備にともなう京の内跡の発掘調査を最初に実施した際の1994年（平成6年）は、那覇市の平均気温は23.0℃、最高気温33.7℃、最低気温10.3℃であった。

首里の町は、那覇市内でも比較的に標高の高い地域にあり、概ね70～135m程度を有する第四紀層の琉球石灰岩台地に形成された町である。町の南側にある標高100～135mの丘陵上に首里城が立地している。

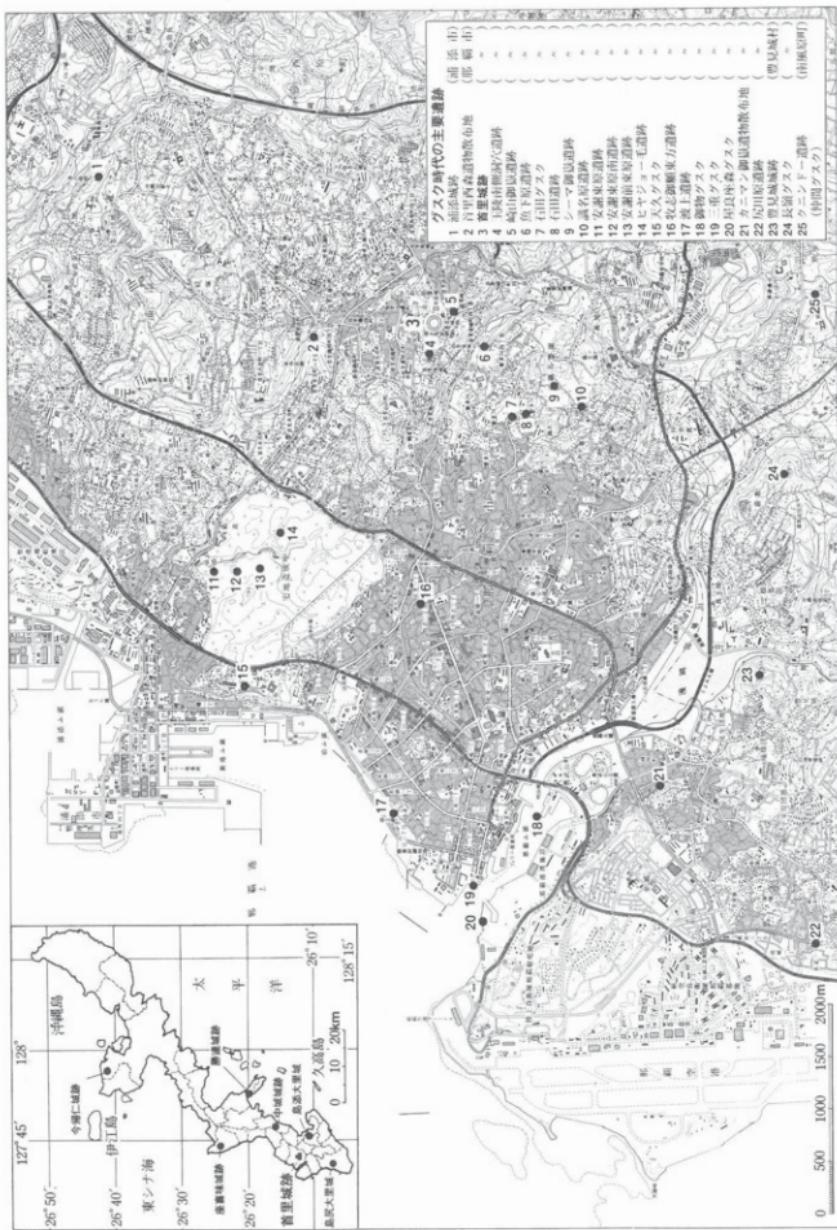
首里の町は、北に西森（標高102m）や虎頭山（標高280m）と称される丘と儀保川、南には首里城眼下の金城川が市内へ流れている。北東には弁ヶ嶽（標高165.6m）があり、王府時代は旧暦の正月・五月・九月に国王の親祭がなされた「弁ヶ嶽」がある。東側には一部、南風原町との市町境となっているナゲーラ川がある。西側一帯は急傾斜や緩い斜面となり真嘉比川が安里・大道の区域を流れて暫時、緩い傾斜から平坦地へと移行する。東側と南・北の両側は三方向に河川や丘陵による自然地形が城の障壁となり、西側の一部（安里・大道方向）が開いた地形となっている。首里周辺の地質の基盤は新第三紀与那原層下部のシルト岩（泥岩）で、その上部に前述した琉球石灰岩（第四紀層 琉球層群下部）が堆積している。

このように首里の南側丘陵地の西寄りの高所（標高100～135m）に城を普請するには最良の適地であったものとして理解される。また、首里城内の東のアザナ、西のアザナ、京の内の物見からは、北は座喜味城跡・浦添城跡の立地する丘陵、東は久高島や大里城跡・糸数城跡の所在する丘陵地を確認することができる。南側は多々名グスク・八重瀬グスクのある丘陵地も確認できる。西側は天候が良ければ久米島や渡名喜島までが視野に入る日もある。

さて、今回報告の対象となる地域は、首里城の内郭下之御庭に接する南側の地域で琉球王国時代においては3～7m程度の高い石積みで区画されていた。俗に「京の内」と呼称されていた区域である。京の内は首里城の中でも聖域として崇められていた場所でもあった。京の内の南側は城内でも高い場所にあり、標高は135mを有し、北側に向って傾斜しながら標高121mの平坦地である下之御庭へ達する。下之御庭の北側から下位の久慶門・歓会門の内側地域は、1984年（昭和59年）の発掘調査で斜面の中間から下は琉球王国時代の土木事業による造成で埋め立てられた人工の地盤であることが確認されている。

#### 参考および引用文献

- ・沖縄県統計協会 『1998 県民手帳』 生産性出版 1998年度版。
- ・那覇市教育委員会 『那覇市歴史地図－文化遺産悉皆調査報告書一』 1986年。
- ・沖縄タイムス社 『沖縄大百科事典』 1983年。
- ・木崎甲子郎編著 『琉球弧の地質誌』 沖縄タイムス社 1985年。
- ・沖縄県教育委員会 『首里城跡』 『沖縄県文化財調査報告書第88集』 1988年。



第2図 首里城跡の位置

## 第2節 歴史的環境

1982年（昭和57年）に那覇市教育委員会が報告した遺跡の実数は、38遺跡（註1）が確認されていた。その後、尚巴志または尚巴志王統墓陵であったと伝えられた“天山陵跡”的調査（註2）と首里王府時代の最高学府であった“国学・首里孔子廟”的調査（註3）そして、湧田古窯の調査（註4）などによって新発見の遺跡が急増している。これは、住宅の建て替え、県立芸術大学の新校舎建設、県庁の新築などと同時に天久地区の米軍用地の返還に伴う古墓群やグスク期の遺跡が多く発見されたからであろう。那覇市文化課のひとつの考え方として、首里城周辺を「城下町の遺跡群」、那覇港周辺を「港町の遺跡群」などとして位置づけているようである（註5）。

首里周辺では、今日までの調査で首里山川町にある2,500年前の山川貝塚（繩文晩期相当）で人が住み始めた痕跡が認められている。僅かではあるが儀保町の首里西森遺物散布地から繩文後期相当期の土器が採集されているが、生活の痕跡を示す構造は発見されていない。繩文晩期以降から平安時代相当の遺跡は未発見である（沖縄貝塚時代後期）。（第2図）。

その後は前述した西森遺物散布地からグスク時代の遺物が採集されているようである。「中山世鑑」（註6）に察度が1392年（洪武25年）に數十丈の高樓であった“高ヨサウリ”（高世層理殿）にて遊観をしているが、この高世層理殿は浦添城内にあったとする解釈と首里城内に存在したとする二つの解釈があった。最近になって家譜資料の調査で首里城内に“高ヨサウリ”が存在していたことがほぼ確定的となっているようである。

察度の子である中山王武寧を第一尚氏王統二代の尚巴志が1406年（永樂4年）に攻め滅ぼした城は、浦添城ではなく首里城であったことが上記した高世層理殿の件からも推測されるところである。

首里城の城主となった尚巴志は、三山統一前の1427年（宣徳2年）に城下の北西隣の安国山に池を掘り“龍潭”を完成させ、記念碑である“安國山樹樺木記碑”を建立している。その2年後の1429年（宣徳4年）には南山王の他魯毎を減して三山統一を成しとげたようである。

1985年（昭和60年）から1986年の首里城正殿跡の発掘調査（註7）で、正殿の創建は14世紀前半～中葉もしくは14世紀代に第I期の正殿の創建がなされていたのではないかとの見解が示されている。少なくとも15世紀初頭～前半には察度を滅した第一尚氏の尚巴志によって首里城内郭（当時は外郭）と“龍潭”が整備されたようである。このことは、戦前の1936年（昭和11年）12月29日～1937年1月11日までの期間に伊東忠太・鎌倉芳太郎の両氏によって正殿前（北殿西側）1ヶ所、京ノ内北西側下（露頭した石岩の斜面の包含層か）2ヶ所、西ノアザナ東南側下1ヶ所の合計4ヶ所で発掘調査を実施している。伊東・鎌倉両氏の結論として「此の三地點の出土品は略ぼ一致して、首里城第一次擴張時代推察される永樂16年（西紀1416年）一宣徳2年（西紀1427年）の頃の埋蔵であろうと想定される。」（註8）と記している。この三地点とは正殿前・京ノ内北西側下（東）、西ノアザナ東西側下である。また、次のようにも記している「此の第一次擴張の際には、瑞泉門から京ノ内西面の城門に至る線以西を、埋め立てたのではなかろうか…中略…北面の低地に對しては、石垣を築いて其の中に盛土し、更に其の石垣を地盤の鞏固な瑞泉門で支へてゐる。…中略…それ故に埋立地北部の城壁は、一方に於て降雨の際の水壓の防備を考へ、一方に於て雨水を瑞泉門に集中するように工作してあるらしい。」この見解は今日の発掘調査の成果からも卓越された見解であることが確認されている。

第二尚氏の初期に尚真王により中央集権の体制が築かれ強固な琉球王国の基礎ができあがり、首里城外郭である歓会門や久慶門の両門（1447年～1526年）が普請され、その頃に外郭の整備がなされたようであるが、外郭の着工時期や完成時期についてはよくわかっていないようである。

尚真の後を次いだ尚清王は、尚真によって確立した王国の基礎を継承し、発展させる。1546年（尚清25年）には首里城石垣の補強工事と1553年の那覇港の防備拠点であった屋良座森城の築造などが行われ、倭寇の侵入による対策が取られたようである。

尚真・尚清の両王統の頃に城の整備と城下の整備などが積極的に推進されたものとして考えられるようである。

首里城の500余年にわたる歴史も1879年（明治12年）の廃藩置県により、最終の琉球王国となった尚泰王によって明治政府に首里城を明け渡して王城を去る。1879年の熊本鎮台沖縄分遣隊の首里城入城から1897年（明治29年）の撤退するまでの17年間が分遣隊の配備期間であるが、その後は沖縄県師範学校・第一小学校などの文教施

設として利用される（第5図・第7図）。1944年（昭和19年）には首里城地下に第32軍指令部壕が造られ、1945年（昭和20年）4月には首里城は灰燼に帰してしまった。

このように首里城は幾多の歴史的な変更を経て今日に至っている。

#### 註

- 註1. 那覇市教育委員会 「那覇市の遺跡」（詳細分布調査報告書） 1982年。
- 註2. 安里嗣淳・盛本 熊 「天山陵跡調査の概略」 「紀要」 第1号 沖縄県教育委員会文化課 1984年。
- 註3. 上原 静・島袋 洋 「首里国学・孔子廟跡の調査」 「文化譜紀要」 第7号 沖縄県教育委員会文化課 1991年。
- 註4 a. 沖縄県教育委員会 「湧田古窯跡（I）」（県庁舍行政棟建設に係る発掘調査） 1993年。  
b. 沖縄県教育委員会 「湧田古窯跡（II）」（県庁舎議会棟建設に係る発掘調査） 1995年。
- 註5. 1997年5月27日に那覇市教育委員会文化課の島 弘主査に遺跡数を確認した際に教示を戴いた。実数については遺跡を大的に整理した上でしか判断はできないとのことであった。
- 註6. 沖縄県教育委員会 「重新校正・中山世鑑」 卷二 1983年収録。「山王武寧 洪武二十九年 中略 不思議ナケン高ヨサウリトテ數十丈ノ樓ヲ作り遊観シ給ケルカ或時此樓ニ上り戯言ニ常ニ此樓上ニ居給程ナラハ毒蛇ノ恐モ無物ヲトゾ宣ケル」。
- 註7. 當眞嗣一・上原 静 「首里城正殿跡の調査」 「紀要」 第4号 沖縄県教育委員会文化課 1987年。
- 註8 a. 伊東忠太・鎌倉芳太郎 「B 琉球Riuiku 発掘」 「南海古陶窯」 宝雲社 1937年。  
b. 鎌倉芳太郎 「セレベス 沖縄 発掘古陶窯」 国書刊行会 1971年。

#### 参考および引用文献

- 沖縄県教育委員会 「首里城跡」 歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査 1988年。
- 沖縄タイムス社 「沖縄大百科事典」 1983年。
- 首里城復元期成会・那覇出版社編集部 『写真集 首里城』 那覇出版社 1987年。

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 調査地域

京の内地域は第1章第2節でも記したように首里城内でも最も神聖な聖域である。首里城発祥の“古グスク”として創建されたとする見解（註1）もある。ここでは京の内の性格について述べることにする。

「京の内」の語義は『おもろさうし』（註2）で「きやのうち」「けおのうち」「けよのうち」と表現され、「けお」は「せぢ」の同義語で“靈力”的意味を持つ「きおのうち」は「せぢ“靈力”のある場所“聖域”」（首里城内の聖域）として考えられているようである（註3）。

民俗学的事例として「きょう」の意味として、知念村の斎場御嶽内にある三庫理に入る右手側の大岩の頂上を“キヨウノハナ”（ギョウノハナ）と称し、大岩直下の香がから岩の上の“キヨウノハナ”を拌み、香がの側にあつたクバの神木を足掛かりにしてアマミキヨが天降りされたといわれている（註4）。また、仲松弥秀氏は「神の来臨のことであるが、（中略）その前方に微小島が存在する場合は、神は一たんその小島に上陸滞在される。

（中略）このような浜前の岩島や小島を、沖縄では「トングッ」（註5）と称しているが、「京」（きょう）と称している村もある。」と記している。事例として名護市嘉陽の集落前面の東方海上にある神が来訪する聖なる小島を“きょう”と称していることである（註6）。

以上のようなことから「京の内」の「きょう」は神が降臨もしくは来訪する場所の意味合いと「うち」は“聖域”・“区域”などの意味もあるので、「京の内」は神が降臨もしくは来訪する聖域として位置づけて整理ができるのではないだろうか。

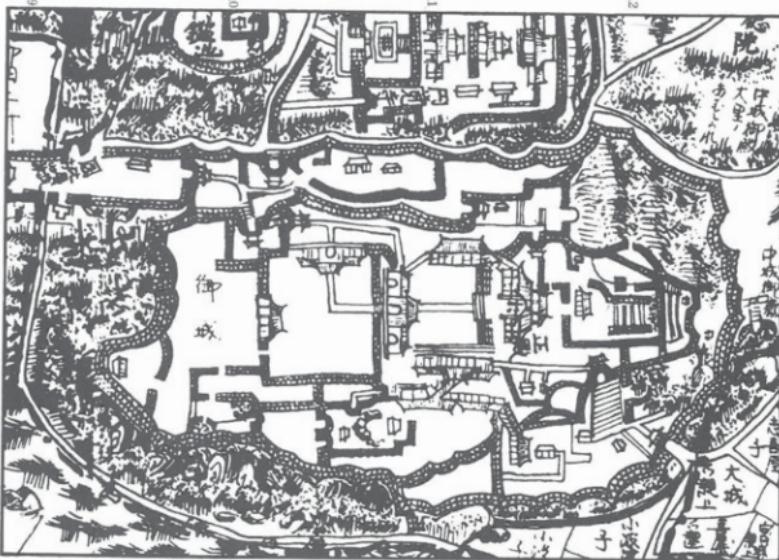
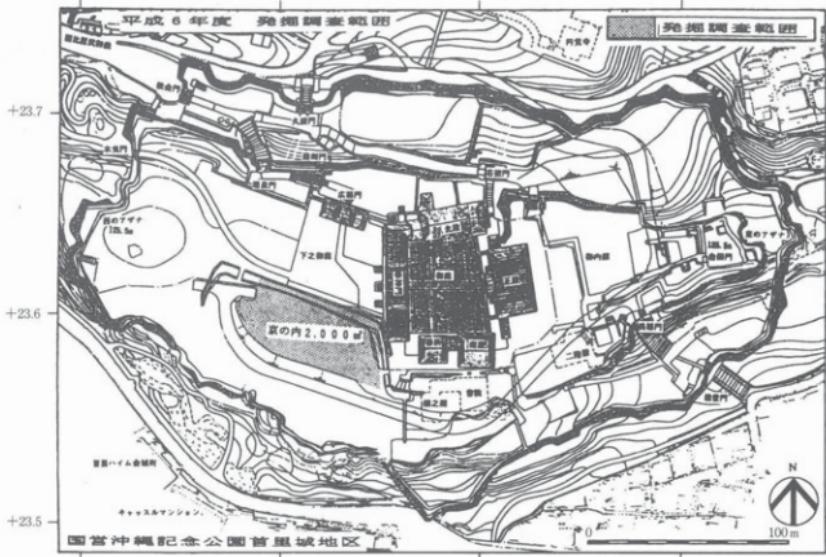
「京の内」については、「首里城古図」（註7）や「首里城略図」（註8）などの古絵図や『おもろさうし』・『琉球国由来記』（註9）などの文献がある。これらの資料から「京の内」地域には、御嶽や家屋型の建物2棟の他に四・五条の区画石積みが確認される。

古絵図の描かれた時代差によっては御嶽が8基程度存在する時期もあったようであるが、基本的には5基の御嶽で構成されていたものとして解釈がなされるところである。

「京の内」の五つの御嶽として、“京の内之三御嶽”（神名アガルイノ大御イベ、ソノイタジキノ御イベ、シキヤヂシキヤダケノ御イベの三神）と称される三つの御嶽と真玉森御嶽（神名玉ノミヤノ御イベ）・首里森御嶽の二つの御嶽である。京の内の御嶽構成は5基の御嶽が基本的なパターンとみられる。この5つの御嶽の内、“京の内之三御嶽”が北西側の平坦地から緩い傾斜地にあったようである。真玉森・首里森の両御嶽は南側の内郭石積み沿いや石灰岩丘陵頂部（標高135m）に存在していたようである。“京の内之三御嶽”的神名を『琉球国由来記』（註9）から共通の神名の有無を検索したところ久志間切嘉陽村の漬板敷御嶽の神名がソノイタジキノ御イベであった。“京の内之三御嶽”的ひとつの御嶽と神名が一致していることが判った。将来において名護市嘉陽の漬板敷御嶽での祭祀を含めた研究をとおしてソノイタジキノ御イベがどのように嘉陽の漬板敷御嶽から京の内の御嶽へ来訪するのかを解明できる鍵となるかもしれない。ところで北部のソノイタジキノ御イベが南下して首里城へ来訪するとなれば、第一・第二尚氏が伊平屋と伊是名を出自としているため、興味深い結論が導き出せるのではないだろうか。

首里城は聖名を“首里森グスク”あるいは“真玉森グスク”と称されるのは、京の内に所在した首里森御嶽・真玉森御嶽の名に由来するようである（註10）。両御嶽の中でも首里森御嶽は、沖縄の開闢神であるアマミキヨがつくられた御嶽とされ、御嶽の前庭に“キャウノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ”があったようである。この首里森御嶽では降臨神である天神または陽神のキミテヅリ（君手摩）の神を琉球王国高級神女 三十三君と最高神女である聞得大君を中心に歴代琉球国王に“世おそうせぢ”（世を治める靈力）が高まるように“オボツ・カグラ”と“ニライ・カナイ”的神に祈願し、託宣を下した御嶽もあったようである（註11）。

ところで宮城栄昌氏は「神女は沖縄社会の政治的発展に即応してカミ→ノロ→キミの順序で発生し、キミ（君）は少なくとも神女の政治的組織化が進んだ段階に現れたもので、中央集権制国家が確立した尚真王代（1477～



第3図 発掘調査地域（上段）と『首里古地図』（下段）（1700年）

「琉球国絵図資料集第三集付録 1994年より複写」：原図は沖縄県立図書館所蔵

1526) のころの「おもろきうし」では、ほとんどの神が君と化している。」(註12) と記している。首里森御嶽の降臨神キミテヅリ（君手摩）は、間得大君を中心とする三十三君の君々に神が乗り降って琉球国王へ神託を伝えたパターンが完成するのではないだろうか。三十三君の大部分は王室関係の女性であったようである。従って歴代の琉球国王と京の内の神事などを掌る高級神女組織とは密接な祭政一致の関係にあったことが推察される。1453年（尚金福4年）の王位継承をめぐる志魯・布里の乱の直後と1470年（尚円元年）の第二尚氏王統の始まりの直後には、「京の内」の区画石積みや御嶽の再建や御嶽の位置の変更がなされたのかもしれないところである。

京の内の性格を概略的に述べたが、平成6年度の調査地区は、京の内の総面積約5,000㎡の内の北側部分2,000㎡を対象とした。北側の発掘調査地域を「京の内北地区」として仮称した（第3図上段）。

#### 註

- 註1. 首里城研究グループ 「首里城入門—その建築と歴史—」 ひるぎ社 1991年。
- 註2. 外間守善・西郷信嗣 「おもろきうし」 「日本思想大系」 18 岩波書店 1972年。
- 註3. 註1・2に同じ。
- 註4. 松仲弥秀 「新垣孫一翁よりの聞き書き」「知念城跡・斎場御嶽及び周辺整備基本構想・基本計画」 1993年。
- 註5. 松仲弥秀 『三、来訪神の経路』「南島の海神祭」「古層の村」沖縄民俗文化論 タイムス選書4 沖縄タイムス社 1977年。
- 註6. 県教育庁文化課民俗文化財指導主事の桃原茂夫氏より教示を戴いた。
- 註7. 加藤三吾 「琉球の研究」 文一路社 1906年。
- 註8. 鎌倉芳太郎「セレベス 沖縄発掘古陶窯」 国書刊行会 1975年。
- 註9. 「琉球国由来記」「琉球史料叢書」 第2巻 東京美術 1972年。
- 註10. 伊波普猷 『三、きみよし考 一守護神の成長に関する試論一』 「伊波普猷選集」 下巻 沖縄タイムス社 1962年。
- 註11. 平敷令治 「きみてづりのもかほうごと」「沖縄大百科事典」 上巻 沖縄タイムス社 1983年。
- 註12. 宮城栄昌 「三十三君」「沖縄大百科事典」上巻 沖縄タイムス社 1983年。

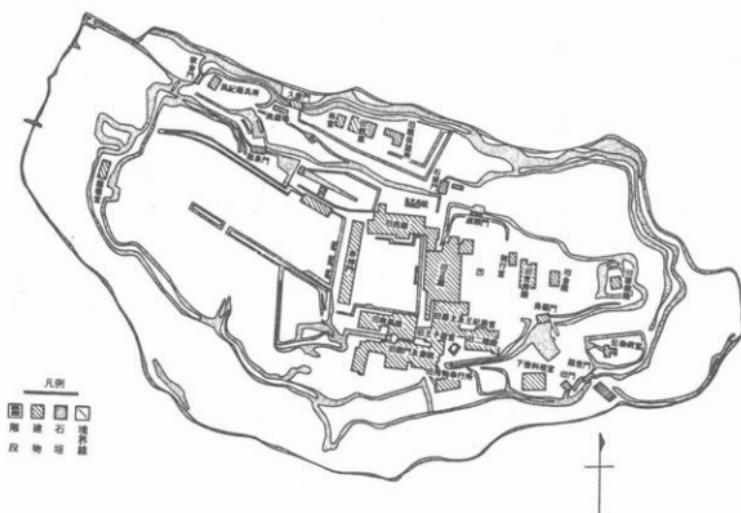
#### 参考文献

- ・松仲弥秀 「神と村 一沖縄の村落一」 伝統と現代社 1968年。
- ・沖縄県教育委員会 「首里城跡」 (南殿・北殿跡の遺構調査報告) 1995年。

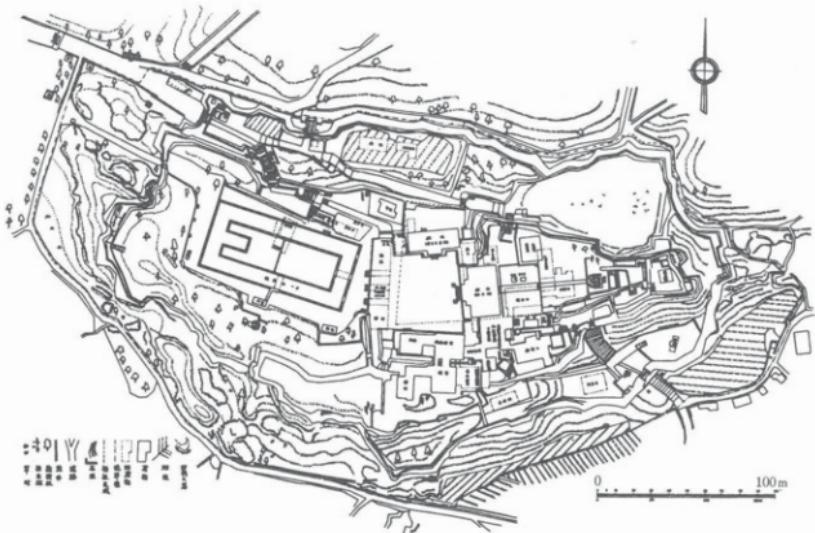


第5図 首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（1893年）

『首里城跡』（1995年より複写）原図は沖縄県史編集室蔵（方位のみを加筆）



第6図 首里城平面図（島袋良徳氏所蔵）『首里城跡』（1995年より複写）



第7図 首里城平面図（昭和6年頃）『首里城跡』（1995年より複写し、座標とスケールを加筆する）



第8図 旧首里城跡図（旧琉球大学校舎配置図）

『首里城跡』(1995年より複写し、座標とスケールを加筆する)

## 第2節 調査区の設定

平成6年度の京の内跡の発掘調査地区は、第1章第4節でも記したように京の内北地区2,000m<sup>2</sup>が発掘調査の対象となった。事前に調査区内には不発弾の有無を確認する目的で磁気探査を調査員立ち合い（グスク期の金属遺物が反応するため）で行った後に本格的な発掘調査を平成6年11月21日から開始して、平成7年の3月28日までの約5ヶ月間実施した。

発掘調査で検出された遺構のプランを基に京の内の復元整備の計画がなされるため、調査地区は白砂や残土で埋め戻した。埋め戻しによって遺構の位置関係が直接的に把握ができなくなるので、発掘調査地区および調査地区内に基準点測量（基-1、基-2、基-3）の三点を委託業務で実施した。基準点の成果は下記のとおりである。

基-1	$X = 23622.856$ $Y = 21998.541$ $H = 125.009m$	基-2	$X = 23594.909$ $Y = 21985.276$ $H = 126.486m$	基-3	$X = 23606.382$ $Y = 22047.613$ $H = 125.054m$
-----	--	-----	--	-----	--

グリッドの設定は、1グリッドの規模が10m×10mを単位とした。基準となった杭は下之御庭の南側にあった東西に延びるコンクリート製側溝の南側縁より50cmの地点に基準杭A-11を設定した。以下、側溝と平行させながら東西方向に10m間隔でA-12からA-17の杭を設定した。南北方向には基準杭A-11からA-17の軸線からW90°0'00"Sに振って10m間隔でB-11・C-11・D-11の杭を設置したためグリッド番号は東から西へ10・11・12…と数字を冠した。グリッドの記号はアルファベットを採用し、北から南へA・B・C…とした。グリッド名は記号と番号を組み合わせてA-10・B-10…と表現した。グリッド名はグリッド内の東南隅に冠して、将来の調査に使用できるように設定した（第9図）。

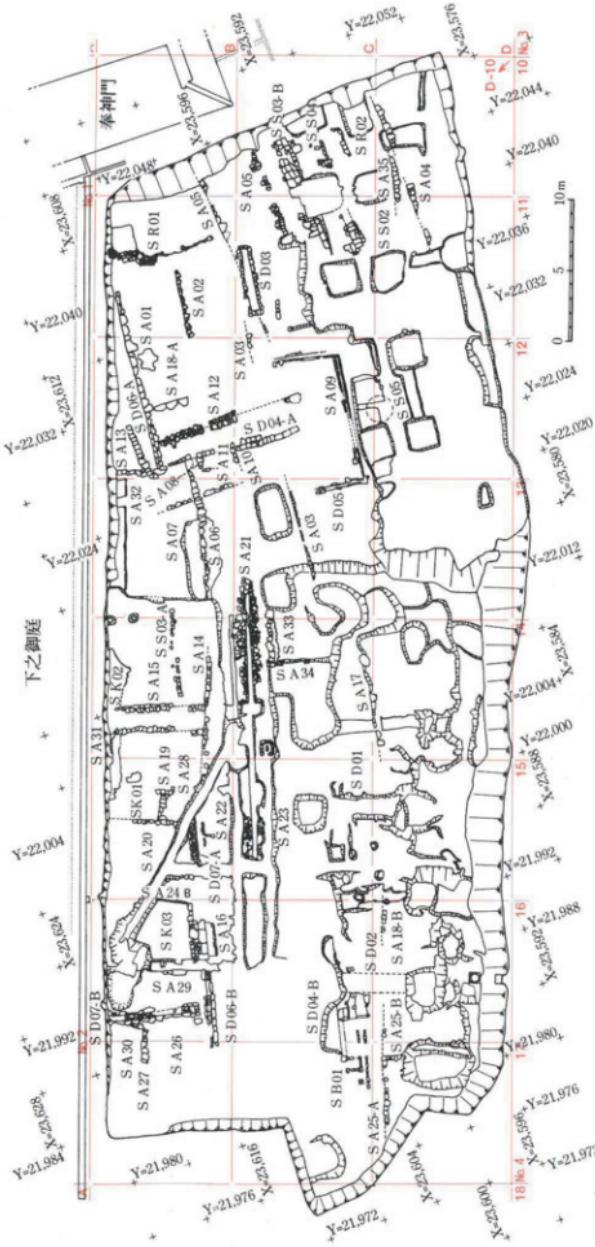
基準杭A-11とA-17を結ぶ軸線（南北基準座標軸N°19'00"Wに偏る座標軸）からW180°0'00"Eへ振って、A-11から東側へ170cmの箇所にある奉神門基壇と丁度、かち合うようにA-11の杭を設定した。

調査地区的北東のA-11、北西のA-17、東南のD-10、南西のD-18の4点のX座標とY座標については、写真測量図の読み取りから下記の結果が得られた（第9図）。

A-11 (X = 23604.474 Y = 22047.078) A-17 (X = 23623.565 Y = 21990.239)

D-10 (X = 23572.885 Y = 22047.018) D-18 (X = 23598.267 Y = 21971.191)

その他にA-11から東側にある奉神門基壇とかち合う接点（170cm）から奉神門南側階段がとり付けられた基壇（階段南側縁と基壇との接点）までの直線距離は6mを読み取った。



平成6年(1994)度の京の内蔵から検出された遺構については下記のとおりに記号化した。  
 石積み・石敷き・石敷地 (SS) ..... SA01～SA18・A・B、SA19～SA25・A・B、SA26～SA35、(37基)  
 土壙 (SK) ..... S01～S03・K03 (1基)  
 溝 (D) ..... S01～SD04・A・B、SD05、SD06・A・B、SD07・A・B (10基)  
 建物 (SB) ..... SB01 (1基)  
 口引 (SR) ..... SR01、SR02 (2基)  
 遺構の合計 ..... (59基)

※遺構の配置は実測図より移行ライン等をトレースしたものである。

※遺構の配置は実測図より移行ライン等をトレースしたものである。

No. 1	A-11	X=23,604.474
No. 2	A-17	X=23,625.565
No. 3	D-10	X=23,572.885
No. 4	D-18	X=23,598.267
		Y=21,971.191

第9図

「京の内」跡構配図およびグリッド設定

## 第Ⅳ章 遺構

### 第1節 遺構の概要

#### A. 遺構の種類と概略

平成6年度の首里城京の内跡発掘調査で検出された遺構には石積み（階段を含む）、石敷き（埴敷きを含む）、土壌、溝、建物、石列などがある。検出された遺構のほとんどは真北に対し、やや西に振れるものと西よりに振れるものが存在した（第9図・第10図）。

各種の遺構は発掘直前に推定された遺構の種類や性格によって記号化し、検出された順に番号を冠したため、建物と付属する溝、石敷き、石積みの外面や内面にも個別に記号と番号を用いた。また、個別の遺構として取り扱っていたものが完掘後に一連の遺構となり、種類や性格も明らかとなった遺構もある。これについては古い記号と番号を尊重しながら新しい記号と番号を付して新旧の番号と記号を併用した。基本的に同一遺構であっても調査時点に冠した記号や番号の改正などは実施しなかった。これは記号や番号の改正などによって図面整理や資料整理（ナンバーリングの変更など）で時間を費やし、資料整理の進捗に支障を来すことが予想されたからである。遺構の記号は以下のとおりであるが必ずしも遺構の種類と性格を示すものではないことを付する。

遺構の種類は石積み（S A）、石敷き・埴敷き（S S）、土壌（S K）、溝（S D）、建物（S B）、石列（S R）の6種類である。以下、遺構別に性格などを略記する。

#### 石積み（S A）

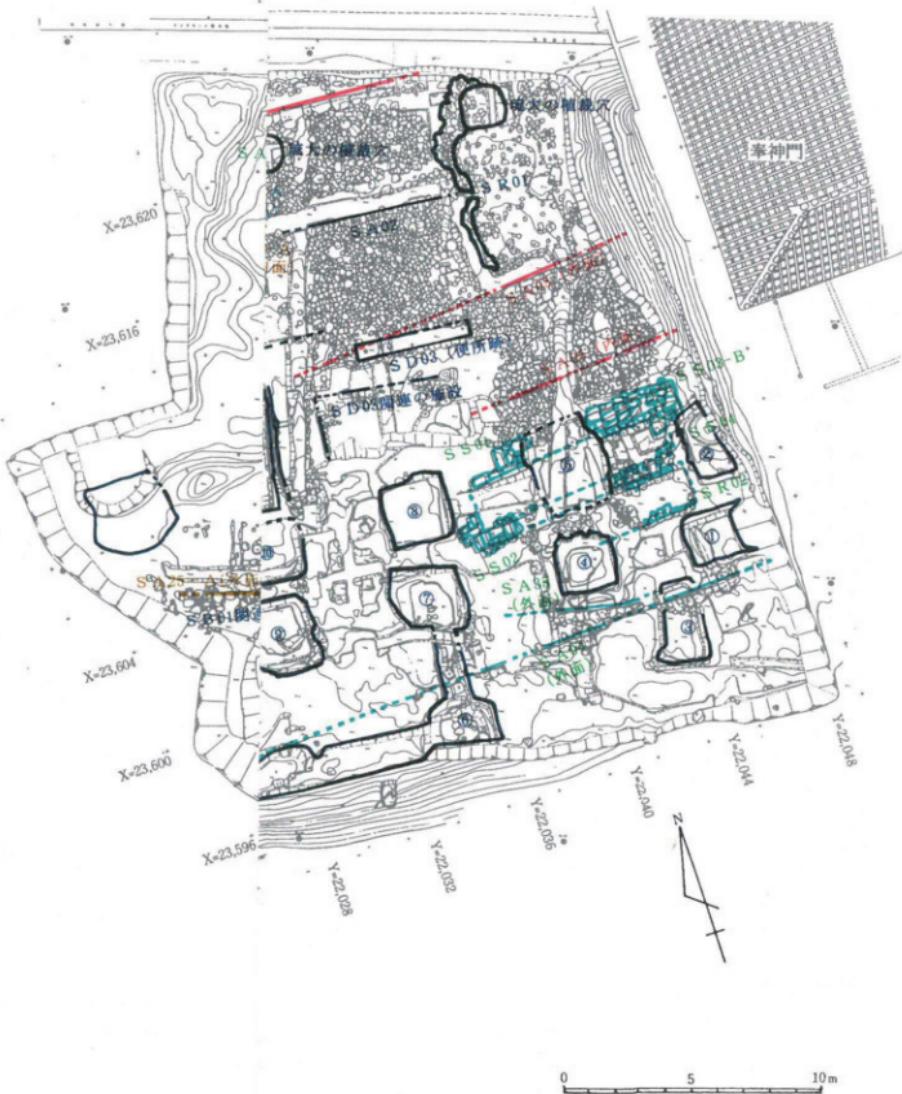
石積みの大部分はその上部を欠くため上部の構造は判っていない。石積みは外面と内面を並行に南北方向や東西方向に配置する区画石積みが主であった。古絵図にみられた区画石積みに空けられた通用門は戦後の造成（岩盤の削平と掘り下げ）で破壊され確認されていない。他に基壇状の建物の縁石や倉庫の壁石などのように外面のみが検出されたものもある。これは石積みの位置変更や度重なる造成による嵩上げなどで内面が破壊されたためであろう。その他に完掘の結果、階段や階段の脇石積みとして判明した石積みもある。石積みも大半が根石のみが存在する状況にあった。根石は粗加工の切石や野面石に粗い加工を加えたものを用いて造成土盤（遺物包含層を二次的に使用）や削平した岩盤上に直接的に配置し、その上から切石を積み上げているものが主であった。石積みの外面と内面において、外面は切石で、内面が野面積みを用いたものがある。内面に野面積みを用いた理由として、内面側の土盤の仕上げ高が高い位置にあったため、野面石を基礎石として積み上げ途中から設定された土盤近くから切石に変更がなされたからであろう。この方法を用いた例は二例のみ確認されている。他に例外的ではあるが野面積みを積み上げ途中から裏込目石の代りに埴混りの土砂を投入する特殊なものもあった。

発掘調査の結果、明確な石積みとなったのは、切石積みでは東西方向に延びる石積みが13基（S A03～S A06、S A08、S A10、S A14、S A17、S A18-B、S A25-A、S A27、S A33、S A35）で、南北方向に延びるものは12基（S A07、S A11～S A13、S A15、S A18-A、S A19、S A20、S A25-B、S A30、S A32、S A34）が確認されている。野面積みは1基（S A24）のみで南北方向に延びていたようである。その他に建物の基壇の縁石や建物の縁石が3基（S A01、S A02、S A09）、階段およびその脇石積み3基（S A16、S A19、S A28）、側溝の縁石2基（S A26、S A29）、石積みの裏込目石の集石が2基（S A21、S A23）があった。以上の36基が石積み（S A）として取り扱ったものである。

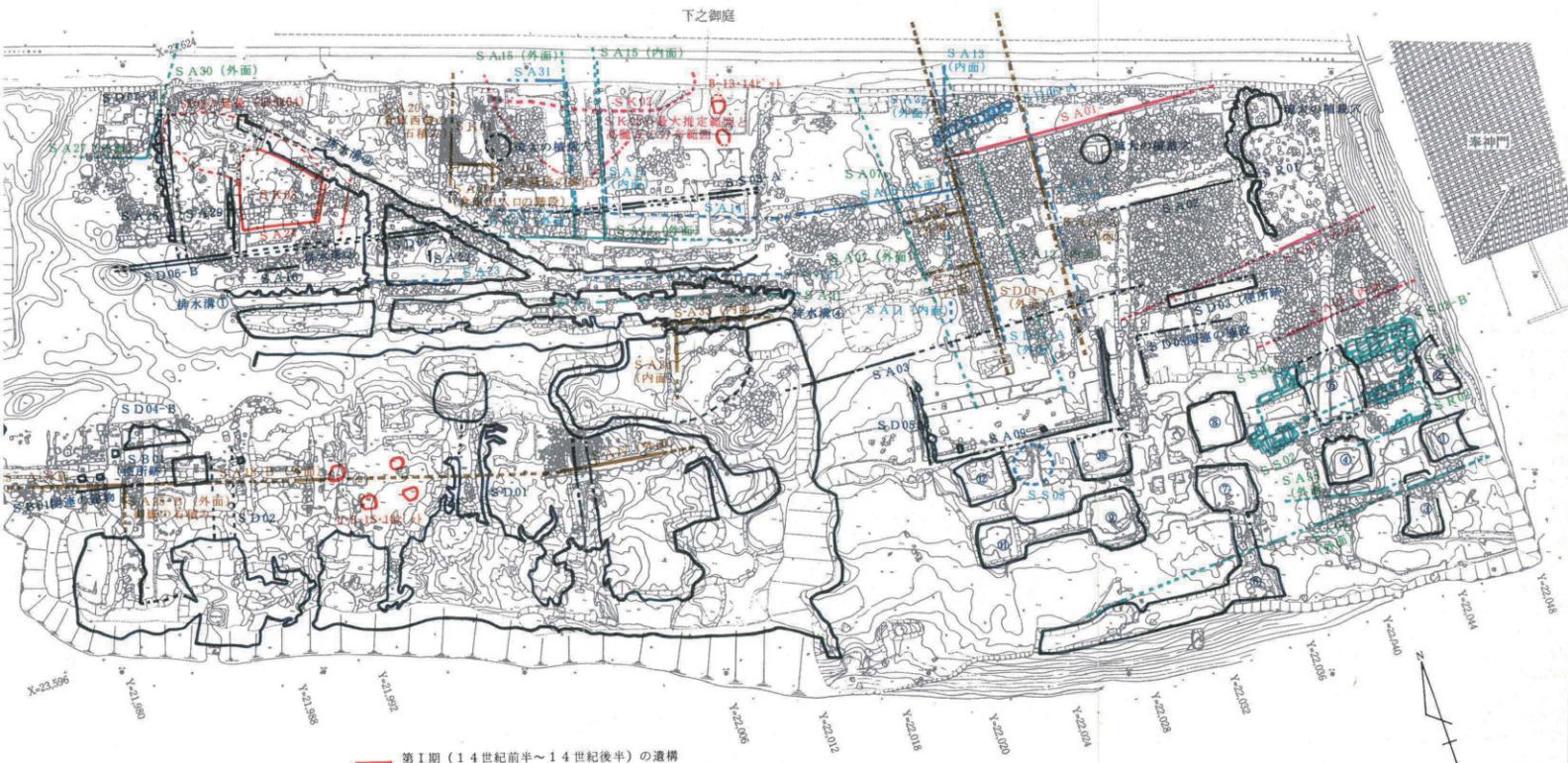
#### 石敷き・埴敷き（S S）

石敷きは細粒砂岩製（俗称・ニービスフニ）と琉球石灰岩製の二種類が存在し、板状に薄く仕上げたものである。主に細粒砂岩製のものが主流であった。石敷きの方向は東西方向に途切れながら検出されている。これは後代の造成で破壊されたためである。埴敷きとしたものは埴瓦が敷かれた状態で検出されたのではなく、埴敷きが破壊されたままの状態で検出されたものである。

石敷きの細粒砂岩製のものは建物の縁石と礎石を伴うものであり、建物に付属する取り付けの回廊・踊り場などの施設であったものとして推察されるところである。石灰岩製の石敷きは側溝の底板であった。

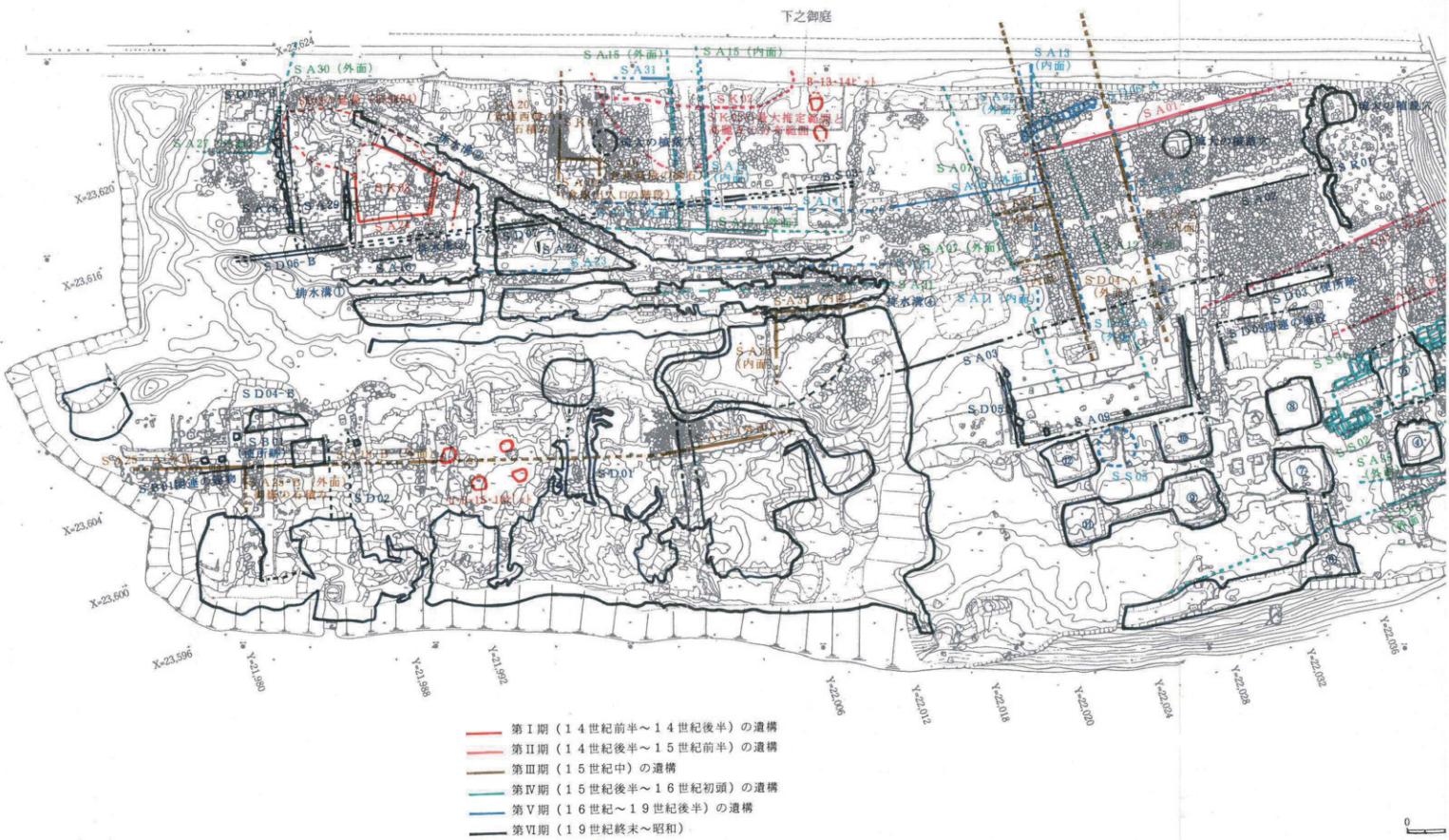


第10図 遺構全体図



- 第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）の遺構
- 第Ⅱ期（14世紀後半～15世紀前半）の遺構
- 第Ⅲ期（15世紀中）の遺構
- 第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）の遺構
- 第Ⅴ期（16世紀～19世紀後半）の遺構
- 第Ⅵ期（19世紀終末～昭和）

0 5 10m



第10図 遺構全体図

石敷きの細粒砂岩製のものは4基（S S01、S S02、S S03-B、S S04）が存在し、建物に伴う一連の造構とみられた。石敷きの石灰岩製のものは1基（S S03-A）のみであったが、後述する排水溝と関係し、一連のものとみられる。博敷きは1基（S S05）のみで、破壊された状態で検出されている。以上の6基を石敷き・博敷き（S S）として調査した。

#### 土壤（S K）

掘り込みや自然地形の部分的な落ち込みを総称して土壤とした。土壤は北西側に集中する傾向が窺え、検出直後に他の造構と同レベルで確認されたもの、掘り下げの途中から確認されたもの、完掘後に確認されたものの3種類があった。これらの土壤は3基（S K01～S K03）が確認されている。S A19、S A20、S A28は完掘後に最終段階で倉庫内部であることが判明し、S K01と名称を付けたものもある。

S K02は岩盤の溜みを造成土（遺物包含層を二次的に使用）で埋めたもので、造成土（S K02）直上にS A15、S A31の石積みがなされている。

S K03はS A24の石積みと同レベルで検出されたもので、S A24の西側を埋めた造成土（遺物包含層を用いる）であり発掘の結果、S A24の外側の石積みが検出された。以上の3基を土壤（S K）として処理した。

#### 溝（S D）

建物や石積みに伴う溝と便所となったものなどをS Dと記号化した。建物に付属する排水溝で東西方向に延びるものは3基（S D06-A・B、S D07）が存在する。南北方向に延びるものも3基（S D04-A、S D05、S D07-B）が確認された。他に岩盤を溝状に掘り込んだ現代の建物基礎2基（S D01、S D02）や近代～現代の便所跡2基（S D03、S D04-B）が存在していた。以上の10基を溝とした。

#### 建物（S B）

便所の覆い屋や基礎石、縁石、躊躇場の施設がセットで検出されたものを建物とした。1基（S B01）のみであった。S B01の建物の中にはS D04-Bの便所跡が伴っている。

#### 石列（S R）

擁壁跡の裏込目石や建物の縁石が列状に検出されたものを石列とした。擁壁の裏込目石は北東隅から南北方向に弧状に曲がりながら延びていたもので1基（S R01）のみ確認されている。建物の縁石は石敷き造構（S S01、S S02、S S03-B、S S04）の東南隅から検出され、東西方向にのびたものが1基（S R02）のみ検出されていて、前述した石敷き造構（S S01ほか3基）と関連する一連のものとみられる。以上の2基を石列（S R）とした。

以上の58基の造構は一連のものもあるが個別の機能を尊重したため重複するものなども含まれている。大雑把に大別すると以下のa～dまでの4種類に分類と整理ができるようである。

##### a. 石積み（30基）

イ. 切り石積み（S A03～S A08、S A10～S A15、S A17、S A18-A・B、S A19、S A20、S A25-A・B、S A27、S A30、S A32～S A35）…25基。

ロ. 野面石積み（S A24）…1基。

ハ. 排水施設を伴う切り石積みと関連する造構（S D04-A、S D06-A）…2基。

ニ. 拝所の一部となる切り石積みと関連する造構（S A25-A・B）…2基。

##### b. 建物および付属造構（7棟）

イ. 基壇を有する建物の面石（S A01）…1棟。

ロ. 排水溝や階段に取り付けられた建物2棟。1棟目（S A09、S D05）、2棟目（S A26、S D07-B、S D06-B、S A16、S A22、S D07、S S03-A）…2棟。

ハ. 便所を伴う建物造構は2棟が存在する。1棟目（S A02、S D03）、2棟目（S B01、S D04-B）…2棟。

ニ. 石敷き・縁石・礎石を伴う造構（S S01、S S02、S S03-B、S S04、S R02）…1棟。

ホ. 倉庫造構（取り付け階段を含む）（S A19・S A20、S A28）…1棟。

c. 土壌 (3基)

イ、倉庫遺構と重複するSK01 (SA19、SA20、SA28) ……1基。

ロ、土壤直上に遺構が存在するSK02 (SA15、SA31) ……1基。

ハ、石積みを埋めたSK03 (SA24) ……1基。

d. その他 (6基)

イ、埴敷き遺構 (SS05) ……1基。

ロ、石積みの裏込目石の集石遺構 (SA21、SA23) ……2基。

ハ、擁壁の裏込目石の集石遺構 (SR01) ……1基。

ニ、建物の基礎掘り溝 (SD01、SD02) ……2基。

以上のように大別すると46基が遺構として整理ができる。更に石積みで切り石積みの外面と内面を対応整理した場合、上記a.イの切り石積みは25基の内SA19・20を除外すると19基（第2表）となり、実質的な遺構数は総計39基となる。

第2表 切石積みの外面と内面の関係

南北方向			東西方向		
No.	外 面	内 面	No.	外 面	内 面
①	SD04-AとSA32か	SA18-A (野面積み)	①	SA03	既に消失
②	SA07	SA12	②	SA04	未確認
③	既に破壊され消失	SA13・SA11	③	SA05	SS03-B 北側に野面積み
④	SA15 (西側)	SA15 (東側)	④	SA06	SA10か
⑤	消失	SA25-B (拌所)	⑤	SA08	SA10か
⑥	SA30	未確認	⑥	SA14	既に破壊か SA21か
⑦	未検出	SA31	⑦	SA21か (既に破壊か)	SA33
⑧	既に破壊され消失	SA32	⑧	SA17・SA18-B	
⑨	既に破壊され消失	SA34	⑨	SA25-A	既に破壊
			⑩	SA27	未確認
				SA35	既に破壊
合 計 9基			合 計 10基		

B. 各時期別の遺構

発掘調査時点で出土した陶磁器を基に各時期別に遺構を整理すると、第Ⅰ期～第Ⅳ期までの6時期に大別されるようであるが各遺構のトレンチ内から出土した陶磁器類を中心とする遺物の整理が終了しないと正式な時期を絞り込むことができないので暫定なものとして考慮されたい（第10図～第16図）。

第Ⅰ期 (14世紀前半～14世紀後半) ..... (第11図)

第Ⅱ期 (14世紀終末～15世紀前半) ..... (第12図)

第Ⅲ期 (15世紀中頃) ..... (第13図)

第Ⅳ期 (15世紀後半～16世紀初頭) ..... (第14図)

第Ⅴ期 (16世紀前半～19世紀後半) ..... (第15図)

第Ⅵ期 (19世紀終末～昭和) ..... (第16図)

以下、各時期別に遺構を整理するが、個々の遺構の特徴や規模などについては観察表に呈示することにする。

イ. 第Ⅰ期 (14世紀前半～14世紀後半) (第11図)



第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）  
石積みS A24（野面石積み）  
土堆S K03  
ピット（B-13・14、C・D-15・16）

地区第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）の遺構

面を対応整理し  
的な遺構数は総

面

北側に野面積み

か S A21か

時期に大別され  
正式な時期を絞

ることにする。



この時期の遺構としては S A24 の野面石積みと土壌 S K03 が存在する。他に石灰岩を人為的に掘り込んだ大型のピット様のものが B-13・14 のグリッドで 2 基、 D・C-14・15 のグリッドで 4 基が確認されているがプランは把握できなかった。ピット内からウシの骨（註 1）が出土している状況が窺えた。ウシを用いた何等かの祭祀儀礼が当該期にあったのではないだろうか。今後、大型（直径 30~50cm ）ピット内から出土するウシの骨の出土例が増加すれば祭祀と関係する遺構として位置づけられるのではないだろうか。

第 3 表 京の内北地区第 I 期の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 幅 高 (m・cm)	遺 構 性格・形状・工法・機能の 推 定 時 期 な ど	遺 構 の 主 軸 方 位	石 積 み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長 (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-16 S A24 第11図	1m83cm 2m00cm 76cm	琉球王国成立以前の石積み。南北方向に短く残る。岩盤および造成土盤より石積みを実施し、根石と栗石を敷いた後に両面を積み上げながら小礫混じりの土砂を 30~40cm の厚さで投入し、その直上から土砂を隠すように 15~40cm の厚さで栗石を詰めた特殊な工法とみられる。14C 前半~中頃。	N 20°05' W	野面積み 85°	20~25 7~18 12~32	土壌 S K03。 根石から 5 番石までを含めた平均勾配は 87°
B-15・ 16 S K03 第11図	5m32cm 4m45cm 深さ 1m16cm	琉球王国成立以前の土壌で S A24 の機能停止直後に造成で埋められた溝地。平面観が直角な台形状となる。土壌内の包含層は上・下層とも時間差が無いため短期間で S A24 を埋める。14C 前半~中頃。	南北軸は S A24 の N 20°05' W。 東西軸は S D07 の N 77°00' W。	一 一	規 模 幅 277~ 445cm。 深さ 76~ 116cm。 長さ 40~ 532cm。	石積み S A24 の西側前面部の溝地（当時は平地か）を埋めた二次堆積土（造成土）。 土壌 S K03 内から鏡井弁文碗・白磁ビロースクタイプ碗 II ・天目茶碗などが出土。

#### 註および参考資料

註 1. C-15 のピット内からは膝蓋骨・手根骨・中節骨・頭蓋骨など 15 片余が出土。

\*糸満市内にあるサンティン毛遺跡に点在した按司墓 4 基を 10 年程前に市文化課が墓内の調査を実施した際、按司墓 3 基の骨壙には人骨がなく代わりにブタの骨が納められていたとのことである。市内の事例では人骨が拾えない場合は動物の骨に故人の魂を籠めて骨壙に納めたとのことであった（湖城 清氏の教示による）。

#### 口. 第 II 期（14世紀終末～15世紀前半）(第12図)

当該期の遺構として S A01 、 S A05 、 S K02 の 3 基が想定される。 S A01 は基壇を有する建物の面石とみられるものである。 S A05 の石積みは外側が切り石積みで、内面は野面積みで基礎となる野面石を丁寧に積み上げられているものが S S03-B の北側より検出されている。 S A05 の北側に設定した東西トレントチ内から二次的に火熱を受けた鉢（小札や金物）や釘が下層近くから出土している。この時期の状況を文献にあたると 1453 年に起きた志魯・布里の乱（註 2 ）が予想され切り石積みは岩盤直上から石積みがなされている点などから志魯・布里の乱以前の時期が予想された。 S A01 と S A05 の前後関係は、 S A01 が若干古く、 S A05 が新しい時期として考えられる。土壌 S K02 の下部から高麗系の灰色瓦の破片が多量に出土した状況から判断して当該期に設定した。

第4表 京の内北地区第Ⅱ期の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺 構 残 存 幅 幅 高 (m・cm)	遺 構 の 性 格・形 状・工 法・機 能 の 主 軸 方 位 推 定 時 期 な ど	石 積み 種 類 根石勾配	石のサ イズ 幅 み 控え (cm) 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)	
B-11-12 S A01 第12図	12m95cm 6m50cm 64cm	琉球王国初期頃の建物基壇。東西に延びる。岩盤を削平した面上に土盤となる土砂を6~7cm敷いた上から粗加工の大型切り石を設置。14C終末~15C前半。	N86°45'W	切石積み 65°・80°	40~90 23~37 35~70	西端がS A13で切られS A01を積み直して使用。一番石の勾配は80°と83°である。根石と一・二番石にノミによる刻印があり種類や組み合わせ、方向などから15種類19例が確認。
B-10-11 C-11 S A05 同図	11m90cm 6m00cm 67cm	琉球王国時代の区画石積み。東西に直線的に延びるが大半がS A02やS D03に隠れている。東端は未検出で奉神門南辺に延びる。岩盤を削平した後に厚さ6cm程度の土砂を土盤に敷いて丁寧に加工された切り石を設置。14C終末~15C初頭。S A05は第V期まで機能していたことが予想される。寿命の長い石積みか。	N95°30'W	切石積み 89°	32~65 28~39 15~52	S A05の上位にS A02の栗石とS D03が覆さる。石敷きS S01~S S03-B、S S04、S R02と関係する遺構か。(主軸方位が近似)。一番石の勾配は89°と根石と同じ勾配。S A05の前面トレーンチ内から二次的に火熱を受けた鎧の金物・小札や鉄釘が多量に出土。S A05の内面の基礎は配石された野面石積みがC-11 S S03-Bの北隣りから検出されている。S A05の内面の野面石積みは岩盤から積み上げていることがトレーンチの発掘で判明している。
B-14-15 S K02 同図	11m77cm 1m65cm	S A15の下位からS K01の下位に存在した土壤(岩盤の窪みに堆積した包含層)。両端は岩盤である。石灰岩の窪みを包含層で埋めてS A15の石積みを配置する。土壤内から高麗瓦を主体とする遺物包含層が確認される。14世紀終末~15C初頭に埋められた土壤。	N72°10'W	—	—	なし。 上位にS K01、S A15の遺構が存在した。

## 註

註2. 沖縄県教育委員会「蔡温本 中山世譜 正巻」 1986年。

## 八、第Ⅲ期(15世紀中頃)(第13図)

この時期の遺構として石積み、土壤、倉庫がある。石積みは南北方向に延びるもののが3基存在し、1基はS A08(外側)とS A10(内側)が対応する。他の1基はS D04-AとS A32が外側でS A18-Aの野面積みの基礎石(捨て石)を二列に配置するものと外側が消失し内側が僅かに残るS A34がある。

東西方向に延びる石積みとして2基が存在する。1基はS A17・S A18-B・S A25-Aの一連の石積みとみられるもので外側のみ検出されていて、内側は戦後の琉球大学校舎建築時の造成に伴う岩盤を削平した際に破壊されたようである。他の1基は内側のみ残存するS A33である。土壤S A01は完掘後に仮称したものであり、S



## 地区第Ⅱ期（14世紀後半～15世紀前半）の遺構

下之御庭



第Ⅱ期（14世紀後半～15世紀前半）  
石積みSA01・SA05  
土塁SK02

第12図 京の内北地区第Ⅱ期（14世紀後半～15世紀前半）の遺構

A19・S A20とS A28は土壙SK01に包括し、倉庫として判断された遺構である。このSK01の倉庫跡は1459年の倉庫など失火（註3）の時期が想定される。倉庫内から出土した一括遺物は古くは14世紀中頃～15世紀中頃までの陶器が保管されていたものと推定され、主体となる時期を検討した場合、15世紀初頭～15世紀中頃が予想されるところである。倉庫の使用時期を考えるとすれば第Ⅲ期の1453年以降頃から始まり、倉庫機能の停止時期が第Ⅲ期の1459年頃として考えられるが一応、該期に設定してみた。土壙SK02は石灰岩の窪みに二次的に包含層を持ち込んだ造成土を主体とするが、下層においては高麗系灰色瓦の破片が多量に包含する層が確認されている。土壙SK02直上にS A15・S A31の石積みが存在する点などから第Ⅱ期～第Ⅲ期にかけて存在した遺構として解釈した。

#### 註

註3. 1459年の倉庫などの失火については、明實錄之部 英宗実錄、卷301に「天順三年三月癸未朔〔甲申〕禮部奏、琉球國中山王尚泰久奏稱 本國王府失火、延燒倉庫銅錢貨物…云々」の記録がある。

#### 引用文献

- 日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における 日本史料集成明實錄之部1』 国書刊行会 1979年。

第5表 京の内北地区第Ⅲ期の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 地図番号	遺構残存長 幅 高 (m・cm)	遺 構 性 格・形 状・工 法・機 能 の 推 定 時 期 な ど	遺 構 の 主 軸 方 位	石 積 み 種 類 根石勾配	石のサイズ 厚 幅 み 笠 え 長 (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-12 S A08 第13図	83cm 2m80cm 22cm	琉球王国時代の区画石積みの東端部分で東西方向に短く残る。造成土盤の上に切石を設置。15C中頃？（外側のトレンチ内より白磁八角杯・壇瓦などが出土）	N89°15' W	切石積み (105°)	23~37 22 28~55	S A08が外面でS A10が内面とみられる。S A11とS A13の中間に位置し、S A11・S A13よりも古い時期の石積み。根石がずれていて外側に傾く。
B-12 S A10 同図	1m53cm 2m80cm 26cm	タ。岩盤や礫を敷いた土盤の上に根石を設置。根石はやや雑に加工される。15C中頃。	N90°20' W	切石積み 78°	30~40 26 20~29	S D04-Aよりも新しい。S D04-Aの石積みの一部を取り外してすり付ける。
C-D-14 S A17 同図	6m75cm 70cm 49cm	琉球王国時代の区画石積みで東西方向に残る。造成土と岩盤の上に石積み。根石は粗雑な加工。15C中頃。S A17の一部は琉大校舎の基礎工事の際に破壊。第V期まで存続。	N80°45' W	切石積み 90°	25~69 20~49 20~70	S A18-B、S A25-Aとは一連の区画石積みであったものとみられ、東西方向に延びる区画石積みで最も長いものとみられる。
D-15・16 S A18-B 同図	1m63cm 30cm 26cm	琉球王国時代の区画石積みで東西方向に残る。平面観がやや直線的で東西方向に短くなる。造成土や野面の石を基礎としてその上から粗加工の根石を設置。15C中頃～第V期。	N70°15' W	切石積み 83°	27~38 26 27~30	S A17、S A25-Aと一連の区画石積みであったものとみられ、東西方向に延びる区画石積みで最も長いものとみられる。

第5表 京の内北地区第Ⅲ期の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 残 存 幅 高 (m・cm)	遺 構 性格・形状・工法・機能の 推 定 時 期 な ど	遺 構 の 主 軸 方 位	石 積み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え、長 (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
C-D-17 SA25-A 第13図	4m86cm 1m37cm 40cm	琉球王国時代の区画石積みで東西方向に残る。平面觀は直線的で途切れながら残る。造成土や岩盤の上に粗加工の根石を設置。15C中頃～第V期。	N73°23'W	切石積み 86°	26~52 14~32 26~41	SA17、SA18-Bと一連の区画石積みとみられる。SA25-Aの東側でSA25-Bが上に乗っている。
C-D-17 SA25-B 同図	1m22cm 2m16cm 22cm	琉球王国時代の区画石積みにすり付けられた拝所(御嶽)東側の外面石積み。SA25-Aに一部乗っているため、平面觀が「L」字となる。SA25-Aの栗石や造成土盤の上に粗加工の根石を設置。	N16°15'E	切石積み (91°)	19~38 18 28~38	SA25-Aの石積みを0°と設定した場合、SA25-Bはほぼ直角(90°)となる関係にある。根石が東側に傾いている。15C中頃～後半。
B-15 SA19 同図	1m17cm 39cm 65cm	琉球王国時代の倉庫階段の東側縁石。南北方向に短く残る。岩盤上に基礎となる野面石や栗石を敷いた石積み。15C中頃。	N24°15'E	切石積み 90°	22~36 20~26 34~39	SA20とほぼ同一方向にありSA28の階段の東縁の石積みであった。SA20、SK01と関連。
B-15 SA20 同図	3m17cm 50cm 63cm	琉球王国時代の倉庫西壁の石積み。南北方向に延びているが、両端が欠落。岩盤を一部成形し、直接岩盤上に石積み。石積みは小振りのものを多用し、横目地がとおる箇所が存在する。15C中頃。	N22°15'E	切石積み 90°	14~51 8~33 27~39	SA19、SA28とは切り合ながら併存。SA19とはほぼ同一方向。 SA20の石積みは火災で火熱を受けて脆くなり、橙色に変色する石が目立っている。
B-15 SA28 同図	2m25cm 1m03cm 47~70cm	琉球王国時代の倉庫へ下つて入るための階段。岩盤や造成土の上から小振りの粗加工の切石を石積みし、二・三段踏み石として配置する。15C中頃。	N64°00'E	切石積み 90°	24~36 15~25 24~42	SA19・SA20と直接関連。SA28の階段は現存する最上段でSA20とは直角の関係にあり、かつ、SA19ともほぼ直角の関係にある。計画的に設計された倉庫か。階段の二段目が7°程度外側に傾く。
B-15 SK01 同図	2m90cm 2m47cm 深さ 45cm	琉球王国時代の倉庫内部で、火災により一括で焼けた多量の遺物が堆積。倉庫の輪郭は壘な形状。岩盤を壘に成形した面が床面か。1459年の火災で機能を終える。	南北の主軸 はSA19と SA20の方 位と同じ。 東西はSA 28の方位と 同じ。	-	-	SA19、SA20、SA28が倉庫の縁石および階段で、その内部をSK01とした。



### 第Ⅲ期（15世紀中頃）

石積み S A08（外側）・S A10（内側）・SD04-A（外側）・SA18-A（内側）・SA17（外側）・SA18-B（外側）・SA25-A（外側）・S A33・S A34（外側）。

御殿石積み S A25-B

倉庫石積みおよび階段 S A19・20・S A28

土塁 S K01（倉庫内部）

\*土塁 S K01、石積み S A19・20、S A28は1459年に失火した倉庫のひとつとみられる。

0 5 10m



### 第Ⅲ期（15世紀中頃）

石積み S A08（外面）・SA10（内面）、SD04-A（外面）・SA18-A（内面）、SA17（外面）・SA18-B（外面）、SA25-A（外面）、SA33・SA34（外面）、  
御殿石積み S A25-B  
倉庫石積みおよび階段 S A19・20、SA28  
土塙 S K01（倉庫内部）  
※土塙 S K01、石積み S A19・20、SA28は1459年に失った倉庫のひとつとみられる。

第13図 京の内北地区第Ⅲ期（15世紀中）の遺構

第5表 京の内北地区第Ⅲ期の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 幅 残 存 高 (m・cm)	遺 構 性 格・形 状・工 法・機 能の 推 定 時 期 な ど	遺 構 の 主 軸 方 位	石 積 み 種 類 根石勾配	石のサ イズ 幅 厚 み 控 (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
C-13-14 S A33 第13図	3m00cm 73cm 85cm	琉球王国時代の区画石積み。東西方向に短く残る。東西の端は欠落。造成土や岩盤の上から石積み。15C中頃で、S A10が機能しなくなった直後の時期まで存続か。	N78°10' W	粗加工の 野面石積 み。 70°	13~48 12~30 29~39	勾配は根石から二番石までが65°である。S A34が西端で付いている。S A08、S A10、S A14、S A21が間接的に関係する遺構とみられる。
C-13-14 S A34 同図	2m92cm 94cm 75cm	タ。南北方向に途切れながらS A33と直交する。粗加工の根石下端は岩盤を深さ50~60cm程度掘削し、岩盤の縁沿いに根石を直接乗せる。15C中頃。	N18°55' E	粗加工の 根石。 84°		根石のみ残存。S A33に北端が付く。S A08、S A10、S A14、S A21、S A17が間接的に関係する遺構とみられる。
B・C-12 SD04-A 同図	4m82cm 49cm 25cm	南北に延びる区画石積みにすり付いた断面が「L」字状の排水溝。造成土の上から切石を設置し、区画石積みを含めたものをSD04-Aとした。15C中頃。	N1°15' E	粗加工の 根石。 85°・89° 一番石 83°	14~64 14~51 15~30	区画石積みの根石は79°勾配。SD04のすり付いた区画石積み下場からSD04-Aの縁までの溝幅は49cmである。SA32、SD06-A、SA06が関連。SA06の東端石積みの一部を「L」字に石の隅を抉って排水を確保か。SD04-Aの存続時期は長期間使用か?。
B-12 SA18-A 同図	2m56cm 56cm	南北に延びていた区画石積みの内面である。外面はSD04-Aとみられる。SA01の栗石を除去後に削平された岩盤や土砂の上から大型の粗加工の切石を根石として使用。15C中頃。	磁北と重なり0°である。	切石積み	60~88 — 40~56	SD04-Aとほぼ平行に存在し、SD04-Aが外面でSA18-Aが内面とみられる。両者の幅は側溝を含めて464cmで、側溝を除外した幅は432cmであった。

## 二、第Ⅳ期(15世紀後半~16世紀初頭)(第14図)

IV期は石積みと建物に伴う遺構が存在するようである。石積みは切石積みである。東西方向に延びた石積みは3基が存在し、内・外側が残存する例ではなく、外側のみ残っているもののみであった。S A04、S A14、S A35の3基であった。南北方向に延びる石積みも3基が検出されている。内・外側とも存在し、対応する石積みはSA07とSA12である。SA15も両面とも残っていて土壌SK02の直上から石積みがなされている。SA30は外側のみ検出されていて、内側は未確認であった。

建物の縁石や回廊様の石敷き遺構がこの時期に存在するようである。ひとつの建物に伴う施設とみられる遺構はSS01、SS02、SS03-B、SS04、SR02である。SS03-Bは縁石と礎石が残っていた。SR02は建物のコーナー部の縁石も残っている点や石敷きが建物中央に敷かれている点などから屋根の在る渡り廊下などの施設も考えられるようである。

第6表 京の内北地区第Ⅳ期の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 幅 高 (m・cm)	遺 構 性 格・形 状・工 法・機 能 の 推 定 時 期 な ど	遺 構 の 主 軸 方 位	石 積 み 種 類 根石勾配	石 の サイズ 幅 み 控 え (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
D-10・11 S A04 第14図	18m55cm 85cm 30cm	東西方向に途切れながら残存する琉球王国時代の区画石積み。造成土の上に設置。比較的小振りの切石を用いる。布積み崩れ。15C末~。	N93°30'W	切石積み 81°	25~56 12~18 30~52	一番石は78°の勾配。S A35の上にS A04が存在する。S S01~S S03-B、S S04、S R02とほぼ平行関係で、時期も近く、同時期のものとみられる。
B-12・13 S A07 同図	4m90cm 70cm 52cm	南北方向に延びるが両端を欠落した琉球王国時代の区画石積み。大半が地山の赤土を掘り込んで地山から石積み。南側は岩盤直上から石積み。15C末。	N2°00'W	切石積み 76°・89°	29~79 14~42 24~40	S A12が区画石積みの内面でS A07が外側である。
B-12 S A12 同図	10m70cm 44~72cm —	南北方向に延びる北端はS A01の縁石を利用。南端で唯一の切石(幅92cm×控え長45cm×厚さ48cm)が残る。S A01の栗石直上に野面石積みを二列に設置。15C末。	N1°45'W	野面と切石を併用	16~36 9~18 30~44	S A07と平行する区画石積み。S A07が外側でS A12が内面である。両者の幅は455cm(外側と内面の縁同士までの直線距離)が推定される。
B-13・14 S A14 同図	8m50cm 1m35cm —	東西方向に直線的に延びる琉球王国時代の区画石積みで両端を欠落する。東側は一部岩盤を利用するが大半は造成土から石積み。粗加工の切石を合い肩積みで石積み。15C末~。	N68°45'W	切石積み 78°	14~60 20~34 30~45	一番石は76°勾配で、二番石が80°勾配であった。S A06とは直接は繋がらないが一連の石積みである。S A15の石積みがすり付けられている。
B-14 S A15 同図	6m13cm 2m04cm 57cm	南北方向に直線的に延びてS A14にすり付けられた石積み。S A14とすり付けられた平面観の形狀は「T」の字状となる。包含層を持ち込んで造成土盤とし土盤の上に根石を設置する。根石は東側のみが20cm前後一番石の下場から突出した状態で石積みする。石積みは粗加工の野面風の石を合い肩積みで石積み。15C末~。	N14°20'E	野面風の 粗加工の 石積み。 90°	28~48 14~30 18~44	1番石も90°の勾配。S A14にすり付けられている。北西隅で石積みが折れはじめていて、S A31の石積み(栗石のみが検出)に繋がっているようである。



第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）

石積み S A04(外面)・S A07(外面)・S A12(内面)・S A14(外面)・S A15(外面・内面)  
 S A21(栗石等の列)・S A27(栗石等の列)・S A30(外面)・S A35(外面)・石敷き SS01(石敷きのみ)・SS02(石敷きと碌石)・SS03-B(石敷き、碌石・礎石)・SS04(石敷き、碌石)  
 石列 S R02

考  
の重複)

。 S A35  
する。 S  
S S04、  
係で、時  
ものとみ

の内面で  
。

画石積み。  
12が内面  
は455cm  
土までの  
れる。

、二番石  
。 S A06  
いが一連  
A15の石  
ている。

れてい  
はじめ  
積み（栗  
がってい



第14図 京の内北地区第IV期（15世紀後半～16世紀初頭）の遺構

石積み S A04 (外), S A07 (外), S A12 (内), S A14 (外), S A15 (外・内)  
S A21 (栗石等の別), S A27 (外), S A30 (外), S A35 (外), 石敷き SS01 (石敷きのみ), SS02 (石敷きと緑石), SS03-B (石敷き・緑石・從石), SS04 (石敷き・緑石)  
石列 SR02

第14図 京の内北地区第IV期（15世紀後半～16世紀初頭）の遺構

第6表 京の内北地区第IV期の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 幅 高 (m・cm)	遺 構 性格・形状・工法・機能の 推定時期など	遺 構 の 主 軸 方 位	石 積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長 (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-C-13-14 S A21 第14図	12m30cm 2m10cm —	東西方向に延びていた石積みの 栗石や切石などの列を S A21と した。地山、岩盤、造成土盤の 上に石積みか。区画石積みの裏 込目石を主体とする。15C末~。	N74°00'W?	裏込目石 ほか不明。	— — —	S A06、S A14や S A08、S A10、S A33、S A34の裏込 目石の列が推定される。同様 な裏込目石の石列が西側で検 出されている (S A23)。S A 21と S A23は途中で岩盤に よって途切れているが一連の 石積みとみられる。
B-16・17 S A27 同図	2m40cm 39cm 1m29cm	東西方向に延びる石積みで S A 30にすり付けられている。造成 土の上から石積み。粗雑に加工 された切石を含む肩風に石積み。 15C末~。	N69°30' W	粗加工の 切石。 74°	16~49 14~40 20~34	S A27よりも若干、古い石積 みである S A30と直交する形 ですり付けられている。 一番石から三番石までの勾配 は76°であった。
B-16 S A30 同図	1m69cm 未検出 86cm	下之御庭(南北)方向に延びる 石積み。地山を掘り込んで造成 土を投入して土盤を安定させた 後で石積みを行う。丁寧に加工 された切石で布積みする。15C 末~19C初頭まで継続か。	N33°25' E	切石積み 89°	29~66 18~39 未検出	一番石は93°勾配。S A27の 石積みがすり付けられている。 S A30は古絵図などからその 延長線上に系図座・用物座が 存在する為、系図座・用物座 の石積みの一部とみられる。
D-10-11 S A35 同図	3m63cm 44cm 14cm	東西方向に存在した区画石積み か。造成土の上から小振りの切 石を設置。15C末~。	N77°10' W	切石積み 88°	19~44 14~18 15~50	S A35の上位に S A04の区画 石積みが存在する。周辺の他の 遺構と主軸方向が異なっている。
C-10 S S01 同図	2m28cm 1m20cm —	建物施設の周辺に敷かれた敷石 遺構。造成土の上に長方形状に 加工した敷石で、9枚が残存す る。素材は細粒砂岩(ニーピ) を板状にノミで成形。南側は石 灰岩製の縁石が残る。15C 末~18C。	N96°00' W	細粒砂岩 製の敷石。 —	19~48 未検出 29~84	S S03-B、S S02、S S04、 S R02は一連の遺構である。 特に S S03-Bの延長線上に あることが注目され主軸方向 も一致する。
C-10 S S02 同図	2m87cm 57cm —	*。造成土の上に長方形 状に加工した細粒砂岩製の板石を 敷く。12枚の板石が残存し、北側 (4個)と南側(7個)に石灰岩製 の縁石が残っている。15C末~18 C。	N96°00' W	細粒砂岩 製の敷石。 —	25~35 7 47~65	S S01、S S03-B、S S04、 S R02は一連の遺構である。特 に S S04と繋がる遺構とみられ 主軸方向も一致する。

第6表 京の内北地区第IV期の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 幅 高 (m・cm)	遺 構 性格・形状・工法・機能の 推定時期など	遺 構 の 主 軸 方 位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 控え (cm) 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
C-10 S S03-B 第14図	3m62cm 98cm —	琉球王国時代の建物に伴う敷石 遺構。造成土盤の上に長方形形状 に加工した細粒砂岩製の板石を 敷く。板石は24枚が残っている。 東南隅で縁石に沿うように南側 へ折れている。石灰岩製の縁石 (10個)と建物の礎石は南側に 存在する。縁石の東端よりに礎 石(縦62cm、横51cm、刻印が在 る)が位置する。15C末~18C。	N96°00'W	細粒砂岩 製の敷石 —	21~61 14 23~62	S S01、S S02、S S04、S R02は一連の遺構。S S03-B の造成土の直下にS A05の 内面の基礎となる野面石積み 及び裏込目石が存在する。
C-10 S S04 同図	1m15cm 50cm —	タ。造成土の上に長方 形状の板石を敷く。敷石は細粒 砂岩(ニービ)、ノミで成形す る。敷石は4枚程度が残ってい るが割れによって9個となる。 石灰岩製の縁石が敷石の南縁に 沿うように7個残存している。 15C末~18C。	N96°00'W	細粒砂岩 製の敷石 —	19~25 未計測 33~44	S S01、S S02、S S03-B、 S R02とは一連の遺構である。 S S02と主軸方向が一致して いる。
C-10 S R02 同図	2m13cm 39cm —	琉球王国時代の建物に伴う縁石 遺構。平面観が「L」字状とな り、東西方向に長く、南北に短 い。造成土および岩盤の直上か らやや雑に成形された切石を配 置する。15C末~18C。	N93°45'W	切石積み —	20~36 17~25 17~40	S S01、S S02、S S03-B、 S S04と関係する一連の遺構。

## ホ、第V期(16世紀~19世紀後半)(第15図)

該期の遺構として石積み、排水溝、埠瓦敷き、裏込目石の石列の4種類が確認されている。石積みは切石積みで、東西方向に延びる石積み2基と南北方向に延びる石積み3基の計5基が確認されている。東西方向に延びる石積みで内外面が対応するのはS A06(外面)とS A10(内面)の1基のみであり、外面のみ確認されているのはS A27であった。南北方向に延びる石積み3基は外面が既に破壊されて消失したものや未検出のものであった。従って南北方向へ延びる石積み3基は全て内面のみが残存するものであった(S A11とS A13、S A31、S A32)。他に東西方向に延びていた石積みの裏込目石の石列1基(S A23)が存在するが当該遺構と対応ならびに平行する石積みは北隣に存在する現代の排水溝工事の基礎掘りや岩盤の削平などによって消失したものかと考えられた。

排水溝S D06-Aは南北方向に延びた第III期の排水溝を伴う石積みS D04-Aの時期から第V期の石積みS A11・13の時期頃まで機能したとみられる暗渠であり、底板の切石が10枚程度敷かれている。底板となる敷石は東側へ緩やかな傾斜となるように配置され、その勾配は7°を測った。排水溝S D06-Aから流れてきた雨水は周辺の黒石や岩盤の石灰岩を経過して自然に地下へ浸透させる工法を採用したものとして考えられるところである。

埠瓦敷きS S05は実際には敷き詰められた埠が破壊された状態で検出されている。一応、埠瓦敷き跡と表現すべきであろうが便宜的に埠瓦敷きとした。埠瓦は湧田古墳跡(註4)の例から15世紀中頃~17世紀前半まで生産されている状況や当該期の石積みS A11・13が存在した16世紀頃の時期に機能した遺構(埠瓦敷きS S05)とし





第V期（16世紀～19世紀後半）

石積みS A06（外側）、S A11（内面）、S A13（内面）、S A23、S A32（外側） 石敷きS S05

溝S D06-A

\*当該期まで存続していたとみられる石積み遺構として、S A14、S A15、S A18-A、S A21、S D04-Aが考えられる。

第15図 京の内北地区第V期（16世紀～19世紀後半）の遺構

て判断される。

該期まで存続する遺構として第Ⅲ期の石積み S A17・S A18-B・S A25-Aの一連の石積みと第Ⅱ期の石積み S A05が長期間にわたって存在していたことが予想されるが、今後、同地域から出土した陶磁器類の分類と整理が進行すればある程度の時期が判明するものとみられる。

#### 註

註4-a. 沖縄県教育委員会「湧田古窯跡（I）県庁舎行政棟建設に係る発掘調査」『沖縄県文化財調査報告書 第111集』

1993年。

- b. 沖縄県教育委員会「湧田古窯跡（II）県庁議会棟建設に係る発掘調査」『沖縄県文化財調査報告書 第121集』

1995年。

第7表 京の内北地区第V期の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 残存幅 （m・cm）	遺 構 性格・形状・工法・機能の 推定時期など	遺 構 の 主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長 (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-12-13 S A06 第15図	7m55cm 1m15cm 25cm	琉球王国時代の東西方向に延びた区画石積み。東端は S D04-A にすり付いている。西側は崩壊する。東端から 3 m の地点から石積みが雑に積み上げている。地山および岩盤から切石を積み上げている。S A07と接する部分から西側は粗加工の切石を用いて積み上げる。石積みは布積み（東側）と合い肩積み（西側）が併存する。16C～。	N84°30' W	切石積み で、布積 みと合 い 肩積みが 併存。 77° 78° 80°	25~67 24~32 30~65	西側の 1 番石はズレて勾配が 65° となっている。 東側は S D04-A にすり付き 中央部では S A07 の上に S A 06 が存在する。S A32・S D 04-A と一期期平行する。東 端の上位の切石は S D04-A の排水のために「L」字状に 切石の東隅を抉って成形する。
B-12 S A11 同図	70cm 25cm —	琉球王国時代後半頃の南北に延びていた区画石積みの一部で S A13 と主軸方向が一致している。岩盤と土盤の上に切石を設置。根石のみ検出されている。16C～。	N12°30' W	切石積み 80°	36~41 59 18~24	S A01 の西端に南北方向に設置された大型の切石と S A13 の主軸方向が同一であり、南北に延びた区画石積みの内面とみられる。これと平行するとみられた外側の石積みは既に破壊されていた。
B-13 S A13 同図	2m55cm 55cm —	琉球王国時代後半頃に南北に延びていた区画石積みの一部で S A11 と主軸方向が一致している。地山を掘り抜いて岩盤直上から石積みか。根石のみ残存。16C～。	N12°30' W	切石積み (110°)	19~45 18 38~60	根石がズれているため勾配が 110° となる。西隣に S A32 が存在する。S A32 よりも S A13 は新しい時期のものとみられる。S D06-A とは平行する時期。

第7表 京の内北地区第V期の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 幅 高 (m · cm)	遺 構 性格・形状・工法・機能の 推 定 期 期 など	遺 構 の 主 軸 方 位	石 積 み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-C-15 S A23 第15図	10m 2 cm 140cm —	琉球王国時代に東西に延びていた区画石積みの栗石か。東端は岩盤から始まり、西端が琉球大学の電線埋設工事で破壊。造成土と岩盤直上から石積みか。16C～。	N71°15' W	野面石積み。 保留	未計測 未計測 未計測	S A06、S A14、S A08、S A33の裏込目石か。あるいはS A21のものか。
B-14 S A31 同図	1m73cm 未検出 不詳	琉球王国時代の石積み。大半が崩れてS A15の北西隅ですり付いている。造成土の上から石積み。粗加工の野面風の根石のみが検出。16C～。	N72°10' W	野面風の 石積み。 保留	9～14 10～15 24	S A15と一連の石積みとみられる。S A15の主軸を0°と設定した場合、S A31はN98°30'にある。S A31はS A15よりも新しい時期の石積みとみられ、ある時期にS A15にすり付けて機能させた石積みとみられる。
B-12 S A32 同図	1m27cm 37cm —	南北方向に延びていた琉球王国時代の区画石積み。造成土盤の上から丁寧に加工された切石を設置。16C～18C。	N1°15' W	切石。 —	35～40 未検出 31～37	S A13と隣接するが石の面は西側を向く。S D04-Aとは一連のものとみられる。
C-D-12 S S05 同図	1m21cm 1m10cm —	S A11、S A13の区画石積みが存在した時期に石積み近くにあった博瓦敷きの遺構とみられる。博瓦は割れた状態で検出されている。造成土の上に博瓦を敷いたか。16C後半～17C前半。	不明	博瓦敷き か。 —	不明 タ タ	S A11、S A13の区画石積みが存在した時期と平行する遺構とみられる。
B-12 S D06-A 同図	3m87cm 47cm 15cm	琉球王国時代後半頃の区画石積みに付属した排水溝の底板か。西側から東側へ傾斜する。傾斜は7°勾配で東へ下っている。栗石および削平された岩盤の上に底板を設置。板状に加工した切石を使用。16C後半～。	N91°45' W	板状の切 石。	22～53 7～15 34～57	S A13がS D06-Aの上位にある。S D04-Aからの雨水はS A06の東端を流れてS A13の石積みコーナーにぶつかって本遺構を流れ周辺の栗石や岩盤をとおして地下に自然浸透させる目的でS D06-Aを設置したものとみられる。本遺構には調査の結果、縁石が検出されていないことを記す。

## △. 第VI期 (19世紀終末～昭和) (第16図)

当該期は1879年(明治12)の沖縄県設置に伴ういわゆる琉球処分以降の時期から1950年(昭和25)の琉球大学開校直後から校舎などの増改築がなされた時期頃までとした。

琉球王国の王宮としての機能を停止した直後の明治12年(1879)から明治29年(1896)までの時期は「熊本鎮

「台沖縄分遣隊」の兵舎として使用され京の内も施設の一部として改変されているようであるが、京の内跡の平場中央を東西に走っていた第Ⅲ期の区画石積み S A17、S A18-B、S A25-A はすでに消失したものとして「首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」(註5)から読み取れる。また、第Ⅲ期の石積み S D04-A と S A18-A (外側と内側) が第Ⅳ期の石積み S A07 と S A12 (外側と内側) のいずれかが残存していることが上記の「首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」にみえる点が注目され、上記の第Ⅲ・Ⅳ期の石積みの一部は当該期まで残存している可能性が配置図から読み取れるようである(第5図・第20図④)。

熊本鎮台沖縄分遣隊による駐留が終わった明治29年以降から昭和20年(1945)までの期間は、首里城内に首里市立女子工芸学校、沖縄県立工業徒弟学校、首里第一尋常高等小学校(首里第一小学校)などの校舎として利用される。京の内と最も深く関係するのは首里第一尋常高等小学校(以下、首里第一小学校と併記)であり、京の内跡の発掘調査地区の北西側一帯は学校校舎の周辺に走っていた側溝や学校施設に入る階段などが遺構として検出されている(第7図)。

1945年(昭和20)の沖縄戦では首里城の地下に1944年(昭和19)頃から第32軍指令部壕が造られたため、米軍の集中砲火を受けて地上にあった首里城正殿・南殿・北殿など建築物や城門・城壁などの施設もことごとく消失や崩壊などで灰燼に帰ってしまったようである。

1950年(昭和25)には焦土化した首里城跡の丘へ琉球大学が創設され、1982年(昭和57)までの32年間、沖縄の最高学府とし存在した。現在は西原町の新キャンパスへ移転している。京の内跡の調査区の南半分に存在した石積み遺構は基盤である琉球石灰岩の削平や基礎掘りによって消失してしまったようである。さらに地下に排水溝やヒューム管の埋設によって調査区の西半分が溝状に破壊されている。

さて、京の内跡の調査区内で確認された第Ⅵ期の遺構を整理する目的で、便宜的に1945年(昭和20)を含めた、それより以前の時期(1879年～1945年)を前半として仮称し、1945年(昭和20)以降を後半とする。

#### 第Ⅵ期前半(1879年～1945年)

この時期の遺構は首里第一尋常高等小学校(首里第一小学校)の施設のみが主体として考えられる。遺構の配置関係は昭和8年頃の阪谷良之進による「旧首里城図」(註6)と学校校舎および便所などの施設が良く一致するようである。当該期の遺構として検出されているのは校舎周辺に存在した排水溝や便所などである。東西方向に延びる排水溝は S A16・S D06-B・S D07-A・S S03 の4基が一連のものである。その内の S A16 は校舎に入る階段であり、その直下を排水溝が走っている。S S03 は排水溝の底板となる石灰岩製のものを配置したものである。南北方向に延びる排水溝は S A26(縁石)と S D07-B が一連のものである。校舎の基礎石の一部とみられるのは石積み S A29 の1基のみで南北方向に延びていたようである。他に校舎へ南側から入る階段脇の縁石とみられるものが検出されていて、これが石積み S A22 であり、東側の縁石のみが残っていた。

便所および関連する建物や踊り場の遺構として S D04-B と S B01 の2基(西側)と S A02・S D03 の2基(東側)が便所および関連遺構として判断された。

その他に掩壁の外側の石積みが破壊されて裏込目石のみが列状に検出された S R01 が1基のみ確認されている。以上の遺構は上記した「旧首里城図」に大部分が描かれているようである。「旧首里城図」に描かれていない遺構として S A09 と S D05 の建物と排水溝があり、南側に隣接する岩盤を斜位に成形し法面としている状況や S A09 内の床面から砲弾の破片などの状況から考えると首里第一尋常高等小学校末期頃(昭和20年頃)に存在した学校施設の一部かもしれない。

#### 第Ⅵ期後半(1946年～1982年)

当該期の遺構は琉球大学が創設された1950年前後から1950年以降を中心とする時期に実施された校舎建設工事に伴う岩盤の削平や基礎工事とその後の校舎の増築や周辺整備あるいは地下の配管工事などによって掘り下げられた建物の基礎や配管の溝などである。

建物の基礎跡は発掘調査地区的南側に集中し、東南側が法文校舎の基礎、西南側は教育校舎の基礎とみられる。

S D01・S D02 の2基は南北に走る教育学部校舎の基礎跡とみられるものである。東南側にある方形状の基礎は一辺が250cm前後のもので床にコンクリートが流し敷かれていた法文校舎の基礎跡で10基を数えている。これ

らの校舎施設に伴う配管跡は調査区の北西側に集中している状況にあった。他に東西に走る擁壁があったが聞き取り調査の結果、琉球大学の時期に切石でもって構築したものであったことが判明したので記録を残して大半を撤去した。この石積みが S A03である。他に植栽の痕跡を示す穴が調査区の北東隅や S A01の基壇中央縁石近くと S K01 (S A19・20、S A28) の北東隅近くで確認されている。以上の遺構は「旧首里城図 (旧琉球大学校舎配置図)」(註7)で一部を確認することができる(第8図)。

#### 註

註5. 沖縄県史編集室所蔵 「首里城熊本鎮台沖繩分遣隊配置図」 1893年(明治26)。

註6. 阪谷良之進編集 「旧首里城図」 沖縄県立図書館所蔵 昭和8年頃(1933)作成。

註7. 沖縄県教育委員会 「首里城跡 南殿・北殿跡の遺構調査報告」 1995年に収録された配置図である。

第8表 京の内北地区第VI期前半の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 幅 高 (m・cm)	遺 構 性格・形状・工法・機能の 推定時期など	遺 構 の 主軸方位	石 積 み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控 え (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-11・12 S A02 第16図	5m30cm 4m50cm 34cm	首里第一尋常高等小学校の便所入り口にある踊り場の縁石。S A01の栗石の一部とみられる直上に土砂を敷いて地固めの後に石積み。小振りの切石を用いて目地をセメントで埋め合わせて面の仕上がりを意識する。大正末期～昭和初期。	N84°00'W	小振りの 切石。 83°	15~32 14~20 15~45	S D03とほぼ同一方向。 一番石は勾配94°であった。 S D03よりも S A02は若干、古い時期か。
B・C-11 S D03 同図	4m50cm 60cm 50cm	首里第一尋常高等小学校の便所。S A02の栗石を掘り下げて構築。床面および内部の壁は漆喰にセメントを混合したもので塗付。漆喰を強くる為にセメントを混入させたものとみられる。縁石は小振りの切石を用いて目地に漆喰とセメントを用いたモルタルを塗付。床面よりガラス製の御弾(オハジキ)が多く出土している。他に大正10年製のニッケル五銭硬貨が出土している。大正末期～昭和初期。	N94°45'W	小振りの 切石。 —	15~46 14 13~33	S A02とほぼ同一方向。 西隣りの試掘坑で S A05の石積みが検出されている状況から S D03直下に S A05が存在する可能性が高い。 昭和8年(1933年)頃に阪谷良之進編集の「旧首里城図」(県立図書館所蔵)に本遺構が便所として描かれていて、位置的にも一致している。
B-10・11 S R01 同図	7m10cm 4m04cm —	琉球王国時代に下之御庭と京の内を区画する石積みがあったが、この区画石積みを学校建設時に取り崩し、崩れた石積みを再度、方向を南側に変更して擁壁として使用か。栗石の上に造成土を敷いてその上から野面石を設置。南北方向に延びるが中央で西側に迫出している。大正末期～昭和初期。	N8°35'E	野面石。 —	未計測 — —	S A02、S D03の時期と平行か。昭和8年(1933年)頃に阪谷良之進編集の「旧首里城図」(県立図書館所蔵)に本遺構の縁石が描かれている。本遺構からは野面石は検出されていない。栗石のみであった。

第8表 京の内北地区第VI期前半の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 押図番号	遺構残存長 幅 高 (m・cm)	遺 構 性格・形状・工法・機能の 推定時期など	遺 構 の 主軸方位	石 積み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控 (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
C-12・13 S A 09 第16図	9m18cm 4m30cm 8 cm	昭和20年前後に存在した建物。北側の一辺を欠くが東西方向に長い建物か。造成土の上に建物の縁石と礎石を配置する。礎石の間隔は80cmの間隔。縁石は石灰岩をレンガ様に丁寧に面取りした切石を主に用いる。縁石周辺から板ガラスの破片が検出。床面の土盤から砲弾破片が検出される。	N 83°30' W	レンガ様 に成形した切石。 —	16~40 8~14 13~20	S A 09の西隣に建物に付属するS D 05の排水溝が存在する。上記した「旧首里城図」には描かれていない。
C-13 S D 05 同図	3m88cm 16cm 深さ 10cm	昭和20年前後に存在した建物に付属する排水溝。南北方向に途切れながら存在。造成土の上および掘り抜きでレンガ状に加工した切石を設置。縁石および溝内部に漆喰を塗付。	N 6°30' E	レンガ様 の切石。 —	10~20 10 20~43	S A 09に付属する。
B-15・16 S A 16 同図	2m94cm 1m25cm —	首里第一小学校校舎に入る階段の縁石。階段直下にある側溝の蓋石も併用する。縁石から南側の箇所にも階段の縁石が平行して存在し、セメントが敷かれている。造成土の上に設置。大正末期~昭和初期。	N 77°00' W	切石敷き —	15~94 15~25 13~60	S D 06-B、S D 07、S S 03-Aは一連の遺構。昭和8年(1933年)頃に阪谷良之進が編集した「旧首里城図」(県立図書館所蔵)に本遺構が描かかれている。
B-15 S A 22 同図	1m03cm 1m16cm 21cm	首里第一小学校校舎の側溝周辺の階段などの縁石か。南北方向に短く残存。	N 19°15' E	野面石と 切石。 —	14~32 17~19 16~39	S D 07-Aと平行する時期とみられる。
B-15・16 S D 06-B 同図	9m03cm 20cm 32cm	首里第一小学校校舎の排水溝。南西方向に残存。板状に成形した切石を底板に用い、厚みのある切石を縁石として使用する。土盤は造成土である。縁石および底板の石はセメントで塗付する。	N 76°45' W	切石と板 状の切石。 —	縁石 27~34 10~34 29~80 底板石 12~20 4~7 17~47	S D 07-A・B、S S 03-Aは一連の排水溝。
B-14・15 S D 07-A 同図	18m35cm 27cm —	首里第一小学校校舎の排水溝。東西方向に途切れながら残存し、西側のS D 06-Bや東側のS S 03-Aと繋がる。造成土の上に板状に加工した切石などを設置。	N 77°00' W	切石と板 状の切石。 —	縁石 15~29 11~25 13~48 底板石 8~25 — 14~38	S D 06-B、S S 03-Aと途切れながら繋がる。

第8表 京の内北地区第VI期前半の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 残 存 幅 (m・cm)	遺 構 性格・形状・工法・機能の 推定時期など	遺 構 の 主軸方位	石 積み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控 (cm) 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-16 S D07-B 第16図	7m03cm 溝幅 36cm —	首里第一小学校校舎の排水溝。南北方向に残存。S D06-Bと暗渠で繋がっている。造成土盤やS A30の縁石直上から設置。板状に加工された切石を底板とし、粗加工の切石などを縁石として用いる。縁石はS A26として仮称。	N12°15' E	切石と板 状の切石。 —	底板石 4~36 — 4~36	S D06-Bに直交し暗渠で繋がっている。
B-16 S A26 同図	7m03cm 79cm 30cm	S D07-Bの排水溝の縁石。造成土やS A30の縁石などの上に設置。首里第一小学校。大正末期~昭和初期。	N12°15' E	切石。 90°	25~76 23~50 18~36	S D07-Bが側溝の底板であり、S A26が同側溝の縁石である。S D06-B、S S03-A、S D07-Aとは一連の側溝である。
B-16 S A29 同図	1m68cm 43cm 10cm	小学校校舎基礎用の縁石か?。SK03の土壤の上に直接設置。大正末期~昭和初期。	N17°35' E	切石。 —	34~60 10~15 28~43	小学校の基礎の方向はS A26やS D07-Bより東に5°20'よっていて平行ではない。
C-16・17 S D04-B 同図	3m28cm 1m20cm —	小学校の便所前面の躰り場。コーラル混じりの造成土の上にセメントを塗付。大正末期~昭和初期。	N77°26' W	切石。 —	— — —	昭和8年(1933年)頃の阪谷良之進編集の「旧首里城図」(県立図書館所蔵)にみえる便所の躰り場である。
C-16・17 S B01 同図	6m56cm 2m40cm —	小学校の便所。便所のサイズは長さ312cm、幅112cmであった。一部、琉球王国時代の区画石積みを使用するが大半はレンガ状に加工した切石を用いる。大正末期~昭和初期。	N77°20' W	切石とレ ンガ状の 切石。	18~64 — 16~44	昭和8年(1933年)頃の阪谷良之進編集の「旧首里城図」(県立図書館所蔵)に描かれた便所そのものである。
B-13・14 S S03-A 同図	7m 8 cm 32cm —	小学校校舎に伴う排水溝の底石。造成土の上に設置。板状に加工された板石を主体に用いる。大正末期~昭和初期。	N77°45' W	切石や板 状の切石。 —	16~40 — 16~28	昭和8年(1933年)頃に阪谷良之進によって編集された「旧首里城図」(県立図書館所蔵)に描かれた小学校の側溝。S D07-A、S D06-B、S D07-B、S A16が関係する。S D07-A・BとS D06-Bは一連の側溝である。

下之御庭



第VI期前半（1879年～1945年）の遺構（未の点描部分）  
 石積み S A02、S A09（建物跡）、S A16（階段）、S A22、S A26（溝の縁石）、S A29溝、  
 S D03（便所跡）、S D05、S D07-A、S D07-B、S D04-B  
 石列 S R01  
 建物 S B01（便所跡）  
 石敷き S S03-A（溝の底板石）

第VI期後半（1946年～1945年）  
 石積み S A03  
 溝 S D01、S D02  
 その他の排水溝①～④、建物基礎（フーチン）①～⑫  
 ※フーチン①・④の南側にある③は第VI期の  
 S A35と若干、平行する時期の溝地で石切り場跡か。



第Ⅵ期前半（1879年～1945年）の遺構（朱の点描部分）  
石積み S02（便所跡）、S A09（便所跡）、S A16（階段）、S A22、S A26（溝の砾石）、S A29溝、  
S B05（便所跡）、S D05、S D07-A、S D07-B、S D04-B  
石積 R01  
便所 S B01（便所跡）  
石敷き S S03-A（溝の底板石）

### 第VI期後半（1946年～1945年）

第Ⅵ期後半（1940年～1945年）  
石積み S A03  
溝 S D01、S D02  
その他排水溝①～④、建物基礎（フーチン）①～⑫  
※フーチン①・④の南側にある③は第Ⅴ期の  
S A35と若干、平行する時期の窪地で石切り跡跡か。

第16図 京の内北地区第VI期（19世紀終末～昭和）の遺構

第9表 京の内北地区第VI期後半の遺構観察一覧

地 区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 幅 残 存 高 (m・cm)	遺 構 性 格・形 状・工 法・機 能の 推 定 時 期 な ど	遺 構 の 主 軸 方 位	石 積 み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え (cm)	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B・C-11-13 S A03 第16図	21m00cm 40cm 30cm	琉球大学法文学部校舎前面に あった建物と関係する北側の擁 壁か。校舎の基礎用の穴と平行 するかのように東西方向に延び ていたが聞き取り調査で琉球大 学建設時期の遺構であることが 判明したので記録を取って除去。 城内に在った切石を擁壁として 用いている。石積みは布積みで 横目地がとおっている箇所も あった。昭和25(1950年)頃~。	N85°30'W	切石 79°	18~40 28~30 23~35	本遺構の下位からS A02の栗 石やSD04-Aなどの遺構が 検出された。S A03は造成土 の上に設置。
C・D-15 S D01 同図	5m00cm 1m80cm —	琉球大学校舎の基礎で岩盤を南 北方向に溝状に掘り下げる。昭 和25(1950年)頃~。	N24°45'E	— — —	— — —	S D02とほぼ平行に存在。
C・D-16 S D02 同図	4m39cm 1m95cm —	“”。一部造成土を掘り 下げている。 昭和25(1950年)頃~。	N19°15'E	— — —	— — —	S D01とほぼ平行に存在する。 S D01との距離は12m前後で あった。

## C. 土壌SK01 (S A19・S A20、S A28)

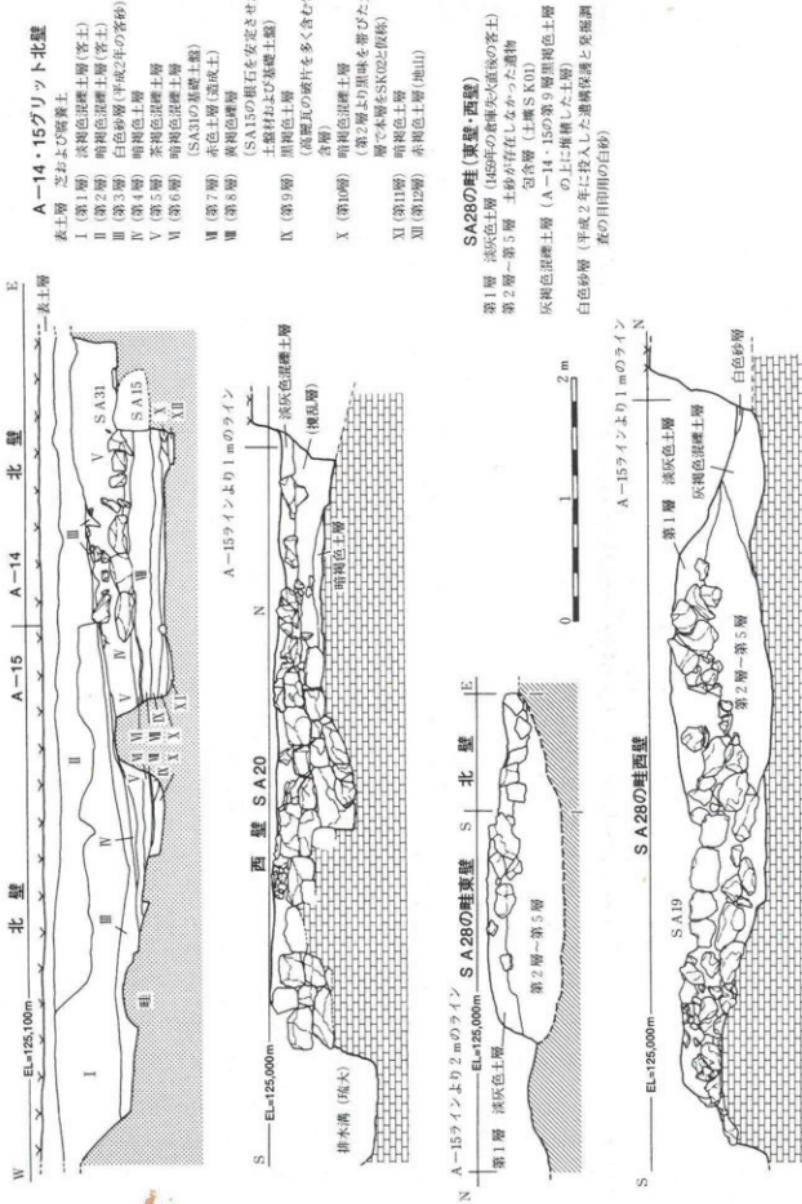
B-15グリッド内から検出された土壌SK01 (S A19・S A20、S A28)について述べることにする。土壌SK01はS A19・S A20、S A28の内部を完掘し終えた時点で北東寄りの壁面近くで新たなる土壌(S K02)が検出されてきたので区別する意味で仮称したものである。土壌SK01は発掘当初、石積みの面石が検出された段階で石積みS A19・S A20、S A28として名付けた。三の遺構がどのように展開するか予想ができなかつたのでS A28から南北方向に80cm幅の土層観察用の畦を設定したが遺構の展開を注視しながら掘り下げ途中でS A28寄りの畦が造成土であることが判明したので畦を残した状態で、下位にある遺物包含層直上の遺物を露出させる作業に入った。畦の北側は過去の調査の際に一部、白砂が敷かれていたので北側の一辺は三角形と直角形状となっている。以下、土壌SK01 (S A19・S A20、S A28)の層序と遺構について概略を記すことにする。

## 1. 層 序

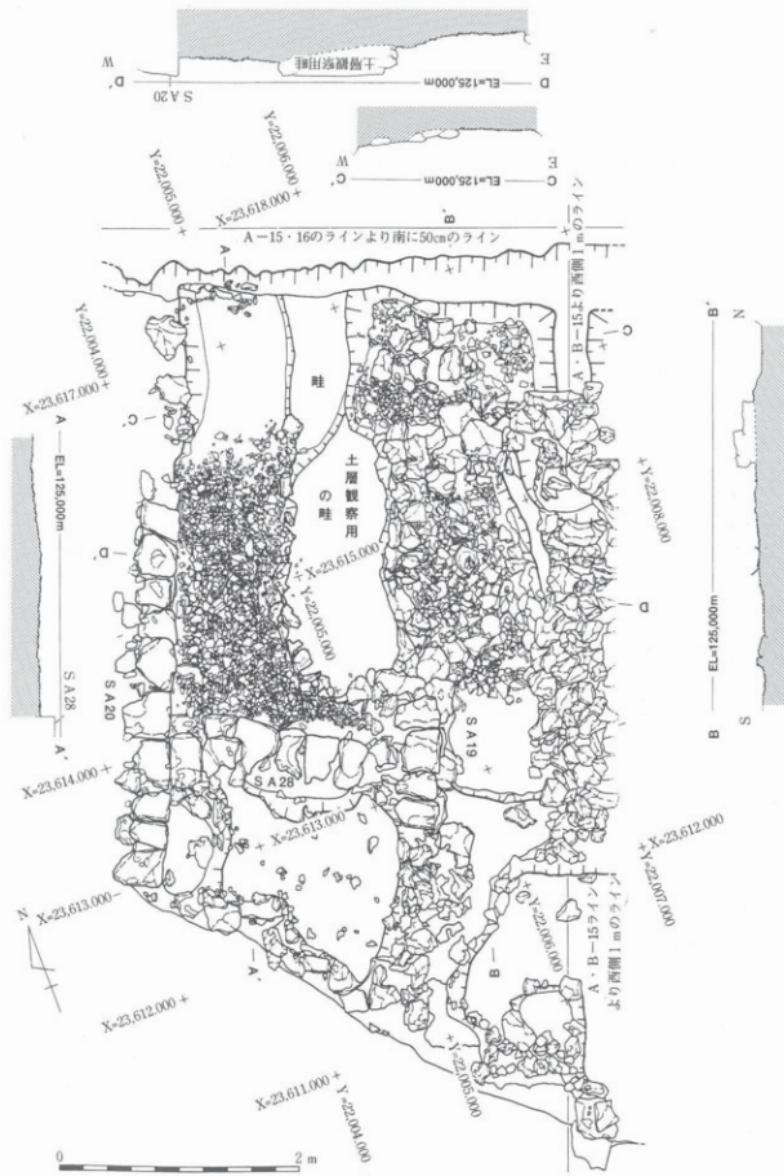
層序については、土壌S A01 (S A19・S A20、S A28)の北側1m程度にある東西方向に存在する調査区B-15グリッドの北壁と土壌SK01内に設定したS A28から北方向に幅80cm、長さ3m40cmで設けた観察用の畦について以下に記す。

## ① 北 壁 (第17図)

B-15グリッドで北壁土層の第1層から第3層は平成元年度と平成2年度に調査を実施した際に埋め戻した土砂と公園整備の使用した客土である。第3層は調査終了時点に投入した白砂であり、将来の発掘調査に備えて調査をスムーズに進行させる目的と下部にある遺構保護の為に目印として敷いたものである。第6層の暗褐色混疊土層を掘り込んだ石積みS A31は東側から延びてきて途中で切れている。石積みS A15の北西隅上部からS A31が延びてきているような状況にあった。第7層は赤色土で部分的に堆積した土層で厚さが2cm前後と薄い。持ち込みによる造成土の一部とみられる。第8層はS A15の石積みの下位にあり、石積みを安定させる目的で敷きならした土盤材の一種として考えられた黄褐色の疊層である。本層直下にある第9層は黒褐色土層で高麗系灰色瓦



第17図 層序 (A-14・15グリットト北壁とSA-28の壁)



第18図 B-15 土壌SK01 (SA19・20、SA28) 内の遺物検出状況

(高麗瓦)の破片が多量に出土した層であり、第9層より下位の層序は土壌SK02と仮称したものである。第9層直上よりSA15の根石が設置されていた。

## ② 畦(第17図)

図化した畦はSA28の中央付近に設定した幅80cm×長さ340cmで、上述した北壁にすり付けた。畦と北壁面とは畦北側が過去の調査の際に切ってしまったようであり、北壁と畦の層序は合致しなかった。しかしながら土壌内から出土した多量の遺物を露出させながら北壁近くまで追い掛けた結果、北壁の第9層中に含まれていた高麗系灰色瓦(高麗瓦)が灰褐色の混疊土層(造成土が部分的に入る間層)を挟んで、間層直下から北壁でみられた第9層に含まれた高麗系灰色瓦(高麗瓦)の破片が多く検出されてきたため、第9層よりも灰褐色の混疊土層や土壌SK01は後代のものであることが判明した。

畦は第1層が淡灰色土層で下部に石灰岩の小礫が集中し、大振りの石は畦上面からその一部が露出していた。淡灰色土層には僅かではあるが赤土が持ち込まれて敷かれている状況が窺え、造成土の一部であることが判明したのでそのまま下層にある土壌SK01内の遺物の検出(第18図)に入り遺物の扯がりを確認し掘り下げた。露出させた遺物の大半は二次的に火熱を受けた状況にあることが判明した。多量の遺物が含まれた包含層には土砂の堆積がなく遺物のみであった。発掘調査を慎重に実施する目的で僅かに遺物包含層に含まれた僅かに残った砂の色合いの変化を基に第2層から第5層までに分けたが完掘後に層を観察した結果、任意に分けた層は一枚の包含層であることが判明したので短期間に一括で廃棄された包含層であることが事実として確認できた。

## 2. 遺構

B-15グリットの土壌SK01(第19図)は完掘後に仮称したことについては前で記したとおりである。SA19は完掘の結果、SA28の側面の脇石石積みであることが判った。SA28は階段であり、階段は北方向に下るもので段数は三段を数えた。最下段の石積みは踏面長42cm、石積み高さ(蹴込み高)18cmと他よりも長い。二段目は踏面長14cm、蹴込み高13cmと最も規模であった。最上段は踏面長が30cm+X、蹴込み高23cmを測った。SA28が階段遺構であることが確認されたためSA19は階段東側の脇石であることが判断された。SA20はSA28の階段にすり付けられていて、北端と南端が破壊されている。SA20の外表面は火熱を受けて縁石が脆くなり、石内部に鱗が入り易い状況にあった。結論としてSA19・SA20・SA28の外表面から出土した多量の遺物から倉庫施設として判断された。SA19・SA28が階段であり、SA20が倉庫内部の西壁であったものとみられた。倉庫内部の床面の状況については、遺物が岩盤直上まで堆積していたため判らなかった。当該遺構の規模や主軸方向などについては第Ⅲ期遺構観察一覧に呈示してある。

## 小 結

平成6年度の首里城京の内跡の発掘調査で検出された遺構の分類整理をとおして今後の発掘調査や資料整理、あるいは復元修復工事に役立てる目的で暫定はあるが、以下に呈示することにした。

各遺構の周辺トレーナー内から出土した陶磁器類の分類や整理を経ていないが試案として第Ⅰ期～第Ⅴ期までの石積み遺構や建物跡などの配置状況を各期別に記すが将来の陶磁器類の整理などが進行すれば時期の入れ替えや追加は必然的に発生するものであろう。なお、首里城の復元整備と関係のない第Ⅵ期は除外することにした。

### 第Ⅰ期(14世紀前半～14世紀後半)

Ⓐ 野面石積み SA24 1基

Ⓑ 土壌 SK01 1基

### 第Ⅱ期(14世紀終末～15世紀前半)

Ⓐ 基壇状建物の縁石 SA01 1基

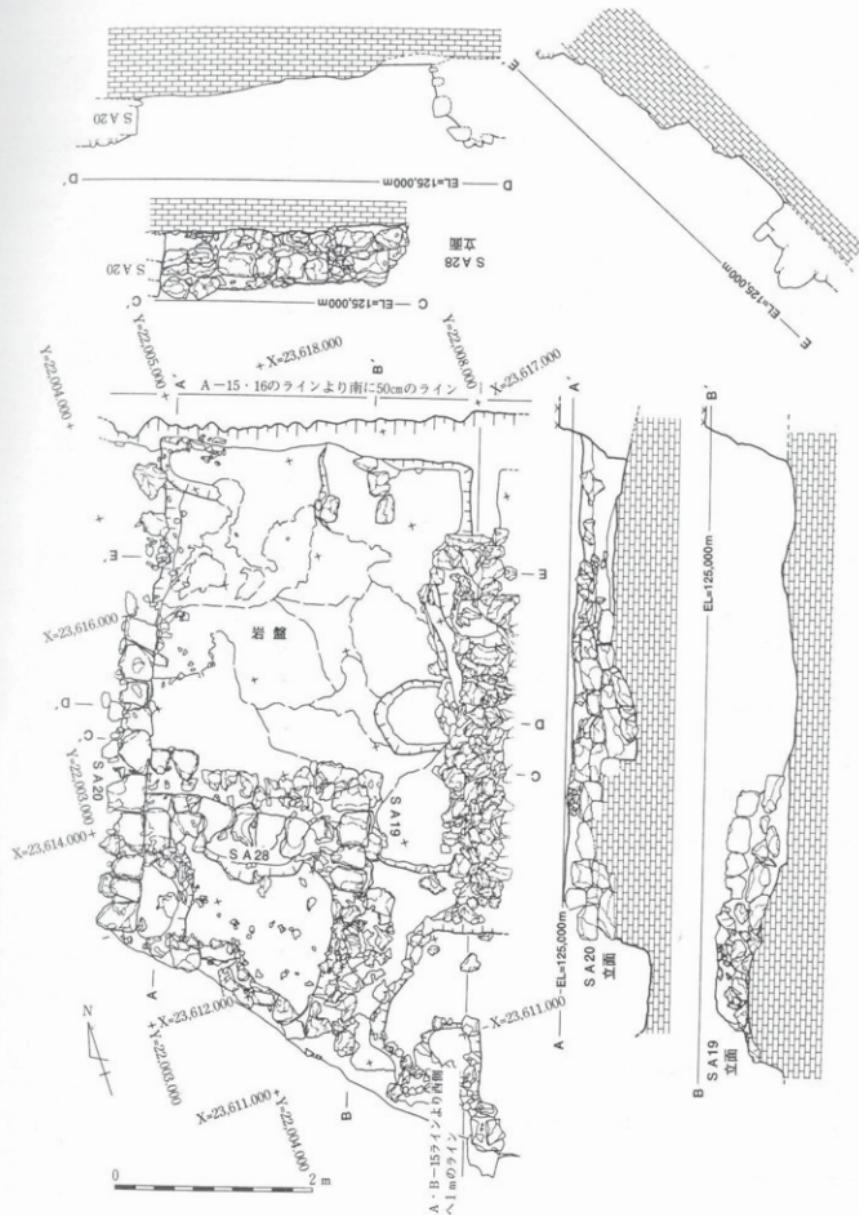
Ⓑ 切石積み SA05 1基…第Ⅴ期まで存続か。

Ⓒ 土壌 SK02 1基

### 第Ⅲ期(15世紀中頃)

Ⓐ 南北方向の石積み

・ SA08(外側)とSA10(内側) 1基



第19図 B-15 土壤SK01 (SA19・20、SA28) の完掘後の石積み立面及び断面

- ・ S D04-A (外面) ・ S A32 (外面) と S A18-A (内面) 1基…第V期まで存続。
- ・ S A34 (内面) 1基
- ⑧東西方向の石積み
  - ・ S A17 ・ S A18-B ・ S A25-A (全て一連の石積みで外面のみ残存) 1基…第V期まで存続か。
  - ⑤押所石積み S A05 (外面) 1基…第V期まで存続か。
  - ⑦倉庫 S K01 (S A19 ・ S A20 ・ S A28) 1基…第II期頃から使用か。
  - ⑨土壤 S K02 1基…第II期まで遡る。

#### 第IV期 (15世紀後半~16世紀初頭)

- ⑧南北方向の石積み
  - ・ S A07 (外面) と S A12 (内面) 1基
  - ・ S A15 (両面) 1基
  - ・ S A30 (外面のみ残存) 1基
- ⑧東西方向の石積み
  - ・ S A04 (外面) 1基
  - ・ S A14 (外面) 1基
  - ・ S A35 (外面) 1基

⑤排水溝 S S01 ・ S S02 ・ S S03-B ・ S S04 ・ S R02 (一連の施設) 1基…第V期まで存続か。

#### 第V期 (16世紀~19世紀後半)

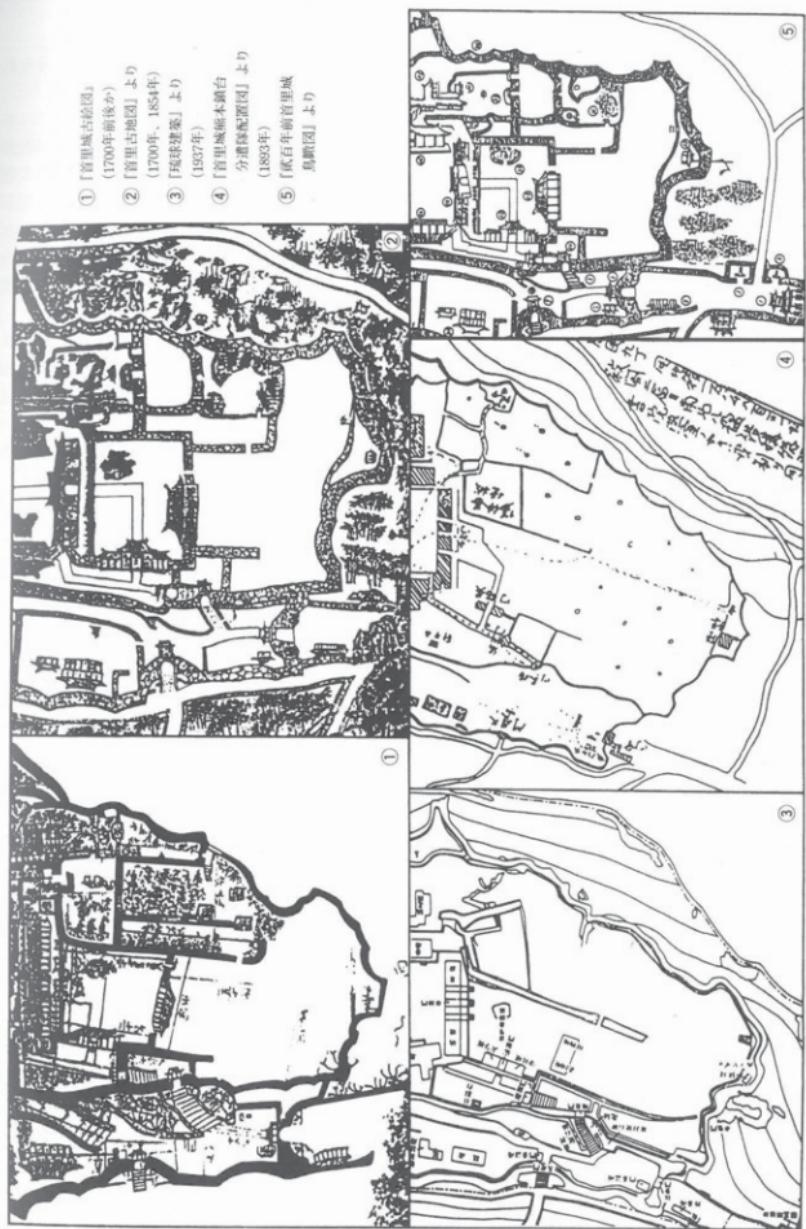
- ⑧南北方向の石積み
  - ・ S A11 (内面) と S A13 (内面) 1基
  - ・ S A31 (内面のみ残存) 1基
  - ・ S A32 (内面のみ残存) 1基
- ⑧東西方向
  - ・ S A06 (外面) ・ S A10 (内面) 1基
  - ・ S A27 (外面のみ残存) 1基
- ⑤石積み裏込目 S A23 (両面欠落) 1基
- ⑤排水溝 S D06-A 1基
- ⑤壇敷き S S05 1基

以上のように第I期から第V期について示したが第VI期前半に位置する時期の古絵図資料から興味深い状況が読み取れた。これは明治26年(1893)に描かれた第5図の「首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」(註1)に第III期(15世紀中頃)の石積み S D04-A ・ S A32 (外面)、S A18-A (内面) が第IV期の石積み S A07 (外面)、S A12 (内面) の二基の内のいずれかが描かれている。切り合い関係や残存状況などから判断するとすれば第IV期の S A07 ・ S A12 の石積みが第III期石積みの S D04-A ・ S A32、S A18-A の上位に位置するようであり、第IV期の石積みが「首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」に描かれたことが可能性として考えられるところである。その他に上記、分遣隊配置図の中から第III期の石積み S A17、S A18-B、S A25-A の一連の遺構は描かれてない点から明治26年以前に石積みが撤去され、一部が造成土で埋められたものとみられる。

次に昭和8年頃(1933)に阪谷良之進が編集した第7図の「旧首里城図」(註2)に描かれた図面と発掘調査区の遺構図を比較してみると京の内跡から検出された遺構の大半が石積みの撤去に伴う造成土で整地されて確認ができない。唯一、第IV期の石積み S A04 (外面) の石積みの本体が描かれているようである。S A04の本体となる石積みは分遣隊配置図にも描かれている。昭和8年以前の首里第一尋常高等小学校校舎等の工事の際に京の内地域まで造成によって整地がなされたようである。

上記した資料も一部採用しながら現存する古絵図資料を集め、京の内空間の変遷図(第20図)を作成してみることにした。その結果、第20図②と同図⑤の図を比較してみると石積みや城壁などが同じ形で描かれていて、

第20図 首里城 京の内空間の変遷（絵図については一部修正した）



同図②が原図として判断された。同図⑤は同図②を後代になって石積みや城壁を模写・複製したものとみられる。同図②・⑤と京の内跡が検出された遺構との照合は困難であった。

同図①の「首里城古絵図」は往時の測量技術で描かれた縄張り図そのものと判断され、ある程度の誤差はあるが、京の内跡から検出された遺構の配置などを検討する上で重要な古絵図とみられる。同図①の古絵図と京の内跡から検出された遺構で符号あるいはその可能性のある遺構として南北方向に走る石積みは第Ⅳ期～第Ⅴ期まで存続した石積み S A07 と S A12 の本体石積みが描かれているものと考えられる。その他に東西方向に延びる石積みのひとつは第Ⅲ期～第Ⅴ期まで存続した S A17・S A18-B・S A25-A の一連の石積みの本体石積みとみられるものが描かれているようである。また、第Ⅳ期～第Ⅴ期の建物に付属する石敷き S S01・S S02・S S03-B・S S04 や建物の縁石 S R02 の一連の施設と関係する建物や第Ⅴ期の博瓦敷き S S05 と関連があると思慮される建物が 2 棟描かれているものかと推察された。

古絵図資料と京の内跡から検出された遺構との照合をとおして 1700 年前後～1937 年頃の期間において描かれた同図①～⑤の古絵図資料からも京の内空間の中で石積みの変更などが実施されていることが窺えるようである。1700 年前後～1937 年頃の時期は京の内跡の遺構分類編年（暫定）第Ⅴ期から第Ⅵ期前半に該当する時期で聖域である京の内において何等かの理由で石積みや拝所である御嶽の位置も変更がなされたものとみられる。

次に京の内跡の遺構の変遷を検討すると石積みの変更是第Ⅲ期～第Ⅴ期の長期間（約 400 年）において位置変更が顕著に認められる。特に B・C-12・13 グリット内においては石積みの積み代えによる位置変更が著しく、東西方向に延びる石積みとして第Ⅲ期石積み S A06（外側）・S A08（外側）の 2 基、第Ⅴ期石積み S A06（外側）と S A10（内側）の 1 基の計 3 基（第Ⅳ期の S A14 は第Ⅲ期の S A06 とは 17 世紀頃にすりつけられている）が存在する。南北方向に延びる石積みとしては第Ⅲ期～第Ⅴ期（？）石積み S D04-A・S A32（いずれも外側）と S A18-A（内側）の 1 基、第Ⅳ期石積み S A07（外側）・S A12（内側）の 1 基、第Ⅴ期石積み S A11（内側）・S A13（内側）の 1 基、以上 3 基が切り合い関係をもちながら各時期の石積み遺構の集中地域となって検出されている。他の S A01 や S D06-A なども含めると重層化の様相を呈し複雑な切り合いとなる。B・C-12・13 グリット内の遺構集中地域は聖域・祭祀の空間である京の内地域で第Ⅲ期～第Ⅴ期までの石積みを南北方向に区切る際において各時間で石積みの方向性や配置で重要な地域であったものとして考慮される。特に第Ⅲ期の S A06・S A08 や第Ⅴ期の S A10 の東西方向に延びる石積みにすりつけられた第Ⅲ期の S D04-A は作事・普請する際に最も固執した場所のひとつとして考えられるようである。

ところで「京の内」が聖域・祭祀の空間として本格的に整備されてきた時期を考えた場合、現段階では第Ⅱ期後半（15世紀前半）～第Ⅲ期（15世紀中頃）が発掘調査の成果から今のところ予想されるようである。

B-15 グリットの土壌 S K01（S A19・S A20・S A28）の遺構は倉庫として判断したわけであるが、倉庫施設の西側の石積みである S A20 と南側の階段および脇石積みである S A19・S A28 は一部分しか検出されていないことから実際の倉庫の規模は不明である（倉庫北側は S A20 の石積みが切れていた）。東側は栗石が集中し確認のために S A15 西側から B-15 グリットの北側に逆「L」字状のトレンチを設けて倉庫の東側石積みの検出作業に着手したが確認ができなかった。

#### 註

註 1. 沖縄県史編集室所蔵 「首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」 1893 年。

註 2. 阪谷良之進 編集 「旧首里城図」 沖縄県立図書館所蔵 1933 年。

## 第V章 出土遺物

土壤 S K01 (S A19・S A20、S A28) 内より出土した遺物の種類などについて産地別に以下に記することにする。最も多く出土したのは、中国製品で青磁(碗、皿、盤、壺、大瓶、大鉢、馬上杯、水注、瓶、花盆台、香炉、小品の12器種)、青花(碗、杯、鉢、皿、盤、瓶、壺、馬上杯、大合子の9器種)、色絵(碗・皿の2器種)、紅釉(水注)、珊瑚釉(水注)、褐釉陶器(壺、鉢、水注の3器種)の7種類が出土している。

ベトナム製品では、青花(碗、盤、壺、瓶、水注の5器種)のみが確認されている。タイの製品では、半練土器(蓋と身)、褐釉陶器(壺)の2種類が出土している。朝鮮の高麗青磁などは出土していないのが残念であった。本土産の資料としては、備前焼の擂鉢、大甕、壺の3器種の他に武具関係の兜鉢、鎌形、龍手などが出土している。県内産としては、円盤状の蓋(土製品と瓦製品があり、第1節タイの半練土器の項で記述)、朱漆の塗膜、瓦が出土している。他に青銅製品の鼎形香炉の把手と口縁破片、鉄製品の錠や釘、ガラス製小玉などが出土している。

今回の報告では、土壤 S K01内から多量に出土した陶器を中心記述することにした。他の青銅製品、鉄製品等については、次回の報告に委ねることとした。出土遺物の報告で、元青花と瓦については土壤 S K01と周辺の遺構から出土したものも収録した。また、黒釉陶器(天目茶碗と茶入れ)、瓦類についても報告することにする。土壤 S K01内から出土した遺物の総数は、第10表に示した。

### 第1節 タイ産半練土器

土壤 S K01 (S A19・S A20、S A28) 内からタイの半練(土器)の蓋と身が出土している。半練の推定個体数は蓋の撮や端部の破片などから検討した結果、67個体が推定された。その内訳としては蓋は63個体、身が4個体であった。身は量的にも蓋と比較して極端に少ないと窺えるなどの状況から半練の蓋は土壤 S K01内より大量に出土したタイの大型褐釉陶器四耳壺に付属するものであることが推察されるところである。タイの半練とタイの大型褐釉陶器四耳壺の関係については既に金武正紀氏によって次のような見解が示されている「歴代宝案に記録されている香花酒をタイの大型褐釉陶器四耳壺に入れ、半練(土器)で蓋をしてタイ国から琉球国に持ちこまれた」(註1)。金武氏の見解は土壤 S K01内出土のタイの半練とタイの大型褐釉陶器四耳壺の出土量などからも両者(褐釉壺と半練の蓋)の関係は密接であり、金武氏の見解を見事に立証した資料として解釈がなされるところであろう。改めて金武氏の研究を高く評価できるのではないかだろうか。

さて半練の蓋の資料で63個体中1個体は被せ蓋であり、他の62個体は落し蓋であった。落し蓋62個体については蓋端部の形態などが豊富

第10表 遺物出土状況

遺物名	出土地	SK01 (SA19-20) SA28	その他 (グリコ ト)と遺構	合計	SK01 推定 個体数
落し蓋		62		62	62
被せ蓋		1		1	1
蓋		4		4	4
その他の蓋		17		17	17
小計		84	0	84	84
柄		202		202	202
皿		268		268	268
盤		103		103	103
壺	身	13		13	13
蓋	蓋	3(34)		3(34)	3
大甕		2		2	2
大鉢		4	1	5	4
馬上杯		2		2	2
水注		3		3	3
瓶		6		6	6
花盆台		1		1	1
香炉		1		1	1
小品		1		1	1
小計		609(4)	1	610(4)	609
盤		5		5	5
蓋		2		2	2
皿		1		1	1
柄	身	1		1	1
蓋	蓋	1		1	1
大甕		1		1	1
小計		2	8	10	2
研		87		87	87
柄		4		4	4
鉢		1		1	1
皿		4		4	4
盤		1		1	1
壺		10		10	10
蓋		3		3	3
小型蓋		2		2	2
大型壺	身	1		1	1
蓋	蓋	1		1	1
小計		114	0	114	114
壺		28		28	28
蓋		30		30	30
柄		4		4	4
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
蓋		11		11	11
小計		75	0	75	75
色絵		3	1	4	3
皿		1		1	1
柄		1		1	1
蓋		1		1	1
水注		1		1	1
壺	身	3		3	3
蓋	蓋	1		1	1
水注・壺	身	1		1	1
壺	蓋	1		1	1
小計		178	0	178	178
大型		129		129	129
壺	中型	14		14	14
蓋	小型	24		24	24
柄		4		4	4
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
蓋		1		1	1
特殊蓋		1		1	1
白釉	身	3		3	3
陶器	蓋	1		1	1
水注		1		1	1
小計		178	0	178	178
研		4		4	4
盤		2		2	2
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	1
蓋		1		1	1
柄		1		1	1
鉢		1		1	1
皿		1		1	1
盤		1		1	1
壺		1		1	

であるため、これについては具体的に分類を試みることにした。

身については有文と無文の二種類が存在し、前者が3個体、後者は1個体分が出土している。器形を窺い知ることのできた資料は無文蓋の資料のみであった。被せ蓋と身の資料については出土個体数の関係や細片であったため分類を実施しなかった。本節では落し蓋の分類概念などについて頁を割くことにする。また、個々の特徴などについては第12表に表わすこととする。なお、蓋の撮分類のⒶ～Ⓓは観察表でA～Dとして表現した。

#### A. 蓋

蓋の形態として落し蓋と被せ蓋の二種類が存在する。量的には落し蓋が62個、被せ蓋が1個の計63個であった。以下、落し蓋と被せ蓋に分けて記することにする。

##### 1. 落し蓋

落し蓋の撮の形態と蓋端部の仕上げ方などについて分類を試みることにした。また両者の相関関係については第11表に示した。

蓋の撮の分類に際しては金武正紀氏分類の「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」(註1)を基本にした。金武氏分類はⒶ～Ⓓの三種類に分けられているが、破片資料も若干出土しているため、これを処理する目的でⒺを設けることにした。以下、金武分類のⒶからⒹと今回、追加分類したⒺについて記することにする。

- |      |   |
|------|---|
| 金武分類 | <p>Ⓐ宝珠形（第21図1～同図9の9点が該当する）。</p> <p>Ⓑ漫頭形（第21図10～同図12の3点が該当する）。</p> <p>Ⓒ乳頭形（未検出）。</p> |
|------|---|

追加………Ⓔ撮欠落（第21図13から同図17の5点が該当する）。

蓋端部は成形や形態などからI類からⅧ類までの8種類に分類し、この中でも細分可能なものについてはa・bの2種類に分けた。

##### I類

本類は端部を折り曲げ、折り曲げた先端部の仕上げ方でa種（13個体）とb種（10個体）の二種類に分けた。a種…蓋端部を折り曲げ、折り曲げた先端部をつまみ上げたもの（第21図1～4）。

b種…蓋端部を折り曲げ、折り曲げた先端部を丁寧に仕上げ断面が三角形状を呈するもの（第21図13）。

##### II類

II類は端部の折り曲げが丁寧で、折り曲げの痕跡は主に劈開面からしか確認できない。折り曲げの断面はI類a種と同様に三角形状の突起となる。突起内面の幅で分類が可能であることが判断されたので内面の幅でa種（5個体）とb種（6個体）の二種類に細分した。

a種…端部の断面が三角形状となる突起を有し、突起内面の幅が5.9mm～6.5mmの範囲内にあるもの（第21図5・6と第12表参照）。

b種…端部の断面形態はa種と同じ三角形状の突起である。突起内面の幅は4.2mm～5.1mmの範囲内に納まるもの（第21図7と第12表参照）。

##### III類

端部の折り曲げが目立たないように折り曲げ、折り曲げの先端部のつまみ出しは弱く断面が隅丸三角形状の突起となるもの（第21図8・9と第12表参照）。推定個体数7個体。

##### IV類

端部のみが資料として得られている。III類と同様に折り曲げが目立たないが先端部の断面はIII類よりも大きな突起をつくる。三角形状の断面は鋭角で大きく、突起外側から外方向に幅のある沈線を廻らすものである（第21図14と第12表参照）。推定個体数3個体。

##### V類

端部のみが検出。端部を折り曲げたままで仕上げとするものである（第21図15と第12表参照）。推定個体数3

個体。

#### V類

端部は丸味のある状態で折り曲げたままで成形し、端部近くに丸彫りの沈線を浅く施すものである(第21図10・16と第12表参照)。推定個体数2個体。

#### VI類

端部のみが検出。端部を折り曲げて玉縁状に成形するものである(第21図17)。推定個体数1個体。

#### VII類

環類は端部の欠落した撮の資料や端部の折り曲げた箇所が破損した資料である(第21図11と第12表のみ表示)。推定個体数12個体。

#### 2. 被せ蓋

第22図18に示した資料で1点のみ検出されている。蓋端部の成形や形態などから判断して被せ蓋として取り扱った。糸数城跡(註2)の例では陶磁器の酒会壺の蓋を模倣したものが1点のみ得られている。今回出土した資料も青磁類の蓋をタイ国内で模倣したものが持ち込まれてきたようである。

#### B. 身

唯一、器形を窺うことができたのは無文の資料のみであった。無文資料は壺形であり口径が9.8cmと推算された(第22図19)。有文資料はすべて胴部の破片で我謝遺跡(註3)の例や博多遺跡群(註4)の例などから浅鉢や壺の破片とみられる。ここでは壺の破片として仮に分類し報告することにする(第22図20・21・22)。

#### C. その他の蓋

本製品は、撮のない落し蓋や被せ蓋として考えられた資料である。推定個体数は17個体であった。蓋の平面観で円形状となるものと方形状となるもののが存在し、前者は16点、後者が1点である。産地別に①・②の二つに分けた。

①タイ産?の蓋1点(第22図23)、②沖縄産の蓋15点(同図24~27を図化)であった。②の沖縄産の諸特徴を記すと蓋上面は縁際までナデ、範ナデ(範ナデを含む)、範削り、擦痕を用いて平坦に成形する。蓋下面の縁は丸味のある角をつくってナデを主に調整するが雑である。器面に擦痕が認められた例は15点中10点と多く、中には薺や粗穀を胎土に混入させたものもあった。蓋の最小と最大の直径は15cmと24cmであった。

平均直径は9点で19.4cmを求めた。色調は黄褐色、黄白色、茶褐色、橙白色、白色、灰色の6色があり、素地などから瓦質土器(14点)と瓦質(1点)が確認された。

#### 註

註1. 金武正紀「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』第11号 日本貿易陶磁研究会 1991年。

註2. 金城亀信「グスク出土の“その他の土器”・“移入系土器”について」『文化課紀要』第7号 沖縄県教育委員会 1991年。

註3. 大城慧・金城亀信ほか『我謝遺跡』西原町教育委員会 1983年。

註4. 有島美江「博多出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』第11号 日本貿易陶磁研究会 1991年。

第11表 タイ産半線土器落し蓋の撮と蓋端部の相関関係一覧

蓋端部の 形態	I 類		II 類		III 類		IV 類		V 類		VI 類		VII 類		VIII 類		
	a 種	b 種	a 種	b 種	4.2-5.1mm	5.9-6.5mm											
① 	4		2	1	2												計 
② 																	
③ 																	0
④ 摂欠落	9 (11)	10 (11)	3 ( 5 )	5 ( 6 )	5 ( 7 )	3 ( 4 )	3 ( 2 )	1 ( 1 )	1								42 (47)
	13 (11)	10 (11)	5 ( 5 )	6 ( 6 )	7 ( 7 )	3 ( 4 )	3 ( 2 )	2 ( 1 )	1								
計†		23 (22)		11 (11)													62 (47)

注 実数は推定個体数、( ) 内数字は破片点数。

第12表 タイ産半練土器観察一覧

( ) : 推定

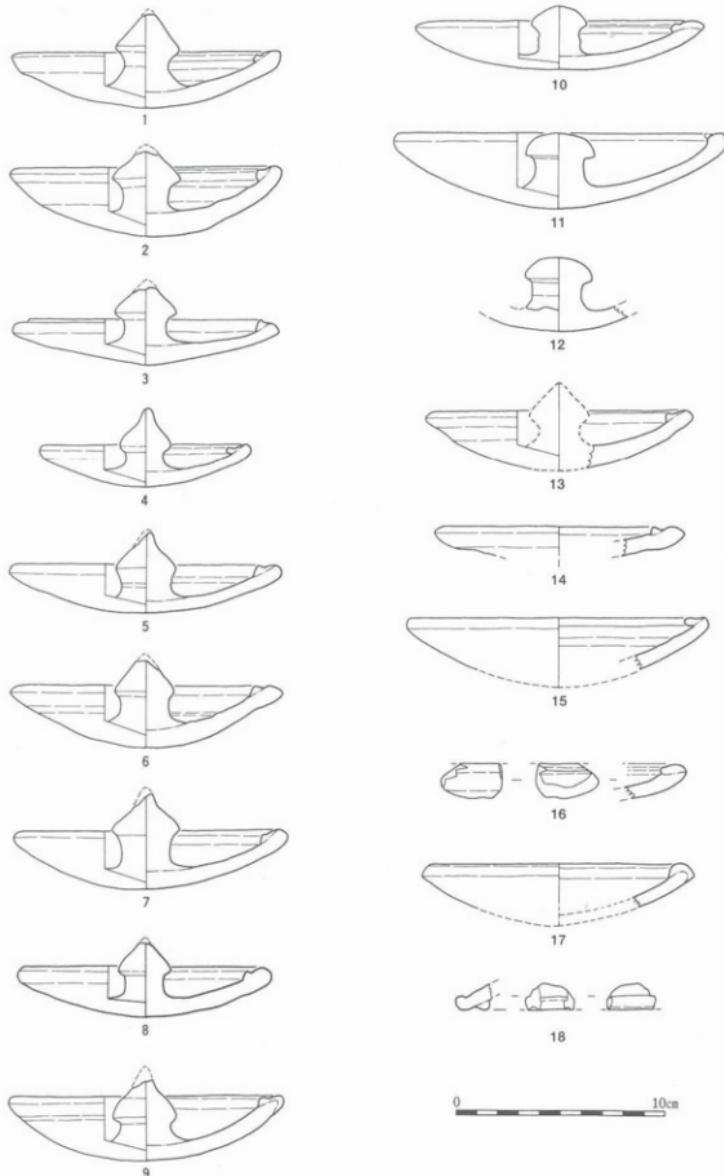
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	撮分類 端部分類	端部径 高さ(cm)	成形・器面調整・器色・焼成・胎土・混入物など	出土地点 出土層
第21図 図版6 1	タ タ 2	A・I a	13.0 (4.8)	端部を折り曲げ、折り曲げた先端部をつまみ出して断面が方形状の突起を雜につくる。先端近くに丸彫り(幅2.7~3.1mm)の沈線で囲繞する。撮のある蓋甲は擦痕が顕著にみられる。裏面中央には範削りが集中する。器色は黄橙色を帯びる。焼成は堅緻。胎土は細かい石英?と茶色の鉱物を多量に混入する。劈開面の色調は黄灰色である。	S A19 第2層
			13.2 (4.3)	タ タ 2 。折り曲げの先端近くに丸彫り(幅3.4mm前後)で沈線を廻らす。蓋甲に煤が部分的に付着する。甲面には擦痕が観察される。裏面中央に範削りが集中する。裏面にも煤が一部分に付着する。器色は黄橙色。焼成は堅緻。胎土は細かいが粗い石英?と茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。希に赤茶色の焼土?の粒が混入。劈開面の芯部は灰白色を帯びる。	S A19 - 20 第2層
			12.8 (4.1)	タ タ 3 。折り曲げの先端近くに丸彫りの沈線(幅6mm)を廻らす。蓋甲は器面の保持が悪く部分的な擦痕がみられる。裏面中央に範削りが集中する。器色は黄橙色。焼成は良い硬い。胎土は細かいが粗い石英?と茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。希に赤茶色の焼土?の粒が混入する。劈開面は橙白色を帯びる。	S A20 第2層
	タ タ 4	A・I a	10.2 (3.8)	タ タ 4 。折り曲げの先端近くに丸彫りの沈線(幅7.1mm)を廻らす。蓋甲は擦痕、裏面中央に範削りが観察される。器色は明茶色を帯びる。焼成は良く硬い。胎土は細かいが粗い石英?と茶黒色の鉱物、赤茶色の焼土?の粒が多量に含まれている。	S A19 - 20 哇 第2層
			13.2 (3.9)	タ タ 5 し。端部を折り曲げ、折り曲げた先端部をつまみ出して断面が三角形となる突起を丁寧につくる。突起の外側に削りを軽く加えている。蓋甲は丁寧に調整された擦痕が全体的にみられる。裏面中央に範削りが集中する。器色は灰白色。焼成は堅緻。胎土は細かいが粗い石英?と灰褐色の鉱物が多量に混入する。劈開面は淡灰色。	S A20 第3層
	タ タ 6	A・II a	13.2 (4.5)	タ タ 6 。断面が三角形状となる突起外側には丸彫りの沈線(幅5mm前後)を廻らす。蓋甲は器面の保持が悪く横走する指圧痕が顕著に認められる。撮周辺に煤が付着する。裏面中央に範削りが集中する。器色は灰色。焼成は良く硬い。胎土は細かい。細かい石英?と灰黒色の鉱物を多量に混入する。劈開面は灰白色。	S A20 第2層 S A19 - 20 哇 第2層
			13.4 (4.8)	タ タ 7 蓋。断面が三角形状となる小突起は外面のみに削りを浅く加えて成形する。蓋甲は丁寧な擦痕で仕上げる。裏面中央に範削りが集中する。器色は淡橙色。胎土は細かいが粗い石英?を多量に混入する。僅かではあるが細かい赤茶色の焼土?が含まれている。焼成は堅緻。	S A19 第2層 S A19 第3層
	タ タ 8	A・III	12.2 (3.8)	タ タ 8 。端部を折り曲げ、折り曲げた先端部のつまみ出しが弱く断面が隅丸三角形状の突起を雜につくる。三角形状の突起外面は丸彫りの沈線(幅2.2mm)を施す。火熱で溶けた青銅が両面の一部に付着する。蓋甲に僅かながら擦痕がみられる。裏面中央の範削りも僅かながら観察できる。器色は火熱で変色し暗灰色となる。本来の色合いは橙茶色か。焼成は良く硬い。胎土は細かい。細かい石英?を多量に含んでいる。僅かではあるが灰黒色の鉱物が混入する。劈開面は淡灰色を帯びる。	S A19 第2層
			13.4 (4.5)	タ タ 9 。突起の外側は削りが加えられ平坦な面となる。蓋甲に乳白色の石灰?が付着し調整は判らない。撮の一部にも石灰?が付着。撮は擦痕で丁寧に調整される。裏面中央に範削りが集中する。器色は暗褐色。焼成は堅緻。胎土は細かい。細かい石英?と粗い茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。劈開面は橙褐色。	S A19 - 20 哇 第2層 B-16旧 琉大の排水マス内 堆積土

第12表 タイ産半練土器観察一覧

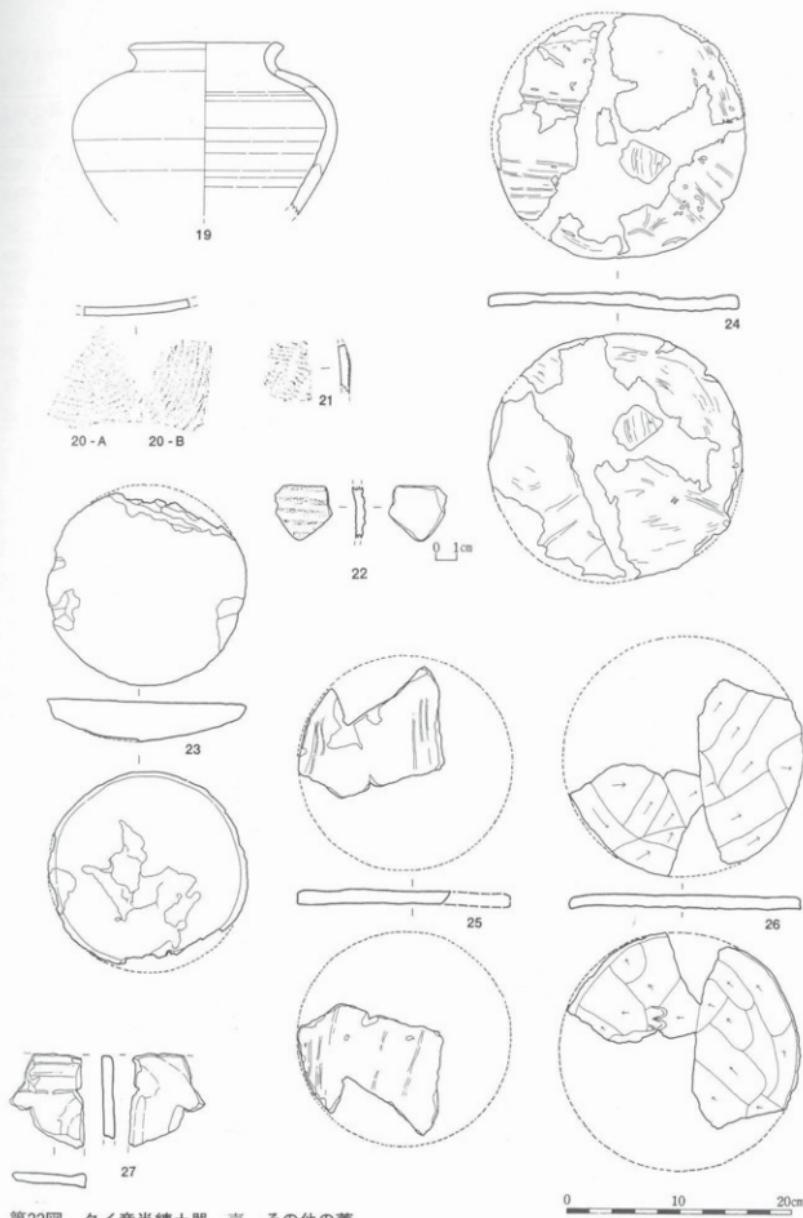
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 ・仮称	撮 分 類 端部部分類	端部径 高さ(cm)	成形・器面調整・器色・焼成・胎土・混入物など	出土地点 出土層
第21図 図版7 10	B・VI	13.8 3.0	端部を折り曲げ、そのまま先端に丸みを持たせて成形する。丸味のある先端近くに丸彫りの沈線(幅1.7mm)を閉縫させる。蓋甲の一部に擦痕がみられる。裏面中央は範削りとナデがみられる。器色は明茶色。胎土は細かい。細かい石英?や灰黒色鉱物を多量に含んでいる。劈開面の芯部は暗褐色。	S A19 第2層	
タ タ 11	B・VII	16.0 3.6	端部を欠落する。蓋甲内は丁寧に仕上げられ擦痕がみられる。裏面は中央に範削りが集中する。蓋甲は器色が暗褐色で裏面が淡橙色を帯びる。焼成は堅緻。胎土は細かい。細かい石英?を多量に含む。僅かに茶褐色の細かい鉱物や粗い赤茶色の焼土?が混入する。劈開面の芯部は灰褐色。	S A19・ 20畦 第2層	
タ タ 12	B・-	— 3.4	鏡頭形の撮のみが残存。蓋甲と撮は擦痕と指ナデで調整。裏面の中央は範削りとナデがみられる。器色は淡橙色。焼成は堅緻。胎土は細かい。粗い石英?を主体に多く含んでいる。希に粗い灰黒色の鉱物が混入している。劈開面の芯部は黄白色。	S A19・ 20畦 第2層	
タ タ 13	D・I b し	12.8 —	撮を欠く。端部を折り曲げ、折り曲げた先端部を丁寧に仕上げる。端部の断面が三角形状を呈する。三角形状の突起外面は丸彫りの工具で沈線(幅4.7mm)を廻らす。蓋甲に擦痕がみられる。裏面は範削りを擦痕でナデ消している。器色は明茶色を基調とするが全体的に灰色味を帯びる。端部の一部分には火熱で溶けた鉄が付着する。焼成は堅緻。胎土は細かい。細かい石英?が多量に含まれる。希に灰黒色の鉱物が混入する。劈開面は明橙色。	S A20 第3層	
タ タ 14	D・IV	12.0 —	端部のみが残存。端部は折り曲げて、端部先端部を丁寧に仕上げる。端部先端の突起は断面が三角形状となる。三角形状の突起の外面は片切り彫り様の沈線(幅5.4mm)が浅く廻っている。器面の調整は器面が剥離して判らない。器色は橙白色。焼成は堅緻。胎土は細かい。細かい石英?や赤茶色の焼土?が多量に混入する。希に大粒の焼土?が含まれる。劈開面は灰白色。	S A19・ 20畦 第2層	
タ タ 15	D・V	— —	端部のみの破片。端部を折り曲げて端部上面を浅く窪ませた状態で成形が終了する。蓋甲は擦痕。裏面は擦痕を主体にその上から範削りを施す。器色は暗褐色。焼成は良く硬い。胎土は細かい。粗い石英?を多量に含む。希に黒色の鉱物を含んでいる。劈開面は灰褐色を帯びる。	S A19 第2層	
タ タ 16	D・VI	— —	端部の破片。丸味のある状態で端部を折り曲げて成形し、端部近くに丸彫りの沈線(幅2mm)を浅く施す。蓋甲は擦痕。裏面はナデ仕上げか。器色は暗褐色。焼成は堅緻。胎土は粗い。粗い石英?を多量に含む。僅かに粗い茶黒色の鉱物が混入する。劈開面は灰白色。	S A19 第1層	
タ タ 17	D・VII	13.0 —	端部を折り曲げて玉縁状に成形する。器面の大半が剥離する。蓋甲に擦痕が僅かに観察できる。器色は黄褐色。焼成は良好で硬い。胎土は細かい。粗い茶褐色の鉱物や粗い石英?を多量に混入する。劈開面は灰白色を帯びる。	S A19・ 20畦 第1層	
タ タ 18	被 せ 蓋	— —	小さな鈎をつくる。身を受けるために断面三角形状の突起は折り曲げて成形されている。三角形状の突起の外側は若干、削りを加えられている。両面ともナデを主体に丁寧に調整している。器色は暗灰色。焼成は良好で硬く胎土は細かい。細かい石英?を多量に含んでいる。僅ながら茶褐色や灰褐色の鉱物を含んでいる。劈開面は淡灰色を帯びる。	S A20 第3層	
第22図 タ 19	壺 無文壺	口径 9.8	口縁をゆるく外反させる壺。口縁外端を尖らせて成形する。外器面の大部分は剥落するが僅かに残った箇所には擦痕がみられる。内面の胴部には輪積み痕(回転台による)が頗著に観察される。器色は黄白色を基調とするが外面の大部分が火熱を受けて煤けている。焼成は堅緻。胎土は細かく、精粗のある石英?を多量に含んでいる。希に灰黒色の鉱物や茶色の物質が含まれている。劈開面は灰白色を帯びる。	S A19・ 20畦 第1層 第3層 S A28 第2層	

第12表 タイ産半練土器・その他の蓋観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	撮分類 端部部分類	端部径 高さ(cm)	成形・器面調整・器色・焼成・胎土・混入物など	出土地点 出土層
第22図 図版7 20-A	有文の 胴部	— —	— —	蓋の胴部片とみられる。外面に平行叩き文が施され、一部は叩きが交差して格子目状となる。内面の当て具痕は確認しにくいが、当て具によって脱落した陶土や混入物の抜け落ちた痕跡がみられる。器色は外面が黄褐色、内面は淡橙色を帯びる。焼成は良好で叩き締めによって非常に硬い。陶器質であり蓋よりも硬質である。胎土は細かいが粗い石英？を主体に茶褐色の鉱物を僅かに含んでいる。劈開面の芯部は灰白色を帯びている。	S A19・ 20畦 第4層
タ タ 20-B		— —	— —	蓋胴部の破片。上記20と同一個体とみられ、接合ができた。外面に平行叩き文。内面は微かな当て具痕。器色、焼成、胎土、混入物などの特徴は上記20-Aと同じ。	S A19・ 20畦 第1層
タ タ 21	蓋 有文の 胴部	— —	— —	蓋の胴部の細片とみられる。外面に鋸歯文（左）、二本の縦沈線（右寄り）、鋸歯文（右）をひとつの単位として叩きを施し、その直下に平行叩きがみられる。内面は当て具によって生じた浅い窪みが一・二箇所みられる。器色は黄白色。焼成は非常に硬く陶器質である。胎土は細かく、粗粒のある石英？を多く含んでいる。希に粗い茶褐色の鉱物が含まれている。劈開面は灰褐色を帯びる。	S A19・ 20 床面
タ タ 22		— —	— —	タ。外面に間隔のある、平行叩き文を施す。内面は綻割れによる剥離面。器色は灰褐色。焼成は非常に硬く陶器質。胎土は細かく砂っぽい。微細な石英？を多量に含む。劈開面は灰褐色を帯びる。胎土などからタイ以外の東南アジア産の可能性もある。	S A19・ 20畦 第1層
タ タ 23	蓋④	17.5 3.8	— —	蓋甲上面は平坦に成形され、器面が削落している。蓋下面は凸レンズ状に丸味を帯びていて、縁沿いは面取りされている。蓋下面是指ナデを主体とし、僅かに範ナデが観られる。器色は黄白色。焼成は良好で、硬い。胎土は細かく、粗い石英（0.7~1.8mm）を少量含んでいる。蓋甲上面に初期（長さ5.2mm×2.3mm）がみられる。	S A19・ 20畦 第2層
タ タ 24		22.0 厚さ 1.2	— —	上面は範削り、範ナデ、指ナデで調整。下面是範削り後に、指ナデを加えて調整。焼成は良く、硬い。胎土は細かい。粗い茶褐色の鉱物（磁化鉄？）が多く混入する。器面に多くの初期痕がみられる。初期のサイズは長さ6.6mm×幅1.9mmのものがあった。	S A19・ 20畦 第3層
タ タ 25	蓋⑤	19.0 厚さ 1.1	— —	上面は範削り、範ナデ、指ナデで平坦に成形される。下面是範削りが部分的にみられ、焼成は堅緻である。器色は黄白色。細かい石英や粗い砂粒などが僅かに含まれている。器面に僅かではあるが初期痕がみられる。	S A20 第2層
タ タ 26	蓋⑥	20.4 厚さ 1.2	— —	両面とも範削りを指ナデで消すが徹底していない。器色は橙白色。焼成は良く、硬い。胎土は細かい。細かい石英と茶褐色の物質が僅かに含まれている。	S A20 第2層
タ ー 27	蓋⑦	— 厚さ 0.9~ 1.3	— —	上面面は指ナデと指圧で難に成形する。右側面は平坦に範削りを加えた後に指ナデで軽く調整する。上面は範削り後にナデを加えるが消えきっていない。下面是ナデ仕上げである。焼成は堅緻である。器色は黄白色。細かい石英が僅かに含まれている。	S A19 第2層



第21図 タイ産半練土器 蓋



第22図 タイ産半練土器 壺、その他の蓋

## 第2節 青磁

土壤SK01(SA19・SA20、SA28)内から出土した青磁の器種として碗・皿・盤・壺・瓶(花瓶)・馬上杯・花盆台などの器種が確認されている。以下、碗・皿・盤などの順に分類概念などを記すことにする。土壤SK01内より出土した青磁の量は第13表に示すとおりである。

### A. 青磁碗

土壤SK01(SA19・SA20、SA28)内より出土した青磁碗には蓮弁文碗(37個体)、ラマ式蓮弁文碗(10個体)、雷文帶碗(98個体)、無文口緣碗(60個体)の4種類が確認されている。青磁碗の総個体数は202個体である。その内訳などについては各種碗ごとに述べてあるので参照されたい。

以下、蓮弁文碗、ラマ式蓮弁文碗、雷文帶碗、無文口緣碗について分類概念などについて述べることにする。

#### 1. 蓮弁文碗

土壤SK01(SA19・SA20、SA28)内から出土した蓮弁文碗は、大きく分けて無鏽蓮弁文碗と線刻細蓮弁文碗の二種類に分けられる。前者の無鏽蓮弁文碗はI群とし、後者の線刻細蓮弁文碗をII群として位置づけて分類した。I・II群の推定個体数は第14表に示すように復元資料と高台片数から求められた個体数は37個体相当であった。その他に各群の個々の特徴については第15表の観察表に呈示することにした。ここではI・II群の分類の概略を記すことにした。

##### ① I群(第23図~第24図15・16)

無鏽蓮弁文碗は器形、文様、施釉などの特徴から以下のA類からF類までの6類に分類を試みた。

##### I群A類(第23図1)

外反口縁の大振りの碗。外表面の口頭部に3本の圓線を施し間隔を空けて胴部に2本の圓線と片切り彫りによる蓮弁文を描く。内表面は片切り彫りで刻花文を描いているものである。

##### I群B類(第23図2~4)

外反口縁の小振り碗。弁先が僅かに空いた蓮弁文を片切り彫りで高台際まで施す。内面は内底面のみに圓線と印花花文を施すものである。蓮弁はやや幅広のものと幅の狭いものが存在する。前者をa種(第23図2・3)とし、後者はb種(第23図4)とした。B類は2個体が復元されている。

##### I群C類(第23図5)

直口口縁の大振りの碗。文様は外表面と内底面に施され

第13表 青磁推定個体数

器種	出土地 部位	SK01 (SA19・20 ・28)	SK01 以外	合計
碗	蓮弁文碗	37		37
	ラマ式蓮弁文碗	10		10
	雷文帶碗	98		98
	無文口緣碗	60		60
	小計	205		205
	口折皿	60		60
	玉縁口緣皿	20		20
	外反口緣皿	74		74
	直口口緣皿	65		65
皿	棱花皿	3		3
	八角皿	6		6
	不明	40		40
	小計	268		268
	銅縁盤	56		56
	直口口緣盤	47		47
	小計	103		103
	I群(小型壺)	2		2
	II群(大型壺)身	11		11
壺	II群(大型壺)蓋	3(4)		3(4)
	小計	16(4)		16(4)
	I群(大花瓶)	1		1
	II群(大瓶)	1		1
	小計	2		2
	大鉢	5		5
	馬上杯	1	1	2
	水注	3		3
	I類(双耳瓶)	1		1
瓶	II類(玉壺春瓶)	5		5
	小計	6		6
	花盆台	1		1
	香炉	1		1
	小品	1		1
	合計	612(4)	1	613(4)

注:青磁壺の蓋7点中4点は身と合致し、残り3点が別個体となる。

ているもので、外体面に竈描きでやや幅広の蓮弁文を高台脇まで施している。内底面に圈線と印花による八宝花纹を施す。この種の大振り碗は一点のみ得られている。

#### I群D類（第23図6～14）

小振りの直口口縁の碗で他と比較して多く出土している。最少個体数は9個体前後が得られている。口造りなどからa種とb種の2種に細分した。

a種…口縁に軽い削りなどを加えるが口唇の断面が舌状となるものである。外体面と内底面にのみ文様を施す。

外体面に片切り彫りでやや幅広の蓮弁文を高台脇まで施し、弁先が僅かに空いている。内底面に圈線と花纹を施す。3個体相当が出土していて、復元された1点を図化する（第23図6）。

b種…腰下部で軽く折れて、そのまま口縁まで逆「ハ」の字状に直線的に移行する腰折れ気味の碗。口造りの特徴として口縁端部で僅かに外側へ膨らむため口唇が幅広くなる。口唇の断面は外側から斜位の削りが入って口唇内端が外端より高くなる。口唇部は面取りによって平坦となるものと丸味のあるものの二者が存在する。文様は内・外体面と内底に施されているが、内底面の文様の有無でイ種とロ種の二種類に便宜的に分類した。内底面が無文となるものをイ種として、内底面に刻花文（牡丹唐草文など）を描くものをロ種とした。外体面の蓮弁文は弁先がかなり空いているものが主体である。内底面の印花は花文と草花文などを施す。ロ種のみを図化した（第23図7～14）。

#### I群E類（第24図15）

口縁が小さく微弱な玉縁をもつ小振りの碗である。外体面に片切り彫りで描かれた蓮弁は幅が狭く、弁先が尖る。内底面に片切り彫りの刻花文を描いているものである。本類は2個体得られていて、内1点を図化した。

#### I群F類（第24図16）

直口口縁の小振りの碗。外体面に叉状工具で蓮弁文を高台脇まで施し、内底面に圈線と印花花文のみ施したものである。1点のみ得られている。

#### ② II群（第24図17～21）

線刻細蓮弁文碗で復元された資料は2個体分のみであった。文様の構成などからA類とB類の二つに分類した。その他にII群の範疇にあるものとして5個体相当分の口縁破片（破片数9片）が得られていて、その内の3片を図化した（第24図19～21）。

#### II群A類（第24図17）

直口口縁のやや大振りの碗。外体面に丸彫りの蓮弁を高台脇まで施し、内底面は刻花文を内底まで施すものである。

#### II群B類（第24図18）

直口口縁の大振りの碗で器壁が厚い。外体面に叉状工具で蓮弁文を高台脇まで描く。内底面に片切り彫りの草花文を描く。内底面に印花による花文を施す。

## 小 結

I群碗と分類した無鏡蓮弁文碗のグループの中でI群D類b種（第23図7～14）の8点について主な、特徴などについて述べてみることにする。I群D類b種は器形が腰下部で軽く折れた腰折れ気味の直口口縁の碗で、小振りの碗である。高台際に竈などで削りを加えて竹節状となる。高台の造りは雑な成形であるが、置付はやや幅広であり、高台内側を斜位に削って抉り取っている。また、高台の外底面の釉の掻き取りは雑で徹底していない点などが特徴として挙げられる。I群D類b種の8点を検討してみると素地や釉色が若干、異なるものが2点（第23図7・8）が存在し、2点とも細かい貫入がみられる点と器のサイズが他の6点よりも僅かに大きいようである。これらの違いは生産地（窯）の違いとして今のところ考えられた。仮に第23図7・8の2点をA窯とし、他の6点（同図9～14）をB窯とした場合、A窯・B窯に共通して認められた内底の印花による草花文と「大」の字款を比較した結果、B窯の印花をA窯が模倣したことが予想された。B窯の「大」の字形で「ノ」の部が曲線的であるが、A窯では「ノ」の部のはらいが微弱で直線的であった。また、B窯の印花をA窯があまりにも模倣しすぎたためか、B窯は模倣によるコピー商品防止対策の一環として「大」の字を消したり、印花の文様の変

更（同図14）を試みたのかもしれない。B窯の印花にある「大」の字款は陶工名とみるか窯印とみるかについては類例資料が確認されていないため、現段階では判然としない。B窯を仮に龍泉窯系と位置づけるのであれば、A窯はB窯に近い地方の民間窯などが今のところ考えられるところである。

第14表 蓮弁文碗推定個体数

分類 個数	I						II			高台片			計	
	A	B	C	D	E	F	A	B	I群	II群	I or II			
推定個体数	1	2	1	1	3	7	2	1	3	1	8	4	3	37
計		2	1	1	3	7	2	1	3	1	8	4	3	37
			3		10	2	1	3	1					
					18			4			11			

注 口縁破片3片を対象に入れた場合推定個体数は40個体となる。

第15表 蓮弁文碗観察一覧

種別番号 固断番号 遺物番号	名称 假称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素地	釉色 貫入	施釉	出土地点 出土層
靴型 圓盤8 1	無	I A	20.4 — —	外反口縁で大振りの碗。外面の口頭部に3本の圈線を施し間隔を空けて胴上部に2本の圈線と片切り彫りによる蓮弁文を描く。内体面は片切り彫りの刻花文。	灰白色の微粒子。	緑青色。 なし。	残存部は総釉。	S A20 第2層
々々々 2	鎧	I B a	12.0 5.6 5.3	外反口縁で小振りの碗。外面に片切り彫りによる蓮弁。内底面に圈線と草花文。	灰白色の細粒子。	青緑色。 ”。	總釉後に外底面の釉を輪状に搔き取り蛇目状とする。	S A20 第2層
々々々 3	蓮	I B a	12.2 6.3 5.4	”。外面の蓮弁の弁尻は高台際まで達する。内底の印花などは不鮮明。	淡灰白色的微粒子。	明緑色。	”。	S A19 第3層
々々々 4	弁	I B b	13.4 — —	”。 ”。	淡灰色の微粒子。	緑青色。 ”。	残存部は総釉。	S A20 第3層
々々々 5	文	I C	17.1 7.9 6.8	直口口縁で大振りの碗。外面の蓮弁は腰下部で止まる。内底に八宝花文と圈線。	灰白色的細粒子。	明灰緑色 ”。	總釉後に外底面の釉を搔き取る。内削りは深い。	S A20 第3層
々々々 6	碗	I D a	11.8 6.3 4.5	小振りの直口口縁碗。外面に籠描きの蓮弁文。内底面に圈線と花文。	灰色の細粒子。	灰緑色の 透明釉。 なし。	”。外底面に砂胎目的の目痕。	S A19・ 20
々々々 7		I D b ロ	13.4 7.0 5.8	”。腰折れ気味で蓮弁文も腰部で止まる。内体面に刻花文。内底は圈線、草花文と「大」の字款。高台際に深目の削り。	淡黃白色的細粒子 (半磁胎)。	青緑色の 釉。 細かい貫入。	”。高台内側は斜位に削り出しで成形。外底面の釉の搔き取りは雜で徹底しない。	S A19・ 20桂 第2層

第15表 蓮弁文碗観察一覧

國立番号 回収番号 遺物番号	名 称 假 称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素 地	釉 色 貫 入	施 軸	出土地点 出 土 層
第2回 団8 8	I D b 口	14.3 7.2 5.9	小振りの直口口縁碗。腰折れ気味で蓮弁文も腰部で止まる。内底の印花は不鮮明であるが上記7と同一の印花。高台際に深目の削り。	灰白色の細粒子。	青緑色の 釉。 細かい貫入。	総釉後に外底面の 釉を搔き取る。高 台内側は斜位に削 り出して成形。外 底面の釉の搔き取 りは雑で徹底しな い。	S A19・ 20 第2層	
△△ 9	無	I D b 口	12.4 6.0 5.2	“ ” “ ” 。内体面に 刻花文。内底は團線、草花文を施す。 高台際に浅目の削り。	淡灰白色的微粒 子。	明緑色の 釉。 なし。	“ ” 。高台 内側は斜位に削 り出して成形。外底 釉の搔き取りは難 。外底及び高台内に 胎土目の目痕。	S A20 第3層
△△ 10	鎬	I D b 口	13.0 6.3 5.1	小振りの直口口縁碗。腰折れ気味で 蓮弁文も腰部で止まる。内体面に刻 花文。内底は團線、草花文。高台際に 浅目の削り。	灰白色的微粒子。	緑青色。 なし。	総釉後に外底面の 釉を搔き取るが徹 底しない。高台内 側を斜位に削る。 費付に目痕。	S A19・ 20娃 第2層 第3層
△△ 11	蓮	I D b 口	13.1 6.8 5.1	“ ” “ ” 。内体面に 刻花文(牡丹唐草文)。内底に團線、 草花文。高台際に浅目の削り。	淡灰白色的微粒 子。	“ ” 粗い貫入。	“ ” “ ” 費付を平坦に仕上 げる。	接合のた め不明
△△ 12	弁	I D b 口	12.8 6.7 5.5	“ ” “ ” 。内体面に 刻花文。内底に團線、草花文と「大」 の字款。高台際に浅目の削り。	淡灰白色的微粒 子。	“ ” なし。	“ ” “ ” 費付に目痕。	S A19娃 第3層
△△ 13	文	I D b 口	— — 5.4	口縁を欠くが I D b のタイプ。内体 面に刻花文。内底に團線、草花文。 高台際に浅目の削りを入れて竹節状 とする。	淡灰白色的微粒 子。	“ ” なし。	“ ” “ ” 費付及び高台内に 目痕と砂胎土目。	S A19 第2層
△△ 14	碗	I D b 口	12.4 6.4 5.1	小振りの直口口縁碗。蓖削りの蓮弁 は高台際にまで施す。内体面に刻花文。 内底面に團線と草花文。費付の幅が 狭い。	灰白色的細粒子。	“ ” “ ”	“ ” 高台内側は垂直に 削り取る。	S A19 第3層
第2回 団9 15	I E	14.8 7.0 6.4	微細な玉縁状の肥厚を造る。外面の 蓮弁は弁幅が狭く、弁先が尖る。内 体面に刻花文。	淡灰白色的微粒 子。	淡緑色。 “ ”	外底及び内底を欠 く。他は総釉。	S A19・ 20娃 第2層	
△△ 16	I F	14.0 7.0 5.2	小振りの直口口縁碗。叉状工具で弁 先の尖った蓮弁を高台縁まで描く。 内底に團線と草花文。	淡灰色の細粒子。	“ ” “ ”	総釉後に費付内面 から外底の釉を搔 き取って露胎とする。	S A19・ 20娃 第2層	
△△ 17	線 削 蓮 弁 文 碗	II A	15.6 8.4 5.6	“ ” 。丸範で弁先の丸い蓮弁 を高台縁まで施す。内面は胴部から 内底面まで刻花文を施す。内底面が 窪む。	灰白色的細粒子。	緑青色。 なし。	総釉後に外底面の 釉を輪状に搔き取 って蛇ノ目状とす る。	S A19・ 20娃 第3層
△△ 18	II B	17.2 8.5 6.3	大振りの直口口縁碗。叉状工具で丸 味のある弁先を描き蓮弁の弁尻は高 台縁まで達する。内体面に草花文。 内底に花文。	淡灰白色的微粒 子。	綠青色。 なし。	総釉後に外底面の 釉を輪状に搔き取 って蛇ノ目状とす る。	S A20 第2層	

第15表 蓮弁文碗観察一覧

種類番号 国版番号 遺物番号	名 称 ・假 称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素 地	釉 質	色 入	施 釉	出土地点 出土 層
第2回 図版9 19		II	— — —	直口口縁碗の破片。線刻の蓮弁文を描く。弁先は丸味のある「ハ」の字状。	淡灰白色の微粒子。	綠青色。 なし。	口縁の両面に残っている。	S A19・ 20桂 第2層	
20	線刻 細 蓮 弁 文 碗	II	— — 5.6	上記19の高台破片か。線刻の蓮弁文が高台脇まで施される。	淡灰白色の微粒子。	綠青色。 なし。	高台内面途中まで釉が掛けられている。脅付の両端を斜位に面取り。	S A19 第3層	
21		II	13.8 — —	劍頭状の蓮弁文を描く。弁先は片切り影り。弁軸は叉状工具。内面に刻花文。	〃。 〃。	明緑色。 〃。	口縁の両面に釉が残る。	S A20 第4層	

## 2. ラマ式蓮弁文碗

土壤 S K01 (S A19・S A20、S A28) 内から外体面にラマ式蓮弁文を片切り彫りで描いた一連の碗が出土していたので「ラマ式蓮弁文碗」として仮称することにした。推定された個体数は10点であった。

この種の碗は口縁部の形態から外反するものと直口するものの二者が確認されたので、前者をI型、後者はII型として分類した。以下、I型とII型の分類の概念を略述することにする。個々の特徴については観察表に呈示する(第16表)。

## I型(第24図22~26)

外反口縁の碗。外体面に片切り彫りによるラマ式蓮弁文を描き、花弁4枚で碗周する。弁内に垂下の三葉文を描く。内体面は片切り彫りの刻花文(牡丹唐草文)を描く。内底に圓線と印花による花文や草花文を施す。8点得られていて、この内の5点を図化した(第24図22~26)。

## II型(第24図27)

直口口縁の碗。外体面の文様はI型と同様のラマ式蓮弁文を描き、弁内に垂下の三葉文を描く。蓮弁は4枚で碗周するようである。内体面もI型と同様の刻花文を描く。内底に圓線と印花による草花文を施す。1点のみ得られていたのでこれを図化した(同図27)。

## その他の資料

その他にI型かII型のいずれかに所属するとみられる高台片が1点得られていたので、これを図化した(第24図28)。

## 小 結

管見の限りでは、この種の碗は龜井明徳氏がG·H·ケア氏によって波照間島のアタンシ(美底御巣周辺遺跡)より採集された碗(註1)を紹介したところから注目されたものとして今のところ解釈がなされるところである。

この種の碗は与那國島の与那原遺跡(註2)、西表島の慶來慶田城遺跡(註3)、沖縄本島南部の糸数城跡(註4)、阿波根古島遺跡(註5)などで出土していたが、各遺跡からは1・2点と数が極めて少ない状況にあった。また、雷文帶碗の中には外体面脇部にラマ式蓮弁文を描いたものがあり、高台破片が出土した場合、この種の碗とは区別が出来なかったのが事実であった。

今回、4個体が復元されることにより從来、「ラマ式蓮弁に類似する文様を施す碗」(註2)、「ラマ式蓮弁に類似する碗」(註5)、「ラマ式蓮弁類似(文)碗」(註3・4)などで仮称してきたが、京の内の資料から外体面に片切り彫りによるラマ式蓮弁文を確実に描いているものとして判断されたため、「ラマ式蓮弁文碗」として命名することにした。龜井氏がこの種の碗の存在の可能性を指摘してから文様を確認するまでに実に15年を経て今回の名称に至っていることを付記する。ラマ式蓮弁文碗の時期については上述した他遺跡の出土状況から今のところ14世紀中頃を中心とする前後の時期に位置づけられるようである。

## 註

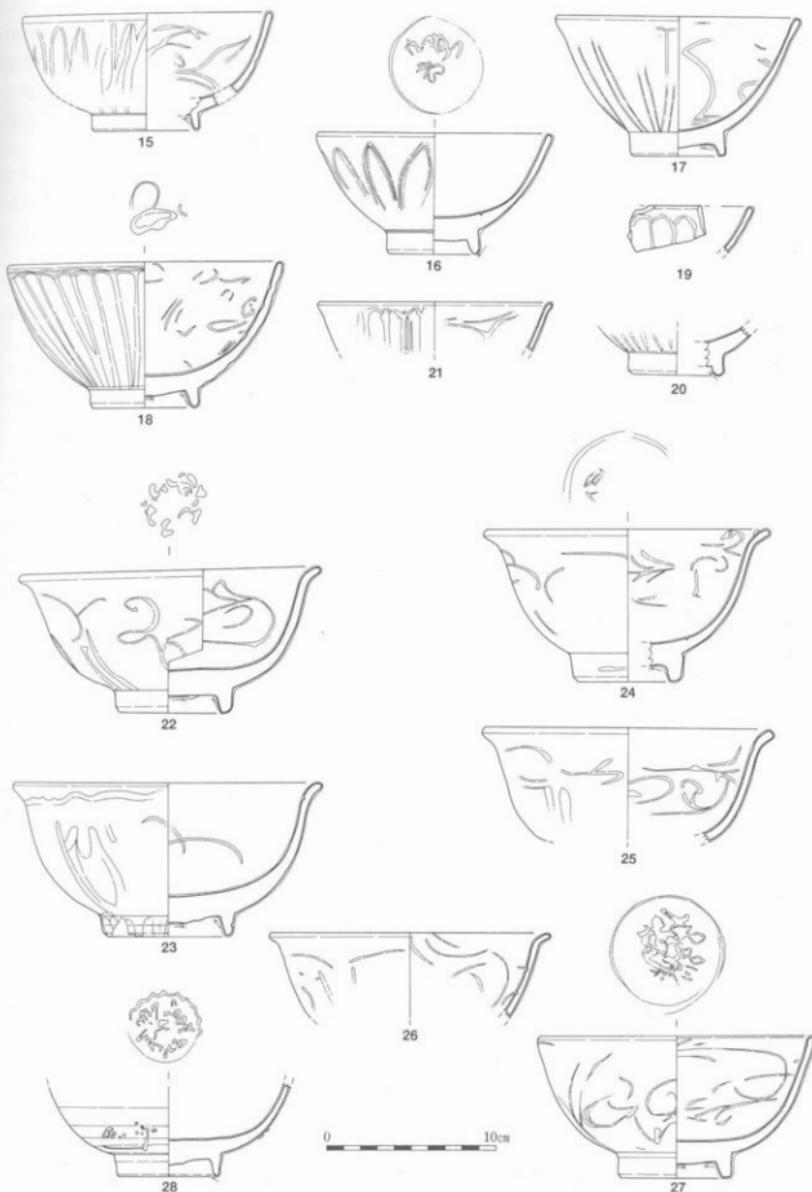
- 註1. 亀井明徳「先島諸島採集の輸入陶磁」「沖縄出土の中国陶磁（上）」ジョージ・H・ケア氏調査収集資料 — 先島編  
沖縄県立博物館 1982年。
- 註2. 金城亀信「与那原遺跡」与那国町教育委員会 1988年。
- 註3. 金城亀信・金城 透・島袋 洋ほか『西表島 慶来慶田城遺跡』（重要遺跡確認調査）沖縄県教育委員会 1997年。
- 註4. 金城亀信・黒住耐二ほか『糸数城跡』（発掘調査報告書Ⅰ）玉城村教育委員会 1991年。
- 註5. 照屋 孝・長嶺 均・金城亀信ほか『阿波根古島遺跡』沖縄県教育委員会 1990年。

第16表 ラマ式蓮弁文碗觀察一覧

網目番号 団面番号 遺物番号	名 称 仮 称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素 地	釉 質 色 入	施 釉	出土地点 出 土 層
22		I	17.8 8.6 6.4	外反口縁碗。外体面に片切り彫りのラマ式蓮弁文を描く。弁内に垂下の三葉文。内体面に刻花文（牡丹唐草文）。内底に團線と花文。	淡灰色の微粒子。	濃緑色。 なし。	総釉後に外底面の釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。外底に胎土目の目痕がみられる。	S A 20 一括 第3層
23	ラ マ	I	18.2 8.8 7.6	〃。内・外体面の文様は釉が厚く掛けられ不明瞭。内底も同様。	淡灰色の微粒子。	緑青色。 粗い貫入。	〃	S A 19 ・20 番 第3層
24	式	I	16.8 8.0 6.4	〃。外体面に片切り彫りのラマ式蓮弁文。弁内に垂下の三葉文。内体面に刻花文。内底に團線と草花文を施す。	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 〃。	総釉後に外底面の釉を搔き取る。	S A 19 ・20 番 第3層
25	蓮 弁	I	16.9 — —	〃。内体面に刻花文。	淡灰色の微粒子。	明緑色の 透明釉。 粗い貫入。	残存部は施釉。	S A 20 第2層
26	文	I	16.4 — —	〃。〃。内体面に刻花文。	濃緑色。 なし。	〃。	〃。	S A 19 第4層
27	碗	II	16.2 8.3 6.5	直口口縁碗。外体面に片切り彫りのラマ式蓮弁文を描く。弁内に垂下の三葉文。内体面に刻花文。内底に團線と草花文。	〃。	明緑色。 〃。	総釉後に外底面の釉を搔き取り蛇ノ目状とする。	S A 20 第3層
28		I・II	— — 6.0	I型かII型の高台片とみられる。外体面腰部に片切り彫りの蓮弁。内底に印花による花文。	灰色の細粒子。	〃。 〃。	総釉後に高台内面途中から外底面の釉を總て搔き取る。	S A 19 ・20 番 第3層



第23図 青磁 蓮弁文碗 (1)



第24図 青磁 蓮弁文碗 (2) ラマ式蓮弁文碗

### 3. 雷文帶碗

雷文帶碗は口縁形態においては總て直口口縁となるものであった。雷文帶の文様の施文方法から大別してⅠ群碗とⅡ群碗に分けられる。Ⅰ群碗は笠などによる片切り彫りによる雷文を描くものである。Ⅱ群碗は型起し（スタンプ）による雷文を施すものである。Ⅱ群碗の中には型起しと片切り彫りによる文様を施す併用型が存在し、主文の雷文が型起しであったためⅡ群碗に含めた。

器のサイズの面からは両群とも大振りの碗と小振りの碗の二者が存在する。以下、Ⅰ群碗とⅡ群碗について文様構成などから分類を試みて分類の概念を記すことにする。個々の特徴については觀察表に呈示することにした。S K01 (S A19・20、S A28) 内からは雷文帶碗は口縁破片を除いた場合、推定で98個体分が出土している（第17表）。

#### ① Ⅰ群碗（第25図1～第28図28）

Ⅰ群碗は器のサイズでは大振りの碗が口径14.0cm～16.4cm、器高7.4cm～8.7cm、高台径5.4cm～6.6cmの範囲内にあった。小振りの碗では口径11.5cm～12.4cm、器高5.6cm～6.8cm、高台径5.0cm～5.7cmの範囲に納まっている。両者の碗は文様構成においては小振りの碗にのみ認められる文様の組み合わせもある。逆に大振りの碗にのみに限定された文様の組み合わせも存在するので、文様構成の分類の中では小振りの碗と大振りの碗として付記することにする。Ⅰ群碗の文様構成などから主文の雷文や蓮弁文などの組み合わせでA類～E類までの5種類に分類した。A類・B類は主文の雷文はかなり崩れ省略化した文様となり、雷文を時計回りに描く。C類・D類・E類においては主文の雷文はやや崩れた雷文を雷文の中心で反転させて連続文を描くものを主体とするが、E類の一部には主文の雷文を雷文の中心で反転させたものと反時計回りの雷文を組み合わせて、一単位とするものが含まれている。その他に内体面の文様の有無などからa種とb種の二種類に分類した。

#### I群A類（第25図1・2）

A類は外体面口縁にのみ片切り彫りでかなり崩れて省略化した雷文を描くもので、小振りの碗のみに認められる。内底面に圈線と印花花文を施す。本類は2点出土しているが、その内の1点は素地・釉色などから中国南部かベトナム産として考えられるものが含まれているようである（第25図1）。

#### I群B類（第25図3～10、第26図11～13）

本類は外体面口縁に片切り彫りで省略化した雷文を描き、雷文帶直下に片切り彫りの蓮弁文を描くが蓮弁は略式化したものが主であり、中には弁先が大きく空いたものや片切り彫りで弁先のない線刻のみで蓮弁文を描くものなどがある。内体面は文様の有無などから無文のものをa種（第25図3～10）、有文のものをb種（第26図11～13）として二種類に分類した。B類の内底面には圈線と印花花文と印花八宝花文を施していく、中には同一の印花花文を施したもののが5点（内2点はb種）あり一連の窯で製作、焼成されたものとみられる（第25図7～9、第26図11・12）。B類には小振りの碗が5点出土していて、その内の2点（第25図3・4）を図化した。大振りの碗は16点出土していて、内9点（第25図5～10、第26図11～13）を図化した。

#### I群C類（第26図14～17）

C類としたものは大振りの碗のみにみられた文様のグループで外体面口縁にやや崩れた雷文を片切り彫りで描き、その直下にラマ式蓮弁文を描いていて蓮弁の弁内には垂下する三葉文を片切り彫りで描いている。内体面には片切り彫りで刻花文を描いた有文のものと無文のものが二種類存在したため、前者をa種（第26図14・15）、後者はb種（第26図16・17）とした。a種は5点出土していて、その内の2点（同図14・15）を図化し、b種は2点のみ出土していたのでこれを図化した（同図16・17）。内底面の印花は花文であった。

#### I群D類（第26図18・19）

本類も主文の雷文がやや崩れた雷文の単独文を連続させる。雷文は外体面口縁に片切り彫りで描き、雷文帶直下に弁先を尖らせた劍頭状の蓮弁文を描く。内体面に片切り彫りの刻花文を描いている。内底面に印花はなく無文である。本類は2点得られている（同図18・19）。

#### I群E類（第27図20～第28図28）

E類もD類と同様にやや崩れた雷文を外体面口縁部に描き、その直下に間隔の空いた刻花文や間隔の狭い密な

刻花文を描いている。内体面も外体面と同じ様に疎密のある刻花文を施している。刻花文の間隔の疎密の関係は外体面と内体面においても良く一致している。刻花文の間隔の空いた疎のものをa種とし、間隔が狭く密のものをb種とした。a種（第27図20・21）のものには小振りの碗は伴わないようであり、大振りの碗のみであった。b種（第27図22～27、第28図28）には小振りと大振りの両者の碗が存在する。また、a種の内底面には印花花文を施していく、b種は印花の八宝菊花文や菊花文を施す。a・bの両種は印花によっても区別ができるようである。a種は3点出土していて、その内の2点を示した（第27図20・21）、b種の小振りの碗は8点出土していて3点を図化した（第27図22～24）。b種の大振りの碗は10点出土していて、内4点を示した（第27図25～27、第28図28）。

### ② II群碗（第28図29～35、第29図36～42）

II群碗は大振りの碗のみが存在する。II群碗のサイズは口径15.9cm～17.6cm、器高8.3cm～9.4cm、高台径6.0cm～7.0cmの範囲内にあるものを大振りの碗として把握した。このII群碗の文様は型起しを基本とするものであるが中には片切り彫りで文様を施した併用型も存在する。型起しによる文様の構成などを基準に分類した結果、以下のA類～E類までの5類が確認された。また、内体面に文様を施した有文のものと無文のものがあり、内体面の文様の有無でa種、b種の2種に分類した。内体面の文様の有無についてI群碗と比較したところII群碗は無文の例が一例のみで他は総て有文であった。

以下、A類からE類についての分類の概念などを記す。

#### II群A類（第28図29～33）

時計回りの雷文の単独文や雷文の中心で逆回転する雷文を連続文として外体面口縁のみを型で起しているもので、口縁より下位は無文とする。内体面の型起しは口縁に反時計回りの雷文とその直下に草花文や人形手文を施すものである。内底面には印花による花文と吉祥花文を施したもののがみられる。A類は8点出土していて5点を図示した。

#### II群B類（第28図34）

一例のみ認められた資料で、反時計回りの雷文の単独文を連続文として外体面の口縁のみに型起しで施す。内体面には上段に三本単位の鋸歯文、中段に三本の界線、下段は内体面の主文となる草花文を型で起す。

#### II群C類（第28図35、第29図36～38）

外体面口縁には雷文の中心で逆回転する雷文の単独文を連続させて完成させた雷文帯や時計回りの雷文と反時計回りの雷文を組み合わせた単位文でもって連続文として雷文帯を完成させる二種類がある。内体面は草花文を施し、内底面に印花による花文を施したものである。本類は5点得られていて4点を図化した。

#### II群D類（第29図39～41）

外体面口縁には雷文の中心で逆回転する雷文の単独文を連続させた雷文帯と反時計回りの雷文をひとつの単位文として連続させた雷文帯の二種類が存在する。雷文帯直下にラマ式蓮弁文と弁内に垂下の三葉文を片切り彫りで描いているものである。内体面には雷文と草花文を組み合わせたものと草花文のみを施したものがある。D類は5点出土していて3点を図示した。

#### II群E類（第29図42）

反時計回りの雷文の単独文を連続させて雷文帯を完成させ、その直下に密なラマ式蓮弁文を型で起したものと外体面に施す。内体面は雷文の中心で逆回転した雷文帯と草花文を施したものがある。内底面には靈瑞の鳳凰文と「付」の字を反転させた印を施している。E類は二例のみ出土していて1点を図化した。

### ③ その他（第29図43・44）

その他の資料として釉が厚く掛けられたものや型起しの文様が不鮮明なものが7点ほど得られているが、文様構成などを検討した結果、7点ともII群A類かII群C類のいずれかに所属するものとして判断された。これらの7点の資料には外体面に型起しの雷文を施し忘れたものや型起しの雷文を施文途中で終了したものなどが認められた。7点中2点を図化した（同図43・44）。他に底部資料が8点得られていて、群別の分類を試みた結果は、II群A類もしくはII群C類のいずれかに所属するもの1点、I群C類a種もしくはII群D類に所属するもの1点、

I群C類b種もしくはII群D類に所属するもの1点、I群もしくはII群に所属するもの5点であった。

小 結

青磁雷文帶碗のⅠ群として分類した資料の中には同一の窯で製作された資料がまとめて出土しているようである。ひとつはⅠ群B類a種（第25図7～9）・Ⅰ群B類b種（第26図11～13）の6点と同化を省略した6点の計12点が同一の窯で製作されたものとして判断できた。主な特徴を挙げるとすれば釉色は灰緑色の透明釉を主体として、希に明緑色のものが存在する。灰緑色の透明釉を施したものは總て粗い貫入が觀察される。素地の面からは灰白色を主体に黄白色や淡灰色が認められ、粒子は細粒子である。素地には微細な黒色・灰色・茶色の鉱物を含んでいる点で共通した陶土を用いているようである。更に内底面の印花に於いては同一の花文を施していることで共通している。破片を含めた12点の資料を仮にA窯として位置づけた場合、A窯の諸特徴などから中国南部の諸窯が候補として今のところ考えられる。次にⅠ群E類b種（第27図22～24・26・27）の5点と同化を省略した3点の計8点も同一の窯で製作されたものとして考えられた。主な特徴を記すと釉は小振りの碗が淡青緑色・大振りの碗は明緑色の釉を掛けている点から釉をサイズによって使い分けているが、素地に於いては共通性が認められ淡灰白色で微粒子の陶土を用いている。内底面の印花は菊花文を主とし、希に菊花の花弁内に八宝文のある「八宝菊花文」が含まれている。このグループの8点を仮にB窯系として位置づけた場合、B窯系は現段階では中国龍泉窯周辺の諸窯（龍泉窯系）で製作されたものかと推察されるところである。

第17表 雷文帶碗推定個体数

分類 個体数	I						II						I Ca or II D (注1)	I Cb or II D (注2)	I or II (注3)	II A or II C (注5)	高台 片	計	
	A		B		C		D		E		A	B	C	D	E (注1)				
推定個体数	2	5	16	5	7	2	3	18	8	1	5	5	2	1	2	5	8	2	98
計	2	5	17	5	7	2	3	18	8	1	5	5	2	1	2	5	8	2	98
		22		12		2		21											
								59								21			18

注 (注1)は口縁破片より個体数を数える。(注2)～(注4)は高台片数より個体数を数える。(注5)の8点中1点は高台片より個体数を数える。

第18表 雷文帶碗觀察一覽

標題番号 国庫番号 遺物番号	名 称 ・ 假 称	分類	口径 高 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素 地	釉 質 色 入	施 釉	出土地点 出 土 層
第25回 国庫10 1	雷	I A	12.6 6.1 5.4	小振りの直口口縁碗。一単位の雷文を7単位で團繰か。高台断面は「ハ」の字状。内底に團線と花文。	黄茶色の粗粒子。微細な黒色鉱物を多く混入。ベトナム産か。	灰白色の失透釉。両面に粗い貫入。	総釉後に外底面の釉のみ輪状に搔き取り蛇ノ目状に残る。	S A19・ 20畦 第2層
		I A	12.2 6.0 5.2	“ ” 。 “ ” 。外面に明瞭な轆轤痕。内底に團線と花文。	灰色の細粒子。	黄茶色の透明釉。貫入なし。	総釉後に外底釉を搔き取る。	S A19・ 20畦 第2・3層
	帶 碗	I B a	12.2 5.7 5.4	“ ” 。一単位の雷文と蓮弁を5枚施す。内底に團線と花文。	淡灰白色の微粒子。	淡青緑色。貫入なし。	“ ” 。	S A19・ 20 第3層
々 々 4		I B a	11.9 5.6 5.0	“ ” 。外面にやや鮮明な轆轤痕。内底に團線と印花八宝花文。	“ ” 。	“ ” “ ”	“ ” 。	S A19 第3層

第18表 雷文帶碗観察一覧

標識番号 図版番号 遺物番号	名稱・仮称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素 地	釉 色 貫 入	施 軸	出土地点 出 土 層
新25 図版10 5	I B a	15.1 7.6 6.2	大振りの直口口縁碗。崩れた雷文と蓮弁を描く。内底面に圓線と八宝花文。	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 貫入なし。	總軸後に外底軸を 搔き取る。輪状に 搔き取り蛇ノ目状 となる。	S A19 · 20畦 第2 · 3 層	
新26 6	I B a	14.0 7.4 5.5	〃。一単位の雷文を8~9 単位で囲繞。蓮弁は4枚。内底に圓 線と花文。	灰白色の細粒子。 微細な黑色鉱物が少量 混入。	濃緑色。 粗い貫入。	〃。外底 面中央が円盤状に 小さく突出。	S A19 · 20畦 第3 · 4 層	
新27 7	I B a	15.2 7.5 6.2	〃。一単位の雷文と蓮弁は 各6枚でもって囲繞。内底に圓線と 花文。	〃。 微細な灰黒色の 鉱物が僅かに混入。	灰緑色 の透明 釉。 粗い貫入。	〃。搔 取りは蛇ノ目状。	S A19 第4層	
新28 8	I B a	15.4 7.4 6.1	〃。一単位の雷文を6単位 と蓮弁4枚で囲繞。内底に圓線と花 文。	〃。 微細な黑色鉱 物が僅かに混入。	明灰緑 色の釉。 〃。	〃。 〃。	S A19 第3層	
新29 9	I B a	15.8 7.4 6.3	〃。雷文の単位は不明。蓮 弁は5枚で囲繞か。内底に圓線と花 文。	〃。 〃。	灰緑色 の透明 釉。 〃。	〃。 〃。	S A19 · 20 第2層	
新30 10	I B a	16.0 — —	〃。一単位の雷文を6単位 と蓮弁6枚で囲繞。中国南部かペト ナム産。	黄白色の粗粒子。 黒色や茶色の鉱物 が多量混入。	黄緑色 の透明 釉。 〃。	窓道具の櫃の一部 が胸中央に付着。	S A19 · 20 第1 · 2 層	
新31 11	帶	I B b	15.5 7.5 6.3	〃。〃。内底面に刻 花文。内底に圓線と花文。	灰白色の細粒子。 微細な黑色鉱物が僅かに混入。	灰緑色 の透明 釉。 〃。	總軸後に外底面の 釉を搔き取って蛇 ノ目状とする。	S A20 第2層
新32 12	碗	I B b	15.5 7.6 5.9	大振りの直口口縁碗。一単位の雷文 を7単位と蓮弁6枚で囲繞。内底面 に刻花文。内底に圓線と花文。	淡灰色の細粒子。 微細な黑色鉱物が僅かに混入。	灰緑色 の透明 釉。 粗 い貫入。	總軸後に外底面の 釉を搔き取って蛇 ノ目状とする。高 台に目痕の一部が 付着。	S A19 第4層
新33 13		I B b	15.8 — —	〃。一単位の雷文7単位と 蓮弁6~7枚で囲繞。内底面に刻花 文。内底に圓線と花文。	〃。黒色 や茶色の鉱物 が多量に混入。 ペトナム産か。	黄緑色 の透明 釉。 粗 い貫入。	高台を欠落。手法 は他のI B bと同 様か。	S A19 · 20畦 第2層
新34 14		I C a	15.6 8.0 6.0	〃。一単位の雷文11単位と ラマ式蓮弁4枚で囲繞。内底面に刻 花文。内底に圓線と花文。	淡灰色の細粒子。	濃緑色 の釉。 貫入なし。	總軸後に外底面の 釉を搔き取って蛇 ノ目状とする。	S A20畦 第2層
新35 15		I C a	15.4 7.9 6.4	〃。雷文が連続する。ラマ 式蓮弁4枚で囲繞。内底面に刻花文。 内底に圓線と花文。	淡灰白色の微 粒子。	明青緑 色。 貫入なし。	〃。	S A19 · 20畦 第2層
新36 16		I C b	16.4 8.5 6.4	〃。〃。ラマ式蓮 弁3枚で囲繞。	〃。	〃。 〃。	〃。	S A20 第2層 一括

第18表 雷文帯碗観察一覧

標本番号 図版番号 遺物番号	名稱・ 假称	分類 器高 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素 地	釉 色 貫 入	施 軸	出土地点 出土層	
第25回 図版11 17	I C b	16.0 — —	大振りの直口口縁碗。雷文が連続する。ラマ式連弁3枚で囲繞。	淡灰白色の微粒子。	明青緑色。貫入なし。	高台を欠落。上記16と同一手法か。	S A20 第2層	
々々 18	I D	14.6 — —	〃。雷文と劍頭状の蓮弁文を描く。内面に刻花文。	淡灰色の微粒子。	濃緑色の釉。貫入なし。	口縁のみの破片。両面に釉が残る。	S A19 第2層	
々々 19	I D	— — 5.4	I Dの高台破片で蓮弁が高台際まで達する。内体面に刻花文。	〃。 〃。	〃。 〃。	高台外底面の釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	S A20 直上覆土	
第26回 図版12 20	I E a	14.9 7.4 6.2	大振りの碗。雷文の中心で逆転させた雷文を連続。内・外体面に間隔の空いた刻花文。内底に團線と花文。	淡灰白色の微粒子。	明緑色の釉。貫入なし。	総釉後に外底面の釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	S A20 第3層	
々々 21	I E a	14.7 7.5 6.2	〃。外体面の雷文と刻花文は不鮮明。内体面の刻花文も同様。内底に花文。	淡灰色の細粒子。	二次的な火熱で変色。明緑色の釉。貫入なし。	〃。 〃。	S A20 第2層	
々々 22	文 帶	I E b	12.4 6.6 5.7	小振りの直口口縁碗。雷文の中心で反転する雷文と反時計回りの雷文を組み合わせる。内・外体面に密な刻花文。内底に團線と菊花文。	淡灰白色の微粒子。	淡青緑色の釉。貫入はない。	総釉後に外底面の釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	接合のため不明
々々 23		I E b	12.2 6.6 5.4	〃。雷文の中心で反転させて連続文とする。内・外体面に密な刻花文。内底に團線と菊花文。	〃。 〃。	〃。 〃。	〃。 〃。	S A20 第3層
々々 24	碗	I E b	11.8 6.8 5.4	〃。 〃。内底に團線と花弁内に八宝文のある菊花文を施す。	白色の微粒子。	〃。 〃。	〃。 〃。	S A19 第4層
々々 25		I E b	15.2 8.0 6.6	大振りの直口口縁碗。雷文の中心で逆転させて連続文とする。内・外体面に密な刻花文。内底に團線と花文。	淡灰白色の微粒子。	明緑色の釉。貫入はない。	外底の大半を欠落。総釉後に外底釉を搔き取る。	S A20 第3層
々々 26	I E b	15.4 7.7 6.4	〃。 〃。内底の印花文は不鮮明。	〃。 〃。	〃。 〃。	総釉後に外底面の釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19 第4層 SK03西側第4層	
々々 27	I E b	14.8 7.4 6.6	〃。 〃。内底に團線と菊花文。	〃。 〃。	〃。 〃。	〃。 〃。	S A20 第2・3層	
第28回 28	I E b	15.5 8.7 6.6	〃。 〃。両面の刻花文は不鮮明。内底に團線と花文。	淡灰色の微粒子。	濃緑色の釉。貫入なし。	〃。 〃。	S A20 第3層	

第18表 雷文帯碗観察一覧

( ) : 推定

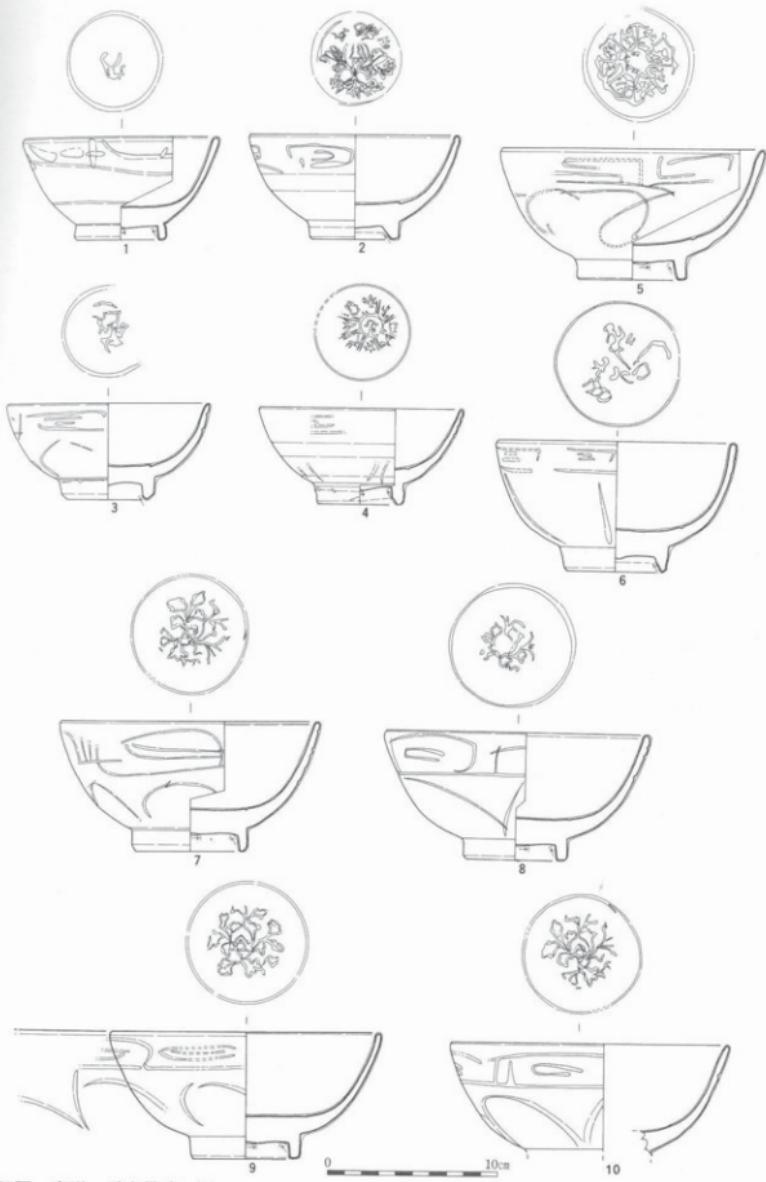
標本番号 図版番号 遺物番号	名称 ・仮称	分類	口径 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素地	釉色 質	施釉	出土地点 出土層
28回 図版13 29		II A	17.0 9.2 6.2	大振りの直口口縁碗。時計回りの雷文を外体面に囲繞。内体面に単独文の雷文を界垂線で区切りその下に草花文。内底の印花は不鮮明。	淡灰色の細粒子。	明緑色 の釉。 貫入なし。	総釉後に外底面の釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19 · 20畦 第2 · 3 層
〃 〃 30		II A	17.0 9.2 6.1	〃。雷文の中心で反転する雷文を外体面に囲繞。内体面の雷文は反時計回りで連続文とし、直下に草花文。内底に團線と花文。	淡灰色の微粒子。	〃 〃	〃	S A19 · 20畦 第3層
〃 〃 31		II A	16.3 9.2 6.6	大振りの直口口縁碗。雷文の中心で逆回転する雷文を外体面に囲繞。内体面の雷文は時計回りの連続文。直下に草花文。内底に吉祥花文と團線。	淡灰白色の微粒子。	明緑色 の釉。 貫入なし。	総釉後に外底面の釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19 · 20畦 第2層
〃 〃 32		II A	16.0 8.8 6.2	〃。〃。内底面に團線と花文。	〃	淡緑色 の釉。 〃	〃	S A19 第3層
〃 〃 33	雷文	II A	16.6 8.4 6.2	〃。外面の雷文は時計回りと反時計回りの組み合わせで囲繞。内面の雷文は反時計回りの雷文を単位として雷文間を界垂線で区切る。雷文直下に人形手文と草花文。内底は吉祥花文と界線。	〃	〃 〃	〃	S A19 第2層 S A19 · 20 第2層
〃 〃 34		II B	17.2 (9.2) (6.2)	〃。〃。内面は三本一組の鋸歯文、界線、花文を型押して施す。	淡灰色の微粒子。	〃 〃	口縁破片で残存部 は総釉である。	S A19 · 20畦 第3層
〃 図版4 35	帶	II C	17.6 9.3 7.0	〃。雷文の中心で逆回転する雷文を外面に施す。内面に草花文。内底に團線と花文を施す。高台は高目。	淡灰白色の細粒子。	明緑色 の釉。 細かい 貫入。	総釉後に外底面の釉を搔き取り蛇ノ目状とする。内割りは深い。	S A20 第2層
29回 〃 36	碗	II C	16.6 8.6 6.2	〃。外面の雷文は時計回りと反時計回りの雷文の組み合わせで囲繞。内面に草花文。内底の印花は不鮮明。	淡灰色の細粒子。	〃 〃	〃	S A19 第3層
〃 〃 37		II C	16.6 9.2 6.6	〃。外面の雷文は不鮮明で雷文の回転方向は不明。内面に草花文。内底は厚く釉掛けされ不鮮明。	淡灰色の微粒子。	淡緑色 の釉。 〃	〃	S A19 · 20畦 第2層
〃 〃 38		II C	15.9 8.3 6.6	外面と内底の雷文や印花は釉が厚く掛けられ不鮮明。内体面に草花文。	淡灰色の細粒子。	淡青色 の釉。 〃	総釉後に外底の釉を搔き取るが稚である。	S A19 第2層
〃 〃 39		II D	16.5 9.0 6.4	大振りの直口口縁碗。外面の雷文は反時計回りの雷文を囲繞。その直下にラマ式蓮弁文。内面に雷文と草花文。内底に團線と花文。	淡灰色の微粒子。	濃緑色 の釉。 貫入なし。	総釉後に外底面の釉を搔き取り蛇ノ目状とする。	S A19 · 20 第2層 S A20 裏込目内
〃 〃 40		II D	16.9 8.7 6.8	〃。外面は雷文の中心で逆回転する雷文を囲繞。雷文直下にラマ式蓮弁文。内体面と内底の文様は厚く釉掛けされ不鮮明。	淡灰色の細粒子。	〃 〃	外底面を欠落する。 II Dと同一手法の釉の搔き取りか。	S A19 · 20畦 第2層

第18表 雷文帯碗観察一覧

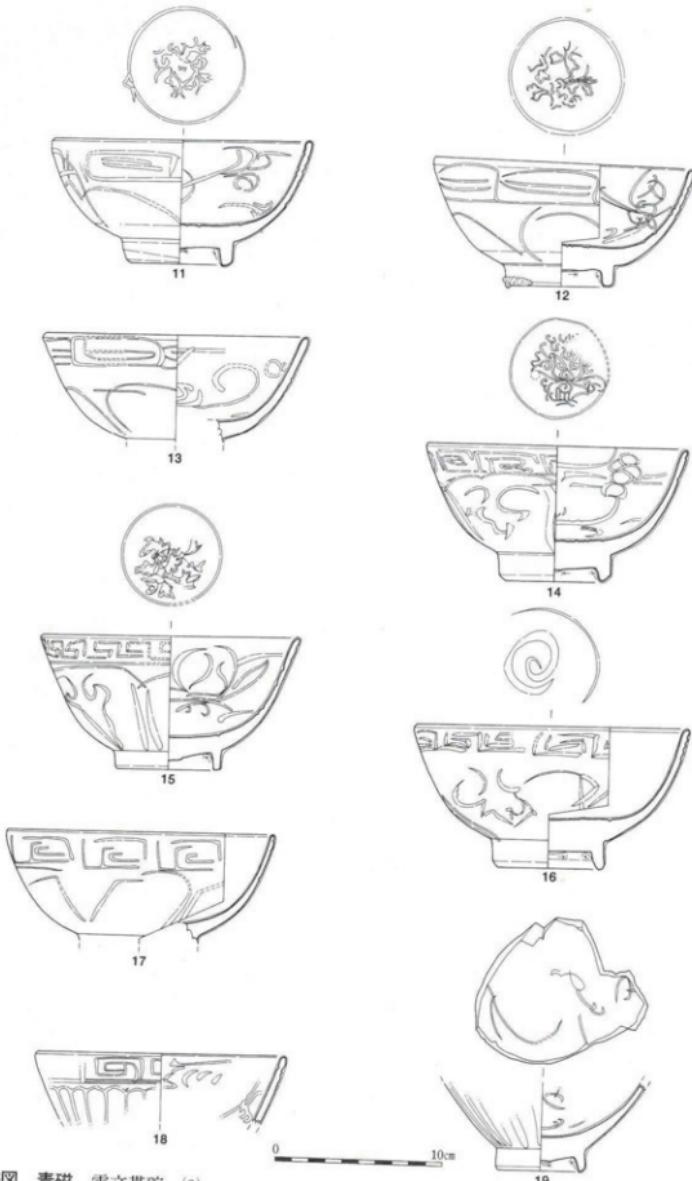
標本番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素 地	釉 色 貫 入	施 釉	出土地点 出土 層
第26図 図版14 41		II D	16.1 8.7 6.0	大振りの直口口縁碗。外面は雷文の中心で逆回転する雷文を回繞。雷文直下にラマ式蓮弁文。内体面の雷文は反時計回りの雷文で回繞。直下に草花文。内底に花文。	淡灰色の微粒子。	明緑色の釉。 貫入なし。	外底面の大半を欠く。総釉後に外底面の釉を搔き取るが雜である。	S A19・ 20畦 第3層
々々 42	雷 文	II E	17.4 9.2 6.6	〃。反時計回りの雷文を外面に施し、直下に劍頭状の蓮弁文を施す。内面の雷文は中心で逆回転の雷文を回繞し、直下に草花文を施す。内底に鳳凰文と「付」の字の反転文字と圓線。	淡灰色の細粒子。	明黄緑色の透明釉。 非常に細かい貫入。	総釉後に外底面の釉を全面搔き取る。内削りは深い。	S A20 第2層 S K03 西側 第4層
々々 43	帶 碗	II A か II C	17.3 9.4 7.0	〃。外面の雷文は僅かに観察できる。他は厚い釉掛けで判然としない。内面は草花文と内底の花文が施されるが全体的に不鮮明。	〃。	明緑色の釉。 非常に細かい貫入。	総釉後に外底釉を搔き取って蛇目状とする。外底に胎土目の陶土が付着。内削りは深い。	S A20 第2層
々々 44		II A か II C	16.6 8.6 6.4	〃。内削りは深い。	淡灰白色の細粒子。	明青緑色の釉。 細かい貫入。	〃。内削りは深い。	S A20 第2層

## 追記

校正中にI群B類b種の2点(第26図11・12)とI群C類a種の2点(第26図14・15)の内体面に描かれた花文は牡丹唐草文であることに気付いた。また、II群A類の6点(第28図30~35)の内体面に印花で施された花は菊(双菊を含む)であることが確認された。II群A類6点の内体面に主文となる花文は、菊唐草文として考えられるようである。



第25図 青磁 雷文帶碗 (1)



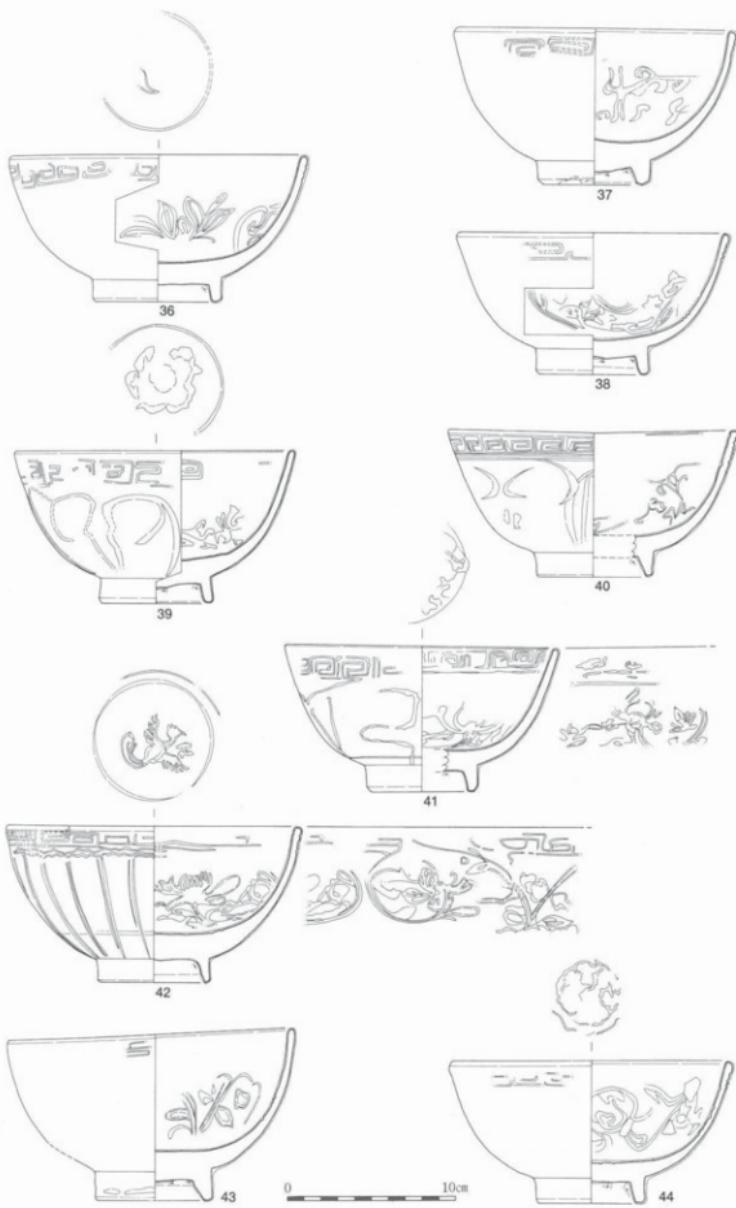
第26図 青磁 雷文帶碗 (2)



第27図 青磁 雷文带碗 (3)



第28図 青磁 雷文帶碗 (4)



第29図 青磁 雷文帶碗 (5)

#### 4. 無文口縁碗

土壤SK01 (S A19・S A20、S A28) 内から出土した無文口縁碗は、高台破片と復元資料から60個体分が推定されている（第19表）。無文口縁碗は口縁形態などからⅠ群からⅢ群までの三群に分けた。その他に内体面に文様を施したものや高台破片が得られている。これについては、その他の資料として項目を設けて紹介する。

Ⅰ群は外反口縁碗、Ⅱ群が直口口縁碗、Ⅲ群は玉縁口縁碗である。個々の特徴などについては第20表に示した。以下に各群の分類概念を記す。

##### ① Ⅰ群 外反口縁碗（第30図、第31図9・10）

外反口縁碗は10個体が復元されている。器のサイズなどからA類とB類の二つに分けた。A類は大振りの碗、B類が小振りの碗である。B類の小振りの碗は口縁形態が豊富で以下のa種～c種の3種類に細分した。

###### Ⅰ群A類（第30図1）

大振りの外反口縁の碗で1点のみ出土している。口縁をゆるやかに外反させた碗である。口唇は舌状に成形し濃緑色の釉を厚く施釉するものである。

###### Ⅰ群B類（第30図2～8、第31図9・10）

小振りの外反口縁碗である。11点が復元されている。口縁形態などからa種からc種までの3種類に分類した。a種…口縁がゆるやかに外反する小振りの碗。口唇は丸味を持って成形するため、口縁が疑似肥厚の口縁となる。器厚はやや厚く、釉色は淡緑色や淡青緑色の二種類の釉薬を主に用いている。外底釉は輪状に掻き取って蛇ノ目状とするのが特徴である。図示した5点（第30図2～6）の中で、同図2の資料のみ諸特徴などから中国南部かペトナム青磁が考えられた。

b種…口縁の外反の折れ具合はa種と類似するが、器壁はa種よりも若干、薄く仕上げられた小振りの碗である。外底面の釉は高台内側途中で止まるものと外底釉を輪状に掻き取って蛇ノ目状とするものがある（第30図7・8）。

c種…口縁が外側に強く折れて鉗縁状となる小振りの碗である。外底面の釉を輪状に掻き取るものと釉が高台内側途中で止まるものがある。内底に印花の双魚文を施したもののが含まれている（第31図9・10）。

##### ② Ⅱ群 直口口縁碗（第31図11～16、第32図17）

直口口縁碗は8個体が復元資料として得られている。器のサイズなどから次の二種類に分類した。大振り碗をA類、小振りの碗はB類とした。

###### Ⅱ群A類（第31図11～13）

大振りの直口口縁碗は3点出土している。3点とも口縁端部近くに浅い界線を施しているものや界線が途中で消えているものがある。内底に圓線と印花の菊花文や草花文を施す。外底釉を輪状に掻き取って蛇ノ目状とする点などで共通性がみられる。同一の窯で製作されたものとみられる。

###### Ⅱ群B類（第31図14～16、第32図17）

小振りの直口口縁碗である。5点出土していて、その内の1点（第31図16）にはA類の大振りの碗で認められた浅い界線を施す。内底の菊花文もA類と同種のものであった。

##### ③ Ⅲ群 玉縁口縁碗（第32図18・19）

口縁に小さな玉縁状の肥厚を有する小振りの碗が2点出土している。2点とも肥厚下端に削りを加えて、内底面に印花を施すが釉溜りのため判然としない（同図18・19）。

##### ④ その他の資料（第32図20～27）

その他の資料として取り扱ったものは、外面が無文で内体面に片切り彫りの雷文と草花文を施した外反口縁の碗（第32図20）の1点と無文口縁碗の高台破片とみられる39点である。高台破片は釉掛けの手法などからⅠ類からⅤ類までの5種類に分類し、必要に応じて便宜的に細分分類を試みることとした。

###### Ⅰ類

総釉後に外底面の釉を輪状に掻き取り蛇ノ目状とするもので18が出土している。高台の高さに基準を設けてA種、B種の二種に分類した（第32図21・22）。

A種：高台外面の高さが高台際まで13.1mm～17.0mmの範囲内にあるもので7点が該当し、1点を図化した（第32図21）。

B種：高台外面の高さが高台際まで10.4mm～13.0mmの範囲内にあるもので11点が該当していて1点を図化した（第32図22）。

## II類

釉が高台内面途中で止まっているもので、外底中央が僅かに盛り上がっているものである。高台の高さの基準はI類に準じA種とB種の二つに分類した（第32図23～25）。

A種：高台外側の高さが高台際まで13.1mm～17.0mmの範囲内にあるもの。A種は3点が出土している。2点を図化した（第32図23・24）。

B種：高台外側の高さが高台際まで10.4mm～13.0mmの範囲内にあるもの、7点出土していて、その内の1点を図示した（第32図25）。

## III類

釉が外底面まで達するもの。2点が出土しているが破片が小さいため図化を省略した。

## IV類

釉が高台外面で止まっているもの。4点が出土しているが、その内の1点を図化した（第32図26）。

## V類

IV類と同様に釉が高台外面で止まっているものである。内底面の釉を円形状に掻き取っているものである（第32図27）。

## 小 結

無文口縁碗の中でI群B類a種（第30図3～6）の4点は成形、釉調、素地などから同一の窯で焼成されたものとして今のところ判断された。その他にII群A類（第31図11～13）の3点とII群B類（同図16）は成形、素地、印花が類似している点などから同一の窯かあるいは近隣の窯で焼成された製品として考えられるところである。中でもII群A類（同図13）とII群B類（同図16）の2点は、内底の印花が菊花文と共通している。これと類似する印花の菊花文は雷文帶碗のI群E類b種に存在するようであり、雷文帶碗と同一の窯かあるいは近隣の窯で焼成された製品として今のところ考えられる。

その他の資料で第32図20に図示した外反口縁の碗は、内体面に雷文と草花文を描いている。内体面の草花文の描き方は、雷文帶碗のI群E類b種にみられる草花文と同種の文様であるが、本品は雷文が片切り彫りである点で異なっている。雷文帶碗は一般的に直口口縁型の碗を指標とし、外面に雷文を主として施すグループであるが本資料は外体面が無文でしかも外反口縁の碗となっているため、現段階では雷文帶碗から除外される資料として考えられるところであるが、将来において類似資料が多量に発見された場合、ひとつのタイプとして型式設定が可能かと思われる。

第19表 無文碗・その他の資料の推定個体数

分 類 個体数	I		II		III	外 (有 反 口 縁)	高台分類								計		
	A	B		A	B			I		II		III	IV	V	I Aか	II Aか	
		a	b	c				A	B	A	B				I B	II B	
推定個体数	1	5	2	2	3	5	2	1	7	11	3	7	2	4	1	2	60
合計	1	5	2	2	3	5	2	1	7	11	3	7	2	4	1	2	60
	10			8		2	1	18		10		2	4	1	2		60

注 口縁破片は除外した。

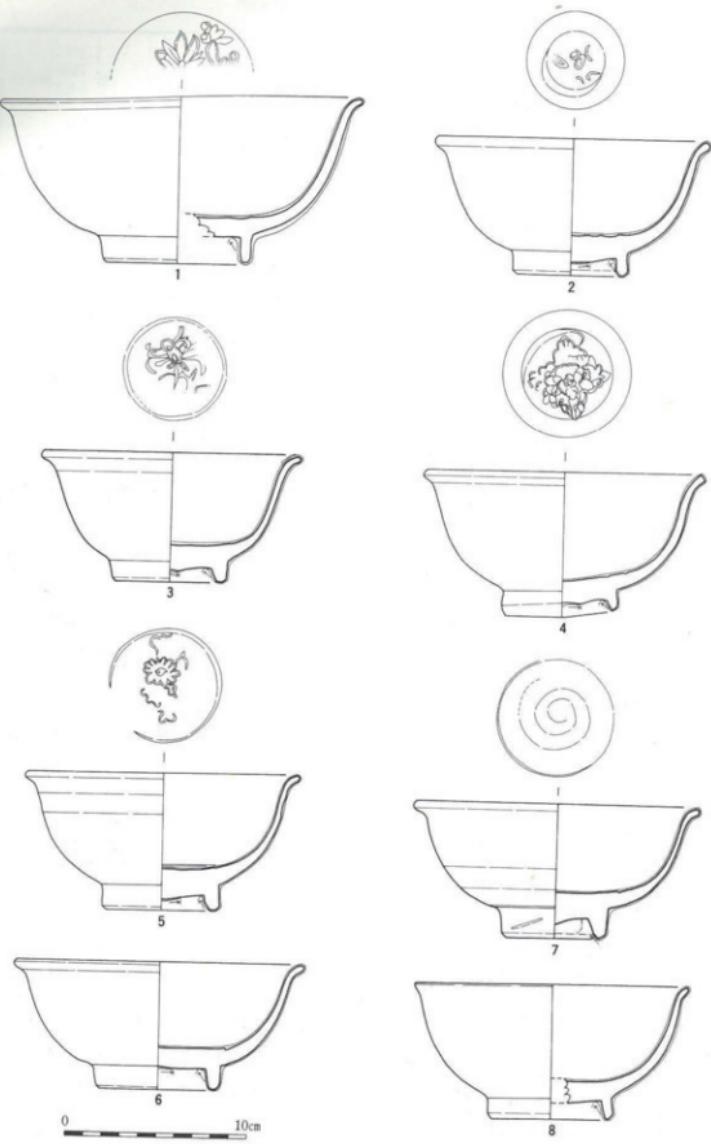
第20表 無文口縁碗観察一覧

横断番号 団体番号 遺物番号	名稱・ 假称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素 地	釉色 貫入	施 釉	出土地点 出土層
第3回 團體15 1	I A	19.8 9.3 8.4	大振りの外反口縁碗。内底に陽圏線と草花文を施すが釉溜りで不鮮明。	淡灰色の微粒子。	濃緑色の釉。 なし。	總釉後に外底面の釉を搔き取つて、蛇ノ目状とする。	S A19・ 20堆 第3層	
外 2	I B a	15.0 7.3 5.8	小振りの外反口縁碗。内底に印花の花文を施すが不鮮明。内底面に針目の目痕。外底面に鉄釉(暗褐色) ? を塗付。ベトナム青磁か。	淡灰色の微粒子。	淡黄緑色。 ~。	總釉後に外底釉を輪状に搔き取つて蛇ノ目状とする。	S A19・ 20堆 第3層	
	I B a	14.2 7.0 5.8	~。内底面に圏線と印花花文。内面口縁に目痕がみられる。	淡灰白色の微粒子。	淡緑青色。 ~。	~。	S A19・ 20 第2・4層	
反 4	I B a	15.2 7.7 6.0	~。~。~。	~。	淡青緑色。細かい貫入。	~。外底面に胎土目の目痕がみられる。	S A19・ 20堆 第3層	
	I B a	15.0 7.4 6.0	~。内底面に圏線と菊花文。	~。	淡緑青色。 なし。	~。~。	S A19・ 20堆 第4層	
口 6	I B a	15.8 6.9 6.4	~。内底面は圏線のみ確認される。	淡灰色の微粒子。	淡青緑色。 ~。	~。外底面に胎土目の目痕あり。	S A19・ 第4層	
	I B b	15.4 7.4 5.6	~。内底面に圏線のみ施す。	~。	淡緑色。 ~。	釉は高台内側の途中まで釉を掛けた後に外底は露胎。	S A20 第2層 S A33 栗石	
碗 8	I B b	14.2 7.3 5.5	~。内底面に幅広の圏線と印花による草花文。	淡灰色の微粒子。	濃緑色。 ~。	總釉後に外底面の釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。	S A20 第2層	
	I B c	15.4 5.4 6.4	鶴縁状の口縁。内底面に圏線と印花による牡丹の花文を施す。疊付を平坦に成形。	~。	緑灰色。 ~。	高台内側の途中まで釉を掛けた後に疊付の釉を除去。	S A19 第3層	
10	I B c	15.0 6.8 5.8	~。内底面に圏線と印花の双魚文。疊付は尖り気味に成形。	淡灰色の微粒子。	明緑色。 粗い貫入。	總釉後に外底面の釉を輪状に搔き取る。	S A19・ 20 第2層	
	II A	16.8 8.2 6.8	大振りの直口口縁碗。外面口縁の端部近くに浅い界線を施す。内底に圏線と菊文。	淡灰白色の微粒子。	~。 なし。	總釉後に外底面の釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。外底に輪状の目痕。	S A19・ 20堆 第3層	
直 12	II A	16.0 8.1 6.6	大振りの直口口縁碗。外面口縁の端部近くに浅い界線を施す。内底は圏線のみ確認される。印花は釉溜りで不鮮明。	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 なし。	總釉後に外底面の釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。外底に輪状の目痕。	S A19・ 20堆 第3層	
	II A	16.8 8.6 7.3	~。外面口縁の端部近くの浅い界線は途切れる。内底に圏線と菊花文。	~。 ~。	~。 ~。	~。 ~。	S A20 第1層 第3層	
14	II B	14.4 7.0 6.5	小振りの直口口縁碗。内底面の文様や印花は二次的な火熱を受けて確認できない。15と同一個体。	灰白色の微粒子。	緑青色。 なし。	外底釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。	S A20 第3層	

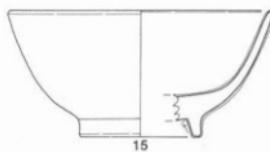
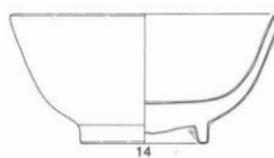
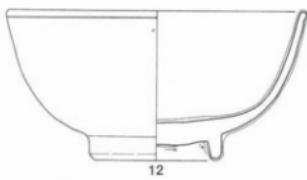
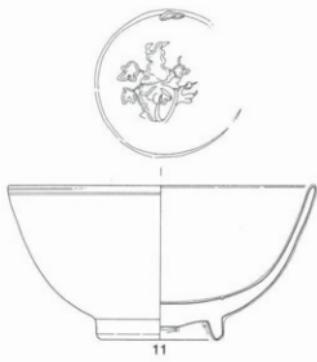
第20表 無文口縁碗觀察一覽

( ) : 推定

銘文番号 国宝番号 遺物番号	名称・ 假称	分類 口径 器高 高台径 (cm)	器形・文様などの特徴	素 地	釉 色 貫 入	施 釉	出土地点 出 土 層
御園 園16 15	II B	14.4 7.0 6.5	小振りの直口口縁碗。内底面の文様や印花は二次的な火熱を受けて確認できない。14と同一個体。	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 なし。	総釉後に外底面の釉を搔き取る。	S A19 · 20畦 第2層
々々 16	直口 口縁碗	II B	12.3 6.6 5.2	〃。外面口縁端部近くに浅い界線を施す。内底面に團線と菊花文。	〃。 〃。	明緑青色。 〃。	総釉後に外底面の釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。外底に目痕あり。
		II B	12.6 7.2 6.2	〃。内底面に菊花文を施すが團線は釉溜りで確認できない。	〃。 〃。	明緑色。 〃。	〃。外底に目痕あり。
御園 々々 17	玉 縁口 縁碗	III	15.6 (7.1) (6.4)	玉縁口縁碗。肥厚帯下端に削りを入れて肥厚を強調。	〃。 〃。	〃。 〃。	〃。 S A19 · 20畦 第2層
々々 18		III	14.8 7.4 6.6	〃。〃。口縁の外反はつきつ折れる。内底に團線と草花文。	〃。 〃。	緑青色。 〃。	〃。外底に目痕あり。 S A19 · 20畦 第1 · 2 層
々々 19	有文 外反 口縁	17.0 — —	大振りの外反口縁。内面に雷文の中で逆転する片切り彫りの雷文を描き、雷文直上に二本界線と雷文直下に一本の界線で雷文を区画。雷文帯直下に草花文。	〃。 〃。	明緑色。 〃。	残存部は総釉。	S A20 · 第3層
々々 20	高台 分類 I A	— — 5.4	内底面に團線と双魚文の印花。図10の双魚文の印花とは異なっている。	〃。 〃。	濃緑色。 〃。	外底釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。外底に目痕あり。	S A20 · 第3層
々々 21	高台 分類 I B	— — 5.6	内底面は印花による草花文を施す。	淡灰色の微粒子。	明灰緑色。 なし。	総釉後に外底釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A20 · 第3層
々々 22	高台 分類 II A	— — 5.6	内底に團線と印花の草花文を施す。	〃。	明青緑色。 〃。	釉は高台内側の途中で止まる。外底に目痕あり。	S A19 · 20畦 第3層
々々 23	高台 分類 II B	— — 6.0	内底面に團線と印花による菊文を施す。	淡灰白色の微粒子。	明緑青色。 〃。	〃。 S A20 · 第3層	
々々 24	高台 分類 II C	— — 5.4	〃。	淡灰色の微粒子。	明黄緑色の透明釉。 なし。	〃。外底面に目痕。	S A20 · 第3層
々々 25	高台 分類 IV	— — 6.1	内底面の印花は十字花文と金玉満宝。	淡灰白色の微粒子。	明青緑色の透明釉。 粗い貫入。	高台外面で釉が止まる。	S A19 · 第3層
々々 26	高台 分類 V	— — 5.0	内底面の釉を輪状に搔き取り露胎とする。内底の印花は菊花文。	灰色の微粒子。	灰緑色。 なし。	〃。 S A20 · 第3層 一括	
々々 27							

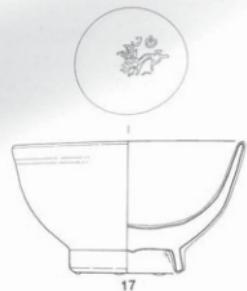


第30図 青磁 無文口縁碗 (1)



0 10cm

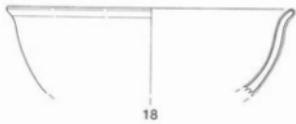
第31図 青磁 無文口縁碗 (2)



17



19



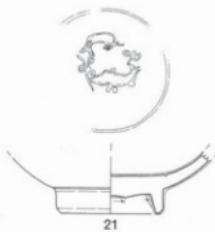
18



20



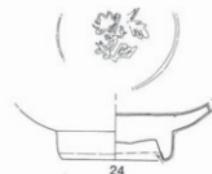
23



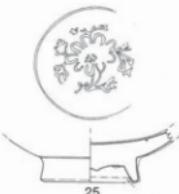
21



22



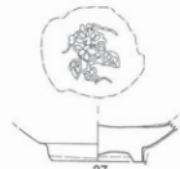
24



25



26



27

第32図 青磁 無文口縁碗 (3)

## B. 青磁皿

土壤SK01 (SA19・20、SA28) 内より出土した青磁皿の種類として、口折皿 (58個体相当)、外反口縁皿 (62個体相当)、玉縁口縁皿 (10個体相当)、直口口縁皿 (54個体相当)、稜花皿 (3個体相当)、八角皿 (4個体相当)、の6種類 (191個体) であった。191個体は復元可能な資料を数えたもので高台片の片数である69片を加えると260個を数える。

分類に際しては器形を優先し、上記の6種類を各器形の中で文様構成などから群、類、種などの細分分類を試みることにした。以下、口折皿、外反口縁皿、玉縁口縁皿などの順に各種の皿の分類概念を記すことにする。個々の特徴などについては各種の皿ごとに觀察表に呈示した。

### 1. 口折皿

いわゆる鉢縁皿と称されているグループで、口縁が折れて平鍔をもつものをI群とした。内底面に施された文様などからI群はイとロに分類した。イは内底面に双魚文の貼り付け (4個体) と印花の双魚文 (17個体) を施したグループである。ロは内底面に印花の花文や草花文 (37個体)などを施したグループである。以下、I群イ、I群ロの分類概念を記す。

#### ① I群イ (第33図1~11、第34図12-A・B)

I群イは内底面の双魚文 (貼り付けか印花) の施し方や外体面の蓮弁文の描き方などからA類からD類までの4類までに分類し、文様や施釉などからa種・b種などに細分した。

#### A類 (第33図1~3)

内底面に貼り付けや浮き文の双魚を施したものである。A類は4個体相当が得られていて、その内の1点は肉厚の双魚文を貼り付けた底面の破片資料であった。他の3個体は外体面の文様の描き方や口造りなどからa種～c種までの3種類に細分した。

a種…外体面に弁先の尖った鎌蓮弁文を廻らす口折皿である。内底面に双魚文を貼り付けている。鍔上面が僅かに浅く窪み、鍔内端に明瞭な稜が走る。豊付の幅が1mm~1.3mmと狭く、豊付と高台内側の一部の釉を搔き取って露胎とするもの (第33図1)。

b種…外体面は肉厚の無鎌蓮弁文を廻らす口折皿で、内底面に双魚文を貼り付けている。鍔造りは平坦であり、鍔内端の棱は不鮮明である。全面施釉の後で豊付の釉のみを搔き取って露胎とする (第33図2)。

c種…外体面に二叉線様の蓮弁文を廻らす口折皿で、間隔の空いた蓮弁文を腰下部まで描く。鍔上面が浅く窪む。鍔内端の棱は鮮明である。外面の釉は高台外面途中で止まり豊付から外底面を露胎とする (第33図3)。

#### B類 (第33図4・5)

内底面に印花による双魚文を刻印したものであり、2個体が得られている。口頸部の屈曲の折れがゆるくルーズである。外体面の文様や釉掛けの手法などからa種・b種の2種類に細分した。

a種…外体面に範描きでやや肉厚の無鎌蓮弁文を廻らす口折皿で、内底面に印花の双魚文を施す。外面の釉は高台外面で止まり、豊付から外底面を露胎とする (第33図4)。

b種…a種と同様にやや肉厚の範描きの無鎌蓮弁文を外体面に廻らす口折皿で、内底面に印花の双魚文を施す。全面施釉後に外底面の釉を輪状に搔き取っているが釉の搔き取りが雜で徹底しない (第33図5)。

#### C類 (第33図6~11)

内底面の印花はB類と同様の双魚文を刻印し、口頸部の屈曲の折れがルーズな点や鍔が内側に若干、傾斜する点はB類と近似するが、釉色や素地などで異なっている。本類には薄手と厚手のものが存在する。薄手のものをa種、厚手のものをb種とした。C類が最も多く出土している14個体が得られている。

a種…外体面に範描きの蓮弁文を廻らす薄手の口折皿であるが蓮弁文の描き方に一貫性がない。蓮弁文の間隔においても間が空くものと詰まるものがある。全面施釉の後に外底面の釉を輪状に搔き取って「蛇ノ目」状とする。本種は8個体分が得られている。8個体分のサイズの最小と最大は口径が11.0~12.0cm、高さが3.3~3.6cm、高台径は5.3~5.8cmの範囲内に収まる。平均的なサイズは口径が11.6cm、高さ3.4cm、

高台径5.4cmであった。a種の8個体は同一の窯で製作、焼成されたものとみられる。良好な資料を3個体図化した（第33図6～8）。

b種…外体面の文様の描き方や蓮弁文の間隔はa種と同様な手法で描かれているが本種は厚手の口折皿である。全面施釉の後に外底面の釉を輪状に搔き取って「蛇ノ目」状とするものと外底のみ釉搔きするものがある。6個体分が得られている。6個体分のサイズの最小と最大は、口径11.0～12.4cm、高さが3.2～3.8cm、高台径5.6～6.0cmの範囲内に収まる。平均的なサイズは口径11.9cm、高さ3.5cm、高台径5.8cmであった。本種はa種と比較した場合、サイズに於いてはb種が僅かながら大きいようである。b種の皿は若干、文様も異なっていて別々の窯で製作・焼成されたようである。b種の皿の中で仮にA窯とB窯に分けた場合、A窯の文様は弁先が尖り、弁尻は幅広となり花弁7枚で一周する。B窯は蓮弁の描き方に一貫性がなく、蓮弁の間隔で間が空くものと間が詰まるものがある。b種の中にはA窯・B窯ともそれぞれ3個体ずつ得られている。素地の面などからa種と比較検討の結果、a種と同一の窯はb種のA窯が同一の窯で製作・焼成されたようである。b種のB窯は別の窯で製作・焼成されたものとみられる。A窯の良好なものを1点図示し（第33図9）、B窯のものを2点図示（第33図10・11）した。

#### D類（第34図12-A・B）

口径が13.9～14cmを測ったやや大振りの口折皿である。二個体分得られている。厚手の皿で、鍔内端に明瞭な棱が走るものと不鮮明な稜がみられるものがある（第34図12-A・B）。

#### ② I群口（第34図13～22、第35図）

I群イと同形態の口折皿のグループで、内底面に花文、菊花文、八宝文花文などを刻印するものである。I群ロのグループでは復元可能な個体数は36個体であった。本群は外体面の文様や釉掛けなどの手法などからA類～J類までの10類に分類し、必要に応じてa種、b種の二種に細分した。

#### A類（第34図13～16）

外体面に篦書きで肉厚の無錫蓮弁文を施した口折皿である。鍔上面が僅かに浅く窪む程度で、鍔内端の稜は明瞭なものと不鮮明なものがある。A類にはやや深目の皿が1点のみ出土している。全面施釉であるが外面の釉は高台外面で止まり、置付から外底面まで露胎とする。4個体得られていて全てを図化した（第34図13～16）。

#### B類（第34図17・18）

外体面に篦書きでやや肉厚の無錫蓮弁文を描いた口折皿である。鍔上面が浅く窪むものと平坦となるものがある。鍔内端の稜は明瞭なものと不鮮明なものがある。A類と同様にやや深目の皿が存在する。外面の釉は置付で止まるものと高台内面途中で止まるものがある。3個体出土していて、2個体を図化した（第34図17・18）。

#### C類（第34図19・20）

外体面に篦書きの蓮弁文を廻らす口折皿で、蓮弁文の描き方で間隔の空くものと詰まるものがある。鍔上面を僅かではあるが浅く窪ませている。鍔内端の稜は不鮮明である。全面施釉の後に外底面の釉を全面搔き取るものと外底釉を輪状に搔き取って「蛇ノ目」状とするものがある。2点出土していて、これを図化した（第34図19・20）。

#### D類（第34図21）

外体面に二叉線の蓮弁文を廻らすもので、全面施釉後に外底面の釉を輪状に搔き取って「蛇ノ目」状とする。口頭部の屈曲はゆるくルーズである。1点のみ得られている（第34図21）。

#### E類（第34図22、第35図23～27）

外体面の篦書きの蓮弁文はC類と同様に蓮弁の間隔で間が空くものと間が詰まるものがある。釉は全面施釉の後で外底面の釉を輪状に搔き取って「蛇ノ目」状とするものと外底面の釉を離して露胎とするものがある。本類の口折皿が最も多く出土していて15個体分が得られている。任意に厚手と薄手の二者に細分した。前者をa種、後者をb種として細分した。

a種…外体面の蓮弁文は間隔の空いた厚手の皿で、浅皿と深皿の二種が存在する。4個体分が検出されている。

皿の最小と最大のサイズは口径が12.2～12.6cm、高さ3.5～4.2cm、高台径は5.0～6.2cmであった。平均

的なサイズは口径12.4cm、高さ3.6cm、高台径5.7cmであった。この平均値から深皿を除外した場合の平均は口径12.3cm、高さ3.5cm、高台径5.9cmとなる。浅皿（第34図22）と深皿（第35図23）の2点を図化した。

b種…外体面の蓮弁文は間隔が空くものと繋がるものがある。薄手の口折皿で11個体が出土している。皿の最小と最大は口径が11.1~12.5cm、高さが3.2~3.8cm、高台径は4.8~6.1cmの範囲内に在る。平均的なサイズは口径が11.8cm、高さ3.5cm、高台径5.8cmであった。素地などから本種はI群イのC類b種のA窯とした窯に所属するものとみられる。良好な資料を4点のみ図化した（第35図24~27）。

#### F類（第35図28・29）

本類は器壁が非常に厚い口折皿である。蓮弁文の描き方に一貫性がなく、花弁に間隔が空くものと詰まるものがある。F類のみ錫上面に3・4本単位の櫛書きの波状文を描く。3個体出土していて2点を図化した（第35図28・29）。

#### G類（第35図30・31）

外体面の蓮弁文の間隔において間が空くもので、黄茶色の釉を全面に施した後で外底面の釉を輪状に搔き取っているものと外底面の釉を全て搔き取るものがある。3個体出土していて2点を図化した（第35図30・31）。

#### H類（第35図32）

外体面の篦書きの蓮弁文の間隔はC類と同様に間隔が空くものと詰まるものがある。外面の釉は外底面の一部まで釉が達しているため、釉の搔き取りを忘れたものとみられる。2個体出土していて1点を図化した（第35図32）。

#### I類（第35図33）

本類は内底に印花を施し忘れたものや施釉手法が破損により判然としないものをまとめた。3個体得られていて、その内の1点を図示した（第35図33）。

#### J類（第35図34）

外体面に弁先の尖った蓮弁文を連続した形で繋ぎ描くもので、内体面に篦彫りの蓮弁文を施す。全面施釉の後で内底面と外底面の釉を輪状に搔き取って「蛇ノ目」状とするものである。1点のみ得られている（第35図34）。

第21表 口折皿推定個体数

分類 個体数	I群イ						I群ロ						高台破片				小計	合計															
	A		B		C		D	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J																
	a	b	c	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b																
推定個体数	1	1	1	1	1	8	6	2	4	3	2	1	4	11	3	3	2	3	1	58	1	1	2	60									
計	1	1	1	1	1	8	6	2	4	3	2	1	4	11	3	3	2	3	1	58	1	1	2	60									
	3								14																								
	21								37																								

注：口縁破片の数は除外した。

第22表 口折皿観察一覧

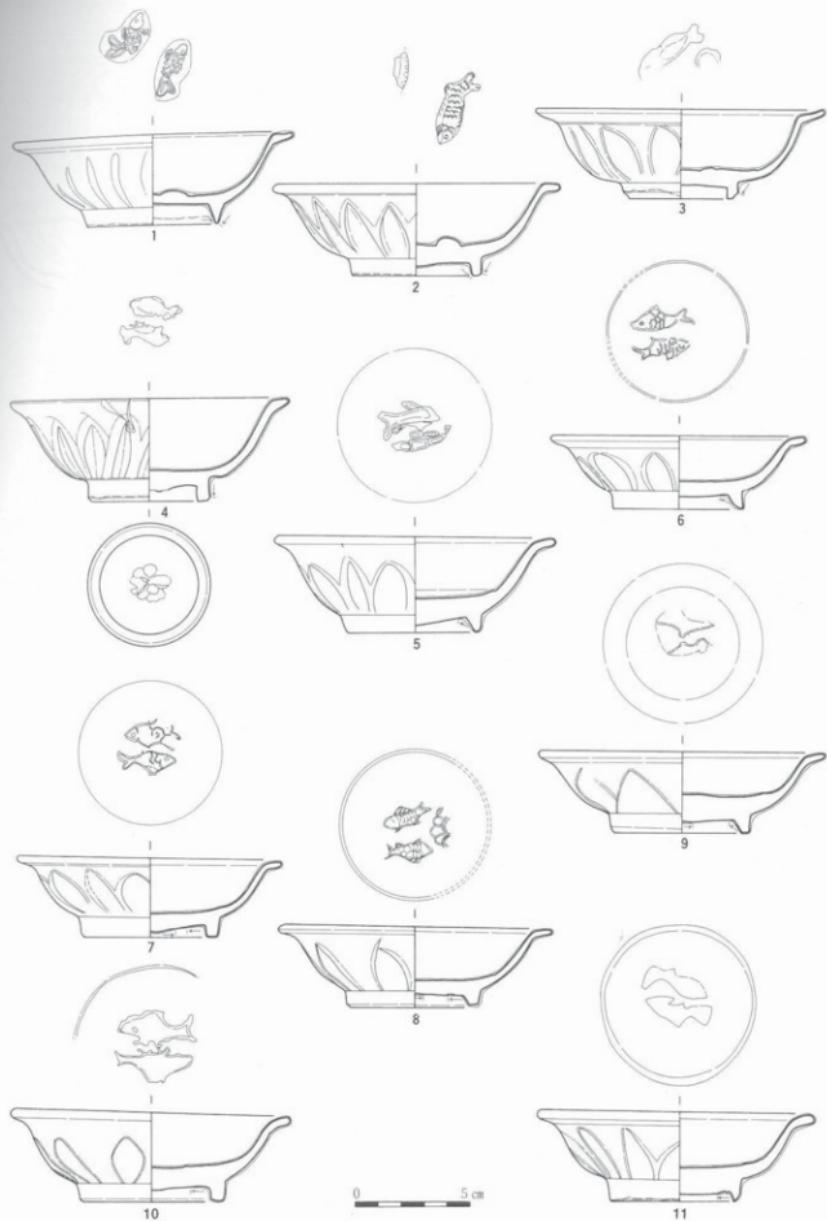
標記 図版番号 遺物番号	名稱 ・仮称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	素地	釉色 貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第3回 図版18 1	I イ A a	12.4 3.9 5.8	灰白色の微粒子。	淡青色。貫入なし。	鈎上面が僅かに浅く窪む。鈎内端に明瞭な稜。外体面に鏽渦弁文を描く。内底に腹を合わせた双魚文を貼り付ける。豊付と高台内側の途中まで露胎とする。他は全面施釉。	S A19 一括	
〃 〃 2	I イ A b	12.6 4.1 5.6	濃灰色の細粒子。	灰青色。 〃。	鈎上面を平坦に形成する。鈎内端の棱は不鮮明。内底面に厚みのある双魚文を貼り付ける。豊付のみ露胎させる。肉厚の蓮弁文を描く。	S A20 第2層	
〃 〃 3	I イ A c	12.5 4.0 4.5	〃。	青灰色。 〃。	鈎上面が浅く窪む。外体面に二叉線様の蓮弁文を描く。内底面に小振りでやや肉厚の双魚文を施す。高台外面途中から外底面は露胎。	S A19・ 20往 第2層	
〃 〃 4	I イ B a	12.2 4.5 5.0	濃灰色の粗粒子。劈開面に微細な気泡痕が多く観察される。	淡青色。両面に粗い貫入。	やや深目の皿。鈎の屈曲はゆるい。外体面にやや肉厚の無鏽蓮弁文を範描きする。内底面に腹を合わせて頭の向きが反時計回りの双魚文を刻印する。豊付から外底面のみが露胎。	S A20 第2層 第3層	
〃 〃 5	I イ B b	12.4 4.3 5.5	淡灰色の細粒子。微細な黒色鉱物が僅かに混入。	淡緑色。 〃。	〃。〃。内底面に腹を合わせて頭の向きが時計回りの双魚文を刻印する。高台内面を斜面に削って仕上げる。全面施釉後に外底面の釉を雜に釉搔き。	S A19・ 20 第1層	
〃 〃 6	I イ C a	11.2 3.2 5.7	灰白色の微粒子。	淡灰緑色。貫入はない。	薄手の口折皿。外体面に範描きの蓮弁文を描く。内底に陽圏線と腹を合わせて頭の向きが反時計回りの双魚文を施す。外底面のみ露胎で、他は全面施釉。	S A19 第3層	
〃 〃 7	I イ C a	11.6 4.5 5.8	〃。	〃。 〃。	釉後に外底面の釉のみ輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19・ 20往 第3層	
〃 〃 8	I イ C a	12.0 3.6 5.5	〃。	淡灰緑色。 〃。	〃。内底面に双魚文以外に葉文と雲文の組み合わせ文を刻印する。外底面のみ釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。外底面に砂目の目痕。	S A20 第3層	
〃 〃 9	I イ C b A 番	12.4 3.5 5.8	〃。	淡緑青色。 〃。	厚手の口折皿。外体面に弁房が幅広となる蓮弁文を範描き。内底面に陽圏線と不鮮明な双魚文を施す。外底面のみ輪状に搔き取って露胎。	S A19・ 20 第2層 畦	
〃 〃 10	I イ C b B 番	12.2 3.8 6.2	〃。	淡灰緑色。両面に粗い貫入。	〃。外体面に範描きの蓮弁文。内底面に陽圏線と腹を合わせて頭の方向が反時計回りの双魚文を刻印する。外底は蛇ノ目状に釉を搔き取る。	S A19・ 20 第2層	
〃 〃 11	I イ C b B 番	12.0 4.0 5.3	淡灰白色的微粒子。	灰緑色。貫入はない。	厚手の口折皿。外体面に範描きの蓮弁文。内底面に陽圏線と双魚文を施す。外底面の釉を全体的に搔き取って露胎とする。	接合のため不明。	
第3回 〃 12 A	I イ D	13.7 4.7 6.2	〃。	濃緑色。 〃。	やや大振りの皿。鈎内端直下に削りを加えて稜線を意図的に造る。外体面にスリムな範描き蓮弁文を施す。内底面に陽圏線と背中合わせで頭が反時計回りの双魚文を施す。外底面は蛇ノ目状に釉を搔き取り露胎とする。	S A19・ 20 第3層	
〃 〃 12 B	I イ D	14.1 4.4 6.7	淡灰白色的微粒子。	明青緑色。貫入はない。	外体面に範描きの蓮弁文を施したやや大振りの皿。内底面に陽圏線と背中合わせで頭が反時計回りの双魚文を施す。外底面の釉を雜に搔き取っている。	接合のため不明。	

第22表 口折皿観察一覧

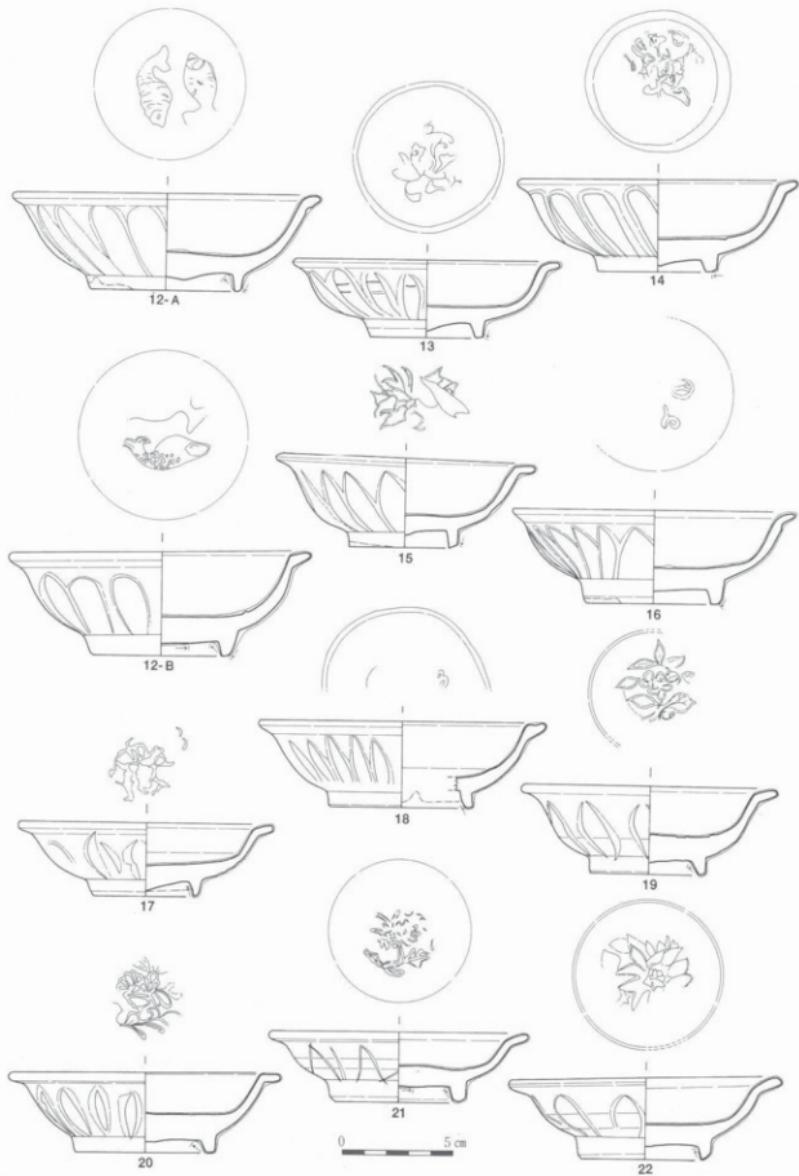
標題番号 図版番号 遺物番号	名前・假称	分類	口径 高台径 (cm)	素地	釉色 貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
新39 図版19 13	I 口 A	12.1 3.5 5.0	淡灰色の微粒子。	淡緑色。 貫入はない。	外体面に篦描きで肉厚の無鉢蓮弁文を廻らす。 内底面に陽圏線と草花文。豊付から外底面は露胎である。	S A 19・ 20 第2層	
〃 〃 14	I 口 A	12.8 4.1 4.9	灰白色の微粒子。	淡青緑色。 〃。	〃。鏡内端直下に丸彫りで削りを加えて稜線を意図的に造る。内底面に陽圏線と草花文。印花は上記13と同一とみられる。豊付から外底面は露胎である。	S A 20 第2層	
〃 〃 15	I 口 A	11.8 4.0 4.9	淡灰色の細粒子。 微細な黒色鉱物が僅かに混入。	〃。 〃。	〃。内底面に印花で菊花文を施す。豊付から外底面までを露胎とする。他は全面施釉。	S A 19・ 20畦 第3層	
〃 〃 16	I 口 A	12.8 4.3 5.4	淡灰白色の微粒子。	明青緑色。 〃。	外体面に篦描きで弁先が劍先状となる蓮弁文を繋ぎ文として展開。内底面に陽圏線と草花文を施す。豊付から外底面までを露胎とする。	S A 19・ 20畦 第1層	
〃 〃 17	I 口 B	11.7 3.3 4.8	淡灰色の細粒子。	〃。 〃。	外体面にやや肉厚の蓮弁文を篦描きする。内底面は印花による草花文?を施す。外面の釉は高台内面途中まで施されている。	S A 19・ 20畦 第1層	
〃 〃 18	I 口 B	12.6 4.0 6.3	淡灰色の微粒子。	明緑色。両面 に粗い貫入。	〃。蓮弁の花弁は密に描かれている。鏡上面が浅く窪む。内底面に陽圏線と花文を施す。露胎となる箇所は高台内面途中から外底面である。やや深目の皿。	D-16 黒褐色 第3層	
〃 〃 19	I 口 C	11.6 4.1 5.2	灰白色の微粒子。	濃青白色。 貫入はない。	外体面に篦描きの蓮弁文。内底面に陽圏線と印花文を施す。全面施釉後に外底面の釉のみを搔き取り露胎とする。	S A 19・ 20畦 第4層	
〃 〃 20	I 口 C	12.5 3.7 6.2	淡灰白色の微粒子。	〃。 〃。	外体面にやや肉厚で細身の蓮弁文を描く。内底面に印花文を施す。全面施釉後に外底面の釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。鏡上面が僅かに浅く窪んでいる。	S A 19 第2層 S A 34 栗石直下	
〃 〃 21	I 口 D	11.8 3.2 6.2	淡灰色の微粒子。	淡緑灰色。 貫入はない。	外体面は明瞭な輪轉痕の上から二叉線で蓮弁文を描く。内底面に陽圏線と菊花文を施す。外底面は全面施釉後に輪状に搔き取る。	S A 20 第2層	
〃 〃 22	I 口 E a	12.3 3.5 5.6	淡灰白色の微粒子。	緑白色。 〃。	外体面は輪轉痕の上から篦描きの蓮弁文を描く。内底面に陽圏線と菊花文を施す。外底面の釉を難に搔き取る。	S A 19・ 20畦 第3層	
新39 23	I 口 E a	12.6 4.2 5.0	〃。	淡緑青色。 〃。	やや深目の皿。外体面に篦描きの蓮弁文を描く。内底面に陰圏線と菊花文を施す。外底面の釉は全面施釉後に輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。	S A 19・ 20 床面	
〃 〃 24	I 口 E b	11.8 3.4 6.0	灰白色の微粒子。	淡灰緑色。 〃。	外体面に篦描きの蓮弁文を描く。鏡上面が僅かに浅く窪む。内底面に陽圏線と草花文を施す。外底の釉は輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。	S A 19・ 20畦 第2層	
〃 〃 25	I 口 E b	11.4 3.8 5.8	淡灰白色の微粒子。	明灰緑色。 〃。	〃。内底面に鮮明な陽圏線と草花文を施す。外底面の釉は輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。	S A 19・ 20畦 第2層	
〃 〃 26	I 口 E b	11.1 3.4 5.0	〃。	〃。 〃。	〃。内底面に陽圏線と八宝花文を施す。外底面の一部まで施釉したままで放置する。八宝花文の花芯に「平八」?字款。	S A 20 第3層	

第22表 口折皿観察一覧

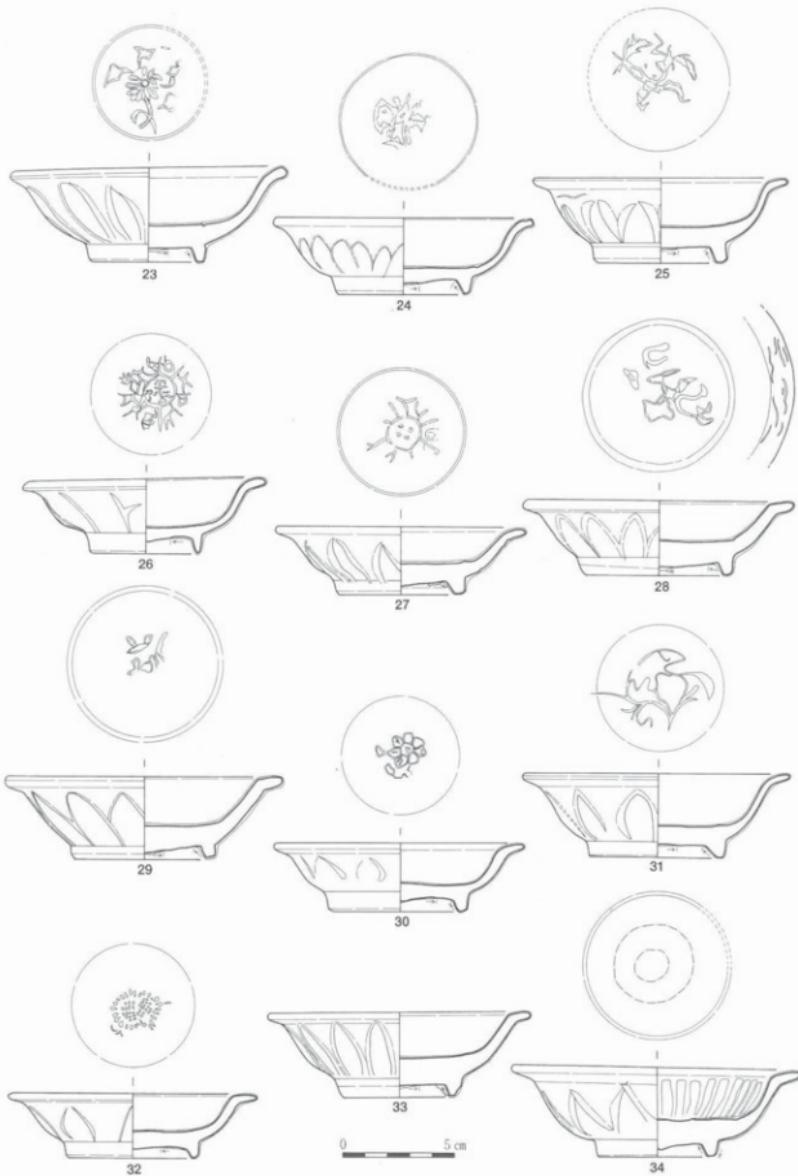
標番号 図版番号 遺物番号	名称 假称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	素地	釉色 貫入	器形、文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
数3回 図版19 27	口 折 皿	I □ E b	11.3 3.2 5.8	淡灰色の細粒子。	明緑色。 貫入はない。	外体面に篦描きの蓮弁文を描く。内底面に陽圏線と八宝花文を施す。外底面の一部まで施釉したままで放置する。外底面に砂胎土目の目痕がある。	S A20 第2層
〃 図版20 28		I □ F	12.0 3.4 6.6	淡灰白色の微粒子。	〃。 両面に細かい 貫入。	鶲上面に三本単位の櫛描きで波状文を描く。外体面に蓮弁文を描く。内底面に印花花文を施す。外底面のみ輪状に釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19・ 20畦 第1層 第4層
〃 〃 29		I □ F	12.5 3.7 6.3	淡灰色の微粒子。	濃緑色。 〃。	鶲上面に四本単位の櫛描きで波状文を描く。 〃。内底面に印花花文を施すが不鮮明である。外底面の釉搔きは上記28と同一。素地などから上記28と同一の窯で焼成か。	接合のため不明。
〃 〃 30		I □ G	11.4 3.1 5.8	灰色の細粒子。	淡黄茶色。両 面に非常に細 かい貫入。	外体面に篦描きの蓮弁文を雜に描く。内底面に 浅目の陽圏線と菊花文を施す。外底面のみ釉を 輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19・ 20畦 第2層 第3層
〃 〃 31		I □ G	12.2 3.8 6.0	淡黄白色の粗粒子。 微細な黒色鉱物が 多量に混入。	緑黄色。 〃。	〃。〃。〃。〃。	S A20 第2層
〃 〃 32		I □ H	11.2 3.0 5.5	淡灰白色的微粒子。	濃緑色。貫入 はない。	外体面に篦描きの蓮弁文。外面は外底面の一部 まで施釉し、そのまま放置。内底面に陽圏線と 菊花文を施す。	S A19 第3層
〃 〃 33		I □ I	11.8 3.9 5.0	灰白色的微粒子。	淡緑色。 〃。	外体面に密で細身の蓮弁を篦描きする。鶲内端 直下に丸彫りを加えて棱を造る。内底面に印花 がない。外底釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とす る。外底面と高台内側に砂胎土目の目痕がある。	S A20 第2層
〃 〃 34		I □ J	13.0 4.2 5.2	淡灰色の微粒子。	明青緑色。両 面に粗い貫入。	鶲上面が浅く窪む。外体面は弁先の尖った蓮弁 文を連續文として堊ぎ描く。内底面には篦描き の蓮弁文を描く。内底面の釉を輪状に搔き取つ て蛇ノ目状とし、その周辺に陽圏線が認められ る。外底面の釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19・ 20畦 第3層



第33図 青磁口折皿 (1)



第34図 青磁 口折皿 (2)



第35図 青磁口折皿 (3)

## 2. 玉縁口縁皿

土壤 S K01 (S A 19・20、S A 28) 内から出土した復元可能な玉縁口縁皿は10個体が得られている。その他に玉縁口縁皿の口縁破片が10片得られていて、これを含めた推定個体数は20個体相当であった。

玉縁口縁皿には無文と有文の2種類が存在したため、無文のものをI群、有文のものをII群として大別した。

I・II群の中で器のサイズなどを検討しながらA類とB類の2種類に分けた。また、釉の搔き取りの手法や施釉の状況などからa種・b種の2種に細分した。ここでは分類概念のみを記述し、個々の特徴などについては第25表の観察表に示した。

### ① 無文玉縁口縁皿

#### I群 (第36図1~6)

無文玉縁口縁皿は器のサイズの中で器高において基準を設定した。器高が3.9cm未満のものを浅皿とし、3.9cm以上のものを深皿とした。前者の浅皿はA類とし、後者の深皿をB類とした。

##### A類 (第36図1~4)

A類の浅皿は5個体が得られている。A類浅皿の最小と最大のサイズは口径が11.7cm~12.0cm、器高3.3cm~3.7cm。高台径は5.8cm~6.9cmの範囲内に収まるもので平均的なサイズは口径11.8cm、器高3.4cm、高台径6.3cmであった。A類の口縁にはやや大き目の玉縁状の肥厚を意識して成形している。内底面を全釉するものと内底面の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状(円形状の釉搔きも含む)とするものの二者が存在する。施釉や釉搔きの状況から前者をa種として位置づけて後者をb種として分類した。

a種…内底面の釉を全釉した浅皿で3個体が得られている。器のサイズは口径が11.8cm~12.0cm。器高は3.4cm~3.7cm、高台径が5.8cm~6.9cmの範囲内に存在する。平均的なサイズは口径11.9cm、器高3.5cm、高台径6.4cmであった。a種は内底面に印花の菊花文や花文を施す。外底面の釉は蛇ノ目状に搔き取って露胎とするものである。2点を図示した(第36図1・2)。

b種…内底面の釉を全釉の後で蛇ノ目状に搔き取り露胎とするものである。2個体得られているが2点とも個別の窯で焼成されたとみられる資料にも拘らず器のサイズは均一的で差がほとんどない。僅かに器高が1mm程度の誤差しか生じていない(口径は2点とも11.7cm、器高が3.3cmと3.4cm。高台径は2点とも6.3cm)。2点を図化した(同図3・4)。

##### B類 (第36図5・6)

器高が3.9cm以上のものを深皿とした。4個体分が得られている。口縁にやや大きめの玉縁状の肥厚を造るものと小さめの玉縁状の肥厚を造るものが存在するようである。B類は内底面に印花で花文や構図不詳の印花などを施す。外底面の釉の搔き取りの手法で明確なものは蛇ノ目状とするものが1点のみ存在し、他の3点は外底面の中央が破損により欠落したため不明なものである。B類の最小と最大のサイズは口径12.0cm~12.8cm、器高3.8cm~4.3cm、高台径6.4cm~6.8cmであった。平均的なサイズは口径12.3cm、器高4.0cm、高台径6.5cmが求められた。良好な資料を2点図化した(同図5・6)。

第23表 玉縁口縁皿推定個体数

分類 個体数	I群		B 群	計	口 縁 破 片	小 計	小 計	合 計						
	A													
	a	b												
推定個体数	3	2	4	1	10	10	10	20						
計	3	2	4	1	10	10	10	20						
	5													
	9													
				1	10									

第24表 玉縁口縁皿観察一覧

編番号 測定番号 遺物番号	名 称・假称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	素 地	釉 色 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
製造 箇所21 1	I A a	11.8 3.4 5.8	淡灰色の微粒子。	濃灰緑色。貫入なし。	外体面にやや明瞭な輪轍痕。内底面に印花の菊花文を施す。豊付の両端を斜位に削り取って豊付を尖らす。外底面の釉は蛇ノ目状の搔き取り。	S A19・ 20 第2層	
	I A a						
文 玉 縁 皿	I A b	11.7 3.8 6.3	灰色の細粒子。	淡緑灰色。貫入はない。	肥厚帯下端に軽く削りを加える。内底面に陽圏線が存在する。内底面の釉を円形状に搔き取り露胎とする。外面の釉は高台外面で止まり豊付から外底面を露胎とする。	S A19・ 20 第2層	
	I A b						
文 玉 縁 皿	I B	12.8 4.6 6.4	灰白色の微粒子。	濃緑色。 “”	外体面中央に輪轍痕。肥厚帯下端に削りを加えるが徹底しない。内底面は陽圏線を施し、圏線内側の釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。外面の釉は高台外面から豊付まで達する。	S A19 第3層	
	I B						
有 文	II	10.6 3.5 6.0	“”	明緑色。両面に粗い貫入。	口縁の肥厚は小さい玉縁であるが肥厚帯直下に削りを加えている。口唇、豊付、外底面に砂胎土目の目痕。内底面に陽圏線と印花花文。外底面は蛇ノ目状の釉の搔き取り露胎(蛇ノ目状)。	S A20 第2層	
	II						
有 文	II	10.6 3.5 6.0	“”	明緑色。両面に粗い貫入。	口縁の肥厚はやや大きめの玉縁。肥厚帯直下は丸鎌様の工具で削り強調。内底面に陽圏線と印花花文。外底面は蛇ノ目状の釉の搔き取りか?	S A19・ 20 第3層	
	II						



第36図 青磁 玉縁口縁皿

### 3. 外反口縁皿

土壤 S K01 (S A19・20、S A28) 内から出土した外反口縁皿の推定個体数は口縁破片や高台破片を除いて62個体が得られている。外反口縁皿の中には無文皿と有文皿の二種類が存在する。前者の無文皿をⅠ群、後者がⅡ群とした。Ⅱ群の有文皿は棱花皿と称される皿の文様と類似する文様が確認されているようである。以下にⅠ群の無文外反口縁皿とⅡ群の有文外反口縁皿について分類概念を記すことにする。分類に際しては器形、サイズ、施釉手法などから類別あるいは種別に細分した。個々の特徴などについては観察表の第26表に呈示した。

#### ① 無文外反口縁皿

##### I 群 (第37図、第38図15~23)

I 群の無文外反口縁皿は器形や口径、器高、高台径などから浅皿と深皿の二つに大別し、前者をイ、後者をロとした。I 群イ、I 群ロの両者とも器高が4 cm前後を境にイ・ロの二種類とも重なり合うところがあるが器形とのバランスとの兼合いでサイズのみでの分類では明確にイ・ロの両者を分離することは困難である。I 群イ・ロの両者で61個体が得られている。その内訳はI 群イが50個体、I 群ロは12個体であった。I 群イの浅皿は以下のA類からF類までの6類に分類した。さらに施釉手法や素地などから必要に応じて便宜的にa種・b種の2種類に細分した。

##### a. I 群イ (第37図1~14、第38図15~19)

###### ・A類 (第37図1・2)

他の類と比較して器厚が2.9 mmと極端に薄く造られたものと器厚が7 mm前後と極端に厚く造られた皿がそれれ1点ずつ出土している。薄手のものはa種、厚手のものをb種として2種に細分した。

a種…内体面は全釉で外面の釉が高台際で止まっているもの。素地や釉色などから中国南部かベトナム産のものとみられるものが1個体得られている (第37図1)。

b種…全面施釉の後で疊付から外底までの釉を搔き取って露胎とする。内底面に印花による菊文を施すものである。1個体のみ出土している (同図2)。

###### ・B類 (第37図3・4)

器高がやや低目で薄手の浅皿のグループである。浅皿のサイズの最小と最大は口径11.4 cm~11.8 cm、器高2.8 cm~3.0 cm、高台径4.4 cm~5.8 cmの範囲内にあるものを本類とした。本類の平均的なサイズは口径11.6 cm、器高2.8 cm、高台径5.0 cmである。本類に該当する資料は6個体であり、1点のみ除いて全面施釉の後で釉を「蛇ノ目」状に搔き取り露胎とする。内底面の印花は菊文を施すものが4点存在する。B類は二つの窯で焼成された製品とみられる。2点を図化した (同図3・4)。

###### ・C類 (第37図5~10)

浅目でやや厚手の浅皿のグループである。22個体分が得られている。内底面の釉の搔き取りの有無などからa種、b種の2種類に分類した。

a種…内体面は全釉で、外底面の釉が疊付内端から外底を露胎とすると外底面のみ円形状もしくは歪な方形に釉を搔き取って露胎とするものである。本種は10個体が得られていて、サイズの最小と最大は口径10.4 cm~12.6 cm、器高が3.1 cm~3.9 cm。高台径は4.2 cm~6.3 cmの範囲内に収まるものである。平均的なサイズは口径11.6 cm、器高3.5 cm、高台径5.7 cmであった。釉色、素地、釉の搔き取りの手法などから同一系統の窯が予想される。内底面に印花で菊文を省略したのや花文などを施したもののが8点得られている。印花のないものや印花が不明瞭なものが2点が得られている。良好な資料を2点図化した (同図5・6)。

b種…内体面の釉を円形状あるいは「蛇ノ目」状に搔き取って露胎とするものである。12個体分が出土している。釉の搔き取りの手法から便宜的に円形状の搔き取るものをイとし、蛇ノ目状に搔き取るものをロとした。イ・ロ以外に2点は内底面の釉の搔き取りでイに所属するのかロに所属するのかが判然としないものがある。これをハとする。

イは4点あり内1点は円形状に釉を搔き取った後で印花の蓮弁 (ラマ式蓮弁文を四枚で花弁を表現し、

弁内の内線から垂下する五葉文を施したもの)を刻印したものがある。イのサイズの最小と最大は口径10.9cm~12.0cm、器高3.0cm~3.6cm、高台径5.3cm~6.5cmの範囲内に収まるものである。イの平均的なサイズは口径11.5cm、器高3.3cm、高台径5.8cmであった。2点を図化した(同図7・8)。

ロの6点のサイズの最小と最大は口径10.5cm~12.2cm、器高3.2cm~3.8cm、高台径5.7cm~6.3cmの範囲内にある。平均的なサイズは口径11.3cm、器高3.4cm、高台径5.8cmである。2点を図化した(同図9・10)。

ハに所属する2点の器のサイズは口径11.6cmと11.8cm、器高が3.5cmと3.6cm。高台径は5.4cmと5.8cmであった。図化は省略した。b種の総数12点の全般的な器のサイズの平均値は口径11.5cm、器高3.5cm、高台径5.8cmであった。b種は2~3の複数の窯で製作されたものとみられる。

・D類(第37図11~14)

浅目でやや薄手の浅皿のグループで9個体が得られている。D類のサイズの最小と最大は口径11.7cm、器高3.2cm~3.8cm、高台径5.3cm~6.4cmの範囲内にあるものである。平均的なサイズは口径12.3cm、器高3.5cm、高台径5.9cmが求められた。本類は微弱な器形の変化と釉色や素地などの違いからa種、b種の二種類に分類した。a種は二つの窯で焼成された製品とみられる。

a種…全面施釉の後で外底面の釉を蛇ノ目状に搔き取るもの、雜で方形状に搔き取るもの、脛付内側から外底までの釉を全て搔き取るものがある。本種は6個体が得られている。内底面には印花の菊花や牡丹花弁などを施しているものが5点、内底に印花の無いものが1点得られている。本種のサイズの最小と最大は口径11.7cm~12.8cm、器高3.3cm~3.8cm、高台径5.3cm~6.4cmの範囲内にある。平均は口径12.1cm、器高3.6cm、高台径5.9cmであった。2点を図化した(同図11・12)。

b種…全面施釉の後で外底面の釉を円形状に搔き取るものである。3個体が得られている。その内の2点は内底面に印花の無い無文の皿である。サイズの最小と最大は口径12.4cm~12.8cm、器高3.2cm~3.5cm、高台径5.6cm~6.1cmであった。平均的なサイズは口径12.6cm、器高3.3cm、高台径5.9cmを求めた。同一の窯で製作・焼成された製品とみられる。2点を図化した(同図13・14)。

・E類(第38図15・16)

上述したA類からD類までの4類と比較して口径が大きくなる浅皿のグループをE類とした。4個体相当が得られていて厚手と薄手の皿がそれぞれ2点ずつ得られている。厚手のものをa種、薄手のものをb種とした。本類のサイズの最小と最大は口径が13.0cm~14.3cm、器高3.3cm~4.1cm、高台径6.2cm~7.7cmであった。平均的なサイズは口径13.6cm、器高3.7cm、高台径6.7cmであった。

a種…外底面の釉のみ搔き取って露胎とするもので、釉の搔き取りの手法には蛇ノ目状と円形状の二種類が存在する。サイズの最小と最大は口径13.2cm~14.3cm、器高3.8cm~4.1cm、高台径6.2cm~7.7cm。平均は口径13.7cm、器高3.9cm、高台径6.9cmが求められた。2点得られていて1点を示した(同図15)。

b種…外底面の釉を全て搔き取って露胎とするものと釉を搔き取り忘れたものがある。2点とも透明なガラス質の釉を施していて両面に粗い貫入が認められる点などで共通している。サイズの最小と最大は口径が13.0cm~14.1cm、器高3.3cm~3.7cm、高台径6.2cm~6.7cmであった。平均的なサイズは口径13.5cm、器高3.5cm、高台径6.4cmを求めた。1点のみ図示した(同図16)。

・F類(第38図17~19)

高台径が他のA類~D類と比較した場合、平均的に大きく、E類よりも若干小さいグループの浅皿をF類とした。7個体得られている。サイズの最小と最大は11.4cm~13.4cm、器高3.3cm~3.8cm、高台径6.1cm~7.0cmの範囲内にあるものである。平均的なサイズとして口径12.3cm、器高3.5cm、高台径6.5cmが求められている。内底面には印花による八宝花文、花芯に「五」のある菊花文などが施されている。本類には厚手のもの(3点)と薄手のもの(4点)の二種類が存在する。良好な資料を選択し、厚手のもの2点(同図17・18)と薄手のもの1点(同図19)を図化した。

・I群口(第38図20~28)

器形や口径、高さなどからやや深目の皿とやや大振り皿として判断されたものを取り扱った。12個体が得られている。器形やサイズなどから以下のA類～C類までの3類に分類し、必要に応じて便宜的に釉の搔き取りの手法などからa種、b種の2種類に分類した。

・ A類（第38図20・21）

やや深目の皿で外底面の釉を蛇ノ目状に搔き取るもの（9個体）と方形状に雜に釉を搔き取るもの（1個体）がある。10個体分のサイズの最小と最大は口径が11.4cm～12.6cm、器高は3.9cm～4.4cm、高台径が5.5cm～6.6cmの範囲にあるもので平均的なサイズは口径12.1cm、器高4.0cm、高台径5.8cmであった。

本類はI群イとの中間的なサイズにある皿とみられるもので、厚手と薄手の皿が存在する。厚手のものは10点、薄手のものが1点得られている。同一の窯か同じ系統の窯で製作、焼成された製品として考えられる。2点を図化した。

・ B類（第38図22）

やや大振りの皿で外底面の釉を蛇ノ目状に搔き取っているもので1点のみ出土している。サイズは口径14.8cm、器高4.4cm、高台径7.4cmを測った。

・ C類（第38図23）

全面施釉の後で内底面の釉を円形状に搔き取ったものである。1個体分のみ出土している。釉の搔き取り手法はI群イのC類b種イの浅皿と類似しているが、素地が異なっている点などからI群イのC類b種イとは別系統の窯で製作された製品とみられる。

c. II群（第38図24～28）

有文の外反口縁皿で内・外体面に文様を施したグループである。11個体分が得られている。II群には腰下部で丸味をもった外反口縁皿と腰下部に稜が明瞭に走る腰折れの外反口縁皿の二種類が存在する。前者のタイプをA類として位置づけ、後者の腰折皿のタイプをB類とした。

・ A類（第38図24・25）

A類は3個体が得られている。やや深目の皿とやや大振りの皿が存在する。やや深目の皿をa種とし、やや大振りの浅皿をb種として2種に分類した。

a種…外底面の釉のみ蛇ノ目状に搔き取ったもので、二個体分が得られている。2点とも同一の窯で製作されたものとみられる。内体面に竈で蓮唐草文とみられる文様を描いている。内底面に印花を施すものと印花が無いものがある。器のサイズで最小と最大は口径が10.5cm～11.5cm、器高が3.7cm～4.0cm、高台径は6.3cm～6.4cmの範囲内に存在するものである。印花のあるものを図化した（第38図24）。

b種…やや大振りの浅皿で一個体のみ出土している。外底面の釉を蛇ノ目状に搔き取って露胎とするもので、内体面に竈による蓮唐草文を描いているものである（同図25）。

・ B類（第38図26～28）

本類は8個体が得られている。外体面の文様の有無でa種とb種の二つに分類した。

a種…外体面が無文のもので、内体面に蓮唐草文とみられるものを竈書きする。内底面に印花を施すものである。外底面の釉は蛇ノ目状に搔き取り露胎とする。本種は2個体が得られていて、図化を省略した皿のサイズは口径11.8cm、器高3.6cm、高台径5.6cmであった。1点のみ図示した（同図26）。

b種…6個体分が得られていて外体面に竈書きの草花文を雜に施し、内体面に蓮唐草文を竈書きするものである。外底面の釉の搔き取りは蛇ノ目状の搔き取り（5点）と全面を搔き取るもの（1点）がある。サイズにおいてはやや大振りの浅皿（1点）とやや小振りの浅皿（5点）が存在する。小振りの浅皿5点の最小と最大のサイズは口径が12.5cm～13.0cm、器高は3.3cm～3.7cm、高台径は5.2cm～5.8cmの範囲内にあり、平均的なサイズは口径12.6cm、器高3.5cm、高台径5.5cmであった。小振りの浅皿で良好な資料を1点のみ図化した（同図27）。

やや大振りの浅皿は、1点のみ出土している。サイズは口径が13.7cm、器高3.6cm、高台径6.5cmであった（同図28）。

## 小 結

口折皿で双魚文を印花としたグループのものと外反口縁皿のグループのもので素地や釉などを比較した場合、印花双魚文のグループの素地は微粒子のものが多く、釉も良質なものを用いているものが主体であった。外反口縁皿のグループは素地は細粒子が主流で釉の質も悪い。両者のグループで素地や色が一致するものは僅か2・3点のみであった。両者の比較検討をとおした結論として印花双魚文のグループと外反口縁皿のグループは別々の窯で製作、焼成されたことが今のところ考えられるところである。

外反口縁皿I群イのC類a種は同一の窯で製作、焼成された製品とみられる。また、外反口縁皿I群イのC類b種イ・ロおよび同皿I群ロのC類は釉の焼き取り手法などから佐敷タイプ（註1）と仮称された無文碗と平行する時期の外反口縁皿か、あるいは佐敷タイプの無文碗に後続する時期の外反口縁皿として今のところ考えられるところであるが、将来、両者の釉色、素地などを比較検討のうえで識別して判断したいところである。また、外反口縁皿I群イのC類b種イ・ロおよび同皿I群ロのC類の中から佐敷タイプの碗とセットとなる皿が存在するのかどうかについては、現段階ではそのタイプの皿は存在しないようである。佐敷タイプの皿（内彌型と外反型）が存在しない根拠として、佐敷タイプの碗そのものが出土していないからである。

外反口縁皿II群については内体面に施された文様は、従来、刻花文として表現されていたものであるが、今回の例から蓮や花文が描かれているものとして判断されたので唐草文や花唐草文として報告することにした。この種の文様は見方によっては牡丹とみることもできるが牡丹とするには花弁の弁先が尖っている点などから蓮や花文と判断した。ところでこの外反口縁皿II群は、稜花皿との時間差を考えた場合、外反口縁皿II群は稜花皿より若干、先行する時期が予想される。稜花皿が誕生する直前の姿がこの外反口縁皿II群であったものとして考慮されたからである。外反口縁皿II群の出現時期として14世紀終末～15世紀初頭の時期に今のところ比定できるものではないかと考えたいところである。

### 註

註1. 當眞嗣一ほか『佐敷グスク』佐敷町教育委員会 1980年。

第25表 外反口縁皿推定個体数

分類 個体数	I群イ								I群ロ			小計	高台破片			小計	合計			
	A		B		C		D		E		F		A	B	C	I群C bイ	II群B b	I・II 不明		
	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b										
推定個体数	1	1	6	10	12	6	3	2	2	7	10	1	1	1	62	4	1	7	12	74
計	1	1	6	10	12	6	3	2	2	7	10	1	1	1	62	4	1	7	12	74
	2			22		9		4		7										
				50						12						12				

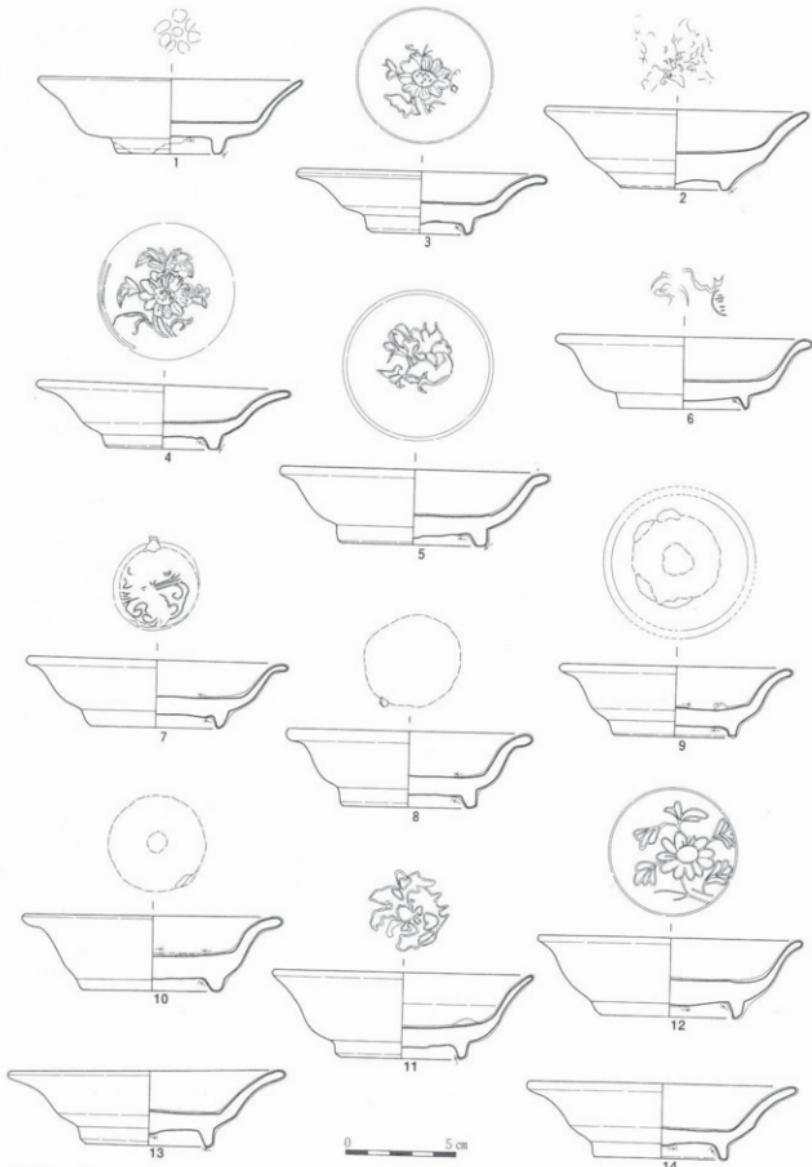
注：口縁破片の数は除外した。

第26表 外反口縁皿観察一覧

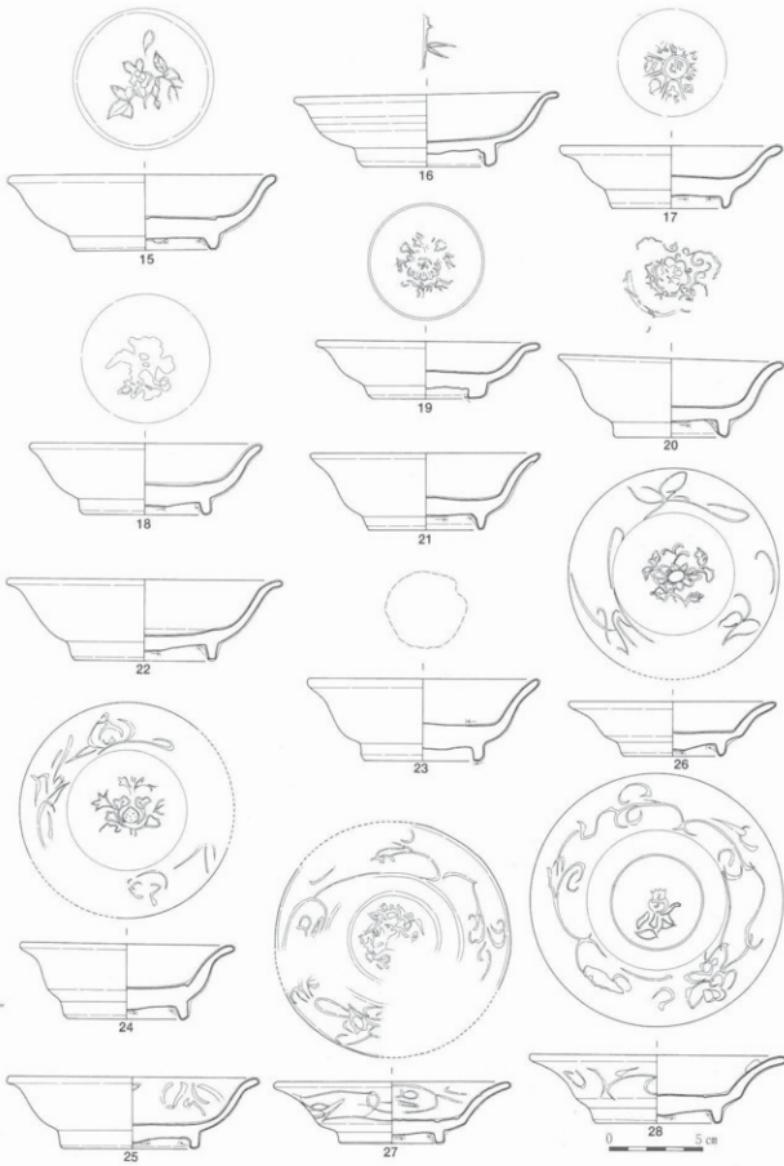
測量用 図版番号 遺物番号	名称 假称	分類	口径 高台径 (cm)	素 地	釉 色 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
第27回 図版22 1	I イ A a	11.9 3.6 4.5	濃灰色の細粒子。 微細な黒色鉱物が 多く混入。	緑灰色。 貫入なし。		腰下部で外側に張り出し、体部上部でゆるく 外反する。釉は高台際で止まっている。内底 面の印花は失透釉の為、不明。	S A 19・ 20堆 第3層
〃 2	I イ A b	11.9 3.6 4.8	茶灰色の粗粒子。 微細な黒色鉱物が 少量混入。	淡青色。 〃。		〃。厚手の外反皿。内底面に小さな 菊文重ねの印花を施す。全面施釉の後で骨付 から外底面の釉を搔き取って露胎とする。	S A 20 第2層
〃 3	I イ B	11.5 2.9 4.4	濃灰色の細粒子。 微細な黒色鉱物が 僅かに混入。	濃緑色。 両面に粗い貫 入。		腰下部で「く」の字状に折れ稜が走る。内底 面に陽囲線と菊文を施す。全面施釉の後で外 底面の釉を蛇ノ目状に搔き取る。	S A 19・ 20堆 第3層
〃 4	I イ B	11.6 3.0 4.9	灰褐色の細粒子。	明緑色。 貫入なし。		〃。上記3と同一のタイプ。	S A 19・ 20堆 第2層
〃 5	I イ C a	12.3 3.4 6.3	淡灰白色の細粒子。	明緑色。 両面に細かい 貫入。		腰下部で丸味を持って張り出す。内底面に陽 囲線と牡丹の印花を施す。全面施釉の後で外 底面の釉を方形状に搔き取っている。	S A 20 第2層
〃 6	I イ C a	11.6 3.2 5.5	〃。	〃。 〃。		〃。内底面に陽囲線と花文の印花を 施す。外底面の釉を雜に搔き取っている。	S A 20 第2層 第3層
〃 7	I イ C b イ	12.0 3.0 5.5	灰白色の微粒子。	淡緑色の透明 釉。 貫入なし。		〃。内底面に陽囲線と二重圓線のあ るラマ式蓮弁文の内線から垂下する五葉文の ある印花を施す。外底面は雜な釉の搔き取り。	S A 19・ 20堆 第2層
〃 8	I イ C b イ	11.2 3.4 5.8	淡灰白色の細粒子。	淡青緑色。 〃。		腰下部で丸味のある皿。内底面の釉を楕円形 状に搔き取る。外底面の釉は丁寧な円形の搔 き取りを施し露胎とする。	S A 19 第3層
〃 9	I イ C b ロ	10.5 3.2 5.7	淡灰白色の微粒子。	淡青緑色。 〃。		〃。内底面の釉を蛇ノ目状に搔き取 る。内底の搔き取りの縁沿いに胎土目の目痕。 外底釉は円形状の搔き取り。	S A 19・ 20堆 第2層
〃 10	I イ C b ロ	11.7 3.3 6.1	淡灰色の細粒子。 両面に粗い貫 入。	緑色。 両面に粗い貫 入。		腰下部での折れが弱い皿。 〃。〃。〃。〃。	S A 19・ 20 第2層
〃 11	I イ D a	11.7 3.8 5.3	淡灰色の微粒子。	濃緑色。 貫入なし。		腰下部で丸味のある折れ皿。内底面に印花牡 丹花文を施す。外底は高台内側から外底面の 釉を全て搔き取る。	S A 19・ 20堆 第2層
〃 12	I イ D a	11.8 3.7 6.0	灰白色的微粒子。	〃。 〃。		〃。内底面に印花菊文を施す。外底 面の釉を蛇ノ目状に搔き取って露胎とする。 外底に砂胎土目の目痕。	接合のた め不明
〃 13	I イ D b	12.8 3.3 5.6	淡灰色の細粒子。 微細な黒色鉱物が 僅かに混入。	黄茶色。 両面に細かい 貫入。		腰下部で「く」の字状に折れ明瞭な稜が走る。 全面施釉の後で外底の釉を丁寧に円形の搔 き取りで露胎させる。黄茶色の釉は透明。	S A 19・ 20堆 第2層・ 第3層
〃 14	I イ D b	12.2 3.5 6.0	淡灰色の微粒子。	〃。 貫入なし。		〃。〃。上記13と同一窯の 製品。黄茶色の透明釉。	S A 19・ 20 第2層
第38回 図版23 15	I イ E a	14.3 4.1 7.5	淡灰白色的微粒子。	明緑色。 〃。		腰部で丸味を持ったやや大振りの浅皿。内底 面に陽囲線と印花の草花文。外底釉を輪状に 搔き取り蛇ノ目状とする。	S A 20 第2層

第26表 外反口縁皿観察一覧

測定番号 国庫番号 建物番号	名称 仮称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	素 地	釉 色 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
新規 國庫23 16	外	I イ E b	14.1 4.0 6.7	白色の微粒子。 両面に貫入。	灰緑色の透明釉。 両面に貫入。	腰部で丸味を持ったやや大振りの浅皿。内底面に印花文を施す。全面施釉の後で高台内側から外底面の釉を掻き取り露胎とする。	S A20 第2層
〃 〃 17		I イ F	12.0 3.4 6.1	淡灰白色の微粒子。	淡青色。 貫入なし。	やや厚手の浅皿。内底面に陽圏線と印花八宝花文を施す。外底面の釉を輪状に掻き取って蛇ノ目状とする。	S A19-20 第2層 第3層
〃 〃 18		I イ F	12.5 3.8 6.4	灰白色の微粒子。 両面に粗い貫入。	明青色。 両面に粗い貫入。	厚手の浅皿。内底面に陽圏線と印花の草花文を施す。外底面の釉は蛇ノ目状の掻き取り。天龍寺系の青磁。	S A19- 20 第2層
〃 〃 19	口	I イ F	11.9 3.0 5.8	灰色の微粒子。	淡灰青色。 〃。	薄手の浅皿。内底面に陽圏線と花芯に「五」字文のある菊文を印花で施す。高台を幅広に成形。高台内面途中から外底を雜に釉を掻き取る。	S A19- 20 第2層
〃 〃 20		I ロ A	12.1 4.3 6.0	灰白色の微粒子。	明緑色。 貫入なし。	深目の皿で、やや厚手である。内底面に印花で梅花と如意頭雲文を施す。外底面の釉を蛇ノ目状に掻き取って露胎とする。	S A19- 20珪 第3層 第4層
〃 〃 21	皿	I ロ A	12.1 4.2 6.3	〃。	青緑色。 〃。	内底面の印花は釉溜りで判然としない。内底面の釉を輪状に掻き取って蛇ノ目状とする。	S A19 第2層
〃 〃 22		I ロ B	14.8 4.4 7.4	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 両面に粗い貫入。	やや大振りの皿。 〃。 〃。	S A19 第3層
〃 〃 23	文	I ロ C	12.4 4.3 6.2	灰褐色の粗粒子。 細かい黒色鉱物が微量に混入。	濃緑色。 〃。	厚手の皿。内底釉を円形状に掻き取り露胎とする。外面は高台内面から外底まで釉を掻き取る。佐敷タイプと仮称される碗と同一系統の皿?とみられる。	S A19- 20 第3層
〃 〃 24		II A a	11.5 4.0 6.0	灰白色の微粒子。	〃。 〃。	やや厚手の有文皿。内底面に片切り彫りで蓮唐草文を描き、内底に印花蓮文を施す。外底の釉は蛇ノ目状に掻き取る。	S A19- 20 第2層
〃 〃 25	外	II A b	13.6 3.8 7.5	淡灰白色の微粒子。	暗緑色。 両面に細かい貫入。	やや大振りの浅皿。内底面に篦描きで蓮唐草文を施す。内底面は釉溜りで印花が確認できない。外底面は蛇ノ目状の釉の掻き取り。	S A19- 20 第2層
〃 〃 26		II B a	11.0 3.0 5.2	灰白色の細粒子。	明緑色。 貫入なし。	小振りの浅皿。腰下部で「く」の字状に折れ明瞭な稜が走る。内底面に篦描きの花唐草文。内底面に印花菊文を施す。外底面は蛇ノ目状の釉の掻き取り。	S A19-20 第2層 第3層
〃 〃 27	反 口 縁 皿 （有 文）	II B b	12.7 3.4 5.8	淡灰白色の微粒子。	明緑青色。 〃。	やや大振りの浅皿。外底面に篦で花唐草文を描く。内底面にも篦描きの花唐草文。内底面に印花文を施す。外底面の釉を輪状に掻き取って蛇ノ目状とする。	S A20 第3層
〃 〃 28		II B b	13.7 3.6 6.5	淡灰白色の細粒子。	明青緑色。 〃。	〃。 〃。 〃。 内底面に印花文を施す。外底面の釉を蛇ノ目状に掻き取る。外底面に砂胎土目の目痕がみられる。	S A19-20 第2層 第3層・珪



第37図 青磁 外反口縁皿 (1)



第38図 青磁 外反口縁皿 (2)

#### 4. 直口口縁皿

土壤SK01 (SA19・20、SA28) 内より出土した直口口縁皿は、復元可能なもので54個体が得られている。これに高台破片の11点を加えると65個体相当が得られていることになる（第28表）。

直口口縁皿は外体面の文様の有無や文様の種類などからⅠ群～Ⅲ群までの三つの群に分類した。各群の内・外体面の文様の変化・素地などからA類・B類などに分類し、必要に応じてa種・b種と細分した。以下に分類概念などを記すことにする。個々の特徴については第27表に呈示する。

##### ① 無文直口口縁皿（第39図1・2）

###### I群（第39図1・2）

本群に所属する皿は二個体のみが得られている。器形や施釉などからA種とB種の二種類に分類した。  
A種…口縁に微弱で小さな玉縁状の肥厚を有するが施釉で肥厚が目立たなくなり直口状の口縁となるものである。  
内底面に印花菊文を施す。全面施釉の後で外底面の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とするものである（第39図1）。

B種…やや厚造りの直口口縁皿である。内底面の釉を円形状に搔き取って印花の菊花文を施す。外底面は釉を外底の一端まで施した後に脛付の釉のみを搔き取って露胎とするものである（第39図2）。

###### ② 有文直口口縁皿（第39図3～14、第40図）

外体面の腰中央に陽圏線が存在するかどうかで、Ⅱ群とⅢ群の二つに分けた。Ⅱ群は陽圏線が無いものをまとめた。Ⅲ群は陽圏線が有るものを取り扱った。以下、Ⅱ群とⅢ群について述べることにする。

###### Ⅱ群（第39図3～14、第40図15～23）

本群に所属するものが最も多く出土していて、41個体が数えられた。外体面の蓮弁の描き方でA類からI類までの9類までに分類し、内体面の文様表現手法などからa種・b種などに細分した。

###### ・A類（第39図3・4）

外体面に竈で蓮弁文を描くもので二個体が得られている。内体面が無文のものと有文のものがあり、前者をa種（同図3）とし、後者はb種（同図4）とした。内底面に印花の菊花文と牡丹文を施している。外底面の釉を総て搔き取るものと輪状に搔き取って蛇ノ目状とするものがある。

###### ・B類（第39図5）

外体面に竈描きで弁先の空いた蓮弁文を施すが蓮弁の間隔が空き、蓮弁の幅は幅広となるものである。蓮弁5枚で皿を一周する。1点のみ得られていて、外底は蛇ノ目状に釉が搔き取られているもの（同図5）。

###### ・C類（第39図6・7）

外体面に竈描きの蓮弁文を雜に描いていて弁先の開閉が著しく、蓮弁の間隔も一貫性がないものである。5個体得られている。蓮弁は9枚～12枚で一周する。蓮弁は高台際まで延びている。外底面の釉は輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。内底面への印花は八宝菊文で花芯に法螺貝を施したものである。同一の窯で製作・焼成されたものである。器のサイズは最小と最大を記すと口径10.9cm～11.1cm、器高3.2cm～3.7cm、高台径5.6cm～5.9cmの範囲内に収まり、平均が口径11.0cm、器高3.3cm、高台径5.7cmであった。2点のみ図化した（同図6・7）。

###### ・D類（第39図8～11）

外体面に竈ヤス状工具で蓮弁文を雜に描き、蓮弁は全体的に丸味を帯びた形となるものが主である。蓮弁は12枚前後で外体面を一周する。内体面には弁先の無い蓮弁を叉状の線彫り工具、叉状の竈状工具、丸竈で描いたものがある。内底面に同種の印花牡丹文を施すものと別種の印花や叉状の線彫り工具で描いた花文がある。前者の同種の印花牡丹文を施したグループをa種として位置づけ、後者の別種の印花花文や叉状の線彫り工具で描いた花文のグループをb種とした。本類は10個体が出土していてサイズの平均は口径11.1cm、器高3.6cm、高台径5.7cmであった。D類の最小と最大のサイズは口径10.6cm～11.6cm、器高2.8cm～3.9cm、高台径5.3cm～7.2cmの範囲内に収まる。

a種…外体面に竈描きの蓮弁文を描き、内体面に叉状の竈状工具や叉状の線彫り工具で弁先の無い花文を描く

ものである。同種の印花牡丹文を施し、外底面の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。7個体が得られている。サイズの最小と最大は口径10.6cm～11.5cm、器高2.8cm～3.9cm、高台径5.3cm～7.2cmの範囲に収まる。2点を図示した（同図8・9）。

b種…外底面はa種と同様の篦書きの蓮弁文を施し、内体面に叉状の篦状工具や叉状の線彫り工具で弁先の無い花文を描く。内底面に印花菊花文や叉状の線彫り描きの花文を描いている点でa種と異なっている。3点得られている。外底面の釉を搔き取って蛇ノ目状とするものと高台内面途中から釉の搔き取りを実施し、外底面を露胎とするものがある。b種の最小と最大のサイズは口径10.7cm～11.4cm、器高3.4cm～3.9cm、高台径5.7cm～5.9cmの範囲内に収まるものである。サイズの平均値は口径11.0cm、器高3.6cm、高台径5.8cmであった。2点を図化した（同図10・11）。

・E類（第39図12）

外底面に篦書きで弁先の消失した蓮弁文を高台脇まで施したものである。内体面に弁先が直線的に省略した菊花文を篦書きで施す。外底面の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とするが雑である。一点のみ出土している（同図12）。

・F類（第39図13）

外底面は叉状の篦状工具で蓮花の両縁を描き、弁先が細線（篦）書きで繋ぎ廻らすものである。内体面も同様な手法で描いて花文を表現する。外底面の釉を縦て搔き取るが雑で徹底しない。一点のみ出土している（同図13）。

・G類（第39図14、第40図15）

外底面に叉状の篦状工具で蓮弁文を高台際まで描いているもので、二個体が得られている。外底面の蓮弁や内体面の文様表現手法などからa種とb種の2種類に分類した。外底面の釉の搔き取りは蛇ノ目状である点で両者は共通する。

a種…外底面の蓮弁文は叉状の篦状工具で描かれ弁先が尖っているものである。弁幅も細く、蓮弁15枚で一周する。内体面は弁先の無い蓮弁文を丸彫りで描く（第39図14）。

b種…外底面の蓮弁は叉状の線彫り工具で描き弁先が空いているものである。弁幅は丸味があり、幅広である。蓮弁10枚で外周する。内体面の弁先は叉状の線彫り工具で繋ぎ文として描き、花弁は丸彫りで間隔を詰めて密に施している（第40図15）。

・H類（第40図16～22）

外底面に叉状の線彫り工具で蓮花の両縁を高台際まで描き、弁先は尖らず半円形状に篦書きや叉状の線彫り工具で繋ぎ文とするもので、内体面の文様表現の手法などからa種からc種までの3種類に分類した。本類がII群皿で最も多く出土していて18個体を数えた。内底面に同様な印花牡丹文を施す点で共通する。中には同一の印花牡丹文を施しているものが4・5点存在するようである。18点のサイズの最小と最大は口径10.2cm～11.0cm、器高2.8cm～3.4cm、高台径4.6cm～5.6cmの範囲内にある。サイズの平均は口径が10.5cm、器高3.0cm、高台径5.2cmであった。

a種…外底面に蓮花の両縁を叉状の線彫り工具で高台際まで描き、弁先は篦書き（6点）や叉状の線彫り工具（8点）で描いて繋ぎ文とするものである。前者を便宜的にイとして位置づけ、後者はロとして細分する。両者とも内体面に弁先を叉状の線彫りで描き、花弁は丸彫りや叉状の篦状工具で描いている。外底面の釉は一点のみ釉を搔き取り忘れたものがあるが、他は全て釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。

a種は14個体が得られている。本種の最小と最大のサイズは口径10.2cm～11.0cm、器高2.9cm～3.4cm、高台径4.6cm～5.6cmの範囲にあり、サイズの平均は口径10.4cm、器高3.1cm、高台径5.2cmであった。イのタイプ6点の最小と最大のサイズは口径10.4cm、器高2.9cm～3.2cm、高台径5.2cm～5.6cmの範囲内にあり、平均は口径が10.6cm、器高は3.0cm、高台径5.3cmであった。イのタイプは3点を図示した（同図16～18）。ロのタイプは8点が存在し、サイズの最小と最大は口径10.3cm～11.0cm、器高2.9cm～3.4cm、高台径4.6cm～5.6cmの範囲内に収まる。サイズの平均は口径10.5cm、器高3.1cm、高台径5.1cmであった。ロのタイプは2点を図示した（同図19・20）。イのタイプの皿は釉色、素地などから同一の窯で製作・焼成された製品とみられる。イ・ロのタイプとも内底面に印花牡丹文を施すものが主である。

b種…外体面は叉状の線彫り工具で蓮弁文を描く。内体面は叉状の線彫り工具で弁先を描き、花弁は籠書きで描いたものである。内体面の文花はa種よりも雑に描かれているが基本的にはa種の花文の描き方が崩れたタイプのものとみられる。内底面に印花牡丹文を施す。一点のみ得られている。外底の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする（同図21）。

c種…外体面はb種と同様の叉状の線彫り工具で蓮弁文を描くが、蓮弁は間隔が密に描かれ27枚で外周する。内底面に印花の牡丹文を施す。外底は全面施釉後に輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。三個体得られていて1点はa種イのタイプと同一の印花を施している。サイズの最小と最大は口径10.7cm～10.8cm、器高2.8cm～3.1cm、高台径5.2cm～5.6cmの範囲内にあり、平均は口径10.7cm、器高2.9cm、高台径5.3cmであった。良好な資料を一点図示した（同図22）。

・I類（第40図23）

外体面の弁先が消失した蓮弁を叉状の籠状工具で高台際まで描いているもので、内体面に叉状の線彫りで弁先を描き、花弁は丸彫りで描いている。内体面の文様の施文手法はH類a種と類似しているようである。内底面に印花の牡丹文を施す。一点のみ得られている（同図23）。

III群（第40図24～29）

外体面の腰部中央に陽圏線を帯状に施し、籠書きや叉状の籠状工具で蓮弁文を描いたものである。内体面の文様表現手法などからA類からC類までの三種類に分類し、器壁の厚みの状態からa種とb種の二種類に細分した。

III群は11個体が得られていて器のサイズは最小と最大で口径9.5cm～12.0cm、器高3.2cm～4.0cm、高台径4.6cm～6.4cmの範囲内に収まり、平均的なサイズは口径10.8cm、器高3.6cm、高台径5.6cmであった。

・A類（第40図24・25）

外体面の陽圏線の上下に籠書きで蓮弁文を描いたもので、弁先は丸味がある。外体面の花弁は陽圏線を境にズレが生じている。内体面にも籠で弁先が丸味を持った花弁を描いている。外底面の釉の搔き取りの状況は4個体中2点が外底の大半を欠き不明であるが、他は外底の釉を半分近く雑に搔き取ったものと釉の搔き取りを忘れて全面施釉のまま放置されたものであった。A類のサイズの最小と最大は口径が9.5cm～10.4cm、器高は3.2cm～3.5cm、高台径5.2cm～6.4cmであった。平均は口径が9.9cm、器高3.3cm、高台径5.5cmであった。二点を図示する（同図24・25）。

・B類（第40図26～28）

外体面には弁先の消失した蓮弁文を叉状の籠状工具で描かれたもので、A類と同様に蓮弁は陽圏線の上下でズレが生じている。内体面には同種の叉状の籠状工具で弁先の消失した花弁を間隔を空けて描いている。5個体が得られている。B類のサイズの最小と最大は口径10.6cm～12.0cm、器高3.6cm～4.0cm、高台径5.2cm～6.2cmの範囲内にあった。平均的なサイズは口径11.3cm、器高3.7cm、高台径5.6cmであった。B類には薄手と厚手のものがあり、前者をa種として、後者をb種とした。

a種…薄手のもので三点が得られている。外底面の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とするものと外底釉を半分のみ搔き取って半月状とするものなどがある。内底面に印花菊文や印花牡丹文を施す。サイズの最小と最大は口径10.6cm～12.0cm、器高3.6cm～3.8cm、高台径4.6cmの範囲内にあり、平均が口径11.2cm、器高3.6cm、高台径5.2cmであった。三点中二点を図示した（同図26・27）。

b種…厚手のもので二点が出土している。外底面の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。内底面の印花は浅目に刻印を施したため花の種類は判然としない。二点とも釉色や素地が類似している点などから同一の窯で焼成された製品とみられる。最小と最大のサイズは口径11.4cm～11.5cm、器高3.9cm～4.0cm、高台径5.9cm～6.2cmで、平均を求めるとき口径11.45cm、器高3.95cm、高台径6.0cmであった。1点のみ図示した（同図28）。

・C類（第40図29）

内・外体面の文様の描き方や施文具はB類と同一であるが、内体面の花弁の間隔はB類よりも密に描かれている点で異なる。2個体が出土していて、素地などから同一の窯で焼成されたものとみられる。内底面の印

花も同一の印花で牡丹文を施している。サイズの最小と最大は口径が11.3cm~11.5cm、器高3.6cm~3.7cm、高台径5.7cm~5.8cmであった。1点のみ図化を試みた(同図29)。

## 小 結

Ⅱ群C類とⅡ群D類a種は同一の窯で製作・焼成された製品とみられる。その他にⅡ群D類a種の内底に施された印花牡丹文皿がS A33・34の外側トレンチ内の栗石直下からも出土しているようである。直口口縁皿は外反口縁皿の素地と比較して良質で微細なものが主流であり、むしろ口折皿の素地に近似するようである。

第27表 直口口縁皿観察一覧

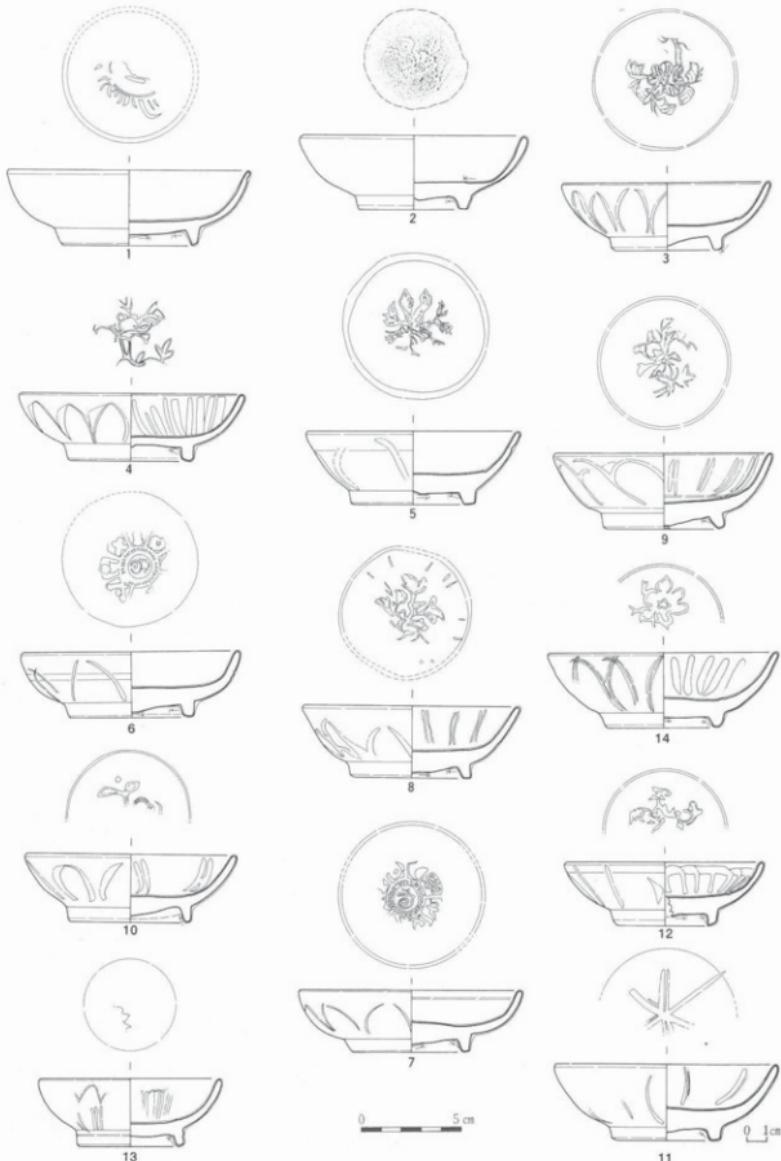
標示番号 図版番号 遺物番号	名称・假称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	素 地	釉 色 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
第27 図版 1	無文直口口縁皿	I A	12.2 3.8 6.5	灰白色の微粒子。	淡青色。 貫入なし。	口縁に軽く削りを加え微弱な玉縁状の肥厚とするが施釉で直口口縁となる。内底面に陽印花の菊花文と陽圏線を施す。外底に砂船目の目痕が認められる。	S A20 第2層 S B01 第1層
〃 2		I B	11.8 3.7 6.1	淡灰色の微粒子。	灰緑色。 〃。	やや厚手の皿。内底面の釉を円形状に搔き取り印花の菊花文を施している。外面の釉は高台内面から外底の一部まで釉を施した後で叠加付の釉を搔き取って露胎とする。	S A19 第3層
〃 3		II A a	10.5 3.3 5.5	〃。	淡緑色。 〃。	外表面に竈で蓮弁文を高台脇まで描いている。内底面に陽圏線と印花の菊花文を施す。外底面の釉を搔き取り蛇ノ目状とする。蓮弁16枚で一周。	S A20 第2層
〃 4	有文	II A b	11.3 3.4 6.1	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 貫入なし。	外表面に竈で蓮弁文を高台際まで施す。蓮弁16枚で一周する。内底面に叉状の竈状工具で弁先のない花文を描き、内底面に印花牡丹文を施す。外底面の釉を總て搔き取る。	S A20 第1層 第2層 第3層
〃 5		II B	10.8 3.7 5.7	灰白色の微粒子。	黄緑色。 〃。	外表面に竈描きの蓮弁文を高台際まで施す。内底面に陽圏線と印花牡丹文を施す。外底面の釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19 第3層 S A20 第2層
〃 6	直口	II C	10.2 3.2 6.0	〃。	淡青色。 〃。	外表面に竈描きで丸味のある蓮弁文を施す。蓮弁は14枚で一周する。内底面に八宝菊花文を印花で施す。菊花の花芯は法螺貝である。外底面の釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。	S A19・ 20 第2層
〃 7	口縁	II C	10.9 3.2 5.9	灰白色の微粒子。	〃。 〃。	〃。蓮弁は10枚で一周する。内底面の印花は上記6と同一の刻印。外底の釉を搔き取り蛇ノ目状とする。	S A20 第2層
〃 8	皿	II D a	10.9 3.5 6.0	〃。	淡緑灰色。 〃。	外表面の蓮弁文は竈描きで弁先が尖る。内底面に叉状の線彫り工具で弁先の無い花弁を描く。内底面に陽圏線と牡丹文を刻印する。	S A19・ 20 第2層
〃 9		II D a	11.1 3.7 6.1	淡灰色の微粒子。	淡青色。 〃。	〃。蓮弁は稚で左寄りに傾いたように描く。内底面に叉状の竈彫り工具で弁先の無い花弁を描く。内底面に陽圏線と印花牡丹文を施す。外底は輪状の釉の搔き取りで蛇ノ目状とする。	S A20 第3層

第27表 直口口縁皿觀察一覧

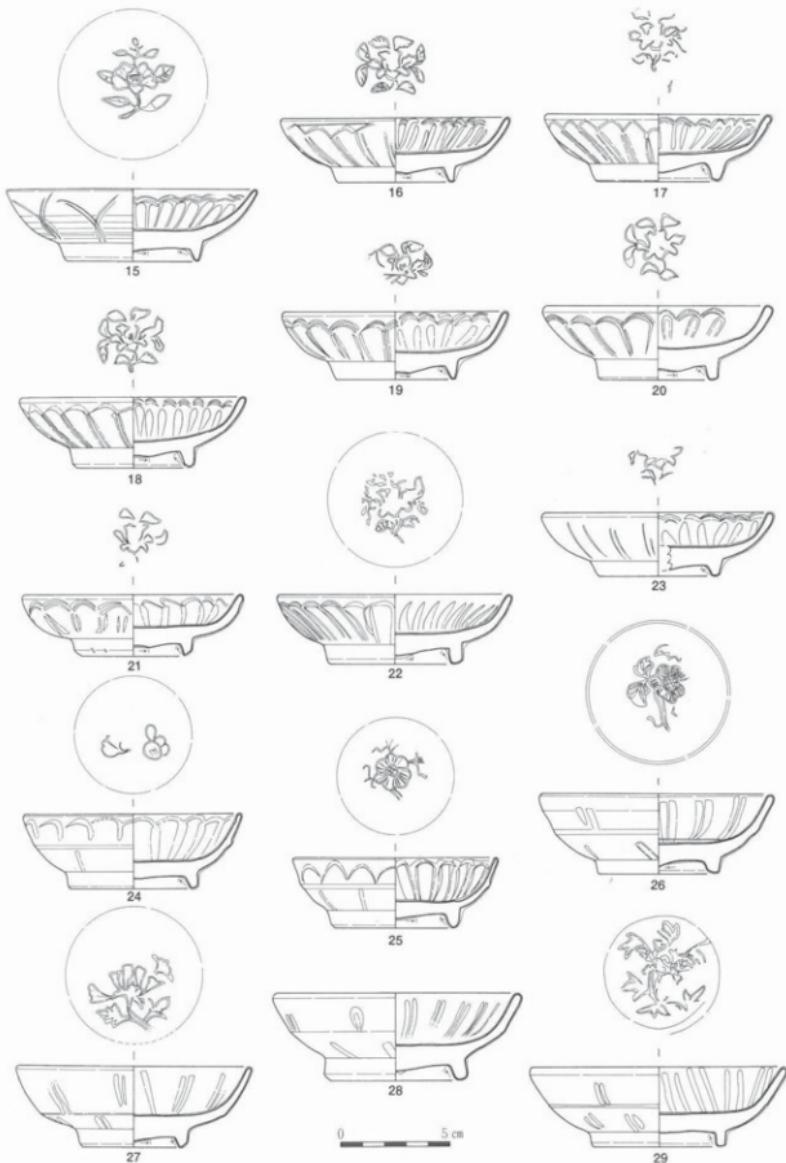
標記号 図版番号 遺物番号	名 称 ・ 假 称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	素 地	釉 色 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
第28図 図版24 10		II D b	10.7 3.4 6.2	灰白色の微粒子。	淡青色。 貫入なし。	外体面に間隔の空いた蓮弁を籠で描く。内体面に又状の籠彫り工具で弁先の無い花弁を描く。内底面に陽圏線と印花花文(牡丹文か)。外底面は半部程度を欠く。蛇ノ目状の外底か。	S A19 第2層
〃 〃 11		II D b	11.2 3.9 5.5	灰色の細粒子。	〃。 両面に細かい 貫入。	外体面は釉が厚く掛けられて籠彫りか又状の蓮弁文かは不明。内体面に又状の籠彫り工具で蓮弁を描く。内底面に陽圏線と又状の線彫りで花文を描く。外底面は蛇ノ目状の釉の搔き取り。	S A20 第2層
〃 〃 12	有	II E	10.1 3.2 4.8	淡灰色の細粒子。	淡黄灰色。 両面に非常に 細かい貫入。	外体面に弁先を省略した蓮弁文を籠で描く。内体面は籠彫きで花弁を施す。内底に陽圏線と印花牡丹文を施す。外底面は蛇ノ目状に釉を搔き取るが雑である。	S A19・ 20 第3層
〃 〃 13	文	II F	9.2 3.5 5.0	灰白色の微粒子。	明緑色。 両面に粗い貫 入。	外体面に又状の線彫り工具で花弁を5枚彌らす。弁先は線彫り工具で描いて蓮弁を表現。内体面は又状の線彫り花弁を密に描き、弁先はタッチを変えた線彫りで描く。内底に陽圏線と印花花文(牡丹文か)。外底釉を綴て搔き取る。	S A20 第2層 第3層
〃 〃 14	直 口	II G a	11.5 3.8 5.5	灰色の微粒子。	淡青色。 貫入なし。	外体面に又状の線彫り工具で蓮弁文を施す。花弁15枚で一周する。内体面は丸彫りで弁先の無い花弁を描く。内底面に陽圏線と印花花文(牡丹文か)。外底は雑な釉の搔き取りで蛇ノ目とする。外底に砂胎土目の目痕あり。	S A19 第2層
第49図 図版25 15	口	II G b	11.6 3.3 6.0	〃 〃	明緑色。 〃 〃	〃。丸味のある蓮弁文で弁先が空く。外体面を花弁10枚で一周する。内体面は丸彫りの花弁と弁先を又状の線彫り工具で表現した花文を描く。内底に印花牡丹文を施す。外底は蛇ノ目状に釉を搔き取る。	S A19・ 20—括 第2層
〃 〃 16	縁	II H a イ	10.5 2.9 5.3	〃 〃	〃。 両面に粗い貫 入。	外体面に又状の線彫り工具で花弁を描き、弁先は線彫りの工具で蓮弁文を描く。内体面は丸彫りで花弁を描き、弁先は又状の線彫り工具で描く。内底面に印花牡丹文を施す。外底面は輪状の搔き取りで蛇ノ目状とする。	S A19・ 20 第3層
〃 〃 17	皿	II H a イ	10.4 3.0 5.6	〃 〃	〃 〃	外体面に又状の線彫り工具で花弁を描き、弁先は籠彫りで描いて蓮弁文を完成させる。内体面は丸彫りで花弁を描き、弁先を又状の線彫り工具で描く。内底面に印花牡丹文を施す。外底は蛇ノ目状の釉搔き。外体面の花弁は20枚で一周。	S A19・ 20 第2層 C-15 ピット, 2
〃 〃 18		II H a イ	10.4 3.2 5.2	灰白色の微粒子。	〃 〃	〃 〃 外体面の花弁は21枚で一周。	S A19・ 20付
〃 〃 19		II H a 口	10.4 3.0 5.3	〃 〃	〃 〃	外体面に又状の線彫り工具で蓮弁文を描く。内体面は丸彫りの花弁と又状の線彫り工具で弁先を描く。内底面に印花牡丹文を施す。外底の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19・ 20 第3層

第27表 直口口縁皿観察一覧

網番号 国番号 遺物番号	名 称 假 称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	素 地	釉 色 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
第27 回 20	II H a ロ	10.6 3.4 5.3	淡灰色の細粒子。	淡灰青色。 両面に細かい 貫入。	外体面に叉状の線彫り工具で蓮弁文を描く。 内体面は丸彫りで花弁を描き、弁先を叉状の 線彫り工具で花弁を描き完成させる。内底面 に印花牡丹文と陽圏線を施す。外底面の釉を 輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A20 第2層	
〃 21	II H b	10.2 2.8 4.6	灰白色の微粒子。	〃。 貫入なし。	〃。 内体面は花弁を丸彫りで描き、 弁先を叉状の線彫り工具で菊文を表現。内底 面に陽圏線と印花牡丹文を施す。外底面の釉 を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。外底面中央付近に砂胎土目の目痕。外体面の花弁は22 枚で一周する。	S A20 第3層	
〃 22	II H c	10.7 3.1 5.8	灰色の微粒子。	明青色。 両面に粗い貫 入。	外体面の蓮弁は叉状の線彫り工具で描く。花 弁は27枚で外体を一周する。内体面は丸彫り で花弁を描き弁先は無い。内底面に印花牡丹文 を施す。外底は釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状 とする。	S A19・ 20 第3層	
〃 23	II I	10.6 2.9 5.4	〃。	灰緑色。 〃。	外体面に弁先の無い蓮弁文を描く。内体面は 丸彫りで花弁を描き、弁先は叉状の線彫り工 具で描いて菊文を表現。内底面に印花牡丹文。 外底の釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19・ 20 第3層	
〃 24	III A 直 口	10.0 3.5 5.6	淡灰白色の微粒子。	淡青色。 両面に細かい 貫入。	外体面に陽圏線と範描きで弁先に丸味のある 蓮弁文を描くが陽圏線直下の花弁はズレる。 内底面は範描きで菊文を表現。内底面に陽圏 線と印花花文（牡丹文か）。外底は蛇ノ目状の 釉の搔き取り。	S A20 第2層	
〃 25	III A 口	9.5 3.4 5.6	灰白色の微粒子。	〃。 両面に粗い貫 入。	〃。 〃。 内底面に陽圏線と 印花の菊花文を施す。外底面の釉を輪状に搔 き取り蛇ノ目状とする。	S A19 第2層	
〃 26	III B 縁 皿	10.6 3.6 5.4	〃。	灰緑色。 貫入なし。	外体面腰中央に陽圏線と叉状の範状工具で弁 先の無い蓮弁を描くが陽圏線直下の花弁はズ れる。内体面も弁先の無い菊文を叉状の範状 工具で描く。内底面に陽圏線と印花の菊花文 を施す。外底面は釉の搔き取りを忘れる。外 底に目痕。	S A19・ 20 第3層	
〃 27	III B a	10.8 3.8 4.6	灰色の微粒子。	淡青色。 〃。	〃。 〃。 内底面に陽圏線と 印花の牡丹文を施す。外底面の釉を輪状に搔 き取って蛇ノ目状とする。	S A19 第2層	
〃 28	III B b	11.4 3.9 5.9	淡黄色の細粒子。	淡茶黄色。 両面に細かい 貫入。	外体面の腰中央に陽圏線と叉状の範状工具で 弁先の無い蓮弁文を描くが陽圏線直下の花弁 はズレる。内体面も弁先の無い菊文を叉状の 範状工具で描く。内底面に印花花文を施すが 不鮮明。外底の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目 状とする。	S A19・ 20 第2層 第3層	
〃 29	III C	11.5 3.6 6.0	淡灰色の微粒子。	明緑色。 貫入なし。	〃。 内底面に弁先の無い菊文を叉状 の範状工具で密に描いている。内底面には陰 圏線と印花牡丹文を施す。外底面の釉を輪状 に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19・ 20 第3層	



第39図 青 磁 直口口縁皿 (1)



第40図 青磁 直口口綠皿 (2)

第28表 直口口縁皿推定個体数

分類 個体数	I		II										III			II高台片			小計	小計	合計			
	A	B	A a b	B	C	D a b	E	F	G a b	H a b c	I	A	B a b	C	D a a 不明	G								
推定個体数	1	1	1	1	1	5	7	3	1	1	1	14	1	3	1	4	3	2	54	7	2	2	11	65
計			1 2	1	1	7 5	3 10	1 1	1 2	1 18	1 1	14 3	1 4	3 5	2 2	54	7 11	2 11				11	65	
												41												

注：口縁破片の数は除外した。

## 5. 稜花皿

土壤SK01 (SA19・20、SA28) 内から3個体の稜花皿が得られている。3点とも復元可能な資料である。特徴として口唇部をラマ式蓮弁の弁先様に浅く抉りを入れて稜花とする皿で、腰下部で「く」の字状に屈曲し腰上部から外側に開いて口縁を外反させている点などが挙げられる。分類に際しては外体面の腰下部に蓮弁を描く有文のものと腰下部が無文となるものの二者が存在し、前者をA類として位置づけて後者がB類として分類した。以下にA類とB類の個々の特徴を記すことにした。

## ・ A類 (第41図1・2)

A類に分類されたのは2点である。いづれも内底に印花菊文を施す点や外底面の軸を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする点などで共通している。外体面の腰下部に蓮弁を籠で描いているものである。

第41図1は口径の短軸が14.5cm、長軸は14.9cmと求められた皿である。器高は4.4cm、高台径が6.8cmを測っている。外体面の腰上部には籠による刻花文を描き、腰下部に弁先の尖った幅広の蓮弁を籠で描いている。腰下部の花弁は推定10枚で一周するようである。内底面には口唇のラマ式蓮弁の弁先に合わせて叉状の線彫り工具でラマ式蓮弁を描き、その直下に籠描きの牡丹唐草文とみられる文様を施す。内底面に陰圈線と印花菊文を施す。素地は灰白色の微粒子である。釉調は濃緑色で貫入は認められない。SA19・20第3層より出土。

同図2は口径の短軸と長軸が15.6cmと16.0cmを測った。器高は4.3cmで高台径が7.3cmを測っている。外体面の腰上部と内底面の文様や施文具は上記の同図1と同じであるが、外体面の腰下部の籠描きの蓮弁は籠で弁先が空いた状態で描かれている。外体面の花弁は推定14枚で一周する。内底に印花菊文を施す。素地は灰白色の微粒子である。釉色は上記1と同色であり貫入は観察できない。SA20第2層より出土。

## ・ B類 (第41図3)

1点のみ出土している。外体面の腰下部の蓮弁は消失する。A類の外体面腰上部に描かれた刻花文はB類では簡略化されている。

同図3は口径の長・短の軸長が15cmと14.6cmと推算で求められている。器高は3.7cmを測り、高台径が6.8cmと直接求めることができた。外体面上部に籠描きで簡略化された刻花文を描いている。内底面は口唇のラマ式蓮弁と合うように叉状の線彫り工具でラマ式蓮弁を描く。蓮弁直下には籠描きの刻花文を描くが花の種類は不明である。内底面に陰圈線と印花を施すが軸が厚く掛けられ花の種類は判然としない。内底に重ね焼による目痕（別種の青磁の疊付が一部付着）が観察される。外底面は全面施釉の後で輪状に搔き取って蛇ノ目状とするが、釉の搔き取りが徹底せず釉が残っている。素地は灰白色の微粒子である。釉色は明るい緑色で貫入はない。SA20第2層より出土している。

## 小 結

稜花皿の3点は素地が同一のものを使用している状況から判断すると同

第29表 稜花皿推定個体数

分類 個体数	稜花皿		高台 破片	計
	A	B		
推 定 個 体 数	2	1	0	3
計	2	1	0	3
		3		

一の窯で焼成された製品とみられる。稜花皿のA類はB類より時期的に先行することが文様の変遷などから窺えるが今後、他遺跡との比較検討によって時期的な問題は解決されるであろう。現段階では15世紀初頭から前半頃の稜花皿として位置づけて置くことにする。

## 6. 八角皿

土壤SK01 (SA19・20、SA28) 内から八角皿の復元可能な資料が4個体得られている。他に高台破片の2片を加えると合計で6個体相当が数えられる。復元可能な4点の最小と最大のサイズは口径が14.0cm~15.3cm、器高3.3cm~3.7cm、高台径6.4cm~7.7cmの範囲内にあり、平均的なサイズは口径14.7cm、器高3.5cm、高台径7.2cmであった。

八角皿は口唇を八角形に面取り成形したものを仮称して用いることにした(以下、八角皿)。

八角皿の器形は外表面が無文のもので、腰下部が「く」の字状に屈曲し、口縁で外反するタイプのものであった。素地については図化した3点とも灰白色の微粒子であり、釉色は淡い緑色を帯びていて貫入は認められなかった。他に共通する要素として内底面に同一の印花で四葉花文を施している点や外底の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状に仕上げている点などがある。図化を省略した資料も含めて素地や印花などの要素から八角皿は同一の窯で焼成された皿として判断されるようである。以下に個々の特徴などを記すことにする。

第41図4は口径の短軸が14.6cm、長軸で15.3cmと求められた皿である。皿の器高は3.7cm、高台径が7.5cmであった。外表面は腰下部で折れて腰上部から外側に開き口縁で外反させる。内底面の口縁には時計回りの雷文を描き途中で雷文の中心で反時計回りに逆回転させて描いている。雷文の上下と八角の頂点から描かれた横位や縦位の区画線は叉状の線彫りで描いている。雷文帯直下の区画内中央には竪書きで雲文を描いている。内底面には陰線と印花の花文を施す。外底面に胎土目の痕が認められる。C-13・14S A34栗石内より出土している。

同図5は口径の短軸が13.6cm、長軸14.0cmと推算された皿である。皿の高さは3.3cm、高台径が7.7cmを求めた。内底面の口縁に描かれた雲文の描き方や叉状の線彫り沈線による文様区画の表現手法は上記の図4と同一手法であるが文様区画内に描かれた雲文は区画内の両隅から垂下する形で竪で描いている点で異なっている。SA19・20第2層より出土している。

同図6は口径の短軸が13.6cm、長軸で14.5cmと求められた皿である。皿の高さは3.7cm、高台径が7.4cmを測った。内底面の口縁に竪書きで時計回りの雷文と雷文の中心で反時計回りの雷文を組み合わせて描き分けていて、上記した2点と雷文の表現手法が異なっている。区画の沈線文は叉状の線彫りで雷文の上下と八角の頂点から横位や縦位に施されているが雲文の描き方は縦位の区画沈線を挟んでほぼ左右対称となるように竪書きする。SA19・20第1層とSA20第3層より出土。

## 小 結

八角皿と稜花皿の釉色や素地の比較検討を行ったところ釉色においては稜花皿の釉はやや質が落ちて濃い目の緑色のものが主であった。八角皿は良質の釉を用い明るい緑色であった。しかしながら両者は素地において良質の陶土を採用していて、素地の色合いも類似するものが多い点が注目された。以上の状況から稜花皿や八角皿は同一の窯で製作・焼成された製品として現時点では判断される。他に共通する要素として外底面の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする点で両者は一致している。

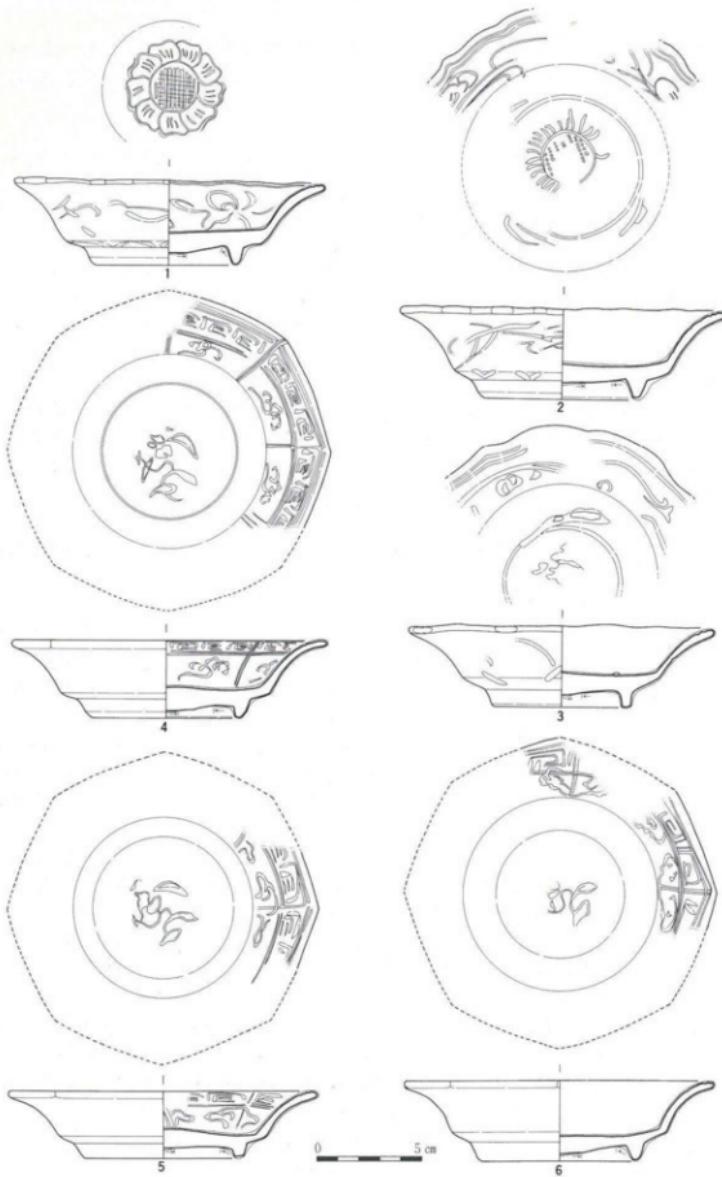
第30表 八角皿推定個体数

分類 個体数	八角 皿	高台 破片	計
推 定 個 体 数	4	2	6
計	4	2	6

第31表 分類不能な皿の個体数

分類 個体数	皿 不 明 高 台	計
推 定 個 体 数	40	40
計	40	40

注：盤付破片8片と外底破片4片を除く。



第41図 青 磁 棱花皿・八角皿

## C. 青磁盤

土壤SK01 (S A19・20、S A28) 内から得られた盤の個体数は103個体（復元および復元可能な資料56個体、口縁資料による推定個体数47個体）が得られている（第32表）。器形や口縁部の成形から鍔縁盤と直口口縁盤の二種類に大別した。

### 1. 鍔縁盤

いわゆる鍔のある盤で、口造りや内体面の文様などで、I群～IV群までの四つの群に大別し、更に内・外体面に描かれた文様の有無などで各群別にa類、b類、c類などに細分した。以下、各群別に分類概念を記し、個々の特徴などについては觀察表に表わした（第33表）。

#### ① I群（第42図1～6）

本群は鍔を平坦に仕上げた盤で、13個体相当（口縁破片4点を含む）が得られている。内・外体面の文様の有無などからa類～c類までの3種類に細分した。13個体（内口縁資料4点を含む）相当が出土。

a類…外体面に片切り彫りによる刻花文を描くものである。内体面と鍔上面に片切り彫りで一連の文様の流れとして牡丹唐草文を描いている。口縁破片を含めて二個体分が得られていて、唯一復元された資料を図化した（第42図1）。

b類…外体面を無文とするもので、内体面に片切り彫りによる牡丹唐草文や蓮弁文を描く。鍔上面は三本単位の櫛で内体面に描かれた牡丹唐草文の縁を取るような波状文を描いている。内底に七宝繋ぎ文や牡丹唐草文を施すものである。復元可能な資料が3個体得られていて、その内の2点（同図2・3）を図示した。

c類…内・外体面を無文とするものである。内底面に菊葉文や牡丹文などを施しているものである。最も多く出土したグループで8個体相当（口縁資料3個体相当を含む）が得られていて、その内の3点（同図4～6）を図化した。

#### ② II群（第43図7～14）

鍔はI群と同じように平坦とするが鍔縁を稜花状に成形した盤である。内・外体面の文様の有無や文様の種類などからa類～e類までの5類に分類した。33個体相当（口縁破片12点を含む）が得られている。

なお、a類～c類は内体面に牡丹唐草文や刻花文を描くもので、d類・e類が内体面に蓮弁文を描いているものである。

a類…外体面は丸窓による蓮弁文を書き、蓮弁文の上・下（頸部と高台脇）を界線でもって区画する。内体面は幅広の蓮弁文を描いた後に片切り彫りで牡丹唐草文を描いているものである。鍔上面は幅のある窓で鍔端の稜花に沿うように描いている。2個体分（内1点は口縁資料）得られていて、1点のみ図化した（同図7）。

b類…a類と同様に丸窓で蓮弁文を描いているものである（蓮弁文の上・下にある区画の界線は釉の変色で不明）。内体面に片切り彫りによる刻花文を施す。鍔上面は叉状の工具で稜花に沿うように描いている。4個体分出土していて、その内の1点を図化した（同図8）。

c類…外体面は無文とするものである。内体面に片切り彫りによる牡丹唐草文を描いている。鍔上面は叉状の工具で鍔端に沿うように描いているものとこれを無視して描くものがあるようである。4個体分が得られていて、2点を図示した（同図9・10）。

d類…外体面に幅広（10mm程度）の丸窓で蓮弁文を描くもので、蓮弁直下に界線を加え弁尻を区切っている。内体面は丸窓（15mm）や窓などで蓮弁文を描いている。鍔上面は窓書きや片切り彫りのものと叉状の工具によるものがあり、いずれも鍔端に沿うように描いているため、施文具の違いでa種とb種の二つに細分した。なお本類はII群で最も多く出土したタイプで17個体を数えている。

イ種…鍔上面を幅広の窓や片切り彫りで鍔端に沿うように描いたものである。16個体分（口縁資料6点を含む）相当が得られていて、2点を図化した（同図11・12）。

ロ種…鍔上面を叉状の工具で鍔端に沿うように描いたものと鍔端縁の稜花を無視して描くものがある

2個体（内1点は口縁資料）相当が出土していて良好な資料を1点図化することにした（同図13）。

e類…外体面を無文とするものである。内体面に幅広の丸窓で蓮弁文を描いている。鍔上面は籠描きで鍔端に沿うように施すものと鍔上面にラマ式蓮弁の弁先を描くものがある。本類は4個体相当（口縁資料3点）が得られていて、その内1点を図化した（同図14）。

③ III群（第44図15～24、第45図25～27）

鍔端部を撮上げて成形した盤である。外体面を無文とするものが総てである。内体面の文様や施文具などから

a類～h類までの8種類に細分した。最も多く出土したグループで口縁資料を含め39個体相当が存在する。

a類…内体面に片切り彫りで牡丹唐草文や刻花文を描いたものである。内底に印花八宝文を施したものもある。2個体分得られているのでこれを図化した（第44図15・16）。

b類…内体面に幅広の丸窓で蓮弁文を描いたものである。大振りのものと小振りのものが存在する。11個体（口縁資料2点を含む）相当が得られている。その内の4点を図示した（同図17～20）。

c類…内体面に2本櫛による蓮弁文を描くものである。9個体相当（口縁資料7点を含む）が得られていて、2点を図化した（同図21・22）。

d類…内体面に3本櫛による蓮弁文を描くもので、6個体相当（口縁資料2点を含む）が得られている。2点を図示することにした（同図23・24）。

e類…内体面に5～6本櫛による蓮弁文を描いたものである。5個体相当（内4点は口縁）が出土している。1点を図示する（第45図25）。

f類…内体面に7本櫛による蓮弁文を描いたものであるが、1点のみ口縁資料が得られている程度であり、図化を省略した。

g類…内体面に9本櫛で蓮弁を施すものである。1個体のみ出土している（同図26）。

h類…内・外体面が無文となるものである。1点のみ得られていてこれを図化した（同図27）。

④ IV群（第45図28・29）

鍔端部の撮上げではなく、鍔上面を浅く窪ませたものをIV群とした。本群はI群からIII群への移行する段階での中間型のグループとして考えられる盤とみられるものである。外体面は無文とするもので、内体面の施文具や文様などから以下のa類とb類の2種類に分けた。

a類…内体面に幅広の丸窓で蓮弁文を描くものである。1点のみ得られていて、これを図化した（同図28）。

b類…内体面に4本櫛（1本の幅2mm）による蓮弁文を描いたものである。5個体相当（内口縁資料4点を含む）が出土していたので良好な資料を図示した（同図29）。

## 2. 直口口縁盤

直口口縁盤は口縁が僅かに端反るものと微弱な玉縁状の肥厚を持つものである。外体面を無文とするもので、内体面に片切り彫り、籠描き、櫛描きによる牡丹唐草文や蓮弁文を描くものである。内体面の施文具や文様などからa類～d類までの4種類に分類した。12個体相当が得られている。

① I群（第45図30～32）

a類…口縁が僅かに端反るものと微弱な玉縁状の肥厚となるものである。内体面に片切り彫りによる牡丹唐草文や吉祥文のある花弁を描く。2個体出土していて、これを図化する（同図30・31）。

b類…a類と同様に口縁が僅かに端反ると微弱に玉縁状に肥厚するものがある。内体面に3本櫛と7本櫛を用いて蓮弁文を描いているものである。2個体分得られていて、1点を図示する（同図32）。

c類…口縁が微弱な玉縁状の肥厚を有するものである。口縁破片のみ3個体相当が出土していたので図化を省略した。

d類…c類と同様に微弱な玉縁状の肥厚を有するものであるが、本類のみ口唇に窓で刻目を入れている。内体面に丸窓や3本櫛で蓮弁文を描くもの（4点）と2本櫛と細線刻の沈線を組み合わせて蓮弁文を描き弁先に叉状工具で界線を施したもの（1点）がある。口縁資料から5個体相当が出土しているが、破片のため図化を省略した。

## 小 結

青磁盤の推定個体数は103個体であった。その中でもⅢ群が39個体（口縁を含む）ともっとも多く出土している。次にⅡ群の33個体である。Ⅱ・Ⅲ群の二つのグループで全体の67%を占めているようである。

盤の中で興味深いのはⅣ群のグループで、Ⅰ群からⅢ群へと移行する段階を窺い知ることのできる資料であり、Ⅰ群とⅢ群との間的なグループとして推察される。

第32表 青磁盤推定個体数

分類 推定 個体数	復元および復元可能な資料										口 縁 破 片										小 計
	銅 縁					直口	小 計	銅 縁					直口	小 計							
	I	II	III	IV	I			I	II	III	IV	I									
	a	b	c	e	d			a	b	c	d	e									
個体数	1	3	5	1	4	4	11	1	2	9	2	4	1	0	1	1	1	1	2	2	103
合計	1	3	5	1	4	4	11	1	2	9	2	4	1	0	1	1	1	1	2	2	47
	9		21			20		2	4	56	4	12		19						47	103
			56																		

第33表 青磁盤観察一覧

器種番号 団体番号 遺物番号	名稱 ・假称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	素	地	釉 色 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴			出土地点 出 土 層
新24 團27 1	銅	I a	32.0 6.6 12.4	灰白色の微粒子。	淡緑色。 なし。	銅を平坦に仕上げた盤。外体面に片切り彫りによる刻花文。内体面および銅上面には一連の牡丹唐草文を片切り彫りで描く。内底に陰図線と印花牡丹文とみられるものを施す。全面施釉の後で外底の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A20 第1層 S A19 第2層			
新2 2		I b	33.8 4.9~ 5.3 16.2	〃	濃緑色。 なし。	〃。内体面に片切り彫りと三本単位の櫛描きを併用しながら牡丹唐草文を描いている。銅上面は上記の牡丹唐草文を縁取る波状文を描く。内底には陰図線と七宝繋ぎ文に三本櫛によるラマ式進弁の花弁を描く。全面施釉の後で外底面の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19 20畦 第2層			
新3 3	盤	I b	31.6 5.5 14.7	淡灰白色的微粒子。	淡緑色。 なし。	〃。内体面に片切り彫りによる牡丹唐草文を描く。銅上面には雫に表現された波状文を片切り彫りで描く。内底面は片切り彫りで牡丹唐草文を描く。周辺には陰図線を施す。全面施釉後に外底の釉を搔き取り蛇ノ目状とする。	S A19 20畦 第2層			
新4 4		I c	31.0 5.7 13.4	灰白色的微粒子。	青緑色。 なし。	〃。内底面のみに文様がみられる。内底に印花による菊葉文と陰図線を施す。全面施釉の後で外底釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。外底中央は浅く窪む。	S A19 20 第2層			
新5 5	I c	24.6 5.2 9.8	淡灰色の微粒子。	黄緑色。 なし。	〃。〃。内底の印花は釉溜りで不明。陰図線のみが鮮明である。全面施釉の後で外底釉を雫に搔き取る。	S A19 20 第3層				

第33表 青磁盤観察一覧

種別番号 団体番号 遺物番号	名称 仮称	分類	口径 器高 高台脇 (cm)	素	地	釉 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
第42回 團28 6		I c	25.8 4.8 10.4	黄白色の細粒子。	黄茶色。 両面に粗い貫入。		鍔を平坦に仕上げた盤。内底面のみに文様がみられる。内底に陰囲線と印花文を施す。全面施釉の後で外底釉を難に搔き取る。外底面に胎土目の目痕がみられる。	S A19 第2層 S K03 西側第3層
第42回 團28 7		II a	33.2 6.6 15.4	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 両面に粗い貫入。		鍔を稜花とする盤。外体面に丸窓で蓮弁文を描き弁尻は界線で止まる。内体面に幅1.1~1.9cmの幅広の窓で蓮弁文を描き、その上から片切り彫りによる牡丹唐草文を描く。鍔上面は陰囲線と印花による菊文を施す。外底のみ全面施釉後に輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19 第2層
團29 8		II b	25.0 6.0 11.2	淡灰色の細粒子。	黄緑色。 なし。		鍔を平坦に仕上げた稜花盤。外体面高台脇に丸窓で太目の囲線を施し、頭部より幅広の丸窓で蓮弁文を描く。内体面に片切り彫りの刻花文を施すが釉の変色で不鮮明となる。鍔上面は二叉線状の工具で鍔端近くに描いているようであるが釉の変色で不明。内底面に囲線と七宝繋ぎ文を施す。外底の釉は難な蛇ノ目状の搔き取りである。	S A19 20 第1層 第2層
團29 9	鍔	II c	21.8 4.6 7.8	灰白色の粗粒子で 微細な黒色鉛物が 僅かに混入。中国 南部かベトナム産 か。	淡い明 緑色。 両面に 細かい 貫入。		”。外体面は無文。内体面に片切り彫りによる牡丹唐草文の崩れた文様を描く。鍔上面に二叉線状の工具で鍔端に沿うように稜花を描く。内底面に陽囲線と構図不詳の文様を片切り彫りで描く。外底面は全面施釉後に円形状に搔き取る。外底中央が盛り上がっている。頭部に鍔下面を成形する際に生じた界線様のものが残る。	S A19 第2層
團29 10	縁 盤	II c	21.1 5.3 7.6	淡黃白色的細粒子。 中国南部かベトナム産か。	灰緑色。 両面に 細かい 貫入。		”。外体面の頭部に丸窓で界線を施す。内体面に片切り彫りによる牡丹唐草文を描く。内底面に陽囲線を施す。印花の有無は釉滌りの為、不明。鍔上面は二叉線状の工具で鍔端に沿うように不鮮明な稜花を描く。外底は全面施釉の後で輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。外底中央が僅かに盛り上がっている。	S A20 第2層
團29 11		II d イ	26.2 4.9 10.8	淡灰色の細粒子。	黄茶色。 なし。		”。外体面の高台脇に窓で界線を施し文様の区画を行う。外体面の蓮弁は幅10~13mmの丸窓で描く。内体面は幅10~16mmの丸窓で蓮弁文を描いている。鍔上面に窓による稜花を鍔端に沿うように施している。内底は陽囲線と印花菊文とみられるものを施す。外底は全面施釉の後で輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。外底中央を窓で削り浅く窪ませている。	S A20 第2層
團29 12		II d イ	23.2 4.3 10.0	灰白色的微粒子。	淡青緑 色。 なし。		”。外体面の頭部と高台脇は片切り彫りの界線で区画し、区画内に丸窓で蓮弁文を描く。内体面は幅広の二本一組の丸窓で蓮弁文を描き、蓮弁間を三角形状の工具で一本の蓮弁を描き強弱をつけている。鍔上面に片切り彫りの稜花を鍔端に沿うように描く。外底の大半を欠く。残存部は全面に施釉。	S A19 20 第2層
團29 13		II d ロ	25.2 4.5 12.2	淡灰白色的微粒子。	淡青色。 なし。		鍔を平坦に成形した稜花盤。外体面の高台脇に丸窓の界線を施し区画とする。区画内は幅7~12mmの丸窓で蓮弁文を描く。鍔上面には二叉線状の工具で鍔端に沿うように稜花を描く。全面施釉後に外底の釉を搔き取る。	S A20 第2層

第33表 青磁盤觀察一覧

編番号 国新番号 遺物番号	名 称 ・ 假 称	分類	口様 器高 高台径 (cm)	素 地	釉 色 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
第438 國新29 14		II e	23.0 5.0 7.3	淡灰色の微粒子。	淡緑色。 なし。	銚を平坦に成形した綾花盤。銚端の外面は他と異なり厚みのある平坦面。外体面は無文。銚端部は僅かに上方に突出する。銚上面に範描きでラマ式蓮弁の弁先を描く。内底面に幅6~11mmの蓮弁を丸窓で描く。内底面に印花牡丹文を施す。外底面は全面施釉の後に方形形状に釉を搔き取っている。	S A20 第2層
第440 國新30 15		III a	25.2 6.7 8.5	〃	黄緑色。 画面に粗い貫入。	銚端部を上方に撮上げた盤。内底面に片切り彫りによる牡丹唐草文を描く。内底面に陽囲線と不鮮明な印花が施されている。外底面は全面施釉の後に外底釉を雜に搔き取る。外底面に胎土目の陶土が付着する。	S A20 第2層
〃 〃 16		III a	20.2 5.2 7.8	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 なし。	〃。内底面に片切り彫りによる刻花文(牡丹唐草文とみられる)を描く。内底面に陰囲線と印花八宝文を施す。全面施釉の後で外底面の釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19 第3層
〃 〃 17	銚	III b	26.3 6.9 12.0	黃白色の微粒子。	黄緑色。 画面に粗い貫入。	〃。内底面に幅広の丸窓で蓮弁文を描いている。内底面の文様や印花の有無については釉溜りで判らない。全面施釉の後で外底釉を搔き取っている。	S A19 · 20 第2層 第3層
〃 〃 18		III b	24.0 5.5 10.6	淡灰色の細粒子。	濃緑色。 なし。	〃。内底面に幅広(最大幅11mm)の丸窓で蓮弁文を描いている。内底面の文様や印花の有無について釉溜りで確認できない。全面施釉の後で外底釉を雜に輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。	S A19 第3層
〃 國新19	縁	III b	23.1 5.3~ 5.8 7.2	灰色の微粒子。	〃。 画面に粗い貫入。	〃。内底面に幅広(最大幅7.5mm)の丸窓で蓮弁文を描く。内底面に構図不詳の印花を施す。全面施釉の後で外底面の釉を搔き取っている。	S A20 第2層
〃 〃 20	盤	III b	18.1 4.7 6.6	淡灰色の微粒子。	青緑色。 なし。	銚端部を上方に撮上げて成形する盤。内底面に幅広(最大幅8.5mm)の丸窓で間隔を空けた蓮弁文を描く。内底面に陰囲線を施す。全面施釉の後で外底釉を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。外底面に目痕の陶土が付着する。	S A19 · 20 第2層 第3層
〃 〃 21		III c	25.8 5.9 10.0	淡灰色の細粒子。	〃。 なし。	〃。内底面に2本櫛(1本の幅4.5mm)による蓮弁文を施す。内底面に陰囲線と印花牡丹文を施す。外底面は全面施釉の後で輪状に釉を搔き取って蛇ノ目状とする。	S A20 遺構 D-16 第3層
〃 〃 22		III c	25.6 5.2 10.8	灰白色の微粒子。	淡緑色。 なし。	〃。内底面に2本櫛(1本の幅5mm)による蓮弁文を施す。内底面に陰囲線と構図不詳の印花文を施す。外底面は全面施釉の後で雜に輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A19 第2層
〃 國新23		III d	24.6 — 11.0	〃	青緑色。 なし。	〃。内底面に3本櫛(1本の幅4mm)による蓮弁文を施す。内底面に陰囲線と印花牡丹唐草文を施す。外底面は全面施釉の後で雜な輪状の搔き取りで蛇ノ目状とする。	S A20 第2層
〃 〃 24		III d	24.0 5.6 9.8	淡灰色の細粒子。	明緑色。 なし。	〃。内底面に3本櫛(1本の幅4mm)による蓮弁文を施す。内底面に陰囲線と印花牡丹唐草文を施す。外底面は全面施釉の後で雜な輪状の搔き取りで蛇ノ目状とする。上記23と特徴が類似している。	S A20 第2層

第33表 青磁盤観察一覧

標印番号 図版番号 遺物番号	名称・ 假称	分類	口径 器高 基台径 (cm)	素 地	釉 色 質	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第46図 図版22 25		III e	23.2 5.6 8.1	淡灰色の細粒子。	明緑色。 両面に粗い質入。	鉢端部を上方に攝上げて成形する盤。内底面に6本櫛(1本の幅3.5mm)による蓮弁文を施す。内底面に陰圏線と印花文(菊花?)を施す。外底面は全面施釉の後で外底軸の大半を搔き取る。	S A20 第3層
々々 26	鉢	III g	18.2 5.8 6.0	灰褐色の粗粒子。	濃緑色。 両面に粗い質入。	“”。内底面に11本櫛(1本の幅1mm)による蓮弁文を描く。内底の釉を円形状に搔き取り露胎とする。内底に目痕あり。外面は扱付まで釉が掛けられ、高台内面から外底面を露胎とする。	S A20 第2層
		III h	23.2 5.5 9.5	淡灰色の微粒子。	黄茶色。 両面に細かい質入。	“”。内・外底面とも無文である。内底面に陰圏線と印花を施しているが釉溜りで判らない。外底面は全面施釉の後で大半を雜に搔き取っている。	S A19・ 20
々々 28	盤	IV a	23.8 5.5 8.6	淡灰色の細粒子。	明緑色。 両面に粗い質入。	鉢上面を浅く窪ませた盤。内底面に幅広(最大幅7mm)の丸窓で蓮弁文を描く。内底面の圏線の有無については判らないが印花を施しているようであるが釉溜りで構図不明。全面施釉の後で外底軸を搔き取る。	S A19・ 20 第2層
		IV b	22.8 5.9 8.2	“”。	“”。	“”。内底面に4本櫛(1本の幅2mm)で蓮弁文を描く。内底面に陽圏線のみを描く。内底面に輪轉痕。外底は全面施釉の後で外底面の大半を搔き取り露胎とする。扱付に研磨が加えられたため、露胎となっている。	S A19 第3層
々々 30	直	I a	28.2 14.2 6.5	淡灰白色の微粒子。	淡青緑色。 なし。	口縁が僅かに端反り、口縁直下に浅い削りを加えている。内底面に片切り彫りによる牡丹唐草文を描く。内底面に陰圏線と印花文を施しているが内底の大半を欠き花の種類は不明。全面施釉の後で外底を輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。	S A20 第2層
々々 31	口 縁	I a	28.1 4.0 15.0	淡灰白色の細粒子。	淡緑色。 なし。	口縁の微弱な玉縁状の肥厚は肥厚帯直下の削りで成形される。内底面は片切り彫りによる工具で花弁を6枚描き、弁内に吉祥文を施す。内底面に陽圏線と印花牡丹唐草文を施す。外底面は全面施釉の後で雜な輪状の搔き取りで蛇ノ目状とする。	S A19・ 20 第2層 第3層
々々 32	盤	I b	24.6 4.5 13.4	淡灰色の微粒子。	“”。	口縁の肥厚は輪轉成形によって小さな玉縁状の肥厚を造る。内底面に7本櫛(1本の幅1mm)で蓮弁文を描く。内底面に印花による菊文を施す。外底面は全面施釉の後で釉を輪状に搔き取って蛇ノ目状とする。	S A20 第2層

## D. 青磁壺

土壤SK01(S A19・20、S A28)内より出土した青磁壺は小型壺と大型壺の2種類が確認されている。小型壺の推定個体数は2個体であった。大型壺は身部が11個体、蓋7個分が得られていて、蓋の3個は身と合致しなかったため、推定された個体数は身部の11個体に蓋の3個を加えた14個体相当が考えられた。

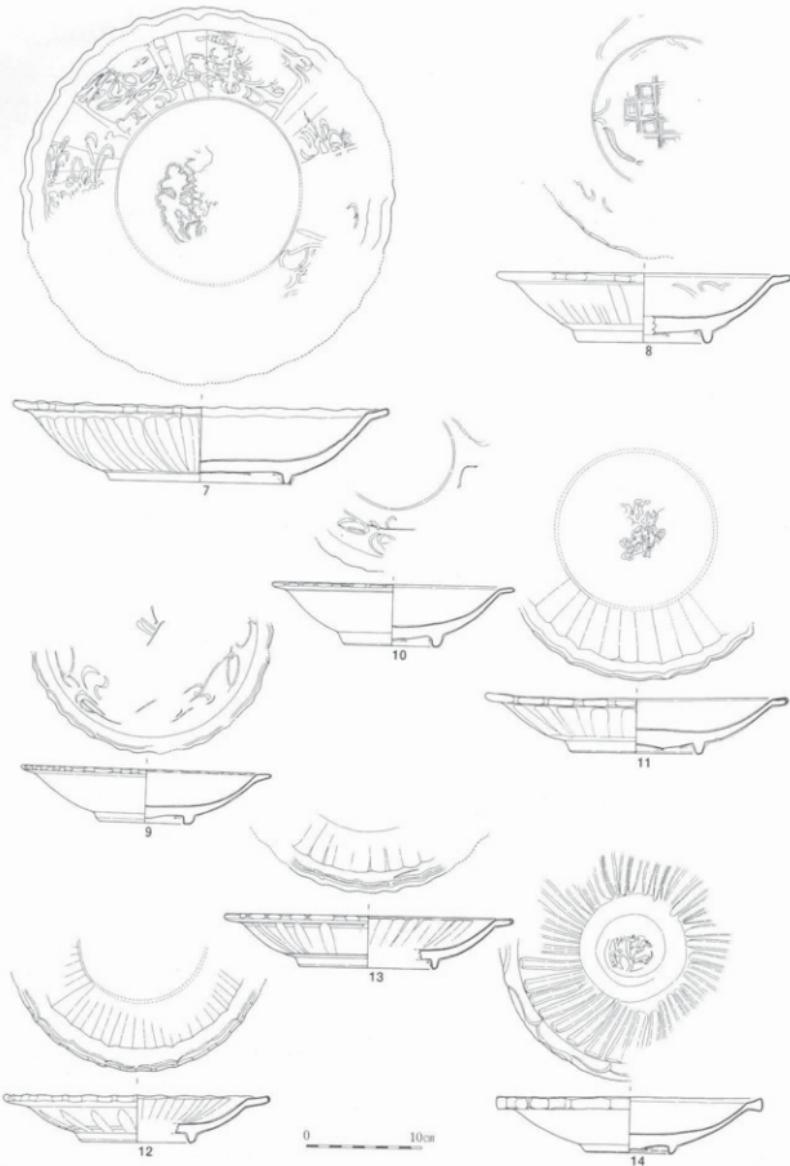
青磁壺は上記のとおり小型壺と大型壺の二つに大別したが、便宜的に前者の小型壺をI群、後者の大型壺をII群として分けた。以下、I群とII群の壺について分類概念を記す。個々の特徴については観察表を呈示する(第34表)。

## 1. I群(小型壺)(第46図1・2)

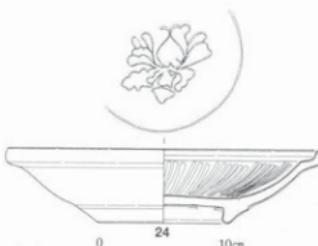
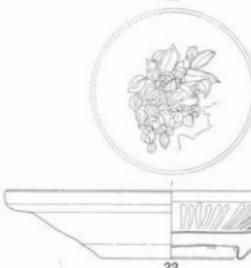
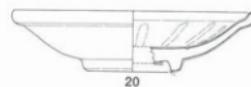
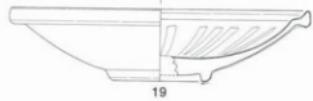
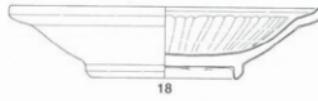
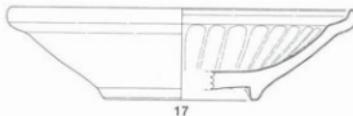
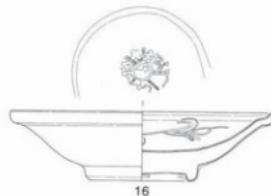
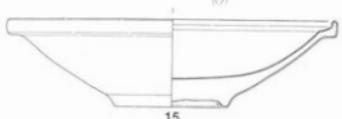
本群に所属するものは身の二個体のみであった。I群の蓋は検出されていない。文様などからI群はA類とB



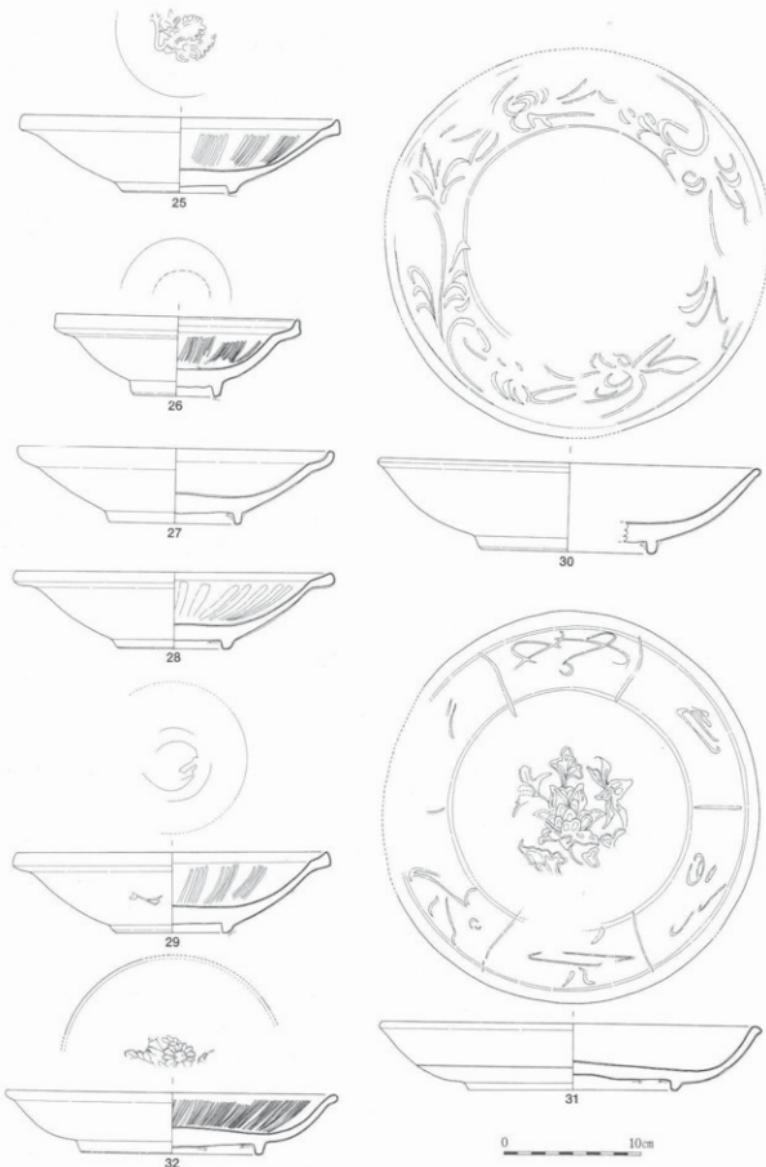
第42図 青磁盤 (1)



第43図 青磁盤 (2)



第44図 青 磁 盤 (3)



第45図 青磁盤(4)

類の2類に分類した。

A類…外体面の中央に片切り彫りによる刻花文を描き、胴下部に肉厚の蓮弁文を箆で描くものである。胴部中央に描かれた主文となる刻花文（花唐草文か）の上下には二本一組の界線と一本の界線でもって文様を区画し、胴下部に肉厚の蓮弁文を描く（第46図1）。

B類…胴下部を欠くが、丸箆で外体面に蓮弁文を描くものである。口頭部と胴上部に二本一組の界線を施している（同図2）。

## 2. II群（大型壺）（第46図3・6、第47図4・7・8、第48図5・14、第49図15～18）

II群の大型壺は身部で11個体が得られている。他に大型壺の蓋が7個体分得されているが、蓋の3個は上記したように合致しなかった。II群の推定個体数は身と蓋を含めて検討した場合、14個体相当が推定される。身部は外体面の胴部に描かれた文様などからA類～C類までの3類に分けた。

A類…外体面中央には片切り彫りで花弁文（弁内に吉祥字）4枚を配置し、花弁を唐草文で繋ぐものと花唐草文のみを単独に描き展開するものなどがある。胴下部には界線を挟んで蓮弁文を箆で描くものである。

A類は6個体が得られていて、胴下部に描かれた蓮弁文の表現手法などからa種～d種の4種類に細分した（第46図3・6、第47図4・7・8、第48図5）。

a種…胴下部に鎖のある蓮弁文を描くもの（第46図3・9）。

b種…胴下部に肉厚の蓮弁文を描くもの（第47図4・10、第48図5・11）。

c種…胴下部に箆書きで間弁のある蓮弁文を描き弁幅が12mm程度と狭いもの（第46図6）。

d種…胴下部に箆書きで幅広（23～25mm）の蓮弁文を描くもの（第47図7・8）。

B類…外体面中央に丸箆で蓮弁文を描いた後に蓮弁文の上から新たに片切り彫りで花唐草文や花文を描いているものである。丁度、蓮弁と花文などを重ねて描いた状態にある。胴下部には界線を挟んで箆書きの蓮弁文を施している。胴下部に施された蓮弁文の描き方でa種とb種の2種類に細分した。B類は2個体分が得られている。

a種…胴下部に鎖のある蓮弁文を描くもの（第48図14）。

b種…胴下部にやや肉厚の蓮弁文を描くもの（第49図15）。

C類…外体面の頭下部から高台際まで丸箆で蓮弁文を描くものである。三個体が出土していて、外体面に施された蓮弁文の描き方などからa種とb種の2種類に細分した。

a種…外体面に幅3mm程度の丸箆で肉厚の蓮弁文を密に描くもの（第49図16・17）。

b種…外体面に施用具を変えて二種類の蓮弁文を描いたものである。胴部中央には幅広の蓮弁文を丸箆で描き、胴下部には2本の界線を挟んで箆書きの蓮弁文を描いたものである（第49図18・19）。

## 3. II群（大型壺）の蓋（第46図9、第47図10、第48図11・12・20、第49図13・19）

II群の大型壺の蓋資料については、II群の身の分類に準じることにするが身分類のII群B類の蓋は未検出であった。また、II群A類で合致しない蓋については細分分類のa種～d種までの4種類の分類を省略して単にII群A類と観察表中に表すこととした。その他に身と合致した蓋は観察表中に身の図番号を観察表に記した。ここでは単に特徴などを記すこととする。

II群A類壺の蓋…蓋甲に片切り彫りで花弁文を描くものや花唐草文などを描くもので鉢縁を5～6箇所上方に持ち上げて波状に成形したもの（5点）や鉢縁を波状に成形しないもの（1点）がある（第46図9、第47図10、第48図11・12・20、第49図13）。これらの蓋資料の中には一例ではあるが、蓋甲内面の中央部分に印花を施したものが得られている。

II群B類壺の蓋…未検出であった。

II群C類壺の蓋…蓋甲に丸箆で蓮弁文を描くものが1点のみ得られている（第49図19）。

## 小 結

II群の大型壺について類例資料を挙げて結びとする。II群A類a種（第46図3）は胴部中央に4枚の花弁と弁内に吉祥字を描いた鎌文壺と同品の蓋（第46図9）の類似例として、東京国立博物館の寄贈品にみられる青磁花

卉文有蓋壺（註1）があり、時代は元～明時代（14～15世紀）に比定されているようである。次にⅡ群A類d種（第47図7・8）も東京国立博物館の寄贈品や収蔵品の中で確認できるようであり、確認できたのは青磁花唐草文有蓋壺（註2）と青磁牡丹唐草文有蓋壺（註3）の2点とみられるものであった。2点とも明代（14～15世紀）に比定されているものである。

Ⅱ群C類a種（第49図16・17）やⅡ群C類壺の蓋（第46図9）と同一タイプとみられる資料は韓國の新安海底遺物にもあり、青磁鏡文壺（註4）として紹介されているものであり、元代の壺（註5）として考えてもよいようである。

### 註

註1. 東京国立博物館 「東京国立博物館団版目録・中国陶磁篇Ⅱ」1990年に収録。〔図版16 青磁花卉文有蓋壺 1 <TG-2510> 龍泉窯 元～明時代 14～15世紀 縦高35.6 口径26.5 底径18.0 広田松繁氏寄贈〕

註2. 註1に同じ。〔図版481 青磁花唐草文有蓋壺 1 <TG-712> 龍泉窯 明時代 14～15世紀 縦高18.5 口径12.2 底径9.2 橋河民輔氏寄贈〕

註3. 註1に同じ。〔図版482 青磁牡丹唐草文有蓋壺 1 <TG-270> 龍泉窯 明時代 14～15世紀 縦高34.2 口径23.6 底径18.2〕

註4. 文化公報部 文化財管理局 「新安海底遺物」 同和出版公社 1983年〔2個体が掲載されている。参考までにサイズを記す。図版30 37 a・b 青磁鏡文蓋壺（口径24.9cm、高さ24.5cm、底径17.5cm）と図版31 38青磁鏡文壺（口径15.5cm、高さ14.0cm、底径11.5cm）〕

註5. 長谷部賀爾氏が1997年7月7日に来沖した際に京の内資料を実見し、中国元代の壺であることと類例が韓國の新安海底引き揚げ遺物にあることを教示して頂いた。

第34表 青磁壺観察一覧

( ) : 推定

編番号 団版番号 遺物番号	名 称 ・ 假 称	分 類	口 径 器 高 高台径 (cm)	素 地	釉 色 質 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第47 図版34 1	小 型	I A	10.8 (11.2) 9.3	淡灰色の微粒子。	濃緑色。 粗い貫入は 内底と外底 に限って観 察される。	丸味のある壺で口頭部の屈曲はゆるい。頭下部から胴上部に片切り彫りで文様を描いているが釉が厚いため判らない。胴上部に叉状工具による界線を施し、その直下から片切り彫りによる丸文（牡丹唐草文か菊文）を描いている。胴下部に丸窓で界線を施していく、界線直下より肉厚の蓮弁文を窓で描いている。全面施釉の後で口唇の釉を搔き取って露胎とする。高台も下端から疊付までの釉を搔き取って露胎とする。疊付に砂胎土目の陶土が付着する。	S A19 第3層
		I B	10.8 — —	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 なし。	”。口頭部と胴上部に叉状工具による界線を施し、胴上部の界線直下から幅(7mmを最大とする)のある蓮弁文を丸窓で描いている。釉は口唇及び口唇の内外端を搔き取って露胎とする。	S A20 第2層
ク ク 2	大 型	II A a	25.5 26.3 19.0	。	淡緑色。 なし。	口頭部でゆるく屈曲する丸味のある壺。頭下部と胴下部に二条一組の界線を施し文様を区画する。中央に花弁文を描き弁内に吉祥字を4箇所に施しているが3箇所の文字は不詳であった。判断できた文字は「酒」の一文字である。中央の花弁文は4箇所に描かれていて花弁の間隔を埋めるために花唐草文などを片切り彫りで描いている。胴下部には鍋のある蓮弁文を窓で描く。底は落し底で内面は円形状に釉が搔き取られている。外面は僅かに搔き取りが認められる程度である。	S A19・ 20 第2層 第4層
ク ク 3	壺						

第34表 青磁壺観察一覧

標題番号 図版番号 遺物番号	名 称 ・假 称	分類	口 径 器 高 さ 台 径 (cm)	素 地	釉 色 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
第47回 図版36 4		II A b	24.3 24.9 20.2	淡灰色の細粒子。	明緑色。 両面に粗い 貫入が認め られる。	口頭部でゆるく屈曲する丸味のある壺。肩部から 胴部中央に片切り彫りによる花唐草文を描く。胴 中央よりやや下位に間隔のある爻状工具で界線を 施す。界線直下より範描きで肉厚のある蓮弁文を 描く。底は落し底で、内面の釉を輪状に搔き取って 蛇ノ目状とする。外底面には釉の搔き取りはない。	S A19・ 20 第2層 第3層 第4層
第47回 図版35 5	大 型	II A b	20.7 22.2 17.2	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 貫入はない。	口頭部でゆるく屈曲する丸味のある壺。肩部と胴 中央近くに爻状工具による界線を施し文様を区画 する。胴中央に牡丹文と花文を片切り彫りで描い ている。胴下部にはやや肉厚の蓮弁文を範で描い ている。底は落し底で内外面とも円形状に大きくな 釉を搔き取って露胎とする。	S A19・ 20往 第2層 第3層
第47回 図版34 6		II A c	23.2 24.8 17.5	〃	明青緑色。 〃	〃。口縁に細線描きによる界線を一条施す。口頭部は幅4mmの界線を丸範で描いている。肩部と胴部中央より下には爻状工具による界線で文様を区画する。胴部は継ぎ方向に三本一組の沈線を丸範で描き、胴中央を6区画に分割している。区画内は各種の花文を片切り彫りで描いている。確認できる花文は菊花のみであった。胴下部には範描きで間弁のある蓮弁文を描いている。底は落し底で内面は釉が円形状に搔き取って露胎とする。外底への釉の搔き取りはない。	S A19・ 20 第2層 第3層
第47回 図版35 7	壺	II A d	24.1 24.7 18.5	〃	明緑色。 〃	〃。肩部に片切り彫りによる界線を間隔を空けて二本施している。腰中央より下は爻状工具による界線を施して文様を区画する。胴部には片切り彫りで二つの花を中心に描いて蔓唐草文で展開させて空間を埋めている。胴下部は幅広(23mm程度)の蓮弁文を描いている。底は落し底で内外とも中心の釉を円形状に搔き取って露胎させている。	S A19・ 20 第2層 B-14 覆土
〃 8		II A d	26.0 23.9 19.0	淡灰色の微粒子。 微細な気泡痕が多く観察できる。	淡緑色。 外面の半分程度は細かい貫入が観察できる。	〃。頭下部と胴部中央より下に間隔のあ いた界線を二本一組で施し、文様を区画する。胴 部には花を6箇所に配するように片切り彫りで描 き、その波を沈線の沈線で埋めつくしている。確 認された花の種類は菊花と牡丹花であった。胴下 部には幅広(25mm程度)の蓮弁を範描きで描いて いる。底は落し底で内底に印花文を施した後に釉 を掛け輪状に搔き取り蛇ノ目状とする。蛇ノ目 の中央で印花文がみえる。外底は釉の搔き取りが ない。	S A19・ 20 第3層
第47回 図版34 9	大 型	蓋 II A a	外径 30.2 内径 20.2 高さ 8.3	淡灰白色の微粒子。	淡緑色。 なし。	図3の蓋。蓋甲頂周から蓋甲下周(鎧際上部)に は花弁を4枚描き弁内にかなり崩れた吉祥字を片 切り彫りで描いている。蓋甲頂部に素焼きの玉取 り獅子を貼り付けて被とする。釉は鎧端から蓋甲 全体に厚く施し、鎧縁下端から裏面全体を露胎と する。	S A19・ 20 第3層
第47回 図版36 10		蓋 II A b	外径 89.6 内径 — 高さ 6.8	淡灰色の細粒子。	明緑色。 外面に粗い 貫入が観ら れる。	図4の蓋。蓋甲頂周から蓋甲下周(鎧際上部)に は片切り彫りによる花唐草文を描く。被を欠くが 宝珠玉状の被かと思われる。釉は蓋甲全面に掛け られている。裏面は蓋甲内面のみ施され鎧下面か ら身受けの突起部分は露胎である。	S A19 第3層

第34表 青磁壺観察一覧

( ) : 推定

標番号 図版番号 遺物番号	名称 假称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	素 地	釉 色 貫 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第4回 図版35 11		蓋 II A b	外径 26.2 内径 16.0 高さ 7.4	淡灰白色の微粒子。	濃緑色を主 体に一部は 明緑色を呈 する。	図5の蓋。蓋甲頂周から蓋甲下周(錫際上部)に は片切り彫りによる花文や葉文とみられるものを 描き蓋甲下周(錫際上部)に交叉工具による界線 を施す。釉は蓋甲全体に掛けられている。裏面は 甲内面に部分的に掛けられている。	S A19・ 20 第3層
〃 図版36 12	型 壺	蓋 II A	外径 26.1 内径 15.4 高さ 7.2	〃 〃	淡緑色。 なし。	宝珠玉状の攝のある蓋。蓋甲頂周から蓋甲下周に かけて片切り彫りによる蓮花唐草文とみられる文 様を描く。釉は蓋甲全面と蓋甲内面に施されてい る。	S A19・ 20 第2層 S A19 裏込目
第4回 図版35 13	蓋 II A	外径 26.6 内径 17.4	淡灰色の細粒子。	〃 〃	蓋甲内面の中央に印花を施している。蓋甲頂周か ら蓋甲下周に二本の界線と片切り彫りによる刻花 文を描いている。釉は蓋甲全体のみ施釉。蓋の内 面は露胎のままである。	S A20 第2層 第3層	
第4回 図版36 14	II B a	21.3 22.1 16.5	淡灰白色の微粒子。	濃緑色。 なし。	口頭部が「く」の字状に屈曲し肩部が明瞭となる 壺。頭下部に片切り彫りの蔓草文を描く。肩部 から胴部中央付近まで囲繞する肉厚の蓮文を施し、 その上から片切り彫りによる牡丹花を重ねて描く。 胴下部には鶴のある蓮弁文を描いている。落し底の 底は内外面とも円形状に釉を搔き取って露胎とする。	S A19・ 20珪 第2層	
第4回 図版37 15	大 壺	II B b	20.0 (20.0) (15.4)	淡灰白色の微粒子。	明緑色。 なし。	口頭部の屈曲がゆるくなる壺。肩上部から胴部中 央より下までは間隔の空いた界線を二本一組で上 下に施し、文様を区画する。胴部中央には幅広の 丸窓で蓮弁文を描いた後で、片切り彫りによる花 文を蓮弁の上に描いている。胴下部には片切り彫 りで弁先の尖った蓮弁文を描いている。落し底の内 外面は円形状に釉を搔き取っている。内面の中央 に印花文を施している。	S A20 第2層
〃 16	型 壺	II C a	18.8 19.5 17.0	〃 〃	灰緑色。 外面に粗い 貫入が觀察 できる。内 面に貫入は ない。	口頭部の屈曲は「く」の字状に屈曲しII群A・B 類よりも明瞭に折れている。丸窓(3mm幅)でや や肉厚の蓮弁文を描いている。落し底への釉の搔 き取りはない。	S A19・ 20 第2層
〃 17	壺	II C a	24.0 23.3 19.8	〃 〃	明緑色。 なし。	〃。口縁に方 形状の小さな肥厚を造る。丸窓の幅も上記16と同 様に3mm幅のものを用いる。	不明
〃 18		II C b	21.5 21.2 17.6	〃 〃	淡緑色。 外面の貫入 は細かく、 内面の貫入 は粗い。	〃。間隔の空いた二本一組の界線を肩部 と胴下部に施して文様を区画する。胴部には幅4 ~6mmの丸窓で蓮弁文を描く。胴下部の界線を抉 んで弁先の尖った蓮弁文を描いている。胴部の蓮 弁はやや肉厚で胴下部は肉が薄いものである。落 し底の内面は大きく輪状に搔き取って蛇ノ目状と する。外底は釉の搔き取りはない。	S A19・ 20珪 第2層 S A20 覆土

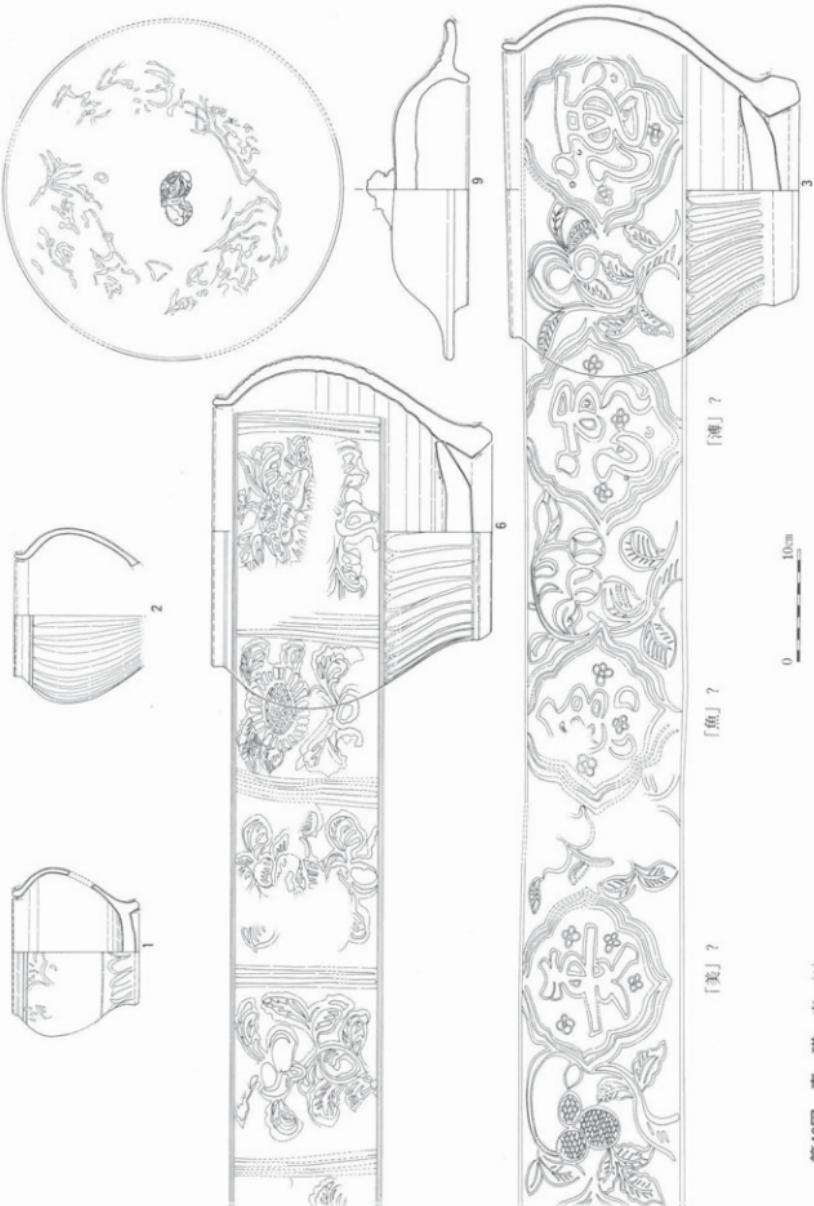
第34表 青磁壺観察一覧

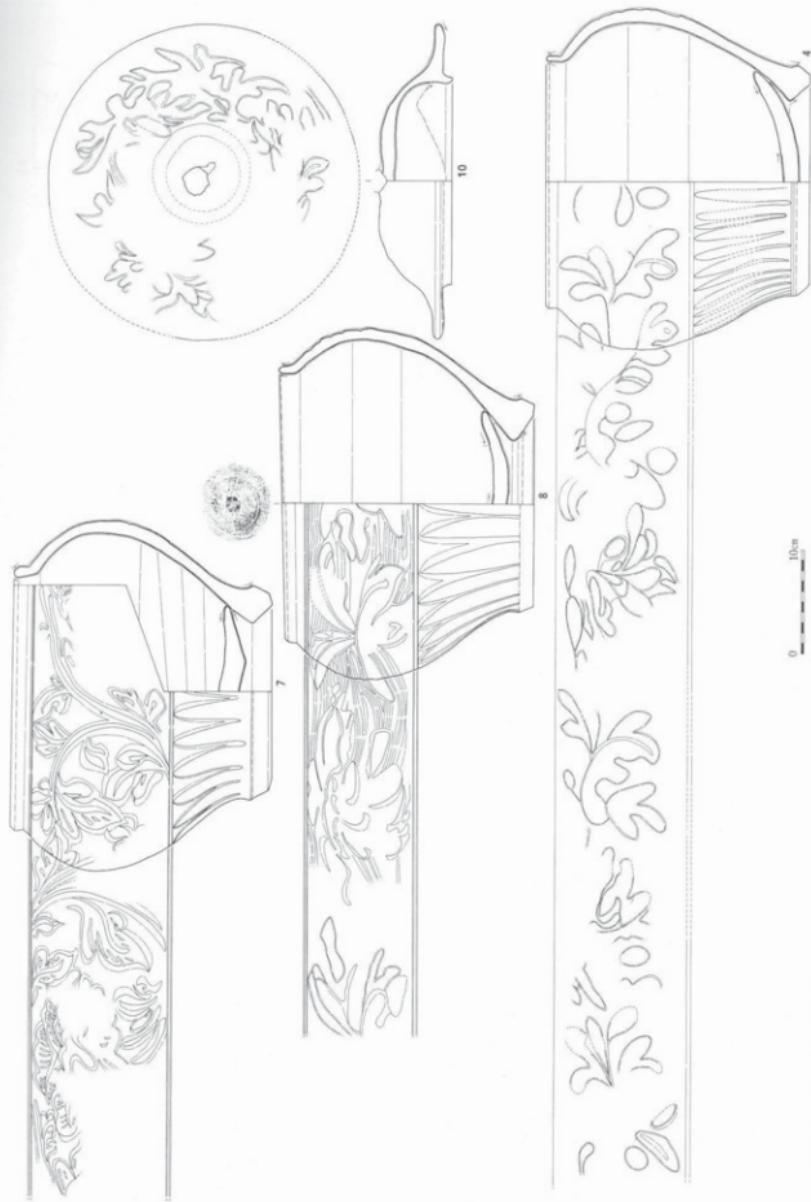
標本番号 図版番号 遺物番号	名 称 ・ 假 称	分類	口径 器高 高さ後 (cm)	素 地	釉 色 質 入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出 土 層
第34 図版27 19		蓋 II C b	外径 26.0 内径 15.7 高さ 8.2	淡灰白色の微粒子。	淡緑色。 外面のみ細 かい貫入が みられる。	上記18の蓋。蓋甲頂部に宝珠玉状の撮を貼り付けて いる。蓋甲頂周と蓋甲下周に間隔のある二本一組 の界線を施して区画をつくり区画内に丸窓でやや肉 厚の蓮弁文を描いている。蓋甲下周の鉢縁沿いには 不鮮明ではあるが幅5mmの界線を施している。釉は 蓋甲外面のみ限られて施されている。	S A19 · 20 第2層
第34 図版28 20	壺 蓋	蓋 II A	外径 25.8 内径 16.2 高さ 6.2	淡灰色の微粒子。	明緑色。外 面のみに粗 い貫入。	該当する身は存在しないようである。蓋甲頂部の撮 を欠く。蓋甲頂周と蓋甲下周に片切り彫りで刻花文 とみられるものを描くが釉が厚く不鮮明である。釉 は蓋甲全体にのみ施されていて内面は露胎のままで あった。鉢縁は波状ではなく平鰐のままで成形され ている。	S A20 第2層

第46図 青磁並（1）

0 ————— 10cm

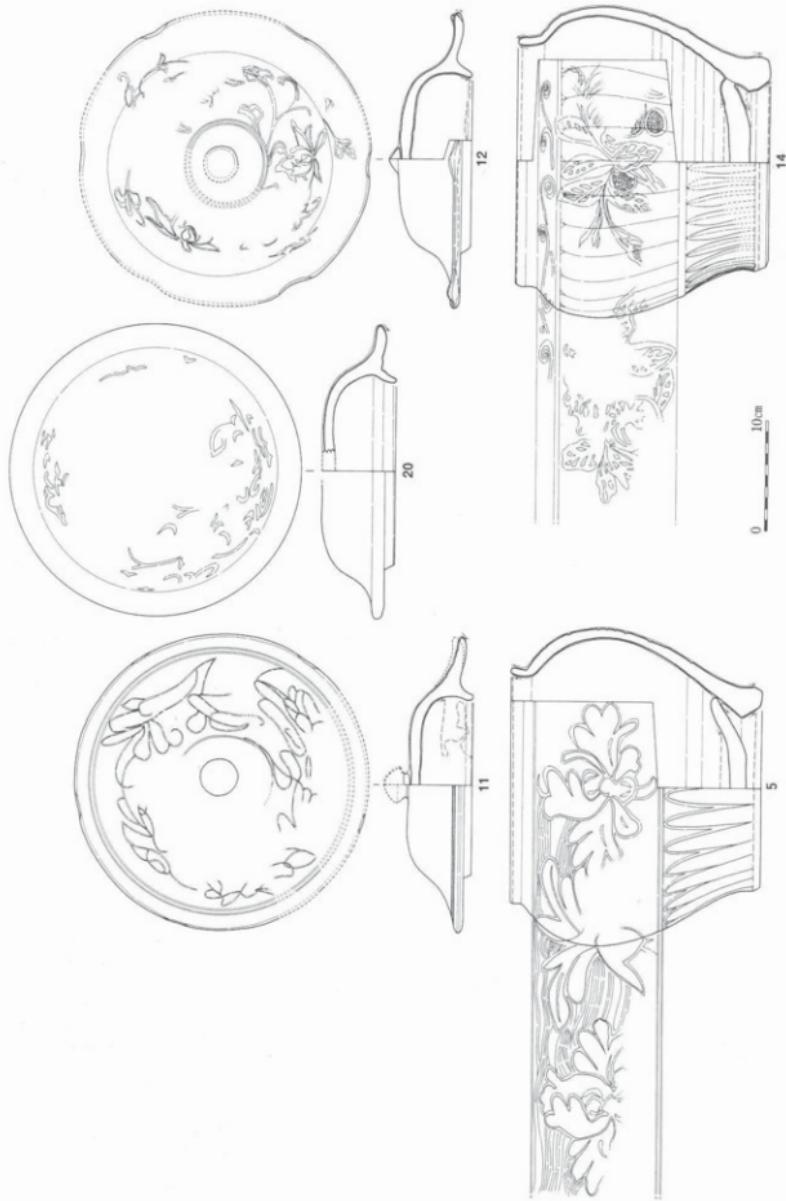
「魚」？ 「美」？ 「油」？





第47図 青磁童子 (2)

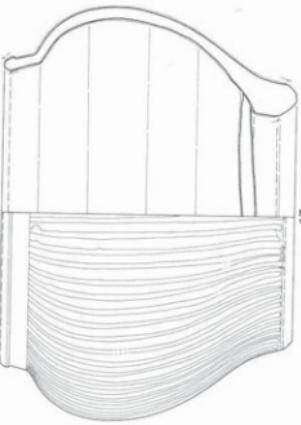
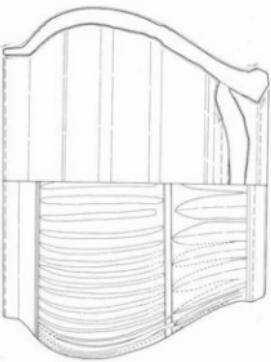
第48図 青磁壺 (3)



第49図 青磁壺 (4)

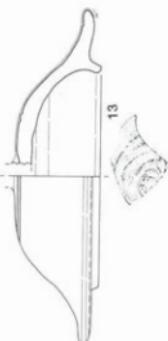
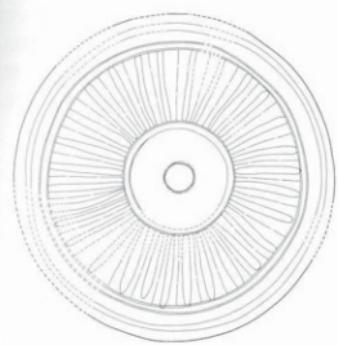
0 10cm

15



16

19



## E. 青磁大瓶

土壇SK01 (SA19・20、SA28) 内より青磁の大型瓶が2個体（胴・底部の大型破片2点を含む）相当が得られている。唯一復元された資料は大花瓶であった。他の1個体も大型の瓶であった。便宜的に大花瓶をI群とし、大型瓶（大瓶）はII群とする。

### 1. I群（大花瓶）(第50図1)

第50図1は唯一復元された大花瓶である。胴継ぎが頭下部と胴中央よりやや下位でなされていて、底は落し底である。長頸の大花瓶で、口縁近くをラッパ状に大きく外側に開かせた後で口縁を更に下方へ折り曲げて口造りを完成させている。口縁外端近くに丸彫りの浅い界線を一条施している。頭部上部には6本の陽圈線を丸窓で描く。頭部中央には陽刻の牡丹唐草文を2箇所に配置し、頭下部と肩上部に陽文の界線を1本ずつ施している。胴中央には陽刻の牡丹唐草文を3箇所に配置している。その直下には陽界線を挟んで鏡のある蓮弁文を回続する。胴最下部は鏡蓮弁の弁尻を区切る三角形状の凸帯文を一条巡らしている。素地は淡灰色の微粒子である。釉色は淡い灰緑色で全面施釉の後で脛付と高台の内・外端面の釉を搔き取って露胎させている。貫入は両面に観察され、粗い貫入と細かい貫入が存在する。サイズは口径26.7cm、高さ62.7cm、底径14.6cmであった。B-15 S A20の第2層より出土している。

### 2. II群（大瓶）(第50図2)

同図2は大花瓶か大瓶の底部資料である。同一の破片資料として肩部と胴部の資料が存在する。文様は破片資料を含めて記述すると肩部には鏡のある蓮弁文が存在し、その直下に片切り彫りで二条の界線を施している。胴部には片切り彫りで唐草文を描いている。花文は確認できない。胴下部には片切り彫りで二条の界線でもって区画帯を造り、その直下に鏡のある蓮弁文を底面近くまで施している。底は落し底である。釉が搔き取られ露胎となる箇所は脛付と高台の内・外端面である。素地は淡灰白色の微粒子である。釉色は明緑色を呈し、両面に粗い貫入と細かい貫入が観察される。底径は16.9cmを測った。B-15 S A20第3層とSA19・20の第2層より出土。

## 小 結

I群の第50図1は仮称で青磁陽刻牡丹唐草文大花瓶とする。この種の大花瓶の全形を窺うことのできる資料については管見の限りにおいては国内の遺跡からの出土例はないようである。しかしながら県内遺跡の報告例では今帰仁城跡（註1）から同種の大花瓶の頭部破片が出土しているのが唯一であろう。

同種の青磁牡丹唐草文大花瓶で最も著名な資料としてイギリスのデヴィッド・コレクションにみえる泰定4年（1327）銘入りの青磁牡丹唐草文大瓶（註2）がある。他に韓国的新安海底引き上げ遺物の中にみえる口縁を欠いた青磁陽刻牡丹唐草文大花瓶（註3）があるようである。

京の内資料としてイギリスのデヴィッド・コレクションや新安海底遺物の大花瓶を図版をとおして観察してみると京の内資料の青磁陽刻牡丹唐草文大花瓶は口縁の折り曲げと外体面最下位にある蓮弁の弁尻を区画する大きな三角形状の凸帯が特徴であり、デヴィッド・コレクションや新安海底遺物にみえる大瓶や大花瓶には認められない。京の内資料にみえる口縁の折り曲げや凸帯は特徴的な技法を採用しているようであり、これが若干の時間的な差によって生じているのか、あるいは同時期の陶工の個性によって生じているかは判然としないところである。京の内資料も中国元代の所産として位置づけることについては問題はないようである。

## 註

註1. 金武正紀・宮里末廣ほか 『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』 今帰仁村教育委員会 1983年。

註2. 長谷部泰爾ほか 『デヴィッド・コレクション 中国陶磁展』 日本経済新聞社 1980年に収録 [No.36 青磁牡丹唐草文大瓶 龍泉窯 元時代 泰定4年（1327） 高さ72.2cm]

註3. 文化公報部 文化財管理局 『新安海底遺物』 同和出版公社 1983年に収録 [図版18 23青磁陽刻牡丹唐草文大花瓶 残存高64.0cm 口径-底径18.0cm]



第50図 青磁大花瓶・大瓶

## F. 青磁大鉢

土壤S K01 (S A19・20、S A28) 内から大鉢（口縁破片を含む）が4個体相当得られている。口縁資料は破片のため図化を省略した。唯一復元された資料のみを報告することにする。

### 1. 大鉢

第51図1は直口口縁の大鉢である。外体面の口縁には片切り彫りで雷文帯を描く。雷文は時計回りで中心方向に描き中心から反転させて反時計回りに描かれているものである。雷文帯直下から高台脇までは片切り彫りと三本櫛を用いた牡丹唐草文を描いている。内体面にも内底まで片切り彫りと三本櫛で牡丹唐草文を描いている。見込みには片切り彫りの花弁で園線を表現し、花弁内にも片切り彫りで文様を施しているが構図は不詳であった。素地は淡灰白色の微粒子である。貫入はない。釉色は淡緑色で全面施釉の後で外底面の釉を円形状あるいは蛇目状に搔き取っている（外底の中心を欠く）。サイズは口径が26.8～30.6cm、高さ12.3～13.9cm、高台径10.2cmであった。S A20第2層より出土している。

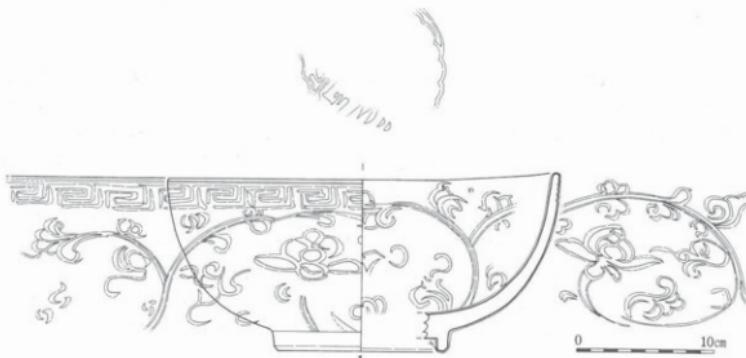
### 小 結

この種の大鉢の類似として宮古平良市の住屋遺跡（註1）が好資料として挙げられる。住屋遺跡出土の大鉢は口縁が外反するタイプのもので本品よりもやや大振りの鉢である。住屋遺跡出土資料は14世紀末～15世紀前半頃のものとして位置づけられているようである。本資料の時期も住屋例と同時期の頃が予想されるところである。

住屋例は外体面に片切り彫りで唐草文を描き、内体面は松葉様菱形文と花文を組み合わせた（四方禪文と雲文か）文様を口縁に描き、その直下に外体面と同様の唐草文を描いているようである。この種の大鉢の復元資料は今日まで県内では住屋遺跡の例しか確認されていなかったが、本品はこれに次ぐ二例目の資料となったようである。

### 註

註1. 砂辺和正「住屋遺跡 平良市新庁舎建設に伴う記録保存の為の緊急発掘調査概報」『平良市文化財調査報告書第2集』平良市教育委員会 1992年。



第51図 青 磁 大鉢

## G. 青磁馬上杯

土壇SK01 (S A19・20、S A28) 内より有文と無文の馬上杯が各1点づつ出土している。以下、有文と無文に分類して特徴などを記すことにする。

### 1. 有文馬上杯

第52図1は口縁を欠く馬上杯で、外体面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。脚中央には陽圏線2本と陰圏線を1本廻らして竹節状の文様帶をつくる。脚の外底面を三角錐状に削り取っている。釉は明緑色を帯びたものを全面施釉後に疊付の釉のみを搔き取って露胎させる。貫入は粗く、両面にみられる。素地は淡灰色の細粒子である。脚の高さは4.7cm、脚の底径2.9cmを測る。SK04第5層より出土。

### 2. 無文馬上杯

同図2は外反口縁の馬上杯である。脚の外底面を三角錐状に削り取って仕上げている。外底面の疊付となる部分は同図1と同様に寛で面を取っている。釉は灰緑色のものを用いていて、全面施釉の後で疊付および疊付の内・外端面の釉を搔き取り露胎とする。両面に粗い貫入が観察できる。素地は淡灰色の微粒子である。口径は推算で8.3cmを求めた。器高は9.4cm、脚の高さ5.4cm、底径3.6cmであった。B-15 S A20第2層より出土。

## 小 結

有文の馬上杯の報告例として、玉城村玉泉洞西側風葬址（註1）から採集されているが、玉泉洞の例は時期が16・17世紀頃のものとみられる。無文馬上杯の類似例として玉城村の仲栄真グスク（註2）から採集されたものがあり、時期的にも14世紀中頃～15世紀前半頃とみられ、成形や釉色などが京の内資料と近似していて同一の窯もしくは近隣の窯の製品として考えられるところである。仲栄真グスクの資料の脚部には陰圏線が上と下に2本施されている点で京の内出土資料とは異なっている。

## 註

註1. 国吉真勝・金城亀信 「玉城村玉泉洞西側風葬址採集の青磁馬上杯について」『具志頭村の遺跡』具志頭村教育委員会 1986年。

註2. 中山俊彦・當眞嗣一・金城亀信・西平 剛 「仲栄真グスク採集の青磁馬上杯」『玉城村の遺跡』玉城村教育委員会 1995年。

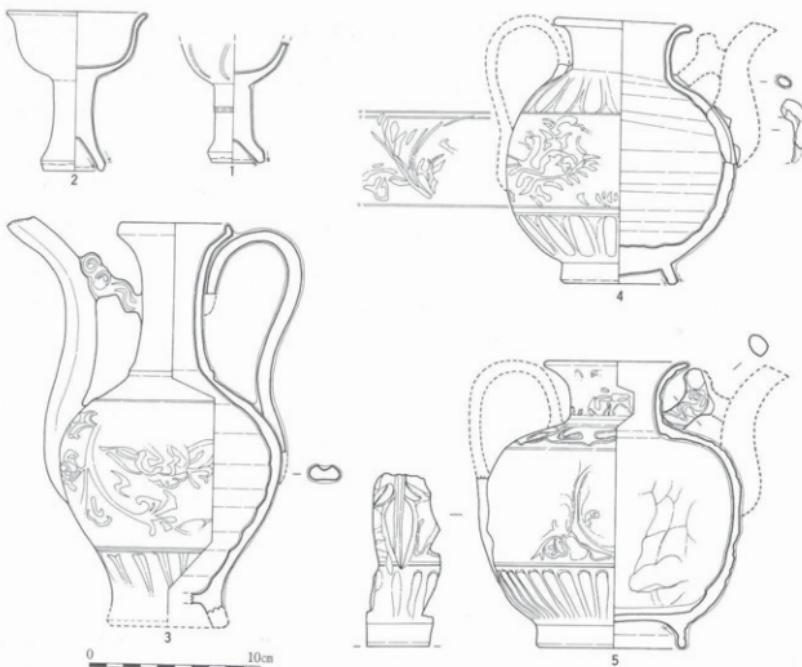
## H. 青磁水注

土壇SK01 (S A19・20、S A28) 内より水注が3個体出土している。水注の形態などから便宜的にI類とII類の二つのグループに大別することにする。以下に分類の概念と個々の特徴などを記すことにする。

### 1. I類（第52図3）

I類の水注は頸部が長く、口縁が「く」の字状となる盤口状のものである。1個体分得られている。第52図3は口唇から頸部までの長さが8.8cmを測る長頸形の水注である。口縁が屈曲し、盤口状を呈する。文様の構成は頸下部に陽界線を施し、その直下は片切り彫りによる刻花文を肩部に描いている。胴上部にも陽界線を施し、陽界線直下の胴部には片切り彫りと叉状工具による唐草文を描いており、花の種類は不明であるが、描き方などから牡丹が予想されるところである。胴下部は叉状工具で界線を書き文様を区画する。胴最下部の界線直下より籠描きとみられるやや肉厚の蓮弁文を描いている。内底面が僅かに残り、高台（疊付）を欠いている。水注の注ぎ口は胴中央から貼り付けられ、側面觀が縦に長い重な「S」字形を呈している。注ぎ口は頸部中央に貼り付けられた型物の雲文と繋がっている。胴上部から口頸までは逆さ釣針状の把手を貼り付けている。把手外面の中央には縦方向に幅6mmの丸籠で沈線を施している。把手の根元には葉文とみられるものを籠で描いているようである。釉色は濃緑色のものを用いて残存部の内・外体面の全体に施している。貫入はない。素地は淡灰白色の微粒子であった。推定復元を試みたサイズは口径6.4cm、高さ23.6cm、底径6.8cmであった。B-15 S A20第3層+SK03第4層より出土。

### 2. II類（第52図4・5）



第52図 青磁馬上杯・水注

水注の口頭部の長さが3cm～3.4cmと短くなる短頭型の水注で、口縁をきつく外反させるため口縁外端は下向きとなるものである。2個体分得られている。いずれも高台を有する。

同図4の文様構成は頭下部から胴上部までは竈による蓮弁文を描き、その直下に交叉工具による界線を施す。胴部中央には片切り彫りと交叉工具による牡丹唐草文を描いている。胴下部にも交叉工具による界線で文様を区画し、界線直下より高台脇まで竈による蓮弁文を描いている。注ぎ口は胴上部に貼り付けられていたようである。把手はおそらく胴部中央から貼り付けられたものとみられ把手の貼り付けの一部が肩上部にみられる。釉色は明緑色を呈し、全面施釉の後で骨付の釉を搔き取って露胎させる。買入はない。サイズは口径7.2～7.8cm、高さ14.8cm、高台径6.8cmを測った。B-15S A19・20第2層より出土。

同図5は上記4と同様に注ぎ口と把手を欠く水注である。口頭部と胴部中央付近で胴垂ぎがなされているようである。内体面には指圧によって生じた窪みが釉上からもみられる。文様も型による浮文である。文様は口頭部に唐草文を施し、肩部には弁内に三葉文のある逆さラマ式蓮弁文を施している。胴部は上・下に陽界線を1本ずつ配置し文様の区画をつくり、区画内中央に主文となる菊唐草文を施す。胴下部には弁先の丸い蓮弁文を施している。肩上部には注ぎ口を支える貼り付けの雲文が残存する。胴上部から胴中央にかけて把手根元の部分が残っている。把手根元の文様は三葉文である。釉色は濃緑色を呈し、厚く全面に施釉した後で外底の釉を雑に搔き取っている。素地は灰白色の微粒子である。外底面にトチンの一部が付着している。買入はない。サイズは口径8.4cm、高さ16.7cm、高台径8.8cmを測った。B-15S A19・20第2層と第4層より出土。

## I. 青磁瓶

ここで取り扱う瓶とは双耳瓶や玉壺春瓶などの小型の瓶類である。土壌SK01 (SA19・20、SA28) 内より出土した瓶は胴部資料の2片を含めると6個体相当を数えた。瓶は双耳瓶と玉壺春瓶の二つに大別し、便宜的に前者の双耳瓶はI類、後者の玉壺春瓶をII類とする。以下に分類の概念などを記すことにする。

### 1. I類 (双耳瓶) (第53図1)

1個体相当が得られている。双耳に輪を取り付けた双耳環瓶と称されているものである。

第53図1は輪状の環が2箇所の耳にとおされた双耳瓶である。耳は頸部中央から頸下部に龍もしくは四靈(鳳凰・亀・麒麟・龍)の麒麟を型取りして貼り付けたものとみられる。口縁は大きく外側に開かせて外反させている。文様は釉が厚く掛けられて判然としないが内体面の口縁から外体面胴下部まで片切り彫りや範などで描いているようである。推察された文様は胴部の刻花文(唐草文か)と胴下部の陽界線と範描きの蓮弁文であった。高台を欠いているため施釉の状況は判らないが残存する部分は全面に濃緑色の釉が掛けられている。内体面の胴部に粗い貫入がみられる。素地は淡灰色の微粒子である。推定復元によるサイズは口径10.6cm、高さ26.4cm、推定高台径10.2cmであった。B-15SA19・20の第2層とSA20第3層より出土している。

### 2. II類 (玉壺春瓶) (第53図2~4)

主に玉壺春瓶をII類として取り扱っているが1点のみ無文とみられる小型瓶も便宜上、含めてある。II類は胴部資料の2片を含めて5個体相当が得られているようである。図化を省略した胴部片の2片は外体面に片切り彫りによる牡丹唐草文と刻花文を描いたものである。一応、II類は胴部の文様の有無などからa種~e種までの3種類に細分した。以下に個々の特徴を記す。

a種…外体面の口縁から高台脇まで文様を施す玉壺春瓶(同図2)。

b種…外体面の胴部中央にのみ陽刻で文様を施す玉壺春瓶(同図3)。

c種…外体面の胴部を無文とする小型の瓶(同図4)。

以下に個々の特徴を記すことにする。

#### ① a種

同図2は口縁を大きく外反させた瓶である。文様は片切り彫りや叉状工具で描かれていて頸部上部から高台脇には上から順に蕉葉文、牡丹唐草文、界線(二本一組)、蓮弁文を描いている。釉は明緑色のものを用いて全面に施した後に疊付と高台外面下端の釉を搔き取って露胎とする。貫入はない。素地は淡灰白色の微粒子である。サイズは口径7.8cm、高さ23.2cm、高台径7.1~7.3cmを測った。B-15SA20第2層より出土。

#### ② b種

同図3は口頸部と高台を欠くが、文様は型によって施されたとみられ、胴部中央に窓枠を設けている。枠は2本の陽界線で縁取り、枠内に菊唐草文を施している。枠と枠の間に菊花と草文とみられる文様を小さく施している。釉色は濃緑色で外体面の残存部に施釉されている。内体面は胴中央まで釉が垂れている。貫入はない。素地は灰色の微粒子である。B-15SA19・20の第2層と第3層より出土。

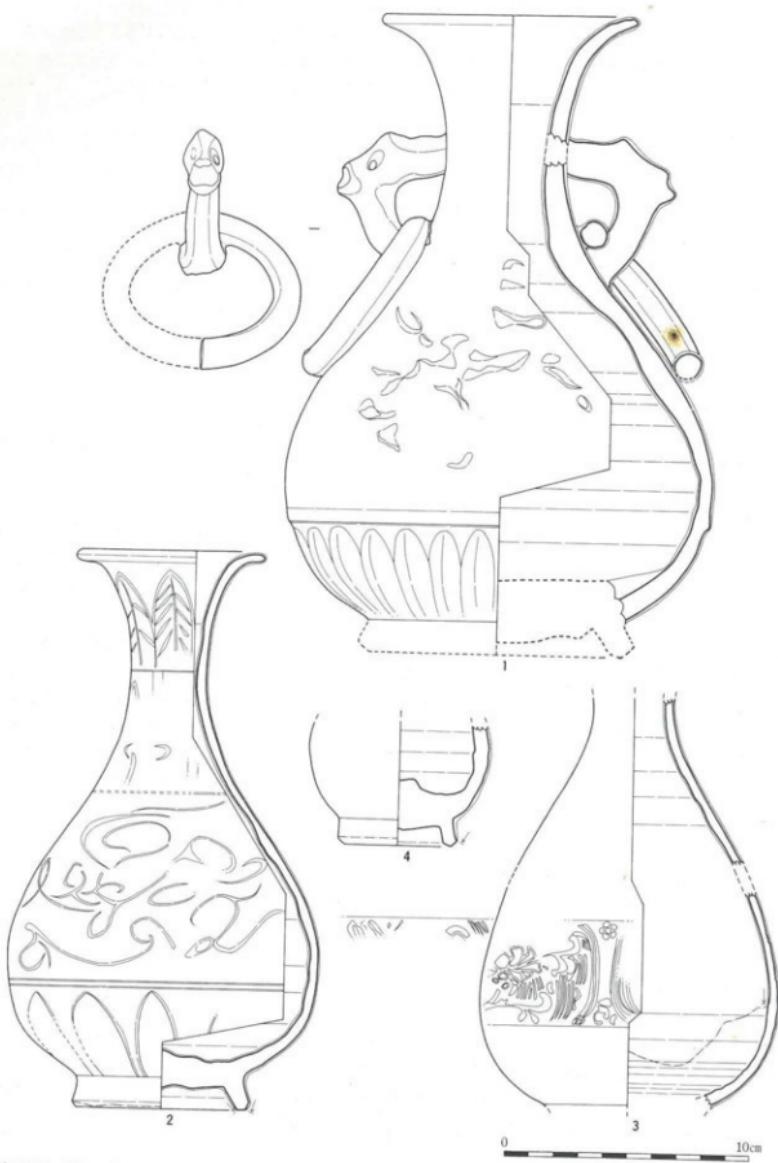
#### ③ c種

同図4は口縁から胴上部を欠く小型の無文瓶である。釉の大半は二次的な火熱を受けて変色しているが本来は青白色の釉である。釉は外体面が全釉の後で疊付とその周辺の釉を搔き取って露胎とする。内体面は露胎のままであり、輪轂痕が顕著にみられる。素地は灰白色の細粒子で微細な気孔痕が多くみられる。推算された高台径は4.4cmであった。B-15SA19・20の第1層と第2層より出土。

## J. 青磁花盆台

土壌SK01 (SA19・20、SA28) 内より今日まで県内の遺跡から報告例のなかった花盆台が1個体相当分が得られている。類例資料が東京国立博物館の収蔵品(註1)などにみられるようであり、これを基に図上復元を試みた。青磁の大瓶や大花瓶などの器台として用いられていたものとみられる。

第54図5は中空の花盆台で口縁を鏽縁状に成形する。口唇はやや内側に傾き幅広となる。頭部に直径1.1~1.2cmの孔を穿っている。孔は推定復元の結果、4箇所に穿たれていたようである。胴部には垂下する五葉文を中心



第53図 青 磁 甕

に両側を開けて中のみえる窓をつくる。文様は胴上部に叉状工具による界線を施し、垂下する五葉文の中心をとおるよう縦位の沈線を叉状工具で描いている。窓の縁沿いや五葉文の縁沿いは範によって各縁に沿うように沈線が描かれている。釉色は明るい青緑色の釉を用いていて残存部分の両面に掛けられている。貫入はない。素地は灰白色の微粒子である。復元されたサイズは口径24.5cm、高さ16.8cm、底径15.4cmが推定された。B-15 S A 19・20の第2層より出土。

### 註

- 註1-a 東京国立博物館 「東京国立博物館図版目録・中国陶磁篇II」 1990年に収録(No.518 青磁花盆台  
1個<TG711> 龍泉窯 明時代 15世紀 高16.3cm口径23.4cm底径16.5cm横河民輔氏寄贈)
- b 国立歴史民俗博物館考古研究部教授の吉岡康幅氏と千葉県市原市文化財センター調査研究員の牧野光隆氏の両氏が復帰前に大里村大城グスクより骨董屋によって採集された資料を現在整理中である。1997年9月12日に採集品の中に花盆台も含まれていることを知り無理をお願いして貴重な実測図を複写させて頂き図上復元の参考資料として使用した。記して謝意を表す。

### K. 青磁香炉

土壤SK01 (S A19・20, S A28) 内より蓋付きの特殊な香炉が1個体分得られている。管見の限りにおいて県内の遺跡からは報告がないようである。類似資料が東京国立博物館の収蔵品(註1)にあるようである。京の内出土の香炉<sup>2</sup> (第54図1~3) に名称を冠するとすれば青磁印花龍文獅子撮香炉として名付けることもできるようである。

第54図1と2は香炉の撮と蓋縁の破片である。撮と蓋は型物であり、撮は口の開いた獅子を用いている。蓋は印花による龍文を施している。釉は透明な明緑色の釉を用いて撮の内・外面に施している。蓋の部分は外面の下端を除いて釉を施している。内面は上方に釉が掛けられ一部垂れている。貫入はない。1・2とも素地は同じで灰白色の微粒子である。1はB-15 S A20第2層より出土し、2がB-15 S A19・20の第2層より出土している。

同図3は香炉の下部と台が貼り付けられたものである。継ぎ目は香炉の胴中央、香炉と台の部分で確認される。香炉は型による成形で、蓮弁文を施している。継ぎ目近くの蓮弁文の一部に直径1cm程度の孔を穿っている。器台も型物であり貼り合わせの継ぎ目が観察できる。上記した蓮弁文直下に印花による雷文を施す。雷文直下には階段状に2本の界線を施している。台の脚部は垂下葉文とみられるもので表現され、葉文の両側を開けて窓をつくっている。窓および葉文の縁に沿うように沈線が走っている。釉は明緑色の透明なものを用いて両面に掛けられたようである。貫入はない。素地は灰白色の微粒子である。B-15 S A19・20の第2層より出土。

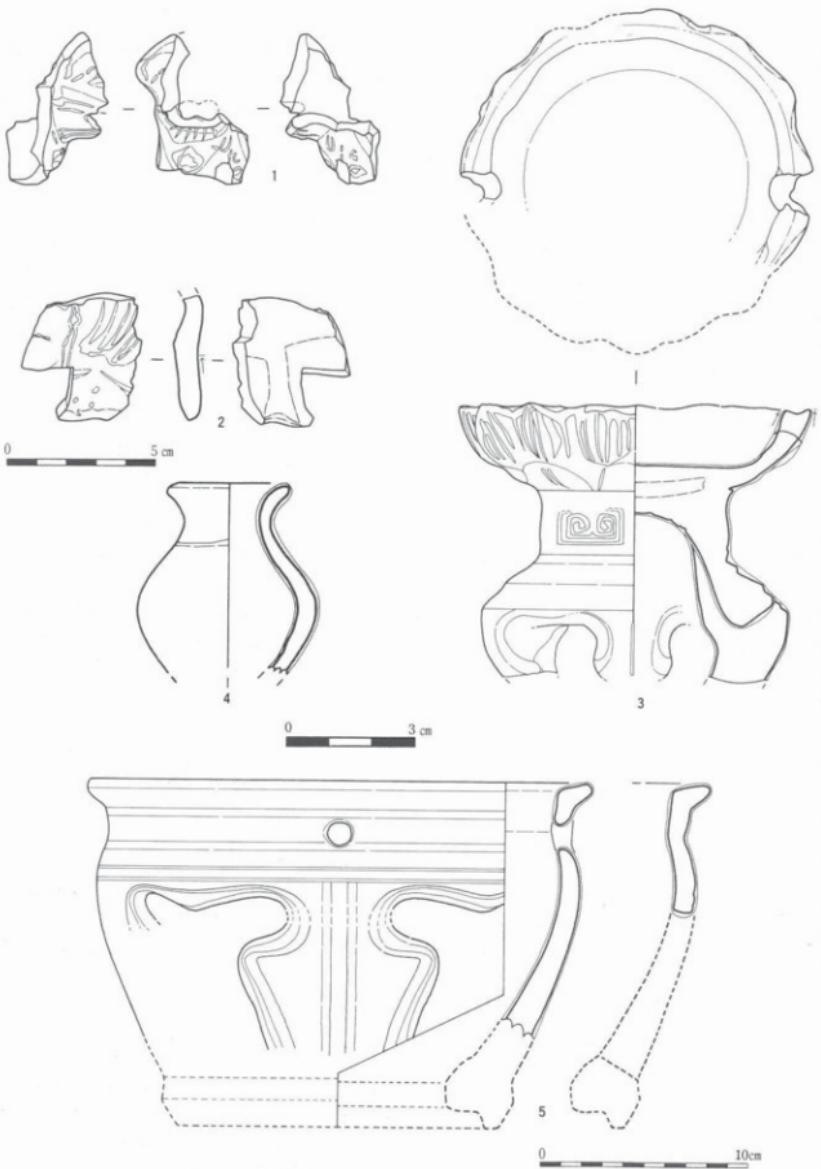
### 註

- 註1 東京国立博物館 「東京国立博物館図版目録・中国陶磁篇II」 1990年に収録 (No.514 青磁印花文獅子鉢香炉 1口<TG1134> 龍泉窯 明時代 15~16世紀 縦高13.2cm口径6.5cm底径8.7cm横河民輔氏寄贈)

### L. 青磁小品

土壤SK01 (S A19・20, S A28) 内より青磁の小品が1点のみ得られている。サイズなどから水滴などが予想される。ここでは、一応小品として報告する。

第54図4は極めて小さい瓶形の水滴とみられるもので輪軸成形によるものである。口縁を外反させていて、胴部で角が取れた算盤玉のような側面観となっている。外体面の胴下部にカンナによる削りが加えられている。内面の頭下部から胴部には輪軸引きによって生じた回転擦痕がみられる。釉は明緑色のものを用いていて両面に施している。貫入はない。素地は淡灰白色の微粒子である。口径は3cmが求められた。B-15 S A19・20の第3層より出土。



第54図 青磁 花盆台・香炉・小品 (1~3:同縮尺、4・5それぞれにスケール表示)

### 第3節 元青花

平成6年度の発掘調査地域(2,000m<sup>2</sup>)で出土した元様式青花は61片であった。その内の47片は1個体分の大合子の破片(蓋14片、中蓋12片、身13片、底面8片)であった。これらの資料からある程度器形や文様が窺えるものを第55図1~9、第56図10~12に図示した。土壤SK01(SA19・SA20、SA28)関係のものは馬上杯と大合子の資料のみであった。他の12片は別の造構や包含層などから出土したものである。器形は盤、壺、鉢、馬上杯、大合子の5器種が確認されている。推定された元様式青花の個体数は口縁や高台資料などから盤5個、壺2個、鉢1個、馬上杯1個、大合子1個の計10個体であった。素地については肉眼観察では白色にみえるが、25倍のルーペで観察すると灰白色の微粒子のものが多く、稀に黄白色の細粒子のもののが存在する(第55図8)。文様は濃い藍色(暗青色)のコバルト顔料で単調なベタ塗り表現で描いたものが5点(第55図1~3、第56図10・11)と半數近くを占めているようである。他は呉須の濃度にコントラストをつけたものや花や葉の輪郭を描いて中をダミ技法で描いたものなどがある(呉須の色合いを記すと濃淡のある青色と濃淡のある藍色など)。文様の種類として牡丹唐草文、菊唐草文、唐草文、菊花文、ラマ式蓮弁文と(弁内に八宝文)、如意頭文(垂下文)、双龍文(三爪龍文)、波溝文などが認められる。

以下、盤、壺、鉢、馬上杯、大合子の順に個々の特徴を記述することにする。

#### A. 盤(第55図1~5)

盤の口縁資料は残念ながら得られていない。5片とも高台や底面の資料である。高台片の3点は外面の釉が高台外面まで施されていて、疊付から外底は露胎のままの状態であった。また、底面破片の2点とも外底面は露胎のままであった。

第55図1は牡丹唐草文盤の高台片である。釉は青味のある白色釉を両面に施しているが、内面の釉は全体的に黄味のある白色となっている。外底面から疊付は露胎である。文様は全体的にぼやけていて暗青色の呉須で内面に牡丹唐草文、二条一組の界線、一条の界線を描いている。外面にも唐草文と2本の界線を施している。内底面の外周に小規模な段差が認められ、これより内側は浅く平坦に窪んでいる。疊付外端から疊付は僅かに面取りを加えているが全体的に丸味のある仕上がりとなっている。高台内面は斜位に丁寧に成形する。外底面も平坦であり底造りは丁寧である。推算された高台径は26.3cmを求めた。C-12S A03栗石部分より出土。

同図2・3は内面にのみ濃青色の呉須で唐草文と2本の界線を施しているが、同図2の文様はぼやけている。同図3の呉須は僅かに紅紫色を呈する部分が存在する。釉は淡い青白色の釉を高台外面と内底面に施すが、同図3のみ外底を欠いている。疊付は2点とも斜位に両面から面取りされたため尖り気味で幅0.5mm内外と非常に狭い。推算された高台径は同図2が23.2cm、同図3は20.3cmと求められた。同図2はC-11のS S01の北側覆土。同図3がB-12のS A01の上層(覆土)より出土。

同図4は蓮池団大盤(註1)か蓮池鶯鷦鷯団大盤(註2)の底面破片とみられるが、鶯鷦鷯を欠いているので單に蓮池団大盤として報告することにする。蓮の花と葉は輪郭を描いて中をダミ塗りした手法で丁寧に濃淡のある藍色の呉須で鮮明に描いている。釉は透明度の高い青白色のものを用いて内底面のみに施す。発掘区域内より表採。

同図5は双鸞文大盤(註3)か鳳凰団大盤の底面破片とみられる。呉須は濃淡のある青色のもので、型起こしとみられる鳳凰文を施す。釉は青味のある白色のものを用いているが全体的に黄味がかかった色合いを呈している。C-10のS A01の直上より出土。

#### B. 壺(第55図6・7)

壺の口縁破片と裾の破片が各々1点づつ出土している。

同図6は唐草文と2本の界線を濃淡のある藍色の呉須で口縁に描いた壺である。二本の界線の間に微弱な段差をつけて口縁部を僅かに肥厚させているがあまり目立たない。口唇は平坦に成形し丁寧である。釉は青白色で両面に施しているが内面は黄味がかかっている。推算された口径は17.2cmであった。C-14の第1層より出土。

同図7は壺の裾部分の破片で濃淡のある藍色の呉須でラマ式蓮弁を描き、その中に如意頭文(垂下文)を描いている。ラマ式蓮弁の直下には2本の界線を廻らしている。文様は丁寧に描かれているが僅かながらぼやけている箇所もある。釉は淡い青白色で両面に施している。C-12の搅乱層より出土。

### C. 鉢 (第55図8)

鉢の高台片が1点のみ出土している。

同図8の推算された高台径は4.4cmであった。内底面に濃淡のある青色の呉須で雲文と草花文とみられる文様を描いている。文様構成などから風物や人物などが組み合わさったものが予想されるが判然としない。釉は青味の強い白色のもので疊付から外底を除いて施している。疊付は平坦に仕上げられている。素地は本品のみ黄白色の細粒子であった。D-14の第1層より出土。

### D. 馬上杯 (第55図9)

同図9は龍文馬上杯の杯の部分である。腰下部はゆるやかな丸味をもって胴部へ立ち上がってくるが、胴部中央からは若干、内方向に閉じるため丸味が強くなる。胴上部から頸部近くまでは外側に開かせて口縁を強く外反させる。釉は青味のある白色のものを使用している。文様は外面の胴部に型起こしとみられる三爪龍を二対と雲文を描いていたようである。内面の口縁には蔓唐草文を廻らして上下の界線でもって区画帯とする。見込みに菊花文を描いている。胴部には印花龍文を施しているが双龍かどうかは欠落のため判らない。印花龍文は三爪とみられるようである。杯の外底は尖り気味に仕上げられていて、その周辺には輪状の破損面が認められた状況から判断すると別途製作の脚(高足)を貼り付けて完成させたようである。復元に際しては本品の推算口径が14.2cmと求められていたので類例品のあった『世界陶磁全集』(元 青花龍文高足杯)(註4)を基本に比率計算を実施した結果、本品のサイズは口径14.2cm、高さ11.8cm、底径4.7cmと求められた。この数値で復元を試みた。B-15 S A20第2層より出土。

### E. 大合子 (第56図10~12)

大合子は1個体分が出土している。大合子は蓋、中蓋、身の三つの部位で構成されている。

第56図10は大合子の蓋である。身と接触する蓋の口では直径が30.4cmと推算された。呉須は暗青色のものを用いている。蓋甲頂周には人物、松、草文を描いているようである。蓋甲上面の周辺部には波濤文と二条一組の界線を二組施して区画帯をつくる。蓋甲上面の縁辺部には段差を設けて前述の界線が廻っている。蓋甲外面より下位にも段差と二条一組の界線があり上部に下向きのラマ式蓮弁を描き弁内に八宝を配置している。下部には牡丹唐草文を描いている。釉は青白色のものを用いて口唇と内面の一部を除いて両面に釉を施している。身の部分と合い口となる部分(口唇)は平坦に成形されて丁寧である。B-15 S A20第2層より出土。

同図11は大合子の中蓋である。外面の口は身の口唇に懸るように方形状に成形され外側に突出する。青白色の釉を中蓋の口唇から内底面のみに掛けられている。中蓋内部の中央寄りに輪状の仕切り板を貼り付けて、この輪を中心に入五つに分割し、板状の仕切り板を貼り付けていたようである。復元されたサイズは最大直径が29cm、高さ2.9cm。底面での最大直径は28.2cmであった。B-15 S A19・20唯第2層より出土。

同図12は大合子の身の部分である。推算されたサイズは口径が28.7cm、高さ10.5cm、高台径22.2cmであった。口縁は蓋を受けた際に蓋がずれないように内側方向に深く削り込んで受け口とするため口縁の厚みは2.1~3.2mmと薄い。高台は高めに成形されるが、外底面は平坦に浅く削られている。疊付の外端を斜位に削り出して面を取っている。更に高台内部も斜位に成形されたため疊付の幅は3mmと狭くなっている。高台脇から胴下部は丸味を持つて開いているが胴上部から口縁方向はやや直に近い状態の器形となる。釉色は青白色を帶びていて外面の口縁下端の縁から高台外面まで施している。内面は口唇から1.3cm~1.7cm下から内底面まで釉を施している。呉須は暗青色のものを用いていて外面に菊唐草文と界線を施す。胴下部に段差を設けていて、この段差から高台際には上下の界線で区画線を設け区内にラマ式蓮弁文と如意頭文(垂下文)を描いている。内底面は段差を利用した陰線とみられるものが廻っている。B-15 S A19第3層より出土。

### 註

註1. 矢部良明 「元の染付」『陶磁大系』 第41巻 平凡社 1980年 (グラビア版 46 青花 蓼池団大盤を参照)。

註2. 同上 (グラビア版 47 青花 蓼池鷺鳶団大盤を参照)。

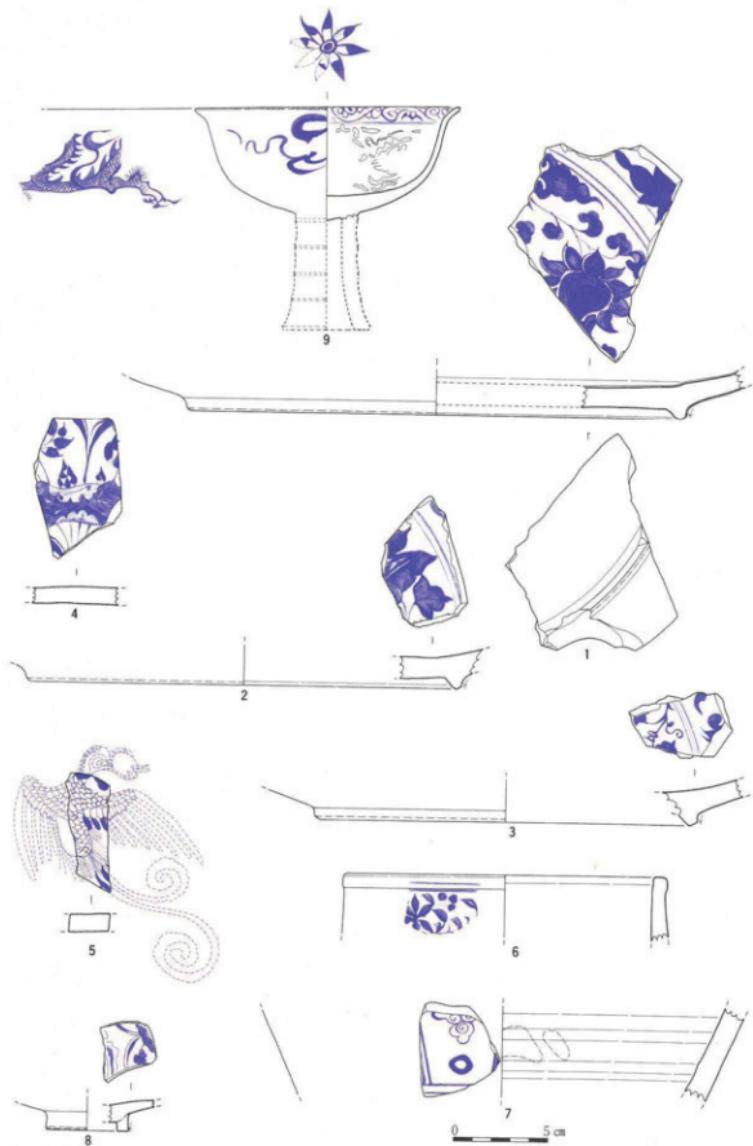
註3. 同上 (グラビア版 49 青花 双鸞文大盤 梅沢記念館の所蔵品を参照)。

註4. 座右寶刊行会『世界陶磁全集』第11巻 河出書房 1955年(原色版 2 元 青花龍文高足杯と286頁 藤岡了一氏の図版解説がある元 青花龍文高足杯のサイズは高さ11.0厘、口径13.2厘、底径4.4cmと記載されている)。

第35表 元青花推定個体数

器種 部位	出土地	B-15	B-12	C-10	C-11	C-12	C-14	C-14	表採	合計
		S A20	S A01	S A01	S S01	S S03				
		第2層	第3層	上層(覆土)		北側覆土	擾乱層	栗石部分	第1層	第1層
盤	高台 底面			1	1	1		1		1 4 5
壺	口縁 裾						1			1 1 2
鉢	高台								1	1
馬上杯	身	1								1
大合子	蓋	1								1 2
	身		1							1 1
計		2	1	1	1	1	1	1	1	11
		3								

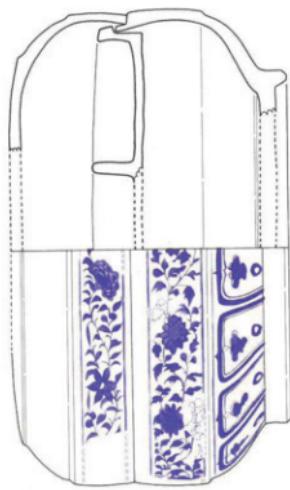
注; その他に破片が51出土しているが、推定個体数に含めてある。大合子は1点として数えた場合、推定個体数の合計は10個体となる。



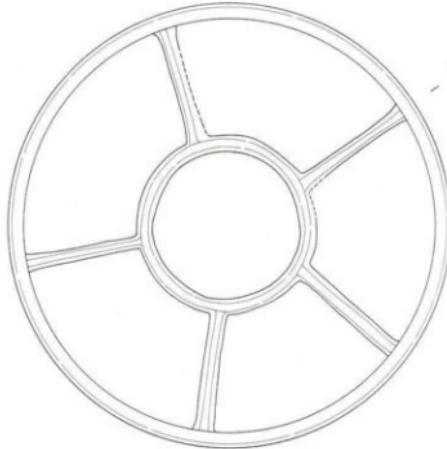
第55図 元青花



10



12



0 10 cm

第56圖 元青花 大合子 (10 蓋、11 中蓋、12 身)